

【無自覚最強の僕は異世界でテンプレに憧れる】
～転生前は病室しか知りませんでした。が、今世はスキルだよりに気楽ままなハーレム旅を楽しみます。いな@ラブル体質でも、超『健康』なので問題ありません～

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世では生まれてからずっと死ぬまで病室から出れなかった少年は神様の目に留まり、「健康」のスキルを貰って、貴族の三男として生まれたライ（ライリール）、何もする事がなくて魔力をぐるぐるしてたら知らない内にスゴい『古代魔法使い』になったようです。

特にやることもなく、勝手気儘に旅をするようですが、どこに行ってもトラブル発生。
注）『無自覚』トラブルメーカーです。

仲間になったテラとムルムルを肩に乗せて今日も健康だけを頼りにほのぼの旅を続けます。

目次

第一章

第1話	零歳く二歳	1
第2話	冒険者見習い	9
第3話	ゴブリン村長	16
第4話	旅をしたいと思います	24
第5話	旅の同行者	31
第6話	盗賊に捕まりました	37
第7話	馬車の中にいますよ	46
第8話	盗賊をやっつけましょう	53
第9話	捕縛しちやいます	61

第10話	馬車での夜営	69
第11話	怒ることもあります	77
第12話	贖金大量	85
第13話	大きなお風呂がありました	93
第14話	襲撃の夜が明けて	102
第15話	公爵領へ その一	110
第16話	公爵領へ その二	119
第17話	生存報告	127
第18話	合流	136
第19話	公都へ到着	145
第20話	公認	154

第21話	夕食	162
第22話	スイミングスクール	
170		
第23話	王都へ	178
第24話	呪いと魅了	186
第25話	立入禁止	194
第26話	呪い回収	202
第27話	追い詰め	210
第28話	罪	220
第29話	透けた心	227
第30話	王子様	235
第31話	捕縛	243
第32話	捕縛完了	252

第33話	さてさて東に向かいました	261
う		
第二章		
第34話	新たな旅路の始まり	270
第35話	ナインテール	280
第36話	護衛依頼を請けましょう♪	289
第37話	ほろっとときましょ♪	297
第38話	忘れていた事	306
第39話	大きなどんぐりの木の下で	314

- 第40話 開拓村のお手伝い — 321
- 第41話 要らないものは捨てちゃい
ましょう♪ — 329
- 第42話 あるうゝひいゝ♪ 森の
中あゝ♪ — 336
- 第43話 異世界転移者達は今
- 344 第44話 ハイエルフの村 ①
- 351 第45話 ハイエルフの村 ②
- 359 第46話 ハイエルフの村 ③
- 367
- 第47話 魔物が近づいて来ているよ
うです — 374
- 第48話 エルフの町の今後について
- 第49話 お手紙を書きました
- 389
- 第50話 お引越ししちやいましたよ
う — 397
- 第51話 お引越しのために転移の
練習しましょう — 405
- 413 第52話 お引越しです ①
- 第53話 お引越しです ②

第62話	海賊退治に向けて	493
485	第61話	お助けしちゃいましょう
476	第60話	海賊がやって来ましたよ
	第59話	王様になった
	第58話	海に到着?
	第57話	ぷにぷにとパパ
	第56話	邪神
430	第55話	お引越し完了
	第54話	お引越しです ③

第69話	海賊退治が終わりました	537
	第68話	海賊退治です 交戦相手
	第67話	海賊退治です 三島目完了
	島目	523
	第66話	海賊退治です 二島目く三
	り	517
	第65話	海賊退治です 二島目の残
509	第64話	海賊退治です 二島目
501	第63話	海賊退治です 一島目

第70話	ダンジョンへ向けて出発で	544
すよ	—	550
第71話	キングとクイーン	557
第72話	ご主人様の行方	563
第73話	救出	569
第74話	街への帰還	577
第75話	温泉がある街ですよ	584
第76話	冒険者登録です	591
第77話	ゴブリン村長ふたたび?	597
第78話	怒られて驚かれました	
第79話	護衛依頼を受けましょう	605
第80話	ランクアップに向けて	613
第81話	またまた忘れていました	619
第82話	ランクアップに向けて	625
第83話	ランクアップしました	632
第84話	ヒュドラの討伐	638
第85話	話を通じないです	653
	—	645
	—	632
	—	②
	—	①

第86話	見学会	660	第95話	怖いアリアがいるそうです	
第87話	鍛冶屋さんにて	666	第96話	帝国の影	722
第88話	ラビリンス王国への道中		第97話	巣穴の奥で	727
673			第98話	神器と神様？	733
第89話	ラビリンス王国に出発です		第99話	これはもしかして！	
よ		680	739		
第90話	入国早々良いのを見つけまし		第100話	冒険者ギルドでテンプレ	
た		686			
第91話	壊れた魔道具	692			744
第92話	ダンジョンで良いものが見		第101話	二つ名	750
つかりました。		698	第102話	Sランク試験	756
第93話	再開の約束	704	第103話	人攫いの黒幕は	762
第94話	九匹の子達	710	第104話	救出開始ですよ	767

第105話 教会のダンジョン

773

第106話 ダンジョン攻略開始です

779

第107話 ダンジョンでの出来事

785

第108話 ダンジョン攻略 |

792

第109話 Sランクになりました

798

第一章

第1話 零歳〜二歳

これで転生したのかな？ 目は やっぱりちやんと見えないや、体も、うんしょつ！

駄目か、くふふつ。

神様ありがとうございます。

無事に転生したようです。

おろつ！

持ち上げられたのかな、く、口に何か入って来た！ あら勝手にもぐもぐ これはも

しや。こきゆ。こきゆこきゆ。

おっばい飲んでますよ！ 頑張れ僕！ しっかり飲んで元気に育つぞ！

つてか、よく考えたら記憶がある中で僕は、初おっばいにお触りしているって事だよね。生前は彼女どころか友達も居なかつたからなく、それどころかずっと病院でしたから、お爺ちゃんお婆ちゃんは沢山居ましたが、同い年の友達欲しかつたなあ。

こきゆこきゆ

ああ、眠たくなってきた

「ライくん、おっぱいでちゅよ〜♪」

いただきます。

僕の名前は、「ライリール」だそうです。お母さんとお兄さん達はライって呼んでいる、だから初めはライが名前だと思っていたりしました。

だって、乳母さんが来て名前を呼んでくれるまで、愛称だなんて思わなかったのは僕のせいじゃないよね！

おっと、興奮して泣いてしまいました。

それに、「雷^{らいり}」が生前の名前だったから、ライまたはライリール、この響きは馴染む感じがします。

違和感なくて良かったですよ、もし、「アレキサンダー」とか、「ジークフリート」とかだと違和感が半端ないと思いませんか？

意識がハッキリして初めにやり出したのはステータスの確認！

しなかった。そう、しなかったのに、僕が転生したこの世界はステータス画面を見る事が出来ないようです。残念。

そして三日が過ぎて、暇ですよ！ 神様！ 出きることって手を、にぎにぎと、足を

たまにピンって伸ばすくらいですよ！

はあく、どうしてかなあ、ステータス見たいのに、
“メニュー” みたいな画面出ないかなあ。

これではやる気も起きませんよ

はっ！ この体は赤ちゃんなので直ぐに眠ってしまいますね。

でも魔法を使いたいよね、そう思うよね！ でも部屋の中だからなあ、風かな、でもどうやるんだろ、大体こう言うのはイメージで解決してたよね。

ファンタジー小説でだけど。

風か、病室の窓はあまり開けて貰えなかったからなあ、んく、扇風機のイメージでやってみよう。

んく、回す感じかな、ぐるぐるっと、上手く行かないな、やる前から分かってしましたが、直ぐには無理だよな、地道にぐるぐる回すイメージをしましょう

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

転生してから早くも三か月が過ぎてしまった。

進展はほとんど無いんだけど、ぐるぐる続けています。

時間があればずっとぐるぐるしてます。

それこそ、おっぱいの時間も。

地道な努力の結果、最近コツが分かってきて、少し風が吹いてくれるようになった気がするのですよ、むふふ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さらに三か月が過ぎて、今はもうぐるぐるマスターです。

なんと、魔力が見えるようになり、風を吹かせるだけではなく、体の中の魔力もぐるぐる出来る事に気が付いてからは魔力の上限が上がっている様に感じます。

最初はぐるぐるするとすぐに寝ちゃっていたのに、だんだん長くぐるぐる出来るようになってきましたから増えてますよね？

暑くなり窓を開けてくれる日が多くなったので、窓の外にある木に向かって、なんちやつてウインドアロー、改め、ウインドニードルを撃ちまくっています。

ふわふわと飛んで行き、微かに揺れる葉を見て、泣きました。興奮のし過ぎですね。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

一年経ってしまいました。

僕は、とてとて歩き、まだまだ頭が重くてよく、コロン、つと転がっていますが行動範囲も広くなり、今ハマっているのは、厨房です。

釜の火をぐるぐるしに来ています。

魔法と言えばやっぱり魔法でしょう！ 風はある程度ですけれど、メイド長であるマリーアさんのスカートは、もうちよつとでめくれる！ つて所までは威力も上がってきました、マリーアさんだけタイトなスカートなので中々の強敵です。

そして火をぐるぐるしていると、声をかけてくれるのは、この厨房で料理をしてきているマシューさんです、とても美味しいですありがとうございます。

そのマシューさんがこつそり、お菓子をくれたりします、今日はラスクの様ですね、力りかりなので口の中で少し柔らかくして美味しくいただきました。

あつ、もう一つ頂けるのですねありがとうございます、頂きます。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

二年の月日が経ち、早くも二歳である、むふふ、最近は庭に出ることが許されて土いじりにハマっているのですよ。

そう、土魔法を覚えようと暇があれば土いじりで、食事に出てきた果物の種を植えたりもしています。

芽が出ないのが残念ですね。

お兄さん達とも遊ぶ事もあって、土魔法は中々物には出来ていません。

その代わり剣術を覚ええました。使っているのは木の棒細い枝ですが何か？

「ライ！ また泥だらけじゃないか、あはははは」

「本当に、ライは土いじりが好きだよね」

「アース兄さんしゃん、シー兄さんしゃん」

長男の、シーリール・アインス・サーバル、次男の、アースリール・ツヴァイ・サーバル、僕のお兄さん達です。

二人は双子で今年九歳、お母さん似の金髪で、ブルーの瞳、将来は女泣かせになるだろうなと思わせるくらい整ったお顔をお持ちです。

ペアでアイドルとかすれば、大人気間違いなしだと僕は思う、プロデュースしちゃいましょうかね。

「ライしやま、わたくちも、ちゆちあしよびまじえてくだしやい」

この子は乳母さん、カリィアの子供で、なんと僕と同じ年の女の子です。

名前は、フィィア、薄い銀色の髪の毛は、光が当たるとプラチナの様にキラキラ輝き、
どこのお姫様ですか！ と僕は思っている。

大きな赤い瞳も、なんだか幻想的でいつもじつと見てしまうほどののだ。

「うん。フィィアいっちよにあしよぼ♪ 兄しやんたちは？ いっちよにあしよぶ？」

兄さん達は、僕やフィィアの言葉の解説はリアルタイムで出来るから返事も早い。

使用人の人達はまだ完璧ではないので、少しタイムラグが発生してしまう、仕方がないですね、後一年くらいでなんとか頑張ります。

「一緒に遊びたいのは山々だけど、これから勉強なんだ」

「十歳で学校に行かないといけないから仕方無いよね」

この世界の貴族は十から十五歳まで、武術・魔法学校に通うことになるそうで、そこで優秀な成績を修めると、さらに上級学校または、王都にある学院に十八歳まで通うそうです。

まあ、男爵家三男はまず学校は行かないそうですが、僕としては、冒険者に憧れるので、バッチコイなのですよ！

それで、兄さん達は来年から学校に通うため算数や字の勉強、それに、魔法と剣術を

習っているのですよ。

それなら仕方無いよね。

ちなみに算数は四則演算の三桁以上が出来れば学院でトップクラスと言われているので、流石に行く気になれませんでした、あはは。

おっと、返事をしませんでしたね。

「しよっかあ、じゃんねん」

「フイーアと楽しんでね」

「魔法の先生に怒られちゃうから行くね」

「うん」

「シーしやま、アースしやま、おきゆつてくりえて、ありがちようごじやいませす」

兄さん達は、結構ギリギリだったのか、駆けて、家の中に入って行ってしまいました。その後はフイーアにも、ぐるぐるを教えながら土いじりを再開しましょう。

第2話 冒険者見習い

兄さん達が学校に行き五年が経ち、高い評価を受けて、無事に次の魔法・騎士学院に進みました。

卒業すれば、また一緒に暮らせるのかと楽しみにしていたのですが、成績が良すぎたので、王都にある学院に行く事になり、また寮生活になつてしまうそうです。

なので、学院に行くまでの一月間ひとつきだけは家に居てくれるはずですが、僕やフィーアは二人の兄さんにベツタリ張り付き、遊んでもらう考えだったのですが、
「ライ、フィーアもすまないな」

「俺と兄貴はお父さんに付き添い、他の領地巡りと、成人のお披露目に王都に行かないと駄目なんだ」

「俺も、アースも出来るなら二人と、一月ひとつきだけでも一緒に居たいのだが。」

仕方無いよね、シー兄さんは将来当主に、アース兄さんは補佐になるから、今の内から世間に顔を売り、人脈を形成して行かなければ駄目だからね。

「分かった、僕もフィーアも我慢するよ」

「シー様、アース様も次期当主と補佐の地位に就きます、今回の事は将来きつと役に立つ

物の筈ですから」

一瞬だけ間を置き兄さん達は僕たちに突っ込んできます。

「良い子に育ったなあ」

「こんな良い子の二人は他には居ないぞ！」

俺達二人を、兄さん達はサンドイッチにして抱きついてくる。

「ぐはっ！^{きゃー}」

数分間ほど揉みくちやにされ、解放された時には、僕もファイアも髪の毛がぐちゃぐちゃになっていた、ファイアと顔を見合せ、笑顔になります。

「あははは、兄さん達は無茶苦茶です」

「あははは、髪の毛が、ぼわっ！ ですよ」

「すまんすまん」

「はあ、二人の成分を補給出来たし、明日の準備をしなきゃな」

「そうだな、二人には悪いが失礼するよ」

「きちんと荷物を用意しておかないと、お父さんとお母さんに叱られますからね、あははは」

「そうですよ、メ！ ってされますから、あははは」

兄さん達は家に戻り、僕達だけになりました。

「仕方がないよね、じゃあフィーア今日は何にするかな?」

「ん〜ライ、今日こそはゴブリンの村を全滅させましようよ」

皆様お気付きだろうか、フィーアが、僕を呼び捨てにしている事を、それはもう激戦説得に次ぐ激戦説得を繰り広げ勝ち取った物だ。

そのお陰で、二人の時と冒険者している時は呼び捨ててルールが出来たのですよ。

おっと話の途中でした。

「まだそこそこ数は残っているよね、間引きをしながら、ゴブリンの村まで行ってその状況次第かな」

「ぶ〜、前もそう言ってダメだったじゃない」

実は、ゴブリンの村の次はオークの村をやろうと言っていたのだが、少し前にフィーアの都合が悪くて、僕ひとりでオークの村を潰してしまつたのです、ゴ布林が終わつてしまうと次が無いのですよ、なので、次が出来るまではゴ布林で、お茶を濁すしか無いのです。

「あははは、仕方無いよ、もしフィーアが、怪我でもしてしまったら嫌だもん」

「も〜、ライったら、わ、私もライに怪我なんてしてもらいたくないわ」

フィーアは頬に手を当て、くねくねしている。

あははは、やつぱり可愛いよね、誰にも渡したくないな、彼女になつてくれるかなあ。

「じゃあ、冒険者ギルドに行つて依頼を受けようか」

「うん」

よし、なんとか切り抜けたし、ごめんねフィーアなるべく早く違う魔物を見つかるか、オークさんが、復活してくれるのを祈ろう。

家の門まできて、門番さんにご挨拶ですね。

「おはようございます、カヤッツさん、今日もご苦労様です」

「カヤッツさん、おはようございます」

「おはようございます、ライ坊つちゃんとフィーアちゃん、今日も冒険かい」

「はい、早く見習いからEランクになりたいですから」

「私はSランクになつちやうの♪」

「あははは、そりゃ頼もしい、街壁の外はゴブリンも居ますから気を付けて下さいね」

「はい!!」

カヤッツさんに、門を開けてもらつて町へ出る。

冒険者ギルドは目と鼻の先なんです。

え？ 貴族の家なのについて思いましたか？ 簡単なことです、貴族は街や、村の皆か

らお金を税として貰っていますからね、その代わりに街の守りをしなくてはなりません。

だから貴族の家は街壁にくつついて建てられています。例外はありますがね、民を蔑ろないがしにしている嫌な貴族も居るようですが、僕の家はきちんと民を守るために、魔物のいる森側、北の街壁近くに建てられています。

だから、冒険者ギルドもこの北門にあるんですね。

冒険者ギルドに入っているもの様に、ゴブリンの討伐依頼は請けません、薬草採取の依頼を請けます。

これはギルドの規定で、Eランクに上がらないと討伐の依頼を請ける事が出来ないからなのですが、いっぱい討伐してるけれどね、あはは。

まあ、僕は年齢がまだ八歳なので、お父さんとお母さんが、『討伐は十歳になってから！』と言うので請けられないから、今Eランクになったとしても、請けることは出来ないのです。

収納の中がオークや、ゴ布林など物凄く沢山入っています。十歳までは不動産在庫になってもらっています。オークのお肉は内緒で家の食材倉庫に、こっそり入れておいたりしてますけど、あははは。

依頼の紙を手持って、受付のお姉さんに渡して登録してもらいましょう。

「おはようございます、ライ君とフィーアちゃん今日も薬草採取請けてくれるのかな」

「はい、お願いします」

ギルドカードと依頼書をお姉さんに渡します。

「少し待って下さいね」

お姉さんはなれた手つきで登録を済ませ、何か魔道具を見て数を数えていますね。

「うんうん、間違いなさそうね、ライ君とフィーアちゃん、今回の薬草採取が完了すれば、Eランクになれるわよ」

え？

「本当ですか!」

「やったあ〜♪ ライ、見習い卒業出来ますよ♪」

「あら、まだですよ、だから今日も頑張って依頼をよろしくお願いしますね」

「はい!」

ほぼ毎日だよ、薬草採取の依頼を請けて、失敗無しでここまで来れたのは中々頑張ったと思いませんか。

フィーアと二人で通用口を通り抜け、街の外に出ていつもの通り森に向かいます。

森に入りしばらく行くと、薬草の群生地があり、手早く依頼の分を採取してしまいましよう。

「ライ、私の方は籠が山盛りになったよ」

「僕も、じゃあゴブリンの村に向けて進もうか」

「うん、頑張ろう！」

右手を突き上げ気合いを入れる姿も可愛いです。

森の奥に向けて歩きだします、直ぐに魔物の気配を感知して、見付からない様に気配を消しながら気配の元へ近付いて行きます。

木に身を隠しながらそくつと覗くと、居ましたゴブリンです。

五匹のグループで、五匹はこん棒を手に、細くて、大股で跨いでしまえる程の小川で水を飲んで居ました。

サクツと倒して先に進みましょう。

おっと、そんな事を考えている場合ではありませんでしたね。

僕は、風の矢を、五つ作って浮かべ、ゴブリンに向けて、発射。

「あつ！ ライずるい！」

「あははは、ごめんごめん」

もの凄い速さで、ゴブリンに突き刺さるウインドアローもう百発百中ですよ。

眉間に小さな穴が空き、ゴブリンは全てその場にパタパタ崩れ落ちました。

血が流れ、その匂いで他の魔物が近付いてこない内に収納してしまいましたよ。

そんな事を繰り返しながら、ゴブリン村の全貌ぜんぼうが見える崖の上に到着、下を覗くと
やっぱり居ましたね。

「ん、やっぱり多いね」

「そうでしょう、二人でやれるかも知れませんが、危険はあるでしょうね」

ざっと見渡すだけで数百匹は居るように見えます。

それにこの村にはなんと！ ゴブリン村長が居るのですよ！

まあ、鑑定の結果はゴブリンリーダーですが、他のゴブリンより体格も大きくて、少し強そうです。

「ライ、そろそろ始めようよ」

「そうだね、今日は五十匹くらいを目標に頑張らしましょう」

そつと音を立てない様に、崖の縁から下がって森の中に入りました。

少し早い時間だったので、街に向けて少し大回りをしながら、ゴブリンの間引きをして帰ります。

「ふう、無事に森は抜けられたね」

「うん、ライ本当に今日はごめんね」

フィーアは結構気にしているみたいだね、別に気にしなくても良いのに、そうだ！

「あははは、フィーア気にしなくても良いよ、結局帰りにも、五十匹は倒したから今日は百匹超えだよ」

「え？ そんなに倒していたの!？」

「そうだよ、フィーアも半分は倒しているね」

「うん、頑張った♪」

「よし、この調子で少しづつ減らしていこうね」

「は〜い♪ ライ、冒険者ギルドに着いたよ、早くいこうよ」

「あ、待ってよ!」

元気になったのかな、僕も小走りになりフィーアの後を追いかけます。

二人で買い取りの列の最後に並んで順番を待ちましょう。

横入りなんてやっちゃ駄目なので大人しく待っていきましょうね、横ではフィーアがい

くらになるかと期待に胸を膨らませニヨニヨしてます。

可愛い過ぎでしょう！

おつ、僕達の順番が回ってきましたね、そんな時に四人組の冒険者の方が話しかけてきました。

「すまねえ、順番を譲ってくれないか」

「仲間が怪我をしまして、回復魔法を使って貰いたいから寄付金が必要なんだよ、頼む」

そう言うことなら良いよね。

「どうぞ！ 先に早く！」

「すまねえ！」

横入りだが誰も文句は言わない、僕達の後ろに並んでいる人達も、少し心配そうな顔をしているね、僕心配です。

買い取りは直ぐに終わったようで、駆け足でカウンターを離れる前にお礼を、待っていた僕達に向かって言っていきました。

「怪我早く治ると良いのよね」

「うん、ライ、私達の番だよ、行きましょう」

「そうでした、薬草の買い取りをお願いします」

「おう、ちびっ子達か、出してくれるか」

「はい♪」

おじさんが、僕達の採取してきた薬草を仕分けしながら十本を一束ひとたばにして行く、前に僕達が分けて持ち込もうとしたのですが、綺麗に縛れなかったり、薬草を折ったり千切ちぎったりしてしまいました。

それからは手を出さずに、慣れている人に任せようと心に決めました。

「うむ、今日も間違いは無いぞ、ベテランの採取職人だな、あははは」

僕とフィーアは鑑定を使えるのでまず間違える事はありません、まあ、採取し始めの頃、フィーアが鑑定を覚えるまでは間違つて、ただの雑草を持ち込んだ事も多々ありました。

「私も頑張つて覚えただから!」

「そうだったな、あははは、よし、受け取り状を持つて行きな」

「おじさんおじさんありがとう♪」

さあ、遂にランクアップですよ!

二人でニヨニヨしています、仕方がないでしょう、顔の筋肉が勝手にそうなるのですから、さあ、受け付けのいつものお姉さんに受け取り状を渡してしましましょう♪

「お姉さんお願いします」

「私達、頑張ってきたよ♪」

「うふふ、じゃあ、ギルドカードと受け取り状を預かりますね」

お姉さんに手渡し、いつものように、ギルドカードを確認して受け取り状も確認後、ここだな！

「おめでとうございます。本日で見習いからEランクですよ、うふふ」

そう言つて今までのカードとは名ばかりの木札を置いて、ブロンズ銅色のカードを取り出し、魔道具へ通します。

じい。

カウンターに顎を乗せ、お姉さんの手元を穴が空くくらい見ています、ニヨニヨしながら。

お姉さんが、少し吹き出して笑いそうな顔で、作業を進めています。関係ありません！ よしよしもうすぐですよ！

「ふふつ、お待たせしました」

笑いましたね、でも今は許してあげましょう♪

「これが新しいギルドカードね、失くさないように気を付けてください」

鈍く輝くブロンズカード！ やっぱり木札とは違いますよ！

「やったあ〜♪」

「はい、むふふふ、遂に僕も冒険者のスタートに立ったのですね♪」

「はい、これからは討伐の依頼も請けられる様になりますね」

「駄目なの、十歳までは駄目って言われてるから、これからも採取依頼だけよ、残念だねどね」

「そうなのね、まあ、君達の採取してくる薬草は丁寧にしてあるから、うちとしても歓迎ですね」

「あはは、そう言う事なのでまだ暫くは薬草の依頼だけです、これからもよろしくお願ひします」

そうして僕は冒険者デビューを果たしたのであります。

第4話 旅をしたいと思います

「ライ、本当にそれで良いのか？」

「はい、僕は三男ですから、もし、僕が女性であつたならお役にも立てたのでしようが、僕は男です、男爵家としては、シー兄さんが次期当主としても、申し分のない成績を修めています」

うん、本当に、王都の学院で、入学当初から頭角を現し、今は生徒会長にまで、同期の第一王子を差し置いてです。

凄いとしか言い表せません。

「アース兄さんも、シー兄さんに負けず劣らずの才をお持ちです」

アース兄さんも、武に関して、入学三ヶ月目の武術大会で、同級生も上級生も関係無く全て無傷で倒したのですよ、もちろん王子様も。

化け物レベルです。

「この兄さん二人が居るならば、僕がこの家の家名を名乗ることは不利益になります」

家名を名乗ると言うことは、一人に掛かるお金は年間数千万の税を上乗せして払わな
いといけません。

それから学校に、着る服、十歳からは社交界、パーティーなどにも出なくてはいけない、それにも新しく最新の服を買わなくてはなりません、見栄のためもあるのですが高い生地を使い、一度のパーティーで一着、それが何度もパーティーがあると何着作らなければいけないのか分かりません。

家は男爵家、領地も狭く起伏ききぶくの激しい土地のため農耕には向きませんが、細々と酪農で、農作物は、他の領地から買い入れている状態なのです。

「そんなことはない！ ライリール・ドライ・サーバル！」

「冒険者でも良い、その名を持つていけ、そして、暇な時は帰つてこい、また一緒に食事をしよう」

「ううう、泣かないつもりでしたのにい〜！」

ぼろぼろと流れる涙を拭うお父さんの手は大きく、剣の達人の筈なのに柔らかく、僕の頬に添えられています。

「そうよ、ライ、貴方は私達の子供なのですからね」

お母さんは僕の後ろから抱き締めてくれる。

「ライ、これを持っていきなさい」

お父さんが渡してくれたのは暖炉の上に飾つてあつた、一振ひと振りの刀。

「私が冒険者をしていた時に使つていたものだ、ダンジョンでお父さんが発見したのだ

が凄く丈夫でな、お母さんと結婚する時に冒険者を辞めるまで使っていたものだ」

「その様な大切な物を僕に」

「ああ、今のライには少し大きいかも知れんが大丈夫だ、すぐに大きくなるさ」

「お母さんからはこれね」

それは小さなピアスです、魔力回復の効果がある稀少きせうなアクセサリー、お母さんは自分から外しながら僕の両耳に着けてくれる。

「うん、似合っているわ、お母さんの幼い頃にそっくりよ」

「うむ、髪と瞳の色は私と同じ黒色だが、容姿はお母さんにそっくりだ、それにそのピアスには魔力回復以外にも面白い付与がされているから、ライが自分で一つひとつ解き明かして行きなさい」

「ありがとう、お父さんお母さん！」

転生して、死ぬ前の世界にもお父さんとお母さんは居ましたけれど、この異世界のお父さんお母さんも本当に大好きです。

「では、さようならではなく、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

「頑張るのよ、行ってらっしゃい」

僕は玄関を出て、街の門をくぐり、旅立ちました。

そしてしばらく街道を歩き、街が小さくなったのを確認してから立ち止まりました。「ひゃっほ〜い♪ まさかこんなに早く冒険の旅に出れるとは思わなかったよ〜♪ 冒険したかった僕にとっては〜♪」

思わず、くるくると回り全身でミュージカルのように喜びを表してしまいました。

「十歳でえ〜♪ 学校かあ〜♪ 家を出るかってこの世界は中々お子様には厳しい世界ですね〜♪ 僕も子供ですが〜♪」

街道を行く人影も無いので恥ずかしくはありません、見物客はこん棒を振り回し突っ込んでくるゴブリンと、シユパシユパツ！

よし、収納！ お父さんの刀は切れ味抜群です。後は、ゴブリンに襲われていて、ほとんど潰れてしまったスライムが一匹居るだけです。ね。

「でろんってなっちゃってますねえ、よしよし、魔石は無事のようにですから仕方ありませんね」

収納から小さな籠かごを取り出しつと、後はゴブリン村長の魔石を入れて、スライムも籠に入れておきましょう。

助かるかな？ 魔石はこれで大丈夫だよ？ 村長はゴブリンでも上位種だったから魔石にもたつぷり栄養じゃなくて魔力が沢山詰まっていますからね。

「よし、夜営予定の所まで行っちゃいましょう♪」

籠を手はずんずん歩いて街道からの景色も楽しむ。ちよつと前は、広大な面積の花畑があつて目を楽しませてくれました。そしてやつと夜営の予定をしていた分かれ道に、到着です。

スライムさんは元気になつていたのでここでお別れです、水場の近くに籠から出しておろして、引っ付いて離れませんよ。

「スライムさん、この場所は嫌なのかな？」

スライムさんは、ぶるぶるするだけで何も言いません、仕方がないですね、良い場所が見つかるまで一緒に旅をしましょうか。

「さあ、夜営の準備ですが、ここでやっても良いのでしようか？」

分らないので、なるべく邪魔にならない所にテントを張りましょう。

このために庭で練習した成果が出てくれれば良いのですが。

水場から離れたところにテントを張って完了です、焚き火なんかやつちやいましょうか。

石で縁を作り中に細い枝を入れ、魔法で火を着けましょう、次は少し太めの木も加えていくタイミングですね、ここです！

火の勢いが一気に上がったところで、ほいっと、追加していきます。

ここでマシユー作のスープを一杯分取り出し（沢山作ってもらいました、マシユー本
当にありがとうございます）、パンと一緒に頂きます。

ちなみにパンもマシユー作です。

辺りも暗くなり、焚き火の炎と大きなお月様だけが光源です。

「何度も思ったけれどお月様大きいよね〜地球の月とは違つて模様が變つていくから
自転の回転方向が違うんだね〜」

『地球つてなあに?』

「地球は僕が前に住んでいた。」

喋りかけられた? あれ?」

辺りをキョロキョロ探してみても誰も居ませんね?」

「幻聴かな」

『ねえねえ地球つてなあに?』

声のする方を見たのですが、小さな花がポツンと咲いているだけです。。

「もしかしてお花さんがお喋りかな? く、ふふ」

『うんしよ、うんしよ』

お花が動き、一生懸命這い出ようとしている、頭から花を咲かせて、深緑の髪に褐色
肌で、緑色のワンピースを着た小さな十センチくらいの女の子が地面から這い出て来る

じゃないですか！

そして自分が埋まっていた？ 生えていた穴の縁ふちに腰かけ僕の方を見上げてこう言いました。

『うん神うん、へえ、転生してきたのね、それより地球眼つてなあに？』
やっぱり喋ってるし動いちやってますよ！

第5話 旅の同行者

「ふうん、ライは死んじやってこっちに転生したけれど記憶が残っているのね」

テラはスライムさんの上に乗っかり、僕の話の話を聴いています。

ドラゴンライダーならカッコいいと思いますがスライムライダー うぶぶ。

「何？ 何か可笑しい事あった？」

「違うよ、テラがスライムさんに乗っているのが可愛いつて思っていたのと、スライムさんも乗られるのが満更でもなさそうだからね」

「そ、そお、私可愛い、そんな事言われたの初めてよ、良いわ！ ライはこれからどうするの？ 私が付いていつてあげるから心配要らないわよ！ それとあなたはそうね、命名！ “ムルムル” ！ 私の騎獣として支^{つか}える事を許してあげるわ！」

ええ、テラと一緒に来るの！ って何者なの!? スライムさんに名前付けちゃったよ！

「テラ、僕の旅に付いてくるの？ 友達のフィーアの様子を見に行つてその後は予定無しだよ？」

フィーアは、お母さんに付いて一緒に元々住んでいた隣町に帰つて学校に通うそうで

す。

僕は通わなかった、もちろん！ だって習うのは算数だけなんだもん。字は覚えちゃったし、魔法も独学で覚えてしまいましたから、友達は欲しいから通いたい気持ちも少しありましたが、授業が耐えられそうにありませんよ、あはは。

「そうなの？ ってファイアってライの彼女？」

おっと聞いちゃいますか！ もちろん違いますよ、フラれちゃってます。

だって、吸血鬼としか結婚したくないそうです。そう、ファイアも乳母のキャリアさんも吸血鬼で旦那様は真祖で食堂を営んでいます、真祖なのに。

昔、お父さんと、お母さんとパーティーを組んでいたそうですよ、そのお蔭で乳母の仕事を受けてくれたそうです。

ファイアも、僕のお母さんにおっぱいを二回貰っていたそうです、ファイアは嘔むからと苦笑いをしていたようですが、あはは。

おっと考え事をまたしてしまいましたね。

「フラれちゃってます、あはは」

「ふくん、まあ、頑張んなさい、その内に良い子も見付かるわ！」

そこは断言してよテラ！ 小さい声が聞こえますよ！

「はああ、そうだね、頑張るよ、あははははは」

たぶん

.....

乾いた笑い声が出ちやいましたよ、さて食べ終わったお皿にはえつと、ムルムルだね、ムルムルをテラが乗ったまま乗せるとみるみる内にお皿が綺麗になつて行きます。

「ムルムルその調子よ、いっぱい食べて大きくなるのよ」

「あははは、ムルムルは普通のスライムだからあまり大きくならないかな」

今は手のひらサイズだから大きくなつても倍くらいまででしょうね、だからテラには丁度良いサイズなのです。

「そうなの？ 仕方無いわね、私が鍛えてあげるわ、私の騎獣なのですから」

お皿の上のムルムルの上で仁王立ちのテラ、ムルムルはプルプル震えて喜んでいるのかな、くふふ。

「よし日課の時間です！ 焚き火があるから今日は火からやるぞ、ぐるぐる〜ほいっと！」

焚き火から分かれた火をぐるぐる回すとこから始めます。

今日は観客が居ますから少しばかり調子に乗っちゃいますよ〜。

始めは蚊取り線香で〜♪ 次はぐるぐる回して竜巻だあ〜♪ 最後は大技、ファイアードラゴンおいで下さい〜♪

パチパチパチパチ

「す〜い！ ライは大魔法使いね、呪文を唱えない魔法は遙か昔に廃れちやつたのよ

！ 良く覚えたわね！」

「え？ 魔法って呪文があるの！」

「え？」

「え？」

「ライは誰に魔法を習ったの？ もしかして、遙か昔に亡くなった魔法使いの幽霊？」

「ど、独学であります！」

なぜか、上官に返事をする兵隊さんの様な返事をして敬礼までしてしまいました。

「はあつ！ 独学ですって！」

「う、うん、産まれた時から一人で修行だよ。えっと、なにか駄目だったかな？」

「駄目な事は無いわ、逆よ、呪文を使わないと発動しないのは、魔力の操作が出来ていないからよ、呪文のせいで威力は下がるし、余計な魔力は使うし良いところがないのよ」

「それじゃあ、呪文を使わない魔法はなぜ廃れたの、少ない魔力で威力も強い、良い事だらけですよ？」

「発動に、目に見えて発動するのに数年は成果が見えないの、呪文なら魔力があり、素質があれば誰でもすぐに魔法が使えるの」

「そ、そうなの？ 僕は産まれて三か月くらいで風は吹いてくれたよ？ それにウインドードルで窓の外にあった木の葉っぱ揺らせたのは半年くらいかかったよ？」

「は？　嘘でしょ？　微風吹そよかぜかせるだけで数年かかる筈なのよ！　ヒヨロヒヨロの攻撃

魔法撃つなら五年は必要なのよ！　ライあなたおかしいわよ！」

ゼハーゼハーとテラは肩で息をしながらムルムルの上で僕を指差しています。ええ、頑張ったね、とか言ってくれないと泣いちゃいますよ。

「あつ、フイーアはそれくらいかな？　でももつと早かったよね？　ビシバシゴブリンさんを倒していましたから！」

「その子もおかしいわよ！」

「あはは、ま、まあ、今は普通に使えるから良いよね？」

「はああ、そうね、古代魔法と呼ばれる魔法使いが二人もいるのですから喜ばしい事よね」

兄さん達も使い出している事は、しばらく内緒にしておきましょう。

「あははは、そろそろ寝るよ、テラとムルムルも一緒にテントで寝る？」

「もちろんよ、さあ行くわよ、さつさとお皿を片付けて私達を運びなさいね」

そこは僕が運ぶんだね、ムルムルをテラを乗せたままって逆ですよ！　テラをムルムルに乗せたまま持ち上げお皿はほいっと！　収納、手のひらにムルムルの感触が気持ちいいですね。よし、焚き火は大きな木を加えておけば明け方まで持つかな？

「これが僕のテントだよ、一人用だけどテラとムルムルなら余裕だよね」

第6話 盗賊に捕まりました

「ふあああ、良く寝てしまいました、うふふ、テラったらムルムルベッドですね、物凄く気持ち良さそうです」

朝ごはんの準備をしましょう。

テント外に出るとまだ火が燻くすぶっていましたから、風をおこして小枝を火種の上に乗せておきます。

すぐに火が着き、少し大きめの木を加えて、お湯を沸かしてお茶にしましょう、歯磨きして、顔も洗えばスッキリしましたね。

テントに戻ると、まだまだテラは寝ていましたので、そつとムルムルごと持ち上げ外に連れ出しテントを収納しちやいます。

「ムルムルとテラは全然起きないね、ご飯も終わったからそろそろ出発です」

心なしか弾スキップんでいるように見えるのは気のせいでしょうか、あははは。

火を消し、王都に向かう道とは別の道を進みます。

「ふあああ、良く寝たわ、あら、ライおはよう、ムルムルもおはよう」

「おはよう、今日も良い天気だよ、今日はたぶんだけど峠の手前の村に到着予定です」

テラはムルムルベッドの上で伸びをしながら朝の挨拶をした後ぼんぼんとムルムルを労ねぎらつてます。

「そうなの、ところでライ、あなた昨日から気になっていたんだけど、常時魔力をぐるぐるさせているの？」

「え？　だって普通でしょ？　何かしていたり、歩いているだけなんて勿体ないよ、寝る

時は流石に止まっていると思うけど普段は回しっぱなしだよ、おかしな事言うね」

後々気付いたのですが、魔力をぐるぐる回していると体の調子が良いのですよ。

「いやいや、ライ、普通の人はそんな事すればすぐに気絶しちゃうわよ」

「ああ、そうだろうね、生まれてしばらくはすぐに寝ちゃってたから知ってるよ、あれっでぐるぐるしている内に魔力が外に出るだけになるからだよね？　だから回りにも魔力があるんだもの、取り込めば解決するじゃない」

そうでしょ、回りに沢山あるんですから、やらない手はないのですよ！

「あなたそれ、その理屈おかしいから、それ出来る生き物はドラゴンとムルムルの様なスライムだよ」

「え？　そうなの？　ファイアもお兄さん達も出来るよ？　あつ」

「お兄さん達も？　お兄さん達も出来るって言うの！　ファイアはまあ、先に古代魔法を使えるらしいからなんとか納得しましょう、それがお兄さんも？」

あつ、内緒にするつもりだったのに口が滑ってしまいましたね、あはは。

「そ、そうだよ、僕が土いじりで色々やっているのを見て、聞いてきたからやり方教えた
ら、すぐに出来るようになったかな、あはは」

「つて事は古代魔法は！」

「え？ えつと、少しは？」

今もぐるぐるを続けていたなら、フイーアと同じくらい使えるように、お兄さん達な
らもつと使えるようになってるかも。

「はああ、じゃあ四人は使えるものが居るつてことね」

「たぶん」

父さんと母さん、メイドさん達や、屋敷の人達は使える可能性はあるけれど、覚える
の難しいならたぶん無理だよな？

「たぶん？」

「屋敷の皆には教えたけれど、難しいならたぶん使えない、はずだよな？」

テラのジト目はちよつと可愛いですね。

「はああ、まあ良いわ、ライのレベルで使えるつて訳でもないでしょう、常にぐるぐる回
している様な変なヤツは見たこと無いもの、フイーアつて子を見てみないと分からない
けれど」

「あははは」
フイーアはたぶんぐるぐるしているだろうなあ、相当厳しくそこは教えたから。

天気の良い街道を遠足気分です。

遠足行ったこと有りませんが、そんな気分です、木の枝を拾い、ずりずりと引きずって歩くのが、何が楽しいのか分からないのですが、お昼休憩以外は歩き続け、まだ日は山にもかかっていない時間に丘の上から村が見えました。

日が山にかかりそうになった時、木を組み合わせて作られた外周の三メートルほど高さがある壁に囲まれた村に到着。

門番さんにギルドカードを見せて、中に入り、道行く人に宿がないか聞くと、一軒だけあるとの事で、場所を教えてもらい、今夜はベッドで寝ることが出来そうです。

僕が出ていく側の門近くにあった宿屋の食事は、大人の人が食べるには少し量は少なかつたのですが、僕が食べる分には調度良い量で、味は抜群に美味しかったです。

特にお肉がオークで、ホロホロになるまで煮込まれたシチューは、お皿をパンで拭き取ってしまい、シチューが入っていたの？ と思えるほど綺麗に完食してしまいました。

明日の出発前に、オークを宿屋に売って見ようかと思えます。

食事も終わり夜も更けて、ムルムルをむにむにと感触をテラと共に楽しんでいると、蠟燭ろうそくの長さも半分くらいまで短くなったので、寝ることにしました。

ムルムルとテラは僕の胸の上に陣取りテラのお腹が冷えないようにハンカチを布団代わりに掛けておきました。

もちろん僕もテラ達の手前までお布団を掛け眠りにつきました。

翌朝、これまた美味しい朝食を頂いた後、オークを二体宿屋さんに売って、村を出発しました。

ここからはしばらく坂道を登ることになりますので、馬車を走らせる方達も、早めに出発して中間点、夜営地があるの山の中腹を目指します。

僕は歩き用の夜営地を使いますので登りだけで数日掛かる予定です。

「ライ、そこのお花のところに私を下ろしなさい」

「どうしたの？ よいしょ」

僕はテラが乗るムルムルごと肩から下ろし、街道脇に咲く、小さな黄色い花の近くに下ろしてあげます。

「ん、ありがと、んっしょっしょっ！」

テラはムルムルから飛び降り、街道脇に咲いていた黄色い小さな花を掴むと、
ずる

るっ” 根ごと引き抜き頭に乗せる。

え？ そういう物なの！

「よし、うんうん、今日はこの子で良いわね、行くわよライ、早く肩に乗せるのよ！」
何か満足そうですが、気になるので聞いてみましょう。

「テラ、なぜ頭に花を乗せてるの？」

「ん？ 栄養を^{あた}与えてるのよ、この種に対してね、それが今の私のお仕事なの」

んと、テラから栄養を吸い取っている花は最初見た時より瑞々しくなっているように見えるのですが、まあ可愛いお花を頭に乗せているテラが、ニコニコなので良いことにしましょう。

「それより、ムルムルの朝ごはんは無いの？ 無ければゴブリンでも倒して用意しなきゃね」

「え？ ムルムルは外にある魔力でみたいな事を言わなかった？ まあ、魔石もゴブリン本体も沢山あるけど」

不動在庫が腐るほど収納に入ってます、それこそ冒険者ギルドで薬草採取のお仕事をやりだした頃からの在庫なので、オークは数体我が家の食卓にも上りましたが、ゴブリンはそのまま残っております。

「魔石ちようだい、本体はお昼休憩にムルムルにあげるから」

「了解、じゃあ籠を出してつと、魔石いくつもいるの？」

「二つずつで良いわよ、ほら早く籠に乗せなさい、ムルムルがお腹すかせてるんだから」
一つで良いのね、って急かされましたので早くやってしまいましょう。

「うん、了解」

昨日の籠を出して魔石をコロソつと出し、テラが乗ったままのムルムルを籠に肩から乗せ替えました。

ムルムルは魔石を包み込みぶるぶると御機嫌そうに揺れています。

「うんうん、たくさんとお食べ〜♪ 沢山あるからムルムルのごはんはいつでも言ってるね」
つんつんと優しくつつくとぶるぶる返事をしてくれている様です。

「じゃあ、気を取り直して出発再開しましょう♪」

「うむ、ライよ進むのよ！」

あははは、旅の仲間が増えるのって、一人で旅をするより良いですね、歌って踊っては、恥ずかしくて出来ませんが、あははは。

緩やかな坂道をすいすい上り、何台もの馬車に追い越され、お昼はムルムルのゴブリンの丸飲みは凄かったですよ！ ゴブリン村長を出してあげたのですが、お腹の上に乗せると、みによくんと伸びたムルムルはゴブリン村長を包み込んだと思ったらシユル

シユルつとほんの数秒で元の大きさに戻って、ぶるぶる震えて終わりです。

見た後数分はマシューさんに作って貰ったスープを掬い上げたまま止まったほど驚きましたです。

つと、語尾がまだ安定していない様ですが、順調に今日の夜営場所に到着しました。

この夜営地は、馬車も数台止められる、中規模な広場です、でもここは宿屋の女将さん情報では盗賊が出ると言われる夜営地の一つ手前、明日、その夜営地は跳ばすために今夜は早く寝て、早朝出発にする予定です。

食事をささつと終わらせ、今日はテントは張りません、朝から畳むには日が昇つてからでないとなかなか難しいからです。

大岩を背に焚火を少し大きく作り、地べたに座り、大岩にもたれながら眠ることにしました。

深夜、甘い匂いがするなど、確か眠り薬がこの匂いでしたね、お母さんが前に作っていましたので知っています。

狩りの罠に使うって言っていましたね、お母さんが間違つて吸つてしまつて寝ちゃったのには驚きましたが、くふくふ。

僕は、「健康」のスキルを神様に貰ったので毒や薬は効かないのですよ、なので眠り薬が充満した部屋に誰も入れ無い時に、僕が家の人の代表でお母さんを部屋から引きずり

助け出した事を思い出しました。そんな事をおもいながらそのまま僕は寝てしまいました。

ガタガタガタガタ

「ふあああ、あれ？」

馬車に揺られているようですが、いつの間に乗ったのでしょうか？ 夢？ あと凄く柔らかな枕ですが僕、枕は持ってきてきましたっけ？

「良かったやつと起きましたわ、大丈夫ですか？」

「え？ おはようございます？」

「はああ、薬を嗅がされ眠っていたのですものね、仕方ありませんわ」

きちんと整えればさぞかし綺麗な金髪で、大きな青い瞳、汚れていなければ真っ白な肌なのだろう女の子が覗き込んでいました、いえ、眠り薬は効かないのですが。

「あなたも盗賊に人攫いの犠牲になりましたのよ」

冒険デビュー二日目で盗賊イベント発生の様です。

第7話 馬車の中にいますよ

「え〜っと」

いきなりの展開ですか！ 初めての街で冒険者ギルドで絡まれイベントより先に盗賊イベントが来ちゃいましたよ！ 順番飛ばしすぎでしょ！ あれ、馬車ですか。襲われてる馬車を助けるってテンプレートは予想して、やってみたいランキングに入っていたけれど、乗っちゃってますね、あはは。

「混乱している様ですわね、無理ありませんわ、私もわたくし酷く混乱しましたもの、盗賊は私達をラビリンス王国へ奴隷として売るために今向かっていると聞いていますわ」

あつ、心配されているのに僕の悪い癖ですね、つつい物思いに、つか可愛い女の子ですね、その金髪碧眼の可愛い顔を下から見上げていますって、これは膝枕ですか！

世の男性（僕）が女の子にやって貰いたいシチュエーションのベストスリーに入る膝枕ですよ！

おっと、そんなことを言っている場合ではないですね、確か盗賊は異世界ではやつつけても良いはずだったよね？ 僕に出来るかどうかだけど、周りから感じる気配だと、そんなに強い気配はないからいけるとは思うのですが、まずは自己紹介からですね。

「そうなのですか、えつと僕はライリール、Eランクの冒険者です、ライと呼んでください」

膝枕から未練がありますが頭をあげ、床に座ることにしました。

「シャクテイよ、テイと呼んでくださいませ」

「テイだね、よろしくお願ひします、で盗賊に僕、テイ、君もかな、捕まってラビリンス王国に奴隷として売られるため、この馬車で移動中、で合っているかな？」

「そうよ、私も昨日、夜営中に甘い香りの眠り薬を嗅がされて、気が付いた時にはこの馬車の中でしたわ。あ、あの、あなたは、ライは何か飲み物を持ってないでしょうか？」

「ここに入られれでから何も口にしていませんの」

「えつ？ この暑い馬車の中で！ ちよ、ちよつと待つてね！」

僕は、マシューさんに搾ってもらったジュースにお塩を少し入れてテイに手渡す、脱水なら確か塩分が必要だった筈です。

大きめのマグカップを渡す時に手に触れたのですが、震えが出るほどに体調が悪かったのに、僕を膝枕をしてくれてたんだね。

テイがコクンコクンとジュースを飲んでる間に良く見ると、馬車の中は壁に手形や引つ掻いて傷を付けた様な跡が至るところに有ります。

今までこの馬車で、人攫いに遭った沢山の人達の付けた痕跡なのでしよう。

あつ！ そう言えばテラとムルムルは大丈夫だろうか。

『ライ、私もムルムルもこの馬車に乗っているから心配しなくて大丈夫よ』

「えつ！ テラ、ムルムル！」

「きや」

僕が声を出した事に驚いて、ティがビックリした様だ。

「ティごめん、いきなり声を出しちゃって、ちよつと待ってね」

「は、はい」

「えつとテラどこにいるの？」

『待ってて、今ムルムルに馬車の底を食べて貰って、穴を開けているから』

「そうなんだ、危ない事はしないでね、待ってるよ」

『任せておいてね、ほらムルムル、私の騎獣としての力の見せ所よ！』

いや、ムルムルはごく普通のスライムさんですから、あはは。

なんだか、盗賊の弱そうな気配でゆるみかけていた緊張感が、テラの声で一気に消え失せた様な気がしなくてもないけれど、少し気が楽になったかな。

「ティ、僕の旅仲間が来てくれるみたい、怪我とかしなきゃ良いんだけど」

「お仲間さん達は眠らなかつたのかしら、私の旅の仲間は沢山いたのですが、ここには私しかいませんし」

「はあ」 とため息を吐きすごく不安そう、 そうだ、 ティを皆のもとに、 住んでいたところに帰る手助けをしよう。

「そうなんだ、 まあ僕の仲間は」

「お待たせ！ 良くやったわムルムル、 褒めてやるわよ♪」

テラとムルムルについて話そうとした時、 足元からにゆるりとムルムルが 出てきて、 その後からテラがよじ登ってきた。

「テラ！ ムルムル！ どこも怪我してない？」

「きや、 ス、 スライム！ と何？」

ティは困惑しているようだが、 僕はテラとムルムルを持ち上げ、 手のひらに乗せた状態で前後左右から怪我してないか確かめます。

「ライ、 そっちの子が戸惑っているよ、 彼女なの？ 人攫いにあつたのに、 女の子を引っかけてたの？」

「そりや可愛いから彼女になつて欲しいなあなんて思つたりはするけどつて、 何言わせるの！」

多感な年頃なんですから大目に見て下さい。

「喋ってますよ、 その可愛いお人形さん」

「か、 可愛い！ ライ、 良い子だよ！ もうお嫁さんにしちゃいなよ！ 見たら汚れ

ちやつてるけど、可愛い子だよ、ムルムル！ その女の子の汚れを食べちゃって！」

うんうん、異世界ハーレム展開も憧れますが、あつ！ 既にフィーアフラれ挫折しますね。

そんな事を考えてしまっていると、ムルムルが、みによんみによんとして縮みしながらティに近づきゴブリンを食べた時のように、ティを包み込んでしまった！

「えっ！ 大丈夫なの！」

「大丈夫だよ、スライムの得意技だからね、ほら終わるよ」

ムルムルは元の形に戻って、ティの頭の上に、みよんと伸びて、僕の肩に乗り移ってきた、テラをムルムルの上に乗せ、なんだか定位置になりそうな予感がしますが、今は置いておいて、ムルムルに汚れを食べられたティはそれはそれは輝くような金髪で青い眼のつるつるの白い肌物凄く可愛い子です。

服の汚れまで綺麗になっていて、青色の服が青い瞳とマッチしてその綺麗な髪の毛を強調させ、ああ、本当に可愛すぎる！

「はわわわわわ！ た、食べられちゃったのかと思いましたですわ！ で、でも、ムラムラさん？ 汚れを落としていただきありがとうございます」

「ムラムラじゃなくてムルムルね、でもこの馬車の中にいるなら、また汚れちゃうね、あはは」

馬車の中は本当に汚いです、たぶん僕の背中も大変な事になっていいると思います、それは、馬車の中で用を足してしまうしかないからなので、臭いも大変臭いです。

「ライ、魔石を二、三個ちょうだい、それだけの魔力があれば、私の騎獣ムルムルならこの馬車の中なんてあつという間にピカピカよ！」

ほお、それはスゴい、早速、今度はオークの魔石にしよう。

「はい、ムルムル」

ムルムルの前にオークの魔石を三個持つていくと、みによくんと伸びて魔石を取り込み、テラはムルムルから降りて待機。

するとムルムルがまたまたみによくんと伸びて天井に引つ付くと、そこから天井を這い、壁床までピツチリと張り付き、まるで僕達を包むかの様に。

三十秒ほどそのままでしたが、シウルシウルと縮んでいき、天井に元のサイズのムルムル。

ぼてつ、つと僕の肩に戻ってきて、周りを見ると、汚れて何？ つてほど綺麗になっていて、壁や床、天井まで木目が見え、作りたての様に綺麗になりました。

「ふおお〜！ ムルムルスゴいよ！」

「はい、ムルムルさん素晴らしいですわ！」

「ぬふふふ、私の騎獣だからな、この程度簡単なものなのよ！」

ぶるぶる

テラが偉そうなのは置いておいて、ムルムルも、満更ではない感じで喜んでいるみたい、あははは。

綺麗になつた馬車の床に僕とティは向かい合わせに座り、テラとムルムルは僕の肩、ついでに僕もムルムルに綺麗にして貰いました。おっと、盗賊をどうやってやっつけるかでしたね、そして作戦会議が始まつた。

第8話 盜賊をやっつけましょう

「さあ、作戦會議を始めるわよ！ あつ、大きな声を出しても大丈夫よ、私が結界を張っているから声なんか外には聞こえないからね」

テラはムルムルの上でふんぞり返り、そんな事を言う。

「おお！ テラ凄い事が出来るんだね、お花に栄養与える事がお仕事だつて言つてたのに、僕にも教えてよ」

「まあ！ 結界術ですよ！ わ、私も教えて欲しいです」

テラはムルムルの上でふんぞり返つたまま鼻の穴を膨らませ、ふふんつとどや顔、可愛いです。

「よろしい！ ライ、ティ、教えてあげるわ！ ムルムルも一緒に覚えるのよ！」

「はい！」

ふるふる

ムルムル、それは頑張るつて事かな、あははは。

「でもまずは、今の状況ね、この盜賊は、五台の馬車で成り立っているわね、この小さい馬車は子供が二人、ライとティ二人だけね、もう一つの大きな馬車は女性冒険者達が三

名捕まっついて、区切られて男性冒険者が六名、合わせて十一名が人攫いの犠牲者ね」
そんなに捕まっているのか、すると人攫いの人数は多いでしょうね。

ティは、自分達以外にも居た事に驚き、大きな眼をさらに大きく見開き口も半開きになっっています。

「それで、盗賊の連中は十五人よ、話の内容から察するに、今日の夜も人攫いをするみたいよ、ライ、やっつけちやいなよ」

やっつけちやいなってテラってば軽いですね！

「良いのかな？　もしかして当たり処が悪くて死んでしまったりするかも、狙いは結構自信がある方だけけれど」

「盗賊は生死不問でどこの街でも引き取ってくれますわよ」

ん、この、『殺す』事に忌避を感じないのは、スキルの、『健康』が心の健康を守っているからなのかな？　僕は既に強盗を捕まえるために足をウインドアローで撃ち抜き捕まえたのですが、太い動脈を撃ち抜いた様で出血で殺してしまった時も、『ああ、こんな事は普通なんだ』と納得してしまったのですよね。

もしかすると、精神耐性なのかもしれないませんが、ステータス見えないからなあ、神様、僕だけでも見える様にして貰えませんかね。

「そうだよ、やっつけちやって良いからね、ライならちよちよいつとやってしまえるよ、

後ついでにこの馬車は頂いちゃいましょう、造りは古臭いけれど頑丈そうよ、ムルムルが穴を開けるのに苦勞するくらいね」

ぷるぷる

あははは、ムルムル頑張ったものね、旅の足は必要だし、箱馬車なので夜営はテント要らずになりますね、小さな穴は開いてますが、頂いた後に直しましょう、DIYですよ。

「そうだね、テイを送る目的が出来たから、馬車はあると嬉しいし、テイを歩かせるのも、どれだけ遠いか分からないから欲しいかな」

「送って下さるの？ ライ、ありがとうございます、テラ師匠もムルムルさんもよろしくお願いいたしますね」

「任せておいて！ ライが何とかするから！」

おくい、僕がやるのにテラがなぜ肩の上で偉そうなのか分からないけれど、何とかしちやいましょう。

「じゃあ、さつさとやつちやいましょうか」

「お願いいたしますぬかるんじやないよー！」

僕は立ち上がり行動を開始します。

この馬車には盗賊は御者一人だけしか乗っていない、後は進行方向に気配があるだけ

なので、まずは馬車の戸に掛かった施錠を外しましょう。

この世界の鍵は魔法の鍵なので、戸に近付き、魔法の鍵に内封されている魔力をぐるぐるします、*「ガチャ」* 外れた音が聞こえました。

内開きの戸を開け、そつと外を見るため顔を出してみる。

後ろは誰もいませんね、前に大小四台の馬車が先行しています。

僕は、馬車の屋根に登り（梯子が付いていました）、そつと屋根をつたい御者台へ向かいます。

御者台には男が一人手綱を持ち、大あくびをしていました。

これはチャンスですね、眠いという事は、頭は少し回転が遅くなっている筈ですから絶対気付かないですね、遠慮無く男の魔力を無理やり回し、魔力を発散させて行きます。

魔力があまり多くなかったのか、男はすぐに気を失い、ふらふらと前のめりに倒れ御者台から転げ落ち、馬車が、*「ガダンガコン」* と男を踏み越え進みます、屋根の上で立ち上がり後ろを見ると、街道には大の字で動かない男が倒れていますので、男を収納してみる、抵抗もなく収納出来ましたので、死んだようですね、街道から男は消え何もなかったかの様になりました。

僕は御者台へ飛び降り手綱を手に取ります、前の馬車に遅れない様にしながら、御者台にある小窓を開けた。

「ライ！ 怪我はしていませんか！ 酷く揺れましたわよ！」

テイが窓を開け、僕が御者台にいると分かり、小窓から顔を出し声をかけてきてくれました。

小窓に手を掛け、顎を乗せたぶん背伸びをしているでしょうね、あははは。

「盗賊が御者台から落ちて、踏んでしまいましたから、テイは揺れて怪我とかはしてない？」

「はい、大丈夫ですわ、ムルムルさんと師匠は大喜びで転がっていましたわ、うふふ」

「あはは、まあ、怪我がなければオツケーかな、テラ、どれが人攫いされた冒険者達が乗っている馬車なのかな？」

「あつ、今持ち上げますわね」

そう言うのとテイが小窓から消え、次に現れた時は頭にムルムルとテラを乗せ、小窓に顎を乗せる。

うん、さらに可愛さアップだよね。

「すぐ前の馬車よ、ライ、やっておしまい！」

前の馬車をビシッ！ つと指差しそう言うが、馬車の操縦はどうしようか。

「あ、あの私が馬車の手綱を握りましょうか？ 引つ張つて貰つてこの小窓から出して貰えれば、何度か馬車は動かした事がありますので」

「おお、それは助かりますでは引つ張りますね」

片手で手綱を持ち、もう片方の手でテイを引つ張りあげます。

「うんしよ、ふう、中も綺麗になったとはいえ、外の空気はやはり良いですね、では手綱をお預かりしますね」

「うん、お願いね」

大きく深呼吸して、御者台に座ったテイに手綱を渡します。

「じゃあ行つてきますね」

「行つてらっしゃいませ、お気を付けて！」

「頑張るのよライ、応援は任せておいて！」

二人の言葉を聞き、馬車から飛び降り、前の馬車に向かって、
“ドンツ” と地面を蹴り加速します。

数秒で前の馬車に追い付き、屋根に飛び上がり素早く御者台の上に到着。

二人ですね、気付かれる前に一気にぐるぐるやっちゃいますよ！ほいと！

手綱を握る男はすぐに魔力欠乏で気絶しましたが、もう一人はまだ動けるようです。

「おい、居眠りしてんじゃねえぞ、ツたくしやくねくなあ〜」

手綱を取ろうと、御者台で立ち上がり、垂れ下がっているために体をのりだし手を伸ばしたところで、魔力欠乏で気絶しました。

ガダンガコンガゴン

「収納！ よし、こいつはえつとロープは持ってたかな？」

と考えていたのですが、御者台の背もたれ部分にいくつもロープが、掛けられてありました。

「そっか、人攫い用かな」

手足を縛ってしまい、ふと思いついて、男の持ち物を片っ端から収納して、パンツだけに。

手綱を操作しながら小窓を見てこれなら大人の人でもごつい人以外なら出れそうな大きさです。

「収納した中身は後で確認しようか、んつと、小窓は鍵付きですね、ぐるぐるつと」

「ガチャ」 開きました、そして小窓を開け中に呼び掛けます。

「助けにきました、馬車を運転できる方は？ それとこの窓から出れる方はいますか？」

「ああ、助けが来たのか、馬車は大丈夫だが、すまない俺達は無理だ、縛られて動けないんだよ」

中を覗くと壁にロープで縛り付けられていました。

「ナイフを渡しても抜けるのは厳しいですね、ん」

「馬さん、前の馬車に付いて走っていて下さいね」

一応ですが、馬さんをお願いをして、手綱を御者台に引つ掛け、小窓から中に滑り込み、素早く六人のロープをナイフで切り拘束を解いていく。

「お兄さん馬車の運転をお願いします、前の馬車に付いて行って下さい、盗賊を捕まえますので」

最初に話しかけてきていたお兄さんに頼んでおきます。

「任せろ、礼は後でな」

「はい、急いで下さい、馬さんに任せてありますのでどうなるか分かりません」

「おう！」

お兄さんは、体に残っていたロープを投げ捨て、器用に小窓から外に出て手綱を握ってくれました。

それを見て、僕は次の方のロープを切り始めました。

第9話 捕縛しちやいます

「おい、前の馬車が休憩に入るみたいだ、この先に水場があるんだ、止まる合図の鐘を鳴らしたからそこで止まるぞ」

小窓から顔を覗かせ、先ほど手綱を任せた冒険者の方がそんな報せをしてくれます。

おお、なら好都合かな、この後どうやって馬車を一台ずつやつつけるか、一度にはやりようがないからどこかに止まって欲しいと思つたので良いじゃないですか！

「なら僕はそこに先回りして、待ち構えまえてやつつけちやいますね、その場所の目印みたいな物はありますか？」

「馬用に、大きな木桶が小川近くに置いてある、街道から見ればすぐ分かるぞ」

小川に木桶ですね、よし。

「はい、これで皆さんのロープは外しました、後、女性冒険者の方が三名この壁の向こうにいますので、頼めますか？」

「ああ、同じパーティーだからな、すまないが、鍵を開け、ナイフを貸して貰えるかな、ロープを切るにも何も持っていないからな」

良く見ると、薄いワンピースの様な服しか着ていなかったもので、何もないですよね。

「分かりました、この馬車を運転していた人の物ですが」

「助かる」

先ほど取り上げておいた盗賊のナイフを手渡します。

「これをどうぞ、それとその内扉を開けますね」

女性冒険者がいるであろう扉の鍵を、ここも魔法の鍵なので、ぐるぐるして、ガチャ

“ 開けておきましょう。”

「鍵は開きましたのでお願いしますね」

「助かる、そっちは気を付けてな」

「はい、全員やつつけちやいますよ」

僕は外への扉の鍵も開け、外に飛び出し、すぐに街道脇の林の中に入り、木が立ち並ぶ隙間を縫うように、走り抜け馬車を追い抜き休憩場、水場を目指します。

下草があまり無かったので思ったより早く馬車を追い越し、ある程度馬車から離れたところで街道に戻る、すると五分かからず目的の場所に到着しました。

「へえ、結構広いですね、夜営も出来る様な広さがありますね」

大きな木桶も十頭の馬が一度に飲めるほどの数が設置され、小川から水車で自動的に水が溜まるように出来ていました。

見渡すと、広場に石で作られた炊き火の消した後を見付けたので、石を集める手間も

ありませんから火を起こし、お湯を沸かして馬車が到着するまでお茶することにしめました、良く考えると、昨晚のごはんを食べた後何も飲んでいませんでしたから、喉が結構渴いていましたからね。

カップのお茶がなくなり、カップを綺麗にして街道の先を見ると、やっと五台の馬車が見えてきました。

僕は焚き火に木を追加して、盗賊ここでやつつけた後、ごはんにしようと思めました。テイもだけど、冒険者さん達もお腹減っているでしょうし、オークで塩味のステーキにしましょうかね。

そんな事を考えていると馬車がスピードをゆるめて、休憩場に馬車を街道から外して入ってきました。

ニヤニヤしている男達の魔力は、すぐにもぐるぐる出来る様に準備万端ですよ。

盗賊達は馬車を止め、十二人が僕の方に歩いてきますが、一度捕まえた僕に気付かないなんて、夜だったからよく見えてなかったのかもですね。

どンドン近付いてきている盗賊達は口と鼻を覆う布をマスク代わりかな？ マスクをしています。

一番前にいた盗賊が懐から瓶（ペットボトルくらいかな）を取り出しフタを開け僕の方に向けて撒きました。

「風よ渦巻け！　そしてかの者を覆い尽くせ！」

うつわく、これが攻撃魔法の呪文かあり、何の魔法使うかまる分かりなのねくうふふ、さて攻撃されたのですから反撃ですよね！

ぐるぐるですよ！

放たれた魔法をぐるぐるして主導権を奪い、たぶん眠り薬だと思うのですが、眠り薬を風で巻き上げ、十二の盗賊達にお返し！

「なっ！　しくじったのか！　こっちくんない！」

「なにやつてやがる！　早く消せ！」

「やつてるが消えねえ！　どうなつてやがる！」

あははは、行きますよおっ！

魔力追加で、ぐるぐるだ！

完全に盗賊達を包み込み眠り薬の風をどんどん範囲を狭め、勢いを増していく。

「やべえぞ！　くう、吸つてしまった！　ヤバイ寝ちまう！」

「俺も吸い込んだしまったあ！」

「ゲホッゲホッ！」

マスクでは防ぎきれず、次々と息を止めてられなくなった者からバタバタと倒れてゆき、十二人が全て眠りについたので確認。

睡眠薬入りの風を小川の向こうの林に飛ばしておきました。

「二応、魔力もぐるぐるしておこうかな、ほいっと！」

二分ほど盗賊達の魔力ぐるぐるして、持ち物を全部頂きました、そのせいで盗賊達はパンツだけになりましたが、あはは。

「ライ！ 大丈夫！」

馬車の影から覗き見ていたティが、頭にムルムルとテラを乗せて駆け寄ってきました。

「大丈夫だよ、後は縛って終わりかな」

「うんうん、流石ライ、良くやったわ！」

ぷるぷる

「あははは、弱かったからね、眠り薬さえ何とかすれば、そこまで強くないよこの盗賊達」
「ライ、縛り上げてしまいなよ、焚き火に木を加えてあるんだからこの後ごはんにするんでしょ」

「え？ ごごはん！ きゃ」

くうくきゆるるる

可愛い音が鳴りましたね。

「そうだよ、皆捕まってるから何も食べてなさそうだから、オークスターキにするつもりだ

「よ」

「少年！ 無事倒せたようだな、助かった、もうこのまま奴隷にされ売られると半分諦めていたからな、ありがとう」

二台目の手綱を握ってくれたお兄さんが残りの八人を連れこちらにやってきました。

「いいいえ、僕も捕まった側で逃げ出すついでですから、そうです、盗賊を縛るの手伝ってくださいませんか？ 縛って馬車に乗せ込んだ後、オークスターキをご馳走しますよ」

「おお！ ありがたい、三日ほど何も口にしていないからな、水は生活魔法でなんとかあったがなあ、拘束するのはもちろん手伝わしてくれ、こいつらの馬車にロープが沢山有ったからな、さっさと縛ってしまおう」

「はい、さっさと馬車に放り込んで、ごはんにしましょう」

「あははは、助かる、おい、俺達に乗っていた馬車をこつちに回してくれるか」

「おう、行ってくる」

お兄さん達のパーティーから一人走って、お兄さん達が乗っていた馬車を取りに行ってくれました。

皆でやるとあつという間に縛り終え、お兄さん達が乗っていた方に全員壁の金具にくくりつける事が出来ました。

あつ、ちゃんとワンピースは着せてあげました、盗賊達の馬車に大量に乗っていました

たからね。

「皆！ 俺達の荷物があつたぞ！ 多分全部揃つてる！」

「本当か！ 俺の革鎧買ったばつかだから結構心配してたんだよ、あははは」

お兄さん達の荷物も前を走っていた盗賊達の馬車に乗っていたようです、皆さん冒険者の格好に着替えに行きました。

なら僕はやることといえれば一つですよね！

「よし、オークを焼いていこう！」

「いっぱい焼くのよライ、皆腹ペコなんだからね、それにムルムルのゴブリンと魔石ちようだい」

「そうだね、ムルムル、とっても助かったから、オーク食べちゃう？」

「ライ、良いの？ 皆の分足りなくならない？」

テラは焚き火の所に用意した鉄板を見ながら心配そうに僕に聴いてきた。

「あははは、大丈夫、百匹食べても大丈夫だよ、いっぱいあるから、よし、オークリーダーをあげるよ、魔石付きで、ほいっと！」

焚き火で鉄板を熱している隣にオークリーダーと魔石を出してあげる。

テイの頭からテラごと持ち上げ、うほつ、至近距離でテイを見ると、うんうん、凄く可愛い♪ つと、今はムルムルのごはんですね、そつとムルムルをオークリーダーの上

に乗せてあげました。

みによくんとゴブリンを食べた時のように包み込んでしまおうとあつという間にオークリーダーはムルムルに取り込まれ、元の大きさに戻って、ふるふるご機嫌にふるえています。

「ムルムルさん凄いです、あんなに大きなオークをあつという間に食べちゃいましたよ！」

「普通のスライムなのにね、ムルムル」

「ぬふふ、私の騎獣ですもの！ ほらほら、ライは皆のオークを準備しちゃいなさい」
「は〜い♪」

オークを一人前ずつの大きさにカットしていると、お兄さん達が戻ってきました。

第10話 馬車での夜営

「ジュー」 熱々の鉄板で厚切り三センチのオークを焼いて貰っています。

お兄さん達のリーダーさんはパーティー内で一番料理が上手いそうなので、お任せしました。

「表面を焼き終わり鉄板の上で肉を五ミリほどの厚さに切り分けていきます。

後はパラパラと塩、ハーブ入りで味付けをして完成だということです。

僕は小さなテーブルを出し、その上に籠に大量に入ったパンを取り出します。

「皆さん、パンもありますので食べて下さいね」

皆は、パンを見て、「ぎよっ」 っと、しますが、手にとつて行きます。

「ライ君パンまで提供して貰つてすまないな」

「いえいえ、沢山焼いて収納してありますから気にしないで下さい、形は僕がやったので、変な形ですが、味は保証しますよ」

マシューさん作の生地を僕が色々形をアレンジした物ですから不揃いです、あはは。

「美味しいですわ、形もこれは角うさぎですわね、目のところまで表現していますし、可愛いですわよ」

「うむ、俺のゴ布林も美味いが、ゴ布林形はリアルだよな、あはは」

魔物シリーズは半分絶賛、半分は苦笑いをされちゃいました。

ちなみにそれはゴ布林村長ですよ、一番時間がかかった力作です。

おのおの各々、パンとオーク肉を食べ始め、おなかも落ち着いて来た頃お兄さんが話しかけてきました。

「ライ君、今日はここで夜営して明日の朝出発、夕方には街に着くからそこまでは一緒に行こう」

「はい、五台も馬車の戦利品がありますからね、一番小さい僕達が捕まっていた馬車は僕達が使えますけど、それ以外は売れますよね？」

欲しいならお兄さん達にあげても良いのですが。

「ああ、小さく型は古いが、堅牢な造りだからな、この馬車なら金貨一枚には確実になるだろうな、小回りも大きくから、少人数で扱うには良い馬車だ、後のは人数的に増えれば良い馬車ばかりに見える、売値も金貨二枚近くになるだろうな」

「おお♪ 凄いです！ ところでお兄さん達は使いませんか？ 人数もいるようですから、馬車があれば移動も楽になりますよね？ あの大きめの馬車なら皆で乗っても行けそうですよ」

九人居ますから二台でも良いですよ。

お兄さん達は顔を見合せ少し思案しているようです。

そして少し話し合い、答えが出たようです。

「では、あの中の二番目に大きな馬車を貰っても良いかな、人数的にあれくらいあると助かる」

「はい、貰って下さい、別に二台でも良いですよ、あつ、そうすると馬さんのお世話が大変ですね」

「そうだな、この盗賊達の馬車は二頭引きばかりだから、流石に四頭は面倒がかかるからな、あははは」

僕達のもそうだが、全て二頭引きだ、箱車ですからね、幌ほろなら一頭でも良さげですが、それでも上り坂の負担は大きそうです。

盗賊達だつて一台はほとんど飼葉や馬車の修理用のパーツや馬具の予備なんか積んでありましたから、馬さんのお世話きちんとしないとですね。

「あははは、そうですねなら残りは売ることになります」

辺りも暗くなり、夜の見張りはお兄さん達がやってくれると言うので、僕達は馬車で寝ることにしました。

綺麗になった室内に木箱のベッドを二つ造り、並べただけですが、その上に僕が作ったマット（空気を入れて膨らませます）、家族にも大絶賛のマットを置いて布団も二

組ありますよ、寝具をセットし終えたのですが、テイがあんぐりと口を開け僕を見ていました。

「テイ、どうかしたの？」

「ライ、そんなベッドマット公爵家の私でも使ったことありませんわ、いえ、王様でも無いでしょうね」

なんと！ 公爵令嬢様でいらしたのですね！

僕は、素早く跪き、お許しをして貰わねば、首が飛ぶより、お父さんやお母さん、兄達に迷惑がかかってしまいます。

「シャクテイ様、これまでの不敬の数々、どうかご容赦をお願いいたします」

そして深く頭を下げました。

「はわわわ！ ら、ライ！ 立って下さいませ！ ライには感謝しかありませんから、不敬などごさいません、それとどうかこれまで通り、テイとお呼び下さいませ、そんな風だと私、哀しくなります」

「よ、良いの？ そうだ」

僕は深呼吸をして、自己紹介をやり直します。

「サーバル男爵家三男、ライリール・ドライ・サーバルです、ライとお呼び下さい」

「まあ、劍聖様のご子息の！ では私も」

姿勢を正し、深呼吸をしました。

「ブラフマー公爵家嫡子、シヤクティ・アン・ブラフマーです、ティとお呼び下さい」
そして、僕の肩の上からテラが。

「テラよ！　そして騎獣ムルムルよ！」

「ぶはっ！」

僕とティはその様子を見て吹き出してしまい、せっかくの自己紹介が笑いに変わってしまいました。

「な、何よ！　私だって言えない肩書きくらいあるんですからね！　ほらほら二人ともそんなカチカチなのはやめて、普通にさつきまでの喋り方で良いじゃん！　ね！　ムルムルもそう思うでしょ？」

ぶるぶる

「ほ、ほら、ムルムルだって、　“そうだ”　って言ってるわよ！　たぶん！　たぶんかい！　あははは、そうだよ、そっちの方が僕も嬉しいけれど。」

「そうですわ！　ライ、今まで通りでお願いいたしますわ」

「うん、よろしくねティ」

うんうん、嬉しそうに笑うティってやつぱり凄く可愛いよね、公爵様の元にお帰するまでは、このまま楽しく行きたいですね。

「はい、では明日は出発が早いとの事ですので、寝ましよう」

「うん、じゃあ光は小さくしておくね」

「お願いいたしますわ」

ティは僕に背中を向け何かを待つてあるようです。

「えつと、もしかして、服を脱ぎたいのですか？」

「はい、侍女が居ませんのでお願いいたします」

「あははは、ティ、脱ぎ方教えるから、やってみない？」

「え？ よろしいの？ 侍女はやらせてくれませんかから、教えて欲しいですわ」

え？ えつちな事は考えてませんよ、お着替えなんて、前世の時もナースさんにやつて貰つてましたから、普通ですよね？ ライリールに生まれ変わつて初めて自分でお着替え出来た時はそれはもう嬉しかった物です。

「このドレスだと、前のボタンを外せば脱げますね、ティ、ほら首元のボタンここね」

「はい、これですねこれをどうすれば？」

胸の少し上に一番上のボタンがあり、ティは胸元を引っ張り僕に示してきますので、僕のシャツのボタンを、見せ外し方、止め方を教えて行きます。

「ほら、こんな感じで」

「うんしよ、こらしよ、どうですか？ 上手く出来ていますか？」

「うん、出来ているよ、ボタン外せばスルツと脱げるから、脱いだ後は皺にならないようにこのハンガーに掛けておくと良いんだよ」

このハンガーも僕のお手製DIYの成果です。

「侍女もなぜこれを教えてくれないのでしょうか？」

「なんでだろうね、家のメイドさん達も最初は教えてくれなかったし、僕が自分で着替えだしたら、兄さん達も自分で着替えだしたよ」

悪戦苦闘まではいきませんが、苦勞しながらも、おなか辺りまでのボタンを外せ、袖から手の抜き方を教えました。

「パスツ」 つとドレスが床に落ち、コルセットだけを嵌めたティの出来上がりです。

「ライ♪ 脱げましたよ♪ あっ、コルセットは確かこの紐を引っ張ってましたね」

ティはコルセットの縫上げてある紐の結び目を引っ張りほどこいて、コルセットも外せました。

見ると体にコルセットの後が残っていますが、すぽぽんティの完成です。

「ティ、おめでとう、そうだ、パジャマがないよね、それにパンツは？」

「はい、寝間着ありませんわね、パンツは用を足した後、履き方が分かりませんから履けませんので履いてませんわよ、脱ぐ時も苦勞しましたわ」

そっか、僕は前世ではずっとオムツだったから、パンツの履き方も知らなかったからね、よし、パンツは僕の予備で良いかな。

「そっか、なら僕の使っていないパンツ履きなよ、えつとね、ほいっと！」

普通の白い紐で縛る物しかありませんが、パジャマとパンツをティに渡し、履き方が分からないと言う事で、僕も着替えのため全部脱いで、見本を見せてあげました。

「うふふふ、出来ました♪ これで侍女に自慢して、弟にも教えて差し上げるわ」

「ねえ、ライ、ティ、あなた達ってお互い裸を見られても恥ずかしいと思わない訳？」
「?」

「はああ、まあ、良いわ、ゆっくり私が教えてあげるわ」

僕達は顔を見合せ、何を教えてくれるんだろうと少しわくわくしながら、隙間があったお互いのベッドを引っ付け、真ん中でテラ、ムルムルも交え、朝までゆっくり眠りました。

第11話 怒ることもありません

「あふあああ、あれ、そっか、テイと一緒に寝たのでしたね」

テイは僕のおなかに足を乗せ、お布団は抱き込んで僕のお布団が持つていかれてます。

足をそつと下ろして、お布団を掛け直し、寝直しました。

次に目が覚めると、上下逆になって、大の字、うぷぷ。

ムルムルベッドではテラも大の字です。

「あははは、寝相が中々激しいね、そうだ、おなか冷やさないように作った冬用だけど腹巻きしてあげよう」

収納からお手製腹巻きを出して、テイの足を真っ直ぐに戻し、足から腹巻きを通します。お尻の通過は僕がやって貰った時のように、横に返して、ずり上げ、逆向きにしてずり上げて完成です。

「こんなところで動けなかった前世の記憶が役に立つなんてね、ゴブリン村長柄は女の子には受けなかった、ってフィーアにだけど、角うさぎ柄なら良いですよね」

お布団を掛け直し、ふあああ、もう少し寝ましよう。

早朝から起き出し、薄明かるくなつた頃、僕達は出発し一番近い街を目指します。テイの着替えに手こずりましたが、腹巻きも気に入つてくれましたし、良かったです。

二時間ごとに馬を休めながら夕方、まだなんとか遠くの山に日が沈む前に到着しましたラビリンス王国手前の国境の街に。

入門まで二時間ほど並びましたが、問題なく入門出来ました。

盗賊を引き渡すため、衛兵の詰め所にお兄さん達の先導で、大通りを五台の馬車を連ねて向かいます。

冒険者ギルドが有ることを確認して、その隣が衛兵の詰め所です、これは悪さ出来ないので、冒険者ギルドでの絡まれテンプレートは持ち越しかと少し残念に思いながら、詰め所横の門からは入り、敷地内に馬車を止めました。

「君達、ここはこの街の衛兵の詰め所だが、なんのご用かな」

門横に立っていた四名の衛兵さんの内二名、僕達が横並びに停めた馬車にやつて来ました。

「ああ、盗賊を捕まえたんでな、引き渡した、誰に話を持っていけば良いのかな？」
訝しげな顔で見ていた衛兵達は、緊張をゆるめ笑顔になる。

「おお！　そう言う事が、うむ、お手柄だな、私が、この時間の責任者なので、その対応しよう」

おっと、いきなり偉い人に会えましたね、これは早く話が進みそうです。

「助かる、この馬車に詰め込んである、見てくれるか」

僕は馬車を降り、盗賊を詰め込んだ馬車前に集まり、衛兵さんも追加して貰って出口を包囲した後、鍵を開けます。

お兄さんが戸を開ける様で、戸を慎重に開けました。

飛び出して来る者もいませんし覗いて見て、きちんと壁に縛り付けられたままの様子です。

「大丈夫そうだな、確認して貰えるか？」

「ああ、よし、鑑定！」

鑑定で責任者さんは称号を、確認するみたいです。

「ふむ、間違いないな、それに懸賞金が着いている奴等が二名居るな、後の奴等は確認してみないと分からないが」

「そうなのか？　眠り薬を使い、人攫いをしている奴等だからか？」

「うむ、被害件数が多くてな、次ぎ国境を越える前には確実に捕らえよと衛兵のみならず、冒険者ギルドにも依頼が出ている筈だ、事後でも報酬が受け取れるのでな、羨まし

い、あははは、だが人数的に二名足りないが、逃がしたか？」

あつ！

「あの、すいません、遺体は僕が収納してあります、出しますので、場所を指定してくださいか？」

ヤバイヤバイ、完全に忘れてました。

「おお、ではこの場に出して貰えるか、一応鑑定で見てくださいな」

「はい」

馬車に引かれた二体の男性を地面に取り出しました。

「うむ、鑑定！ よし、間違いない、あははは、君達のパーティーは優秀だな、よし、懸賞金と引き取りの金を渡そう」

そうして僕達は盗賊を引渡し懸賞金、金貨五枚、と引き取り金、大銀貨三枚をもらい、馬車もここで買い取ってくれるとの事で金貨三枚と大銀貨八枚、銀貨九枚になりました。

「あははは、いきなり大金持ちだな、冒険者ギルドにはこの捕獲完了の書類を見せれば金貨一枚だ、絡まれないような、あははははは」

「おお！ 絡まれテンプレの目が残っているのですか！ にゅふふふ、楽しみですね。」

「ライ君、俺達はここでお別れだな、本当に助かったよ」

「いえいえ、お兄さん達が居なかつたら、全員は捕まえられなかつたですから、こちらこそ助かりました」

「あははは、そう言ってくれるとなんだか俺達も嬉しいよ、俺達は王都に帰るから、来た時には、俺達が逆に飯を奢るからな、絶対来いよ」

「はい、テイを送った後になると思いますが、その時はよろしくお願いします」

皆は笑顔で、馬車に乗り込み、詰め所を出ていきました、僕とテイは冒険者ギルドに行きますので、馬車を置かせてもらい、隣まで歩いて行くことにしました。

「ライ、私も冒険者の登録をしてみたいのですが、出来るのでしょうか？」

テイは僕と横並びで歩きそんな事を聞いてきます。

「出来るよ、じゃあ今から報酬貰うついでに登録しようか」

「はい♪ お願いしますわ、テラ師匠に結界魔法を習いますから、ただの令嬢ではなく、冒険者の肩書きが良いと思いましたの」

「ライ、私も♪」

「え？」

テラは、出来るのでしょうか？

「ん、一応聞いてみるか、ムルムルも従魔としてなら登録出来るし、パーティーを組もうか」

「わくわく」
「わくわく」
「わくわく」

ぷるぷる

テラはムルムルから僕のほっぺに飛び付きティは左腕に腕を絡ませ、ムルムルは頭上にみによくんと移動しぷるぷる。

「あははは、ほらほら歩きにくいし、テラも落っこちちゃうよ」

その状態で冒険者ギルドに入り受け付けを目指します。夕方なので、買い取り目当ての冒険者達が賑わっています。

僕達は受付ですから誰も並んでおらず、受け付けに進むことが出来ました。

「こんにちは、これお願いします」

受け付けのおじさんに衛兵さんに貰った証明書を見せます。

「拝見しますね」

おじさんは書類に目を通し、僕達を見て疑いの目を向けてきました。

「ふむ、これは本物かな、もし偽物ならこの隣は衛兵の詰め所だが」

「はい、隣で書いて貰いましたし、盗賊達も引き渡してきましたよ、あつ、もしかして、盗賊を捕まえた全員で来ないと駄目なのですか？ それならどうしましょう、別々に分かれてしまっていますからすぐには集まりません」

おじさんは、奥の職員になにやら合図を送ると、職員のお姉さんが慌ててギルドを出

ていきました。

「なあ坊主、これは犯罪だ、今衛兵を呼んだから諦めるんだな、奴隷になって鉾山行きだ」「ん？ どうしてなのでしょうか？ 僕は何を悪いことしたのですか？」

「そうですわよね、私にも理解出来ませんわ？ おじ様、私達はどの様な罪を犯してしまつたのですか？」

「それはな」

おじさんが理由を言ってくれそうな時にギルドにけたたましく入って来たのは先ほどまで話をしていた責任者さんと衛兵さんが五名、こちらに向かつて走ってきたのです。

「ギルドマスター、犯罪者は！」

「おお、隊長さんが来てくれましたか、この坊主達だ、世間を騒がす盗賊を捕まえたと偽物の書類まで作り、隣で書いて貰ったなどと、Aランクのパーティーでさえ見付けられない盗賊を、こんな坊主達が見付け、捕まえられる筈がない」

「ライ君、災難だったな、あははは」

おじさん、ギルドマスターさんの話を聞いて理解出来ました、それに責任者さんは隊長さんだったのですね、隊長さんも困り顔で苦笑いしながら僕に話しかけてきました。

「へ？ 隊長さん？ この坊主達が本当に捕まえたのですか？」

ギルドマスターさんは、隊長さんに呆けた顔で問い質していますが。

「本当だ、私がこの目で確認をしたからな、ほらほらさっさと報酬を」

「は、はい！ 少々お待ち下さい！」

ギルドマスターさん、大慌てで金貨を自分の収納から取り出し、隊長さんへ渡そうとしたのでちよつとムカついてしまいました。

第12話 贖金大量

僕はギルドマスターを睨み付けました。

「あのー！ 渡すのは隊長さんではなくて僕達にですよねー！」

ギルドマスターと隊長さん、そしてギルド内の皆さんが僕に視線を集め、耳を澄まします。

「い、いや」

「それに僕達をこの大勢が見ている前で犯罪者呼ばわりした謝罪も頂いておりません！」

「チツ、ガキがちよつと間違えただけじゃないか、鬼の首を取ったように意気がるんじゃないぞ、これ渡したらさっさと出ていけクソガキ共が！」

もう、完全に怒りましたよ！ お父さん、家名を使わせていただきます！

「ギルドマスター、正式にサーバル男爵家ライリール・ドライ・サーバルとして、謝罪を求めます！ 見た目で判断するなど、不愉快です！」

その言葉を聞きサーつと青ざめるギルドマスター、追いつちを掛けるようにテイも言葉を発します。

「ブラフマー公爵家嫡子、シヤクティ・アン・ブラフマーからも、謝罪？ そんな物では済ませませんよ！ 大変不愉快です！」

男爵の次に公爵家が出てきてギルドマスターは青から白に変わり、ガタガタ震えだし、持っていた金貨は手からこぼれ落ち、
「しんっ」としたギルドの床に落ちて、
「キン」と音を立て、転がり僕達の足元に転がってきました。

ギルド内の皆が跪き、ギルドマスターと、僕達以外で立っている者はいません。

「皆さん、皆さんはお立ちください、普通に接して貰えた方が嬉しいので」
皆さんは、そろそると立ち上がり、静かにこちらを見えています。

「ところで、それがギルドマスターの謝罪の仕方ですか？ テイ、僕は三男ですからこれも有^{あり}だろうとは思うけれど、テイは嫡子だよ、お父さんにこのギルドマスターって怒られるよね？」

「怒られますわね、帰った後、報告すれば、このギルドマスターさん処刑もあり得ますね」
「ライ君ではなくて、ライリール殿、貴族様だったのでね」

「はい、継承権は兄に有りますが、僕は十歳で家名を持つまま冒険者になりましたので、成人までは一応貴族ですね、成人すれば、一人になりますけれど、なのでライで良いですよ」

「あはは、俺と一緒だな、三男からはよほど金持ちの貴族でも無い限り、冒険者だよな、

俺は父の伝^{つて}で、衛兵になったが、おっとそれよりギルドマスター、私は貴方を不敬罪で捕らえなければなりません、公爵家の嫡子、シヤクテイお嬢様のお父上は子煩悩とお聞きしているのな、おい、拘束せよ！」

「はっ！」

カウンターのなかに向かう衛兵達を見て、ギルドマスターは、「身体強化！」と叫び、その場から一気にカウンターを乗り越え、テイに向かつて収納から取り出したであろう刃渡り四十センチ程の短剣を突き刺すように加速しながら向かって来た。

「死ねー！ 鎧通しー！」

技名なのか、叫びながら、テイに突っ込んできましたが、僕はギルドマスターの魔力を限界まで無茶苦茶な方向にぐるぐる回す。

ぐるぐるさせながら短剣を避け、ギルドマスターとテイの間に入り、左袖を掴み、さらに懐に入り込み袖を下に引き下ろすと同時に背中を使ってギルドマスターの体を押し上げました。

ズダンッ

背中からギルドマスターは床に叩き付けられ、さらに魔力欠乏で気絶をして、泡を吹き動かなくなりました。

「隊長さん、捕縛お願いしますね」

「あははは、いやいや、流石に今のは焦ったが、ライ君、ティお嬢様、危険に晒してしまい申し訳ない、しかし盗賊を捕まえた程だ、ライ君が強いのは当たり前か」

「あははは、勢いを利用しただけですよ、元ギルドマスターもあのまま捕まっていれば、もしかしたら奴隷落ちで済んだのかも知れませんが、ティを狙うなんて、同情の余地もありませんね」

ティは僕に数歩ですが小走りに駆け寄り、ぎゅつと僕の胸に抱きついて来ました。

「こ、怖かったですわ」

ぶるぶる震えるティを抱き締めかえし、優しく背中を撫でてあげます。

テラも肩からティの頭をぼんぼんと叩き、ムルムルは僕の頭からティの頭に移り、ぶるぶる。

「大丈夫ですよ、僕がティを護りますから」

「は、はい」

（ああ、どうしましょう、凄く胸がドキドキしますわ）

「よし、ギルドマスター、いや、元だな捕縛して、牢に叩き込め！」

「はっ！」

衛兵さん達は気絶した元ギルドマスターをロープで縛り上げ、二人がかりで隣の詰め所に連れて行きました。

「ライ君、ほら、ん？ 軽いな？」

隊長さんが落ちた金貨を拾い上げ、僕に渡そうとして、何やら呟いていたと思つたら、ナイフを取り出し金貨に傷を着けました。

「チツ、罪が一つ増えるかも知れん、この金貨は偽物だ、奴の収納の中身を調べろ！ 奴隷の首輪を使用しても構わん！」

「はっ！」

なんと、渡そうと自分の収納から出した金貨は贋金にせがねでした、この事を知つて報酬として渡そうとしていたなら、何と言う罪かは分かりませんが、罪状が増えることでしょう。

衛兵さんがまた一人、冒険者ギルドから隣の詰め所に走り去ります。

「サブギルドマスター！ ギルド内の貨幣全ての精査を！」

「は、はいい〜！」

おお、奥でエルフのお姉さんが返事をして、一つだけ大きい机に駆けて行き机の引き出しから鍵束を取り出し、その後ろにあつた金庫を開け、鑑定をしようとしているところに、隊長さんが一言。

「偽装の魔法が掛けられているかも知れない、表面に傷を付ければ偽装は解ける」

「は、はい〜！」

ふむふむ、ならぐるぐるして偽装を解いてあげましょう♪ ほいっ♪

「なっ！ 手に持っていた物も傷を付けるまでもなく贋金になりました！ 金庫内は大銀貨以上が全て贋金ですよ！」

「おい！ 俺達さつき大銀貨貰ったところだぜ！ これも偽物か！」

横のカウンターで依頼完了の報酬として貰った大銀貨をカウンターに叩き付け、お怒りの様です。

「あつ、お兄さん、僕が見てみましょうか？」

「へ？ き、貴族様！」

僕が隣にいたことを忘れていた様で、
「びくう」 ツとなってます。あはは。

「ほいっと！」

銀貨は魔力を帯びていましたから、偽物だとは思いましたが、やはり偽物でした。

「偽物ですね、他の方は大銀貨以上持っている方がいるなら、偽装を解除しますので僕のところに来て下さい」

お兄さんはペコペコと頭を下げ、他の大銀貨以上を持っている冒険者達は一列に並び、僕はティを抱き締めたまま解除して行き、八割が偽物と判明しました。

「隊長さん、贋金が沢山出ましたね」

「これは、個人で出来る範囲を越えているぞ、というかその力はなんだ？ 魔法？」

頭の上に、
「？」 を浮かべた隊長さん。

「いえ、魔力を弄^{いじ}つて本来の働きをさせない様にしただけですよ、頑張ればたぶん誰でも出来ますよ」

僕の耳元で小さく「無理い〜」とテラが言ってますが、継続して頑張るのがそんなに難しいのかな、あはは。

「そうなのか、他の魔力、と言うか魔力が弄れるなんて初めて聞くが」

さらに、^{〴〵} の数を増やした隊長さん。

「そうだ、すまないが、先ほど渡した貨幣は無事か？」

収納から出して調べる事にしましょう。

ギルド内の視線が僕に集まる中、少し照れますが。

「そうですね、ほいっと！ はい、魔力は帯びていないので大丈夫ですね、良ければ、詰め所の貨幣を見てみましょうか？ ここでは報酬貰えないようですから、あつ、ちよつと待つて下さいね」

僕はサブギルドマスターさんに冒険者の登録と従魔登録とパーティー登録を頼みました。

なんと、ムルムルの登録は当然のことです大丈夫でしたし、ティはいきなりEランクになり、テラも、「私は従魔ではなくて冒険者！」って、カウンターの上でサブマスターに熱弁して冒険者登録が出来てしまいました。が、テラはカード持てないので僕が一緒

に持っておきますが。

その後、詰め所に戻り、貨幣を精査して、少量ですが贋金が見付かり、今は元ギルドマスターの詰問に立ち会わないかと言われましたが、今夜の宿も取れていませんでしたからご辞退。

「流石国境の街ですわ、宿がこんなに沢山あります」

衛兵さん達に教えて貰った宿が沢山建ち並ぶ通りを馬車で進み、隊長さんおすすめの宿に馬車を止め、滞りなく部屋も取れて宿の確保完了です。

第13話 大きなお風呂がありました

二人部屋トイレお風呂付き、そここの宿屋は全ての部屋にお風呂があるのです、その分お高めの一人銀貨一枚、普通の宿ならこの半分の大銅貨五枚で良いお部屋に泊まります。

でも、お風呂入りたいですよね。

部屋はそこそこ大きなベッドが一つと、二人用のテーブルと椅子があり、トイレはスライム浄化で汚れも匂いもありません。そのスライムはムルムルとはまた違う種類で名前はクリアスライム。ムルムルより大きさがさらに小さく、大きくても五センチくらいにしか大きくなりませんし、本当に透明な水の玉です。数が多く繁殖も凄く良くて僕の家にもいました。

お風呂は僕達なら五人は入れそうなくらい大きく、いつでも入れる様に浄化循環していて、ごはんの後に入ろうと思います。

「テイ、ごはんを食べに行きましよう」

「はい、おなかペコペコですわね」

二階の部屋でしたので、ムルムルとテラを肩に乗せ一階に降り、酒場兼の食堂の二人

席に座るとすぐに料理が運ばれてきました。

泊まり客の食事は一種類なので、階段を降りてきた瞬間に、厨房でシチューを掬うのが見えました。

テーブルに並べられた物はホロホロつと崩れそうなお肉の入ったシチューとマツシユポテトとパン、見た目は中々のポリユームでしかも美味しそうです。

「いただきます」

マツシユポテトをスプーンで掬い、シチューにくぐらせて一口。

「おお、美味しいですね」

「はい、大変美味しゅうございます、お肉もスプーンで簡単に切れてしまいますから、良く煮込まれていて料理を作った方に感謝ですわ」

「うんうん、それにパンも美味しいよね、どっしりとした味わいで、シチューにあつてます」

ティの笑顔を見ながらの食事は大変楽しいひと時です。テラはテーブルに飾られていた花を見て、「少し元気がないわね、よいしょ」と引き抜き根っこもないのに頭に刺して、「むむむ」と言ったかと思つたら、花が瑞々しく、今花壇から取つてきましたよつてくらいに復活。

「うんうん、こんなところね」

スポツと頭から抜くと、根っこが復活していて、花瓶にそのまま戻していました。うん、放っておこう。

美味しい晩御飯が終わり、お皿はムルムルがピカピカに綺麗にして、「ごちそうさま」と二人声を合わせて、そして部屋に戻り、お風呂に入る事にします。

「ムルムルとテラも一緒に入るよね？　ムルムルは良いけど、テラはその服は脱げるの？」

悪戦苦闘しながらも一生懸命服を脱ぐティと、脱いでしまった僕はムルムルを頭に乗せ、テーブルにいるテラに話しかけました。

「私はこのままよ、引っ込めるだけだからね、ほいっと！」

しゅるんつと緑色の服が消え、裸になった。

「あつ！　テラ師匠ずるつ子です！　それを教えて下さいませ！」

ティはまだドレスのボタンが半分まで外れ、袖を抜いているところでした。

「ん？　これは無理ね、私の服は服に見えていて、私の一部だもの、人間には出来ないわよ」

そうなんだ、魔法で作った服なのかと置いていたけれど。

テーブルの上で胸を張り、どや顔のテラをティが羨ましそうに口をとがらせています。

「あはは、それなら仕方がないよね、ティ、手伝おうか?」

「はい、腕が上手く抜けないのです」

ティの服を全部脱がせ、テラをムルムルの上、ムルムルは頭から肩におりてくれました。
た。

皆でお風呂に行くと、手桶でさつと洗い流し、湯船に入りました。

「そうだ、ティ、公爵領に向かえば良いのかな?」

行き先を聞くのを忘れていました。

ティは僕の横でお風呂の縁にもたれて、「はふう」と気持ち良さそうです。

「王都の学院に向かうところでしたが、一度お父様に元気な顔を見せに行きたいと思っていますわ」

「そっか、公爵令嬢が人攫いにあつたのだからね、一緒に行動していた人達もきつと心配しているだろうし」

「はい、その人達に落ち度はなく、仕方がなかったと弁明してあげませんと、酷いことをされてしまうかも知れませんか?」

そう言えば、子煩悩だと隊長さんが言っていましたね、あはは、公爵領なら僕が向かうつもりのファイアが通う学校がある場所なので良いですね。

「じゃあ、僕がティを公爵領に連れていくね」

「はい♪ あつ、ムルムルさんは浮くのですね」

「本当だね、どうムルムル気持ちいいかい」

ぷんぷん

「たまにはお風呂も良いものね、ホカホカだわ」

「テラは泳ぎも上手いね、僕も泳いでみたいな」

「家のお風呂なら泳げるほど大きいですわよ、家まで送って下さるのですから、お父様にお願いしてみますわ」

「本当！ やった！」

「あわわわわ！ ライ！ 波を立てないでよ！ 溺れちゃうじゃない！」

テラを手のひらで救い上げ、ゆらゆら揺れているムルムルに乗せてあげました。

「あつごめんね、僕、前世では体が全然動かさなくて、自分では何も出来なかったんだ、だから泳げるかもって思ったたら興奮しちゃって」

「前に言ってたわね、右手と首から上だけ動かせたけどだったっけ？」

「そうそう、正確には右手の指と首から上だけだね」

だから、体を動かすことを赤ちゃんから練習する事も全然苦にならなかつたしね。

「まあ、そうでしたのね、確か前世？ の記憶がどうか馬車で仰ってましたわね、お可

哀想、分かりましたわ、これはなんとしてでもお風呂で泳ぎをやりましょう！ テラ師

匠お願いいたします」

「テラ、僕からもお願い、泳いでみたいんだ」

「分かったわ、任せなさい、さあ、そろそろ体を洗って出ないとのぼせるわよライもティも顔が赤くなってきたからね」

「はい！」

洗い方も知らないティを洗ってあげて、洗いにくい背中をティが洗ってくれました。

パジャマに着替え、お布団に入ると僕達は光を調節する前に寝てしまいました。

「うふふ、仕方がないわね、ムルムル、私達も寝るわよ」

ぷるぷる

「ふあああ」

あはは、またティったら布団を蹴飛ばしてしまってますね、腹巻きをしているし、この部屋は暖かいですから風邪は大丈夫だと思いますが。

お布団をかけ直して、横に寝直すと、今度は抱き枕にされました。

まあ、寝ましょう。

カチャ

真つ暗な部屋の中に二人の黒づくめが入ってきました、ドアの外にも四名。

(テラ、起こしてくれてありがとうね)

(そんな事よりさっさとやつつけるのよ)

(は〜い、外の人達も一気にやるよ！ ほいっと！)

あのギルドマスターほどの魔力を持っていたようで、一瞬では無理でしたが、偽装したベッドにたどり着く前に、部屋の中の二名も外の四名も気絶して倒れました。

(テラ、表にもいるよ！ とりあえずこいつらの持ち物は、収納！)

(縛るのよ！ 外の四人も持ち物取り上げて、ヤバイ毒薬とか持っているから！)

(了解です！ 収納！)

ロープを取り出し、裸にした奴らの手足を縛り、それを六人、五分ほどで作業が終わり、外の奴らを確認します。

「もう宿の中にはいないようですね」

「うん、私の神眼で外の六名がいるだけね」

「分かった、場所はよし把握できた」

「中々の感知スキルじゃない、さあ、やつつけてきなさい、一つ向こうの通りに衛兵がいるからついでに呼んでくる事も忘れないでね」

「うん、了解、行ってきます」

戸から出て、階段とは逆方向に行くとき突き当たりに開けられた窓があり、たぶんそこから侵入したのであろう鉤爪が窓枠に突き刺さって、下に続くロープが垂れ下がっていました。

僕は窓枠に飛び乗ると、一気に隣の屋根に飛び上がると同時に、それを収納して、下にいた奴らの魔力をぐるぐるさせ気絶させる。

屋根から飛び降りると同時に、空に花火、ファイアーボールを打ち上げ、音を立て弾けさせる。

パァーン

着地前に奴らの持ち物を全て収納して、ロープで縛り上げ、宿屋の壁際に集め終えた時に衛兵さん達が駆けつけてきました。

「何事だ！　ん？　ライ君？」

「あつ、隊長さんが来てくれたのですね、お騒がせしてます、こんな夜中に襲われまして、こいつらと、部屋に押し入ってきた六名も捕まえて縛ってあります」

「ふむ、鑑定！　ふむふむ、冒険者の様だが、誰かに雇われたか？」

ん？　んくおっ！

「依頼書を持ってましたね、これですね」

取り上げた物の中に依頼書が入っていましたから、隊長さんにお渡しします。

「おお、それは助かる、どれ。なんだと！
何やら驚く人が依頼をしたみたいですよ。」

第14話 襲撃の夜が明けて

「何か驚くような方からの依頼なのですか？」

隊長さんは僕の質問には答えず部下の方達に命令を小さな声で、それでもきちんと聞こえる様に言い放った。

「今動ける全衛兵を領主邸に集めよ、シヤクティ・アン・ブラフマー公爵令嬢暗殺を企てたのは、領主、サーント辺境伯令嬢マリグノだ！」

なんと、こここの領主さんの娘さんがティを狙ったの！ なんてまた分らないけど、狙ってくるならこごと尽く跳ね返してやる。

「隊長さん、ティを狙ったのはどうしてでしょうか？ ティがそのマリグノって人に悪い事をしてしまったのですか？」

隊長さんは少し困った顔をして、話してくれませう。

「確実ではないが、あくまでも、もしかしたらと思つた事だ、そこは勘違いしないで貰いたい」

「はい」

僕は頷きます。

「第一王子との婚約者候補なんだよ二人共に、その流れが一番しつくり来る、元々はシャクティ令嬢が一人だけの婚約者であつたのだが、マリグノ令嬢に手を出したのだ、王子が、頼むから内緒にしてくれよ」

「はい」

「十七歳のコシヨン第一王子が、同じ歳のマリグノ令嬢を候補にあげるために手を出した、あるいは手を出させた、正室になるためのと考ればつじつまがあつてしまうからな」

「そうか、婚約者がいたのか。いや、そんなことは関係無い！ 守つてあげるつて決めたから、ティを傷付けようとする奴は僕が許さない！」

「分かりました、では僕はティの側で来た奴を片っ端からやつつける事にしますね」

「うむ、守つていてくれると俺達も動きやすい、よし、部屋の奴らを連れて行くとしよう五名私に付いて来い、残りはこちらで見張りながら、魔道具を使い皆を呼び出せ！」

「はっ！」

僕は隊長さん達を先導し宿に入り二階へ、部屋にいた六名を引き渡し、報酬は後日詰め所と言う事で、話が終わり、足早に隊長さん達は部屋を出ていった。

僕はお風呂場にベッドを置き寝かせていたティの元に行き、そのままお風呂で寝ることになりましたけど、はああ、僕が気に入った子は僕がお相手にはならないのかなあ、前

世でいつもお風呂に入れてくれていた、お姉さんも憧れていたのに、結婚しちゃったからね、僕はあの時九歳、お姉さんは二十八歳だったのですが、いえ、次に担当になったお姉さんも好きでしたよ、既に結婚して、僕と同じ年の子供がいるって言っていました。後は、検査の時に会う女の先生は、お母さんのお母さんくらいの人でしたし、車イスで移動の時にいつも会う女性もお婆さんばかりでしたからね。

はあああふ、眠くなってきました、おやすみ。

翌朝、お風呂で目を覚まし、一瞬知らない天井だつて言いそうになりましたが、まだ寝ているテイや、テラを起こしてしまいかも知れませんが、音を立てずに、お風呂場から出て、洗面所で歯を磨き顔を洗っていると、テイがテラとムルムルを頭に寄せ起きてきました。

「おはよう、良く寝れた?」

「ふああい、一度起こされた分まだ寝足りないような気がします、早く領地に帰りませんとね」

あはは、大きなあくびが可愛いです、絶対を守ってあげないといけませんね

「その事で聴きたい事が、テイってコシヨン王子様の婚約者だよね? それにマリグノって人に命を狙われるような事ってある?」

「うへえ、それはお断りしているのですが、あつちがしつこくしてくるのですよ、父も、『あんな奴にはやらん!』って王様にも言ってくれているのですが」

本当に嫌そうに顔を歪めています。

「マリグノさんは、コシヨン王子さんと仲良くしているのですからどうぞ勝手について思っているのですが、事あるごとに、私に文句を言ってくるのです」

（それに今はライの事が気になって仕方ありませんし、お父さんに相談してみようかしら、先にお母さんからかな？）

やれやれといった感じですが、これは僕にも！ チャンスが！ いえ、自重しましょうか、まだ知り合ったばかりですから、送っていく過程でもっと仲良くなれるように頑張らしましょう！

おっと、また物思いに、一応知らせておきませんかね。

「テイ、昨日襲ってきた奴らなんだね、マリグノがテイ、君の暗殺を頼んだ様なんだ、もしかするとあの盗賊もその可能性があるかもしれない、そつちは依頼書も無かつたら、偶然かも知れないけれどね」

「暗殺を！ マリグノさんが」

僕は、ふるえるテイを抱き寄せ背中をぽんぽんと叩き落ち着かせます。

「僕が守るって、約束するよ」

「はい」

（ああ、ライ、コシヨン王子の気持ち悪い笑いと全然違いますわ、はああ）
近距離で目と目が合い、ティはぼやくと僕の顔を見つめてきます。

コンコンコン

タイミンクの悪いことに、ノックの音で良い雰囲気霧散してしまいました。

「僕が出るよ、ティは顔は洗えるよね？」

「うふふ、はい、教えて貰いましたから、歯も大丈夫ですわよ、テラ師匠、ムルムルさん、今日も悪いところを教えて下さいね」

「まかせて！ さあ行くよ♪」

テラとムルムルを頭に乗せたまま、洗面台に僕から離れ向き直った。

僕は部屋の扉に向き直って、向かいながら声をかけます。

「はい、どちら様ですか？」

『私だ、昨日の報酬と、昨晚の報告に来た』

隊長さんのようですね。

「今開けますね」

カチャ

「どろろで」

「失礼する」

隊長さんと、冒険者ギルドのサブマスターが部屋に入ってきました。

エルフのお姉さん、サブマスターが深く頭を下げ、金貨を僕に差し出してきました。

「ライ様、この度は本当にご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした、報酬をお受け取りください」

金貨を受け取り、サブマスターの肩に手を添え、頭を上げて貰います。

「はい、確かに受け取りましたお姉さんは悪くないのですから、頭は下げなくても良いのですよ」

「いえ、それと昨晚の件でも冒険者がその様な依頼を受け、襲った、あの中に、サブマスター、二人いるのですが私とは違う者がその襲撃に加わっていましたので、冒険者ギルドの代表、本来ならギルドマスターが来なくてはいけないのですが」

「まあ、そんな事だ、謝罪だけでも受け取ってやってくれないかな」

それは、いたたまれないですよ、あはは。

「分かりました、謝罪を受け取りました、で、昨夜の件は？ あつ、その椅子にお座り下さう」

二脚の椅子を二人に進め、僕は顔を洗ってさっぱりしたテイと一緒にベッドに腰掛けました。

「結論から言うと、マリグノは王都の学院にいる、辺境伯様は今回の事、あまりの事に卒倒し、寝込んでしまわれた、早馬を走らせ王様、私の父経由になるが王城勤めなので今日の夜遅くには、報告が上がるだろう」

お父さんの辺境伯様は絡んでいなかったのは良かったのですが、娘のしでかした事とはいえ何のお叱り、お咎めも受けない事は無いでしょうね。

「分かりました、ではまだ公爵領に着くまで気は抜けませんね」

「そうだな、だがライ君がいるなら安心だな、シャクティお嬢様をお守り出来るだろうからな、あははは、おっと、昨日の十二名分の引き取った分だ」

大銀貨二枚と銀貨四枚の収入となりました。

「では俺達はこれで失礼する、旅の安全を祈る、ではな」

「失礼します」

二人は部屋から出て行き、残された僕達は荷物をまとめ収納し、朝食をいただきに一階へと下りました。

「まあ、玉子がふわふわです」

「うん、凄く美味しいし、この腸詰めもハーブと黒胡椒が使われているのかな、僕これ好き」

この宿の食事は夜と朝の二回だけですが、どちらも凄く美味しい良い宿を紹介して

貰ったと実感しました。

食事を終え、馬車に乗り込み、走り出します。

入ってきた門は出発のため集まった馬車や徒歩の方達で賑わい、屋台まで出ています。

車列の一番後ろに並び、国境の街を出発です。

第15話 公爵領へ その一

門を出て少し馬車を走らせると分かれ道に差し掛かりました、僕達の進む方向は、もと来た道を戻る旅路になります。

今日は盗賊達をやった場所での夜営になる予定です。

御者台にテイと並んで座り、沢山の荷物を積んだ馬車の後ろから、少し登り坂になったところで追い抜くため横に出て、お馬さんには少し頑張つて貰います。

馬車の中身は全て収納していますので、馬車と僕達の重さだけなので、軽快に加速し追い抜きました。

「風が気持ちいいですわね、私は庭で馬車の訓練をしたので、こうして街道を御者台に乗ったのは初めての経験になります」

「それもそうだよね、公爵令嬢だもん、護衛対象者が外にいるべきじゃないからね、今は街娘と言っても、そうなんだって思われる格好だから實際顔を見たことある人しか分からないよ、まさか御者台に乗っている女の子が公爵令嬢だなんて思わないもの」

「灰染めの生地を使いスカートを作り、シャツは僕用の物を着て貰ってます。」

「ですわね、このストローハットも良いですわ、きちんと日陰を作つて首筋の日焼けを防

いでくれます、手は手袋をすれば見えませんが、ドレスですとどうしても首筋は見え
しませんからね」

「気に入ってくれて良かったです、その白く透き通った綺麗な肌が赤くなつちやうのを
見たくなかつたからね」

(まあまあ、綺麗だなんて、うふふ、ライつたらお上手ね)

「そうだ、手袋は今夜作るから、今日はその膝掛けに手は隠しておいてね」

「はい♪ よろしくお願ひいたします」

二時間ごとの休憩を挟み、それでもまだ明るい時間に夜営予定地に到着しました。

僕達よりも先に到着した人達も、各々夜営の準備と、馬の水やりや、馬車の不具合を
見ているのか、底に潜り作業している方もいます。

僕達は馬さんに水、塩、飼い葉をやりながらブラッシング。

暗くなる前に、焚き火の用意を済ませ、お湯を沸かしてお茶を飲もうとしていたので
すが、若い冒険者と思われる五名の方が僕達の所に向かつてやってきます。

「テイ、一応警戒はしておいてね、絡まれても僕に任せて、後ろに隠れてくれて良いから」
テイは、こくと頷き、座っているベンチからいつでも立ち上がる事が出来るように
身構えています。

そして、目の前、約二メートルの所で止まり、五名の一人、体格も良く、腰に剣を携

えた大男と言っても良いくらいの方が口を開いた。

「おいガキ、良い馬車を持つてるじゃねえか、俺達に譲りな」
「嫌ですが」

何を言ってるのか、そんなのあげる訳ないじゃないですか。

ん？ これって異世界テンプレート！

「なっ！ ガキがおとなしく渡さねえと分かってんだろうな、こっちは五人、そっちはガキ二人だ」

「こんなところで絡まれイベントが！ うんうん、えつと確か煽るとさらに良いんでしたね。」

「バカですか？ 僕は嫌ですと言いましたが、あつ！ バカだから理解出来ないのですね、それは申し訳ありません」

くふふふ、真っ赤になってしまったよろ♪ おつと危ない、武器に手を着けるまで煽りまくるのでしたよね。

「はああ、バカさん達良いですか、頭の悪い、顔も悪いですが、バカでも分かるように説明しますが、あなたの方、頭の悪いバカ、この行為は盗賊と同じで、犯罪奴隷になりますよ」

さあ！ かかってきなさい！

「チツ、行くぞ！　こんなガキ放っておいて酒でも飲むぞ！」

え？　そ、そんな、間違つたの？

「何だよりーダー、言われたい放題で情けねえなあ、俺がやってやるよ、おら！　さつきと馬車を置いてどつかいっちまいな！」

男の一人がロングソードを抜き、僕達に向けてきました。

そうです、それでこそテンプレですよ！　僕はそいつの魔力をぐるぐる、一気に魔力欠乏にさせ、その場で気絶させてあげました。倒れた手の先が焚き火に突っ込みましたので、火をぐるぐるさせて火が手を避けるようにしてあげます。

「おい！　大丈夫か！　手がやべえ、引っ張れ！」

倒れた男を焚き火から遠ざけ、あつ、ちよつと火傷してますね、それに剣が焚き火の真ん中に残ってますが、どうしましょうか。

「てめえ！　何かしやがったのか！」

「え？　バカだから転けたのですよね？　普通焚き火に手は突っ込みませんし、この剣返しますね」

焚き火をつついていた木の棒で剣を引っ掛け、冒険者達に向かつて返してあげます。

最初に声をかけてきた男は剣を受け取りましたが

「うおつ、てめえ！　つてアディー！　くそガキが！　てめえらやつちまうぞ！」

あははは、剣は熱くなっていたようですな、その後、残りの四人も、ロングソード、短剣やナイフを抜き、僕達に向けてきましたので、先ほどと同じ様にぐるぐるさせて気絶させ、持ち物を全て収納、ロープで手足を縛り上げておきます。

「ふう、少し楽しみが薄い気もしますが、絡まれテンプレート、外（夜営）バージョンいいただきましたよ♪」

裸の拘束された男達を広場の隅に引きずって行き、木にくくりつけて逃げられない様にしておきました。

「ライ、あの方達は如何いなさるおつもりですか？」

警戒を解いてほつとした顔でテイが聴いてきました。

「明日馬車の天井にくくりつけて逃げられない様にして次の町まで連れて行こう、それで衛兵さんにお任せかな」

「うんうん、それで良いと思うよ、でもせめてパンツくらい履かせておいた方が良いでしょう、あなた達二人はなんとも思っていないかもしれないけど」

テラが肩の上でそんなこと言うけど、心配なんだよね。

「でも何か隠し持っているかも知れませんが、私はあれで良いと思います、ですが馬車の天井にくくりつけるのは馬さんが重いと可哀想ですので、歩かせましょう」

「そうそう、そうだよ、僕もそれを考えてたのですが、そっか、馬さんの事を考えたら

明日も半日上り坂ですから、うん、歩いて貰いましょう」

「はああ、まあ良いわ」

テラはお手上げって感じで、ムルムルの上で寝転がってしまいました。変なテラ、あははは。

その後の夕食は、シチューがまだまだありますから、二人分とパンを食べ、ティは魔狼形の物を、僕はオークにしました少し大きいサイズの物を食べました。

食後は馬車に入り、パジャマに着替え、寝ることにしました。

見張りはって？　なんとテラがこの広場に咲いている花を元気付けるから、「私が見張っておくわ！」と足元に咲いていた黄色の花を頭に刺し、むむむ、と力むと花は元気になり、頭から引き抜くと、ポイツと投げ捨て、違う種類の花にムルムルを引き連れて向かっていきました。

投げ捨てた花を見ると、元の位置に抜いた形跡も無く、地に生えていました。異世界の不思議ですね。

翌朝、朝食後、馬車の用意をして、盗賊を馬車の後ろに縛り付けるため、寝ているところを起こしたのですが。

「た、頼む、見逃してくれ！」

「おら達が悪かった!」

「せめてパンツは!」

など、五月蠅うるさかったのですが、盗賊とはそう言うものですから、無視して引きずり馬車の後ろに連れて行き縛り終えた後、足だけ拘束を解き、出発させました。

「おい、あいつらなにやったんだ」「キヤー、裸じゃない」「ち、ちよつと! その方達はうちの護衛依頼を請けてる奴じゃないか!」「あれつてAランクの!」「あのまま街道を行くのか、やべ〜」

「ライ、何か言ってるようですが? 良いのですか?」

「あははは、護衛依頼をしてるのに盗賊しちやダメだよ、返してあげたいけれど、一度町に連れて行って奴隷にして貰わないと、また悪さするからね」

「た、頼む! ちよつとだけ何があつたのか教えて欲しい! その五名は私の商隊の護衛なのです!」

馬車の前に飛び出してきて、そんなことを言うので、停まりましたが。

「あ、ありがとうございます、はあ、はあ、はあ」

走ってきたので息の荒い小太りのおじさんが、馬車の前から御者台の横にやって来ました。

「この五名はですね、昨晚ですが僕達の馬車を寄越せと剣やナイフで脅してきた盗賊で

すが、商人さんは盗賊の方ですか？ それなら捕まえないといけないのですが」

「い、いえいえ、私はただの商人です！ その五名がそんな事を、なら仕方がないのですが、おい、お前達、この少年の言った事は本当ですか！」

後ろの五名に声を掛ける商人さん。

「そ、そんな事はしてねえ！ デタラメだ！」

「そ、そうだ！ 俺は火傷を負わされたんだ！ 見てくれこの手を！」

「はああ、あなた達はそんな嘘が通ると思っっているのですか？」

呆れてしまいますよ本当に。

「商人さん、商人ならその盗賊達の鑑定が出来ますよね、称号が見えますので分かります

よ」

「ぬ、鑑定！ 強盗だと、君の言う通りだ、次の町で衛兵に付き出す予定ですよね」

「はい、そのつもりです」

少し考え事をする商人さん。

「では君達の後を付いて行き、衛兵の所で私はこの者達を犯罪奴隷として買うことにします、すいませんが馬車を回してきますので少しだけお待ちいただけますか？」

それなら良いかも。

「はい、お待ちしておきますね」

「ありがとうございます、ではすぐに！」

商人さんはまた。パタパタ走り自分の馬車に戻り、二台の馬車を連ねてこちらに合流し街道に出て、軽快に次の町に向け走り出しました。

盗賊達は小走りです。

第16話 公爵領へ その二

夕方小さな町に到着しました。

門番に聞き衛兵さんの詰め所を聞こうとしたのですが、裸ん坊では町に入れられないとの事で、衛兵さんと呼んでくれることになり、門前で待つ事に。

「だから言つてたでしょ、裸は良くないんだから、今夜その事について教えてあげるわ！」

テラがなぜかやる気満々でムルムルの上にあります。

「はい、テラ師匠お願いいたします、でも、ライの物とは形が違うのですね、もじやもじやしてますし、私はライの物は可愛いと思えますがあつちのは嫌ですね、見たくありませんわ」

「そうだね、ここまで来たら逃げる事も出来ないだろうし、パンツだけ戻しておこうか、えーっと、出す時に履かせてしまえば良いよね、ほいっと！」

ん、上手く行きました、盗賊達は少しほつとした顔をしています、もうすぐ奴隷ですよ。

パンツを履かせて数分、衛兵さんが来てくれました。

「盗賊を捕まえたと聞き来たのだが、その裸の奴らか？」

「はい、夜営中に武器を持って僕達の馬車を寄越せと言つてきましたが返り討ちにしました」

盗賊と僕達を見比べ少し訝いぶかしげな顔をしています。

「鑑定！ ふむ、確かに強盗だな、だが、良いだろう五名が大銀貨だな、詰め所まで来て貰えるかな」

まだ疑わしそうな顔ですが、盗賊は受け取つてくれそうです。

「はい、よろしくお願いします」

衛兵さんの後をゆつくり馬車を進めついでに行きます。門を入ると、僕達を追い抜いて先に町に入っていた商人さんがお待ちかねで、門を入つてすぐの詰め所前で僕達が入門したのを見て、ほつとした顔をしていました。

僕達はそのまま詰め所の前に馬車を停め、馬車にくくりつけてあつた盗賊達を連れて、商人さんと共に中に入りました。

「ん？ そちらの方は？」

衛兵さんが一緒についてきた商人さんに気が付き聞いてきました。

「この方はその盗賊を、盗賊と知らず護衛依頼をしていた商人さんです、犯罪奴隸として購入するそうです」

「初めまして、王都で商いを営んでおります、コンメルと申します」

「すまないがそうはならんな、この者達は解放せねばならんだ」

へ？ 何を訳の分からない事を。

「どうしてでしょうか？ 明らかに犯罪者ですよね？」

「うむ、この者達は、Aランク冒険者という事も多少あるが、貴族の三男様が三人、後の二人も四男、五男だ、この者達は既に成人し、貴族でも何でもないのだが、親の貴族に不敬罪としてこの町の衛兵が裁かれかねないと言う懸念があるのだ、報酬は払わせて貰うが」

「そうだ！ 俺は男爵家の三男だ！ 今回は見逃してやる、さっさとこのロープを外し、馬車は俺達が貰ってやる」

「そうだと衛兵！ 早く解放しないか！ 替わりにそのガキ共を捕らえろ！」

「オラやれや衛兵！」

なにやら、盗賊達が騒ぎだしますが、それは僕も同じことですよ、それに馬車はあげませんよ。

「あははは、それなら衛兵さん大丈夫ですよ、僕もサーバル男爵家三男ですから」

一応持たされていた、貴族であると証明するサーバル家の紋章が入ったナイフを見せました。

「ん？ サーバル男爵家！ 劍聖様の！ こ、これは！ いや、しかし同じ男爵家、よろしいのですか？」

目を見開き、確認した衛兵さん、心配してくれるんだ、お父さん結構有名なんだね、劍聖、帰った時に聞いてみましょう。

「大丈夫ですわよ、私はブラフマー公爵家の嫡子ですから」

テイが、ニヤニヤ悪戯つ子の顔をして、追い討ちをかける、その事を証明する証拠はないが、あはは。

それを聞いた、衛兵さんはもとより、商人さんと盗賊まで跪きました。

「た、大変申し訳ありませんでした！ すぐ奴隷の準備をいたします！」

「はい、お願いしますね」

先ほどまでの疑いの目が嘘のように、変わり、バタバタと準備を始める衛兵さん、盗賊達は、跪いたままもう何も文句は言わない。

その後は滞りなく奴隷化が終わり、奴隷商人さん立ち合いでコンメルさんに譲渡が終わりました。

お小遣いも増えて、今夜の宿を探そうと詰め所を出る時、コンメルさんが話しかけて来ました。

「シャクテイお嬢様、ライお坊っちゃま、今夜の宿を紹介させて貰いたいのですが、既に

決まった宿はありますでしょうか？」

「コンメルさん、僕の事はライで良いですよ、成人すれば普通の人になるのですから、宿はこれから探そうと思つてますよ」

「私の事も、テイでよろしいですわ、えつと確か、そう！ お忍び中ですよ、お母様も、お父様と一緒にたまにやつておりますわ」

「おお、分かりました、ではライ君、テイちゃんと、お呼びさせて貰いますね、お宿ですが、この町での私がいつも利用している宿がごきいます、この山間の町に相応しく、山の幸が豊富な料理がとても美味しい宿です、如何でしょうか？」

うん、僕はそれが良いかな、山の幸は楽しみです、家の近くの山に山菜や猪を良く取りに行つてましたよね、マシューさん達が、思い出すと、食べたくなってきました。

「僕は、お願いしようと思うけど、テイはどうしたい？」

「私も、山の幸、興味がありますので泊まってみたいです」

「分かりました、ではご案内しますね」

コンメルさんに続いて詰め所を出て、お互い馬車に乗り込み、コンメルさんの馬車について行きます、もちろん奴隷達は馬車を追いかけて小走りに走っていますが。

明日の朝に出る門の、ほど近くに中々立派な宿に馬車を止め、馬さんは厩舎に預けて宿の中へ、少しだけ良い物をあげてねと担当の方をお願いして。

きちんとお金も払いましたよ。

中に入ると料理が売りと一目で分かる、テーブルが沢山置かれた広いロビーにはほんどの席が埋り、食事を楽しんでいきます。

僕は受け付けに進み、一泊二食で一人銀貨一枚のお風呂付きに決めました。

食事はいつでも良いとの事で、このままいただくことにしました。

テラはまたテーブルに飾つてある花を花瓶から抜き取り頭に刺していますが、木に咲く花のように、少し重そうなので、ムルムルがソファーのようになりへこんでます。

「テラ、それは重くないの？ ムルムルがへこんじゃつてるし」

「ん？ 大丈夫よ、私は強いのだよ！ その私の騎獣たるムルムルだって大丈夫よ！ ね、

ムルムル」

ぶる　ぶる

「いやいや、重そうだよ！　ぶるぶるがいつもと違うよ！」

「そうなの？　仕方がないわね、さつきとやってしましましょう！　ほいっと！」

テラが気合いを入れた時からむくむくと木が育ち、数十倍の大きさになり、テーブルが、*“ミシツ”*　つと音を立て出したので、慌てて木を支えます。

最初はテラの二倍程度の二十センチくらいだったかな、それくらいの高さしかなかったのに、今は見上げ、天井に届き、先は曲がるほどまで成長してしまいました。

「ヤバですって！」

僕は木を抱え、宿の外に飛び出し、厩舎前の馬さんが少し運動できる広場に木を、テラ付きを持ってきて、一息つきました。

「テラ！ 流石に大きくなりすぎじゃないのこれ！」

「中々の大食いね、でももうお腹いっぱいみたいよ、そろれつと！」

テラの頭から引き抜かれて行く根っこ、抜けきったので下ろしたのですが、ズズズつと広場の中央に根を張って、さらに成長し十メートル以上の高さがある花が満開の木に育ちました。

「テラ、これマズいかも、いきなりこんな木が生えたら皆ビックリしちゃうよ」

ぞろぞろと食事をしていたお客さんや、お店の、たぶん料理をしていた人、お玉を持つてるし、が広場に出てきて、いきなり生えた木を見上げ、口は半開きになってます。

僕のところにも、ムルムルを抱えたティが、やって来ました。

「凄く大きくなりましたね、この木は何て名前の木なのですか？」

「僕は知らないかな、あはは」

「そのあなた！ あなたがこの木を外に出してくれたのかい？」

あつ、受け付けをしてくれた方ですね。

「はい、いきなり大きくなって慌てて、お騒がせしてすみません」

「いやいや、この木があのまま食堂で大きくなっていた事を考えると、私の宿が壊れていた事でしよう、ありがとうございます」

あれ？ 僕達がやったとは思ってないのかな？

「あの、あのですね、この木が大きくなつたのは、この木に栄養をやってしまったからで
さて、なんと説明したものか。」

た。

その後いただいた食事は大変美味しく、メインは鹿のシチューそれはもう美味しく完食しました。

そして今は、皆でお風呂に入っています、テラの講習会が湯船の中で、始まり始まりです。

「良く聞いてね、二人共、男性と女性はお互い裸を見たり見せたりは、しちや駄目なの、そうね、見せても見ちやつても良いのは、同性、夫婦とか恋人同士だけよ、特に女性は簡単に裸を見せちゃ駄目なの、分かった!」

(まあまあ、そうなのですわね、だとすれば、ライにしか見せてませんので、問題ありませんわね、うふふふ)

「でも、家ではメイドさん達と一緒に入ってきてたよ、兄さん達もフイアも皆が一緒に」

泳いだりしたよね、またやりたいなあ〜♪

「あつ、私は女性としか入って無かったです、ライが初めてですな、私とは違って、おまたにびよこんつと付いていたのでビックリしました」

「僕は見せっこしたりしたから女の子がどんなのか知ってたよ、それに僕が兄さん達に勝てたんだよこれ、メイドさんも大きい方ですと言っていました、えへへへ」

立ち上がり、ぷるんぷるんと回してあげる。

一緒にお湯をぐるぐるさせて、ムルムルとムルムルに乗ったテラを、ウオータースライダーさせてあげる。

「まあ！ スゴいですわ！」

「ひやつほ〜い♪ じゃなくて！ ライお湯は良いけどそこをぐるぐるするのは止めなさい！ テイも、そんなに顔を近付けないの！ はああ、どう言えば分かってくれるのかなあ〜、この子達に教える自信が音を立てて崩れて行つたわ、ムルムル、出ましようか。」

ぷるぷる

二人だけになった後も、お風呂からは楽しそうな声が響いていました。

『す〜い♪ ぷにぷにですよ♪ あっ！ 少し硬くなりました♪ 面白いですね♪』

『でしよ〜♪ それにこの先つちよが。』

「ねえムルムル、私は教えたわよね、なのに、もうお手上げよ、結婚でもなんでもして貰うしかないわね、寝ましょう」

ぷるぷる

お風呂から上がると、テラはムルムルベッドで大の字で寝ています。

「あはは、待たせてしまったみたいだね、ハンカチのお布団をかけて上げよう」

そして僕達も眠りにつききました。

「あふあああ、朝ですね、ムルムルが枕にされてますね、ティ、ムルムルが潰れていますよ、くふふふ」

「あはあふう、おはようございます、あらムルムルさんがほつぺに、うふふふ」

うつ伏せに寝ていたティが起き上がると、ほつぺに付いたままのムルムルが、ふるふるポヨンと元の丸い形に戻りました。

「あら、テラ師匠はライの胸の上に寝てますね、ちよつと寝ました……………」

視線をティから胸に移すと、大の字に僕の胸の上で寝てました。

「あははは、じゃあ、起きて出発しようか」

「は〜い♪ テラ師匠、朝御飯食べて出発ですよ♪」

もそもそと起き出し、僕のパジャマでヨダレを拭きつつ手櫛で髪の毛を整えたテラ、まあ、良いですけどね。

「おはよ♪ 今日も元気に行きましょう！」

何食わぬ顔で、そんな事を、あははは。

「よし着替えて、朝ごはんからだ！」

「早くしなさいよ分かりましたわ♪」

着替え終え、食堂へ。

朝ごはんは、猪肉のベーコンと腸詰、ふわふわ玉子に、サラダでした。

テラはサラダの小さなトマトを頭に乗せ、むむむ、とすると、枝葉が伸び沢山のトマトが鈴なりに、ご主人に引き取って貰いました、オマケでオークも二匹提供してきました。

今夜の夕ごはんはオークステーキになる事でしょう。

今夜の夜営地は、僕の人攫いにあった場所を越え峠の山頂の予定で進みます。

「もうすぐ山頂の夜営地に着くよ」

「思ったより早く着きますわね、馬さん後少し頑張つて下さいね」

軽快に進み、まだまだ明るい時間に到着しました。

「ここですね私が人攫いにあった場所ですわ、流石にもう、兵達はいらつしやらないですわね」

辺りを見渡してみても、まだまだ早い時間に着いたため僕達以外は誰もいない、馬車

を進め広場の端の方に場所を決め、馬さん達を馬車から外し、水や飼い葉を与えてブラッシングしました。

すると、林の中から騎士の鎧を着て兜まで被り、剣を仕舞いながら出て来ました。

「ん？ なっ！ お嬢様！ お嬢様ご無事でしたか！ 怪我などはありませんか！」

騎士さんが僕達がブラッシングしていると凄く勢いで、駆け寄ってきてテイにだるうね、呼び掛けています。

「あら、ステファニーではないですか、貴女は残っていましたのね、私はこの通り怪我などはありませんわ、このライに助けていただきましたの」

「おお！ テイの護衛をしていた人なんだね、これはキチンと挨拶をしておかないとですわね。」

「初めまして、サーバル男爵家三男、ライリール・ドライ・サーバルと申します、ライとお呼び下さい」

「劍聖様の御子息様！ は、初めまして、ステファニーと申します、シャクテイお嬢様の侍女兼護衛をしております、この度はお嬢様を助けていただき誠にありがとうございますました」

兜を脱ぎ、ふあさつと金色のストレートヘアが武骨な鎧に降り注ぎ、戦乙女ヴァルキリーの様な印象に変わりました。

「ステファニー、貴女だけが残っていますの?」

「はい、この場は私だけでありますね、他の者は、隊の隊長は公爵様に報告を上げ、王都方面や、隣国方面に散り、公爵領からは応援のため、各街道を虱潰しにお嬢様を探しに出しております」

そんなに沢山、でも公爵令嬢だものね、当たり前前かもしれません。

「もしかしたら、すれ違っていたのかもね」

「そうですわね、ステファニー、皆に連絡は出来ますか? 無事を知らせておきたいのですが」

「はい、すぐに魔道具にて公爵様に連絡を入れたと思うのですが、あのですね、魔力が、食事をするために狩りに出たのですが上手く行かず、魔力だけが消費されて今使うと気絶をさせていただきます、あはは」

あはは、狩りのため森に入っていたのですね。

「僕が、魔力を流しましょうか、喋るのはステファニーさんがやっていただければ大丈夫ですよ?」

「は、はい、助かります、ではこれを持ち私の方へ向けてお願いいたします」

魔道具を預かり、ステファニーさんに向けて魔力を込め始めました。

「はい、お願いしますね」

『誰だ！ シャクテイが見つかったのか！』

「はっ！ ステファニーであります、シャクテイお嬢様を保護してくださいました方と今ここにいらつしやいます、怪我もなく、元気なご様子、今お声を頂きます！ お嬢様、お願いいたします」

「お父様、シャクテイですわ、ご心配をお掛けしてごめんなさい、私はライ、サーバル男爵家のライリール様に助けられ、今そちらに帰る途中ですわよ」

『おお！ シャクテイ！ 良かったあ〜！ それにサーバル男爵家だと！ 剣聖殿の息子か！ ライリール殿だな、でかした！ ステファニー、その者も一緒にこちらに案内を！ 今いるのは峠の山頂だろう、すぐに早馬を出す、明日の朝には到着するはずだ！ それまでの護衛を頼んだぞ！ ひゃっほ〜い♪』

あははは、楽しそうなお方ですね。

「うふふふ、お父様ったら」

「あはは、いつものお元気が出たようで安心しました」

その後まだ魔力を流したままだったのですが。

『サーバル男爵へ連絡を！ お礼を言わねばならん！ 出向くか？』

『あなた、それだご迷惑になりますわよ、まだお呼びになつた方がサーバル男爵様のご負担になりませんわ』

『うむうむ、そうしよう♪ 奴には助けて貰ってばかりだったからな、ここらで恩も返したい、今回助けてくれたのは三男と申しておつたな、ん、ん、婿』

そこで、向こう側が、魔道具を切り替えた様です。

貴族同士、仲が良かったようですし、もしかしたら、お父さんと会えるかも知れませ
んね。

第18話 合流

ステファニーさんがテイの寝る場所を確認したいとの事で、今日は、僕達だけしかない夜営地の馬車にご案内。

ささっと二つのベッドをくっ付けて、一つのベッドにして、セッティングです。

張り切つて、看護婦さんがやつてくれていた様にベッドメイキングまでやってしまいました。

ですが、それを見たステファニーさんは困惑した顔で馬車内を見渡しこんな事を言い始めました。

「あの、お嬢様、ベッドが一つしかありませんが、どういう事でしょうか？」

「何がですか？ 一つではありませんわよ二つ置いてくっつけているだけですわ、皆で寝るのですもの」

うんうん、元々僕のベッドと同じものが作れるかと思つて作った物だけど、馬車内はそれ以上置くことは出来ないでしょうね、半分のベッドがあれば大丈夫ですが。

「あの、お二人は同じ馬車の中で一緒に寝られる事は、あつ、そうですね、夜警がありますからね、あはは、私とした事がそんな事も見落としてしまうとは、あははは」

「一緒に寝てますわよ？ ステファアニー、何かいけませんか？」

目を見開き、口も開いて物凄く驚いたかと思つたら、今度は難しい顔になっています。

「こ、これは、由々しき事態、すぐに連絡を！」

ステファアニーさんは先ほどの魔道具を出して、魔力を込めた。

「あつ！^{あつ！}」

ぼすんっ

ベッドに気絶して倒れ込んでしまいました。

「うふふふ、ステファアニーったら、魔力切れ寸前と言つてましたのに」

「気絶してしまつたね、鎧のままだと眠りにくいし、収納！ よし、あつ、でも汗かいているよね、一回全部収納！ ティ、僕のパンツと、確かお母さんに作りかけて断念した服が、ほいっつと！」

「まあ♪ ワンピースですわね」

「うん、これならステファアニーさんでも着れるよね」

ムルムルに体の汚れを取つて貰い、パンツを履かせ、ワンピースを着せて、ベッドにきちんと寝かせて、僕達もパジャマに着替えます。

「ステファアニーのおっぱい大きいですわね、ぶにぶにですわ♪ ムルムルさんです♪」

ステファアニーさんのおっぱいの両方を両手でぶにぶにしている。

「ほんとうだ！ ムルムルみたい♪ でも家の母さんも大きかったよ」

ステファニーさんのおっぱいをぶにぶに。

「私のお母様もですわ、でも、大きいと肩が痛くなるそうです、私はそこそこで良いですわ」

「あははは、その悩みは男だと無いからね、一応前に捕まった失敗を活かして馬車と馬さんの周りに魔力で誰かが近付いても分かるようにしたから、軽めに晩ごはん食べて、僕達も寝ようか」

「はい」

食事、サンドイッチがあつたのでそれを食べて、今日は真ん中にティを挟んで、川の字です。

ピクツ

何か侵入したようだね。

そつと、二人を起こさないようにして、ベッドを抜けようとなりましたが、ティが僕を抱き枕にしていました、そつと起こさずに腕を解き、足をほどき、なんとか抜けました。

パジャマを収納し、装備を整え、天井からそくつと馬車の屋根に出ます。

這うような低い姿勢のまま、辺りを見渡すと、また盗賊でしょうか？ 十数名、二十名程いるでしょうか、馬を木に繋ぎ、こちらの、僕達の馬車の方を見ているようです。

あつ！ もしかして、テイのお迎えの方達でしょうか！

ん、聞くにしたつて、違つたらがここにいて知らせてしまうことになりまし、困りましたね。

そして馬車に近付いてきました。

「静かに、お嬢様はまだ寝ているはずですが、私達はこの馬車の近くに待機、朝起きてくるのを待ちます」

「はっ」

お迎えの人の様ですね、はああ、安心したら眠く。

ピクツ

おおつ！ 屋根の上で寝てました！ つてか今度は違いますね、魔物が近付いてきます、オークの様ですね、三方向から。

「魔物が来ます！ オークですよ！ 街道側から十！ 左の森から七！ 馬さんに向かつてくるのが十五！ 街道側と馬さんは僕が！ 左の森からの七匹お願いします！」

「何！ 全員戦闘準備！ 馬車に近付けるな！」

「はっ！
「はっ！」

まず最初に出てきた街道側を、ウインドニードルです。

馬さんの方近付きながら十匹を倒してしまふ、すぐさま収納し騒ぎ出す馬さんの前に立ち塞がり、十五匹を一気にニードルで倒して収納してしまふ。

兵士さん達の方は、苦戦しているようで、馬車を守る陣形がじりじりと下がってきています。

オークリーダーの七匹に何やってるのですか！

「危ないですよまったく、ほいっと！」

ウインドニードルを飛ばし、眉間を撃ち抜き収納しました。

「お疲れ様です、魔法で遠距離から倒さないと怪我をしますよ」

「た、助かりました、攻撃魔法を使える者がおりませんので、見事な魔法でございますね」

おっと、使えない方達だったのですね、使える人が少ないのかな？ あつと、ここは礼儀正しくきちんと自己紹介ですね。

「はい、サーバル男爵家三男、ライリール・ドライ・サーバルです、ライと呼んでください、ブラフマー公爵様の兵士さん達ですよね？」

「はい、この度はシャクティお嬢様をお救い下さいましてありがとうございます、それにも我々だけでは危なかったところを重々かさねがさね感謝いたします」

兵士さん達は隊長さんかな？　話しかけてきた方を最前列にして整列し頭を下げお礼をしてくれました。

「いえいえ、そうだ、テイ、シャクテイとステファアニーさんは馬車内で一緒にいます、ステファアニーさんは魔力切れで気絶してしまわれたので」

「ステファアニーの事までお世話になりありがとうございます、しかしお強い、オークリダーをいとも容易く倒してしまうとは、流石剣聖様のご子息、魔法の腕も宮廷魔道士を結婚のためお断りになった賢者様ゆずりで素晴らしい、あれ？　呪文が聴こえなかった気もしますが、そ、それに剣術もお父君の御指南をお受けになられたのですか？」

母さんは賢者なんだ！　また聞くことが増えましたね。

周りの兵士さんは興味津々ですね。

「はい、父さんと兄二人に教えて貰いました、全然敵わなかったですが、あははは」

「おおっ！　それはそれは素晴らしい環境ですね、ん？　もしやあの王子様を勉強、魔法、武術全般で勝ってしまったと噂の双子がライ殿のお兄様方ですか？　名前までは私達は知らないのですが」

「はい、シーリール兄さんと、アースリール兄さんですね、学院の外にまでそんな噂が出ているのですね」

うんうん、家族が褒められたり、良い事で有名になるのは嬉しいですね。

「おおっ！ やはりライ殿を見て、そうじゃないかと、うんうん、剣聖様、賢者様のご息達様方だったのですね、おっと、自己紹介を」

兵士さん全員が姿勢を正しました。

「ブラフマー公爵家三番隊隊長シルキーと申します、主に公都でお嬢様の警護をやっております」

兜を装備していますが声で分かっていました、やはり女性のようにですね。

「隊全員の名を紹介する事が当然かと思いますが、ここは私だけでご容赦願います。数が多いので、混乱する可能性がありますので、それで、もう夜が明けますので、朝食後公都に向け出発でよろしいでしょうか」

「はい、分かりました、では朝食の準備してしましましょう、先ほどのではありませんが、保存食のオークリーダーのベーコンが沢山ありますので、それを使いましょう」

以前マシユーが作っていたのを盗み見て（バレてました）こっそり作った（バレバレでした）ベーコン、調子にのって何匹分（三十七匹、マシユーが確認した分）作ったか分からないのですが、一度こっそり厨房にあったベーコンと入れ換えて食事に出して貰ったのですが（当然バレてました）、自画自賛したくなるほどの出来でした。

そのベーコンを使い、スクランブルエッグと、ベーコンを魔物パンに挟み、サンドイッチを作っていきます。

隊長さん、シルキーさんが料理ダメダメだという事が分かり、ちよつと弄られていたのが笑えました。

日が昇り始め、ティを起こそうと馬車の鍵をぐるぐるして、
「ガチャ」
開け中に入ると、ステファニーさんが起きていました。

「おはようございます、ステファニーさん、良く眠れましたか？」

「はい、ライ殿は夜警をして下さっていたのですね、私はなんて早とちりを、申し訳ありません、大変良く眠れ魔力も回復いたしました」

「それは良かったです、朝食の準備が出来ますので、ティを起こして貰えますか？」

「はい、お着替えをして、向かいますね」

「お願いします、テラ、ムルムル、おいで」

ふるふる

テラはまだムルムルベッドでハンカチを布団に寝ていますが、ムルムルごと持ち上げ肩に乗せておきます。

シルキーさん達の所に戻り、焚き火でお湯を沸かしお茶の準備を始めます。

「ライ殿は貴族のご子息にしては、こういった料理やお茶などもお上手ですね。私も男爵家の三女で知らない人に嫁がされる事が嫌で兵士の道を選び、下積みの時分に色々料理などを教わったのですが、まったくと言って良いほど身に付かなかったのですよ」

「ん、僕の場合は何でも自分でやる事が楽しくて、好きこそ物の上手なれという言葉があつて、好きな事は上手くなる物ですよ、だから、自分で美味しい物が食べたいから料理していたら自然に好きになつて上手くなりますよ」

「な、なるほど！　そうですね、あの下積みの時は取り敢えず食べれる物を！　としか考えていませんでした、うんうん、その考えで修行のやり直しを試みることにします」
そんな話をしている内にステファニーさんが、ティを連れ、馬車から出てきました。
さてさて、お茶つばを入れましょうかね。

第19話 公都へ到着

朝ごはんが終わり、馬車に馬さんを繋いで出発です。

テイが御者台に座ろうとしたのですが、ステファニーさんに止められ、しぶしぶ今は二人が馬車の中にいます。

御者台には僕とテラ、ムルムルが、周りは馬に乗ったシルキーさん達が一定の距離を取り、護衛してくれています。

何度かの休憩の末、だいぶ薄暗くなったのですが、公都に到着しました。

入門のため並ぶこともなく、シルキーさんが部下に命令をして先行させ、僕達が止まらなくても入門出来る様に、手配をしてくれましたので、そのまま入門する事が出来ました。

「そういえば、ここが目的地だったんだよな、ファイアのお父さんのお店を探さなきゃね」

「ライをフツたファイアがここにいるのね」

テラ、グサグサと何かが僕の心に刺さるからそういう言い方はやめて欲しいです。

一応、お友達として会いに来たのですから。

「あはは、この学院に通っているよ、お父さんがここで食堂を開いているからね、たまに来て作ってくれる食事は凄く美味しかったよ」

和風な料理を作ってくれた事には物凄く驚いたものです。

山菜の料理は絶品、前世を思い出して涙が出そうなくらいでしたから。

「ふくん、じゃあフィーアにあった後は行き先は未定なのね」

「うん、まずはこの国をぐるっと回ってみるのも良いかなあ〜って思ってるよ」

肩の上、さらにムルムルの上で腕組みをしながら何かを考えているテラ。

「ライ殿、サーバル男爵様も今入門なされたとの事です、転移魔法を使える術者でもありませんからね奥方様は」

え？ そ、そうなの！

「つ、つい先日家を出発した所ですが、もう再会とは、あははは」

「うふふ、そうなのですね、それは少し気恥ずかしいものがありますね、でもシャクティお嬢様をお助けした事で、公爵様がお呼びになったのでしよう、おほめの言葉を頂けるのでしようね」

うん、公爵令嬢だものねティは、それもだけれど、母さんそんな事出来たのか、後で教えて貰いましょう♪

「あはは、僕も最初は捕まっちゃったんですけどね」

「うふふ、そのお陰でシャクティお嬢様が助かったのですから、お手柄には違いありません」

兜を装備したままなので、声は少しこもっていますが、ティが見つかり、この公都に帰ってきた事が本当に嬉しそうです。

街の人達も、この三番隊がティの護衛をしている事を知っているのか、ちらほらと、「お嬢様がお帰りです」「また、お店に来てくれるかな」「学院に行った筈では?」、など聞こえてきます。

「そう言っていたらと、僕も、なんだかそんな気がしてきました」

広い、街の大通りをゆっくり走り、見えてきた、お城、屋敷を通り越してお城ですよ！ その大きなお城を囲む城壁の門をくぐり抜け、まだ先に見えるお城に向かい馬車を走らせませす。

お城の大扉前に馬車を横付けして停車させ、馬車を降り荷台の戸を開けました。

ステファニーが先に降り、続けてティが馬車を降りると、開かれていた大扉から、一組の男女が歩み寄ってきました。

「シャクティー！」

男性の方が、走り出しこちらに向かつてきます、横に付いていた兵士さんもいきなりの事で驚いていましたが、流石素早く追い付き、並走エントランスの階段を走り下りて

来るともう目の前です。

「お父様、階段は走り降りては危ないですわよ、うふふ、ただいま戻りましたわ」
やはりお父さんの公爵様です。

「あなた、そんなに慌てないで下さいませ、お怪我などされるやも知れませんが」
「うむ、すまんな、シヤクテイ、よくぞ無事帰ってきてくれた」

公爵様と奥様はテイを挟み嬉しそうに微笑んでいます。

「お父様、お母様、ご紹介しなければならぬお方がおります、ライ、私の横にお願いします」

テイが呼び、僕はテイの横に進み跪きご挨拶を。

「直言」

「構わん！ 立って話しなさい」

直言のお許しを窺うかがおうとしたのですが、被せるようにお許しが出ました、それも立つたままで良いと、そんな事は普通有り得ないのですが、あはは。

「お許しありがとうございます」

僕は立ち上がりテイの横で自己紹介を始めます。

「僕はサーバル男爵家三男、ライリール・ドライ・サーバルと申します、良ければライとお呼び下さい」

「お父様、お母様、ライが私の事をお救い下さいましたの、それにライの肩に乗るムルムルさんとテラ師匠にも色々助けられましたわ」

「ふむ、ライリール殿、いや、ライ殿、この度は誠になんとお礼を言えば良いか、本当にありがとうございます」

「私からも、ライ殿ありがとうございます」

「お二人は頭こそ下げることはありませんが、心からの感謝の気持ちが伝わってきました。」

「いえ、当然の事をしたまでです」

「サーバル男爵ご夫妻が到着いたしました！」

遠く離れた城壁の方から父さんと母さんが到着した事を伝える声が聞こえました。

「ふむ、ここではなんだ、応接室に案内しよう」

公爵様と奥様、そして僕達は兵士さんの案内で、お城の中に入り、応接室に通されました。

父さん達も、少し遅れましたが同じ応接室に通され、数日ぶりの再会を果たしました。

「ライ、良くやった」

「ライ、お母さんは心配してましたのよ、でも、頑張りましたね」

「はい」

父さん達もソファアーに腰をおろし、僕達の前は真ん中に公爵様と左右にティと奥様が座りました。

「うむ、ではまず褒美だが、爵位を与えようと思うのだが、劍聖、どうだ？」

「はっ、恐れ多いとは思いますが、何故に？」

「うむ、シヤクティの恩人であるぞ、公爵位でも欲しいと言えば譲つてやつても良いくらい感謝しておるからな」

ほへえ、いやいや僕は冒険者でこの世界を巡る旅に出てすぐですよ！ 爵位なんて貰っちゃつたら、自由が無くなつちやいますよ！

「お父様、サーバル男爵様がお困りですよ、それにライはこの世界を旅して回りたくいと仰っていましたわ、自由を無くす様な事は褒美にはなりませんわよ」

「ぬぬ、そ、そうなのか、劍聖の息子であるのだ、家臣にも欲しかったのだが」

「僕は、まだまだ子供です、そういった事はまだ考えられません、あつ！ そのご褒美、サーバル男爵家の領地に穀物などをお安く提供出来たりはしませんか？ 父さんの領地は起伏が激しいところが多く農作地の場所が少ないので、民の方々は高い小麦を買っています、それが少しでもお安くなるなら」

「ライ、お前」

部屋の中の皆が、それこそ一緒に帰つて来たステファニーさんとシルキーさんまで僕

に注目してきて、居心地が悪く、むずむずするのですが。

「ふむ、自身の功績を父の領地のために使うか、ふふつ、良からう！ サーバル男爵、我がブラフマー公爵領から格安で譲ることとする」

「公爵様、ライ、良いのか？ 叙爵じよしゃくなど中々受けられるものでは無いのだぞ、穀物は助かるが」

「はい、皆が嬉しくなる事ですよね♪」

「うむ、では決まりだな、家令よその様に手配を進めよ」

「はっ」

公爵様の後ろに控えていたのは家令さんの様です。

「公爵様、少しでもお話が」

話が途切れたところでステファニーさんが公爵様に向かい、言いにくそうにしながら、言葉を紡ぎました。

「うむ、ステファニーどうしたのだ？」

「はい、シャクテイお嬢様とライ殿は同じ馬車の中で寝て、宿では同じお風呂に入ったとお聞きしました」

「何まゆ！」

公爵様夫妻と父さん母さん、家令さんシルキーさん、メイドさんに至るこの部屋の中

に居る皆が声を合わせて驚きを表しました。

僕はなぜそんなに驚いているのか、分からなかったのですが、ティは少しだけ分かっているっぽいし、テラはお手上げて顔をして首を振っています。

「シ、シャクティ、ライ殿、それは真まことか？」

公爵様が聞いてきましたので、僕は。

「はい、そうですが」

「本当ですわよ、ライにはお着替えのやり方も習いましたし、体の洗い方もですわ」

ティが、そう言った後、父さん達は顔に手を当て溜め息を吐き、公爵様達は顔を見合わせ頷く。

「私の権限では伯爵までしか与えられませんが、婿にするなら伯爵であれば構わんだろう、劍聖、良いな」

「はっ、自由がどうかなど言ってはおられません」

「まあまあ、では王子から打診のあった婚約話は受けなくて良くなりましたのね、うふふふ、ライ殿、いえライ、私の事はお義母さんと呼んでくださいね」

「え？ あの、何がどういう事ですか？」

何かなんだか分かりませんよ！

「ライ、お前の婚約者が決まった、叙爵もな」

第20話 公認

「お父様！ 私はその様なことは望んでおりません、ライが成人して私のもとに来てくれる事を信じておりますもの！ ライの自由を奪うお父様達なんて嫌いになってしまいますわ！」

ティは、ぼろぼろと涙を流しながら僕のために。

「シヤクティ、だが」

すると奥様が公爵様を遮り、話し始めました。

「あなた、叙爵は一旦保留としてはいかがですか？ ライはまだ十歳、貴族の柵しがらみに囚われているには早いと、ここは婚約者だけでよろしいのではなくて、シヤクティもライの事を好んでいる様子、その様な事で不仲にしてしまつては、シヤクティに、それにライにも嫌われてしまいますわよ」

うんうん、ティの事は好きだから彼女になつて貰つて奥さんかあ、良いかも。

「ふむ、私もライと呼ばせて貰おう、叙爵はライの好きな時で良い、シヤクティとの婚約は、劍聖、そなたの息子と知つた時から婿に貰いたいと考え始めておつたのでな、これは譲れんがそれで良いか？」

「ブラフマー公爵様、ライの事をそこまで」

「そうです父さん、面識もなく、報告を受けただけでそう思うのは、僕も不自然だと思います。」

「うふふ、違ふのよ、あの女誑し第一王子からの求婚を止めるための策でしたわ、最初はね」

第一王子との？ 兄さん達に負けちゃった王子様だよね？ 奥様。

「うむ、あやつにだけは嫁ととがせたくはない、女誑しなど可愛いものだ、口止めされているのでなここでは言えんが兄も知っている、次期国王は第一王女が即位し女王になるか、第二王子でも懐妊してくれ無ければ、シャクテイか、私の二人目の妻が産んだ息子を推すつもりであつたからな」

え？ 奥さん二人いるの！ じゃなくて、王子様って婚約者じゃないの？ あつ！

『第一王子との婚約者候補なんだよ』

そうです！ 隊長が言つたのは候補だからまだ確定では無かつたのですね！

ん、では王子様ってどんな人なの？

「ライ、シャクテイの事は頼めるか？」

「ライ、お願いしますね、貴族である女性の肌を見てしまったのですからね、うふふふ」

「ライ」

公爵様、奥様、それに不安そうなティ。

父さん、母さん、僕は。

「ティ、僕はこの世界を見て回りたんだ、色んな物を自分の足で目で見て回りたいたずっと思つていたんだ、そんな僕の婚約者になつて貰えるかな」

「はい、お慕ひしておりますので、未永くよろしくお願ひ致します」

ティは、ソファアニーから立ち上がり、とととと真ん中にあつたテーブルを迂回し僕の胸に飛び込んできました。

僕はティを抱き止め、初めての彼女を通り越し、婚約者が出来た瞬間でした。

「ははっ、ライ、責任重大だな、シーや、アースより先に婚約者が決まつたなんてな」

父さん。

「うふふ、二人にも良い娘は居ますわよ」

うんうん、母さん僕もそう思います。

「うむ、これで兄に報告すれば良いだろう、シャクティ、ヤツからの贈り物は？」

僕の胸から顔をあげたティは、少し涙の痕は残っていますが、笑顔になりました。

「ん？ 手も付けていませんわよ、何度かお会いしましたが、どうにも気分が悪くなりますから、ステファニーにどこかに持つていってと言いましたわ、そうよね、ステファニー」

「はい、地下の使われていない牢屋の一室をお借りして放り込んであります、いずれも、輸送用の木箱から出しておりませんので、計十八箱あります、送り返しますか？」

おお、中々まめにプレゼントしているんですね。

僕も何か贈ろうかな、結婚を前提だと指輪かな？ ドワーフの国に修行しに行くのも良いかもしれませんね。

「ふむ、手を付けていないなら、学院に行くのだ、私も付いて行き、兄を通して返しておこう、ちょうど十日後に王都に出向くのでな、ステファニー、私の王都行きに一台馬車を追加と、荷物の運び出しを頼めるか？」

「はっ！ シャクティ様もそれに合わせて王都に向かわれるのですか？」

「うむ、さてどうしたものか、学院の始まる前には向こうに行っておかねばならん、おい、学院はいつからだ？」

公爵様のお義父さんと言った方が良いのかな？ 後ろを振り向き家令さんに尋ねます。

後ろに立っていた家令さんが言うには。

「四日後からでございます。明日には出発しませんと間に合いません、それも四頭引きの速度が出る馬車でですな」

「確か兄も学院顧問として出席であったな、ふむ困った」

「母さん、転移の魔法で飛んで行く事は出来ないのですか？」

転移で行けるなら、明日一日ゆっくり休んでからでも大丈夫だと思うのですが。

「うふふふ、そうですねシーとアースに会いに行くのも良いかもしれませんわね、公爵様、私が転移で飛びますわよ」

「おお！ それは助かる、荷物はどうするか」

「ライに任せれば問題解決ですわよ、収納の魔法？ スキルを持っていますから、たつぷり入りますよね？」

テイが僕のスキルをお義父さんに進めています、どれくらい空きがあるのか。．．．．．
うです、要らない物、ゴブリンはムルムルが、やつぱりオークの方が良いかな、なので
オークは食べるから置いておいて、ゴブリンや魔狼なんかは売ってしまえば空きは出来
る筈。

「ちよつと心配だから、中の魔物を売れば空きは出来ると思いますよ、馬車も数台入ると
思います」

皆が、目を見開き僕の方を見てくるのですが。

「ライ、収納のスキルを持つているの？ 鑑定は使っているところを見て知っています
が、収納のスキルは長年商人として来た者がごく稀に覚えるものですよ、それも馬車な
ど収納できるなんて聞いた事も無いわよ」

「え？　そうなのですか？　冒険者ギルドに登録した時には馬車も入りましたよ、マシューにお願いされて車軸が壊れて、馬車用の納屋に運びましたから、それに大量のオーク肉も保管庫代わりに数十四分、そうそう、あのオークが大発生した時の物ですがお安く手に入るとの事でいっぱい買いました」

「え？」

父さん母さん、間抜けなお顔をしていますよ、くふふ。

「あの百匹の群れだよな、あの後、毎日オークが食事に出てきていたが」

「はい、そうです、それに今もマシューに作ってもらった沢山のシチューやパンなどを持っていますよ」

「ふ、ふむ、ではそれらを出せば荷物や馬車は入ると、そう言う事だな？」

「いえ、ゴブリンなどの要らない魔物売ればですね。凄く沢山ありますから」

皆がジト目で見えます。

「ライ、十歳まで討伐は駄目だと言っていた筈だが、沢山？　家を出ていつてから、そんなに倒したのか？　数十匹以上を？」

あ、あああああ〜！　そ、そうでした！　約束してました

「ご、ごめんなさい、フィーアと一緒にゴブリンの村とかオークの村とか潰してました

」

頭を下げて床を見ながらなので、皆の様子が見えないので、どんな状況なのかは分かりません。

「まあ、素晴らしいですわねライ、村をそのフィーアさんとお二人で潰してしまわれるなんて、お父様、お父様の家臣達で出来ますか？」

「無理だな、軍を率いてなら、手傷は負うだろうが、しかし、サーバル男爵、お主が気付かないとすれば、怪我もなくそのフィーアと二人で潰し、二人は無傷と言うことだな？」
怪我なんて、しないしさせませんよ、フィーアだって、フラれましたが好きな子には変わりがありませんから。

「はい、二人が怪我をしたところは見たことがありません」

「私も、気付きませんでしたわ」

「ふむ、そのフィーアと申す者は？」

お義父さんがフィーアに興味を？

「この街の学院に通っております、私達の昔のパーティーメンバーの娘です」

「おい、サーバル、お主のパーティーメンバーなら真祖の食堂、美味しい飯屋であろう、よくお忍びで使う場所だ、家令よ、その者達を夕食に誘うのだ」

「はっ、では少し席を離れることをお許し下さい」

「うむ、行け」

「はっ」

おっと、探しに行かなくてもファイアに会えそうです。

第21話 夕食

「よし、後は。」

皆さんが僕を、じい〜と見てきます。

父さんが母さんに肘で、つんつんと押され、口を開きました。

「ライ、約束を破り討伐をやっていた事はこの際許そう。でだ、いったいどれほどの魔物が収納に入っているのだ？」

ジト目で僕を見て、返事を待っています。

「公爵様、魔物の買い取りは出来ますか？」

おお！ 父さん良い事を聞いてくれました！ ここで買い取っていただけのならば、それはもう助かります。

数が多いので、ギルドだと多分無理ですからね。

「うむ、ゴブリン二匹で銅貨一枚だな、魔狼なら毛皮の状態にもよるが、銀貨に手が届くかどうか、大銅貨七枚からその辺りだな」

「分かりました、お庭をお借りする事は出来ますか？」

ふむふむ、なら大金貨に手が届く計算ですね、ギルドに売るより割高です、ギルドな

ら三匹のゴブリンで銅貨一枚ですからね。

「うむ、早速庭に出ようか、シルキー三番隊を庭に、ゴブリンなどを運ぶ用意もして集合させよ、旅疲れのところすまないが」

「はっ、ではすぐに」

シルキーさんは一礼して応接室を出て行きました。

「では行くか」

庭に続く大きな窓を開け、僕達はテラスに出ました。

流石公爵邸庭が、つて言うかお城ですねもはや、あはは。

そしてその庭は大きく、男爵家の屋敷なんか何個も余裕で入る広さがあります。

「どうせ、ビックリするほどの物が出てくるのであろうから、ここなら良からう」

多分大丈夫かな。

「ライ、数えやすいように十匹ずつ塊で出すように、まずはゴブリンからだ」

「分かりました。では十匹ずつですね、ほいっと！」

ドサドサ、ドサドサつと十匹ずつ出して行き、三十個目の山を出したところで止められました。

「待て！ 待て待て！ いったいどれほどのゴブリンが入っているのだ！ 今ので三十の山が有ると言うことは三百だぞ！」

「ん、父さん、分からないです。数は分からないですがまだまだありますね、この辺りは日に百匹ずつ二人で倒していた時の物ですから、今出ている物は三日分ほどなので、後二年分はありますよ」

「はあああこれあ三あ日〜！」

「まあ♪ ライは凄いです♪」

「はああ、ライ、あなた貯め込みすぎよ！ 小出しにしなさい、皆が驚いて、固まつちやつたじゃない」

ティは満面の笑みで褒めてくれましたが、テラは、呆れ顔です。

そこにシルキーさんが三番隊を連れ、荷台を引いてやって来ました。

「おお！ ライ殿沢山狩りましたね、なるほどこれほどのゴブリンが入っていたなら収納が心配になる事も分かりますね」

「シルキーさん、お疲れ様です、あのまだ出している途中です、待てと言われましたので」「うんうん、この数だけでも数回は倉庫と往復せねばならないでしょうから私達としてもこれを運ぶのは些いさか手間になります、ライ殿、よろしければ倉庫に直接入れて貰えないでしょわか？」

そうですね、いちいちここから荷台で運ぶなんて手間だけがかかりますからね。

「分かりました、では一度収納してしまえますね。収納！」

出した三百匹分のゴブリンを入れ直したところで、固まっていた皆は復活しました。

「ライよ、お主これほどの数を二人で、それも数年に渡って倒し続けたと？」

「はい、最後はゴブリン村長を間違えて倒してしまつたのですが、それ以来増えなくなりまして、それでその前に潰してしまつて復活を待つていたオークが復活していて、最後はオーク村長も倒したので一年くらいはどちらも急激に増えることはありませんね」

オーク村長も復活してくるまで二年近くかかりましたし、ゴブリン村長を、またファイアがミスつて倒してしまつたので焦りましたが、本当にオーク村長が復活していたので助かりました。

「サーバル、ライとそのファイア二人でこの国と戦をしても渡り合えるかも知れないぞ

はっ！ はははははははは！」

「その様ですね、くはははははははははは！」

戦いませんよそんなの、戦うのは悪い魔物だけですからね。

なぜかご機嫌が、最高潮に上り詰め、倉庫からはみ出すほどの（はみ出てないし全部ではない）、ゴブリンを買い取ってくれました、ほとんどは魔石の値段ですが、本体は肥料にするそうで、それも安くだが売れるそうです。

それにこの公爵領は農耕が盛んなので、肥料になるゴブリンは大歓迎だそうです、明日肥料を作る者達を集め、格安で譲るそうです。

それに王都でも買い取って貰えるように手配すると言っていたいただきました。

日が落ちて、夕食の時間となりました。

そうして、フィーアと乳母をしてくれていたカーリアさん、旦那さんは店が忙しいと断わったそうですが、公爵様のお誘いを断わって大丈夫なのかと思うでしょうが、実は魔族の公爵（現王より長生きしていて、自分が王などやりたくないと思し付け、父さん、母さんと冒険者パーティーを組んでいた）であり、友好国の客人としてお断りすることもありだそうです。

「フィーア元気にしてた？ カーリアさん久しぶりです」

「ライ久しぶり、元気よ、ライも元気そうね」

うんうん、やっぱり可愛いよね、フラれましたが

「ライ君久しぶりですね、旦那はお店がねえ、こんな時くらい休めば良いのに、うふふ」
「うむ、魔国の公爵にして、あの料理の腕前、仕方なからう。あははは、私も妻とお忍びで食べに行つても個室を用意してくれて助かってるからな」

そんなことをテイが言っていましたね、よし、フィーアとも再会できましたが、この街を離れる前に絶対に食へに行きましょう。

おっとこれで全員揃いました。お義父さんの合図でメイドさん達が大きなテーブルに料理を並べ、大人にはワインを、子供にはジュースを配り終えたところでお義父さんの挨拶で夕食が始まりました。

皆で歓談し食事が進む中、耳元でテラがこそこそと話しかけてきます。

「ライ、フィーアつて子もぐるぐるしっぱなしじゃない！ あなたと同じよ！ 魔力的にはライの方が段違いに上だけど、周りの魔力も取り入れてるし、実質魔力は無限に近いわ、どうなってるのよ！ だとすれば、お兄さん達も？ はあああ、なんだか疲れたわ、ハンカチちょうだい、もう寝るわ」

そつと収納から出したハンカチをテラに渡すと、ムルムルの上で横になり、何かぶつぶつ文句を言いながら寝てしまいました。

そして夕食もお開きになり、客室に案内されたのですが、すぐにティがお迎えに来ました。

「ライ、お風呂使っても良いって♪ あ、テラ師匠は寝たままですか？」

「起きたわよ、仕方ないわね私が泳ぎを伝授してあげるわ！ ライ行くわよ！」

みによくんと伸びて僕の肩に乗り移るムルムルにしがみつきながら移動してきました。

「うん♪ 楽しみにしてたんだ、そうだ、フィーアも誘おうか、絶対に泳げないと思うし」

父さん母さん達はお風呂と聞き、止めようとしたのか、腰をソファアから上げかけて
ましたが、テラの泳ぎを教えると言ってすぐに、背もたれにもたれ直しました。

「はい、大きなお風呂ですから大丈夫です♪ 行きましょう♪」

部屋を出て、隣の部屋に行きノックをします。

コンコンコン

「は〜い、開いてますよ」

僕は戸を開け、中を見るとカリィアさんとファイアはソファアで寛くわいでいました。

「ファイア、今からテラに、あつ、テラってのは」

「私がテラよ！ そして私の騎獣ムルムル！ よろしくねー！」

ぷるぷる

「あつ、肩に乗ってたスライムさんとちびっ子ちゃんだ♪ よろしくお願いします、
ファイアです♪」

自己紹介も終わり、お誘いしましょう。

「これからテラに泳ぎを教えて貰うんだ、ファイアも一緒にどう？ 僕もだけど泳げな
いよね？」

「嘘っ！ 本当に教えてくれるの！ 今度学院で川に行くのだけど、泳ぎの授業がある
らしくって、自信が無かったんだ、テラ先生私にも教えて下さい」

へえ、そんな授業があるのですね。

立ち上がり、素早い動きで僕の前に立ち、テラに視線を向けてじい〜つと見つめる。「ねえライ、テラ先生って、めっちゃくちゃ可愛くない？ それにシヤクテイちゃんも」
うんうん、それにムルムルも可愛いよね。

「フィーアちゃん、私の事はテイとお呼び下さい、同じテラ師匠に教えをいただく仲間ですから」

「良いの？ うちのパパは一応公爵だけど、公務は何一つしないで冒険者して、今は食堂で料理人よ、あははは」

「そうなのですよね、偉ぶったところなんて皆無ですし、カーリアさんにいつもお尻にしかれていますから、くふふ。」

「はい、仲間で、それにお友達にもなりましょう♪ さあ、お風呂で泳ぎを！」

「じゃあ行くわよ、ライ、進めええ〜！」

テイを先頭に、フィーアと僕はお風呂に行くのでした。

第22話 スイミングスクール

「テイの先導で廊下を進み、やって来ました憧れのプールですよ！ お風呂ですがなにか？」

「面倒くさいと言うか、早く泳いでみたいので、僕が皆の服を収納して、テイのドレスはハンガーに、フイーアのワンピースもハンガー。」

「僕の服は収納したまま放っておきます。」

二人のパンツは、蔓で編んだ籠かごに出して、二人別々に放り込んでおきます。

「よし、テラ、初めはどうすれば良いの？」

湯船の縁ふちにムルムルに乗ったテラが、何か複雑な顔をしています。僕たち三人は、わくわくして、テラの言葉を待っています。

「はあああ、水着があるのかなあと思っていましたが、僕たち三人は、わきに裸見られても何とも思っていないのね」

肩を落とし、水着っぽい服に変えていたテラですが、お風呂なのでから裸になるのは当たり前です。

「何がいけないのか分かりません。」

「はあああ、良いわ、まずは準備運動よ！ 体の至る所を伸ばして怪我をしないようにするの、私の真似をして付いてきなさい！」

自分も、しゆるんつと服をしまつて裸になり、準備運動を始めます。

僕達はテラの真似をして、足や手、腰や首、いろんな所を曲げ伸ばしやひねり。

そして、先日ティに大ウケしたぐるぐるを、ティとフィーアに見せていると、ティは大喜び、フィーアは。

「ライ、それ好きよね、メイドさん達も喜んでたし、あはははは」

「ライー！ それは、そこは準備運動しなくて良いから止めなさい！ そして二人とも顔が近いって！ 離れなさい！ こらっ！ 掴もうとしないの！」

そんな事もありましたが五分ほど準備運動が続き、最後に深呼吸をすまして終わりのようです。

「うん、皆の体が柔らかくなって、ホカホカしてきたでしょ、じゃあ湯船に入つてバタ足から練習よ！」

「分はかりらしまいしたら」

ここの湯船は一メートルくらいの深さがあつて、僕達は肩から上が出ているだけで、かなりの深さです。

「じゃあ三人とも縁に手を置いて、こうやって、足をバタバタさせるのよ、見ててね」

ムルムルに手を置き湯船に体を浮かべたテラは、足をバタバタ。

推進力があるのでムルムルがすいすいと移動して行きます。

「テラ、凄いいい♪」

その後僕達は、浴槽の縁に手を置きバタ足、次はのぼせてはいけませんから一旦外に出て体の動きを教えて貰います。

「上半身はこんな風に、ぐるぐる、足はさっきのバタバタするバタ足ね、もう一つはカエルの様な泳ぎ方よ、これはね、手は水を後ろに掻き出す感じで、足は蹴るこんな風にね」
湯船に戻ったテラは実演して、体の動きを教えてくださいました。

「さあ、そろそろ体も冷めてきている頃だから中に入つてやつてみましょう！」

「分かりました！」

それからはしばらく泳いで、体を冷まし、また泳いで、最後には十メートルくらいある湯船の端から端まで皆が泳げるようになりました。

「さあ、泳ぐのはとても疲れるから、今日はここまで、さあ、そろそろ出るわよ」

「は、はい♪」

出ようとして、体を洗っていない事に気が付いて、体を洗い、背中を洗いつこして、お風呂を出ました。

もちろん泳いでいる間お湯をぐるぐるして、ムルムルに乗ったテラをウォータースラ

イダーして上げましたよ。

物凄く気に入ったようで

「ひやつほ〜い♪ ライ、フィーアでも良いわ、もつと高い所から滑らせて♪」

と、何度も滑つて楽しんでいました。

テラ、今日は泳ぎを教えてくださいありがとうございます。

体を拭き、汗が引くまでベンチに座っていると、母さんとお義母さん、それにカリーアさんがお風呂にやって来ました。

「ライ、フィーアちゃんまで。」

お義母さん？

「うふふ、フィーアは小さい頃から一緒に入ってましたから、でもそうね、そろそろその辺りも教えていかなければ駄目ですね、もうすぐ川で泳ぎが始まるのよ、不特定多数の男の子の前で裸になられては困りますし」

カリーアさん？

「そうね、カリーア、フィーアちゃんは吸血鬼同士しか結婚駄目なのよね？」

母さん？ 僕はそう聞いたよ。

「ぶつ、それね、お父さんが嘘を教えたのよ娘を嫁にやりたくないからつて。吸血鬼つて、二千年くらい新しい子供が生まれていないの、フィーアが久しぶりに生まれた吸血

鬼なので、『ずっと嫁にはやらん』なんて言つて私に内緒でそんな事をばらまいて、まあ、
 好い人が出来るまではそれでも良いかつて思つてましたが、うふふふ」

え？ それじゃあ！

「え？ ライと結婚しても良いの？ なんだ、それならそうと早く言つてよね。ライ、
 ティちゃん、私も仲間に入れるみたい、よろしくね♪」

「まあまあ♪ フィーアちゃん、こちらこそよろしくお願ひしますね」

「え！ 本当に！ やつったあああ〜♪ ずっと一緒にいようね♪」

「はい♪」

二人は僕に飛び付いてきて、まだ冷めきらない体でお互い抱き合いぴよんぴよん跳ね
 てしまいました。

「うふふ♪ ライったら一日で二人も婚約者が出来てしまいましたね♪」

はい、母さん、とても嬉しいです。

「あははは♪ ライならお父さんも諦めるでしょ、ごねるなら私が説得調教するわ♪」

カーリアさん？

「まあまあ♪ では私達は親戚になりますわね、うふふ♪ お二人ともこれからもよろ
 しくお願ひいたしますね♪ シャクティにもその辺りをしっかり教育しませんと、うふ
 ぶ」

「そうか、親戚になるんだ。」

「あはは、はああ、結婚するんだ、なら問題解決ね！　そうよねムルムル！」
ぷるぷる。

そして、僕達はテイのお部屋で三人一緒に寝る事にしました。

「ふあああ、もう朝かな？　テラとムルムルは？」

視線を移動するとやっぱ僕の胸の上にいました。

テイとフィーアは僕を真ん中にして、抱き枕（DIYで作りました）を抱え込んで寝ています、もちろん角うさぎの腹巻き付きです。

そくつとテラとムルムルを、ベッドに下ろし、大きな窓を開け、二階のテラスに出ました。

「どうしようかな、兄さん達にも会っていいのかな、王都もその内行くつもりでしたから」

そんな事を考えながら、ぐるぐると風を渦巻きに、木の葉に付いた朝露を巻き込み、その朝露もぐるぐる。

風と朝露で竜巻のようにぐるぐるです。

「うん、次の目的地は王都！　ドワーフさん居るかなあ？」

その後、ティとフィーアも起きてきたので、僕とフィーアで、ぐるぐるのやり方をティに教えました。

「ティ、これ本当に呪文を唱える魔法より楽チンだから、いつでもぐるぐるのイメージしておくの、半年もすれば魔力が見えて風が起こせるようになるわよ」

「うん、呪文を使った魔法って、どんな魔法を使ってくるのか分かってしまいますから、防がれたり、邪魔されたり、でもこのぐるぐるなら呪文無しで撃てるからね」

「はい、頑張ります♪」

いつの間にか足元に来ていたテラがこんな事を言いました。

「その魔法を極めなさいね、ティも、将来良い事があるかもね、ん？ ムルムル、あなたもやってるの？ あはははは♪ 頑張んなさい♪」

ムルムルも魔力をぐるぐるしだしたようです。

魔石が回っていますので、頑張っているようですが、魔石を動かすんじゃないかと、魔力を動かそうね、あははは。

僕とフィーアが、コツを教えている内にメイドさんが朝食の準備が出来たとお知らせに来てくれました。

そこにはフィーアのお義父さんがエプロンをしたまま待っていました。

「ライくん、うちの可愛いフィーアとぐふつ」

カリーアさんの鋭いボディーブローが決まりました。

くの字になりお腹に手を添えふるふるしているお義父さん。

「あなた、もう決めたの、まだ説得調教が足りなかったのかしら？」

「ひゃい、わ、分かりました」

「お店の仕込みを途中で放つてあるのは大丈夫なの？ 婚約の念話した後飛んで来ちゃ

うし」

「み、店は今日は開けん、こんな気持ちで作る料理は客には出せん」

「うふふ、娘はいつかお嫁に行くものよ、あなたが私を親元から貰ったようにね、それに

ライなら昔から知っていますし、元パーティーメンバーの息子よ、これほど良縁は私は

見たことがないわよ」

「ぬう、コシヨンのような奴に見初められ、娶られる事を思えば、それも良いか、ライ、

フィーアを不幸にするような事があれば、許さんからな、それにお義父さんと呼ぶこと

を許そう」

「はい、僕はまだまだ子供ですが、絶対に幸せにしますね」

お義父さんが頷き、朝食の場に居た皆が頷いてくれました。

第23話 王都へ

朝食が終わり、早めに男爵家の王都別邸に転移する事となり、地下の牢屋に王子さんからのプレゼントを収納しに来たのですが。

「ライ！ 早く収納して浄化してしまいなさい！ 何て禍々まがまがしい！」

テラがそう言うので、急ぎましょう！

「収納！ ぐうつ、なにこれ、気持ちぎもじわるいいいい」

胃がひっくり返り、脳みそまでぐわんぐわんと揺らされているような感覚にいきなり襲われ、その場にしゃがみ込んでしまいます。

「ライ！ 浄化するイメージでぐるぐるしちやいなさい！ 早く！」

じ、じよ、浄化浄化あ、空気清浄機い、くうう、みたいな感じいい、わ、分つかないけどおお吸い取って集めてえー！ 気持ち悪いんだよー！

「ぐるぐる回って集まれええええー！」

僕的には十分ほどかかったと思つたのですが、一分ほどだつたらしいです。僕の手のひらには、見ているだけで不快な気持ちになる黒い玉が乗っています。

「テラ、これなに、持っているのも嫌なんです、ポイって捨てちゃ駄目？」

「呪いよ、それも中々のどぎつい部類ね、それに魅了が、このプレゼントを贈った王子は駄目な奴ね」

そう言えば、お義父さんが何か言えないみたいな事を。

「箱の中からあれだけ溢れ出すほど呪いが出ていてご丁寧に魅了付き、つて事は贈った相手を好きに動かせるためにやったとしか思えないわ」

「なぜ、どうやって？ 物凄く気持ち悪かったよ？」

「呪いで思考を混乱させ、まともな抵抗力をも失わせる、そしてそれを救う感じにしておいたのでしょうね、保険でこの魅了でしょ、好感度が上がったところで呪いを解いて、さらに魅了、だめ押しよ、あはは」

そうか、あんなに苦しい時に魅了に掛かり、王子に好意持つはずだから呼んだり、近付くよね。

それで目の前で、呪いを解いてって自分の呪いだから簡単に外せるのか？

「この魅了の魔法はその王子の物だと思っわ、だつて自分の物にするつもりだったのでしょ？ 呪いは部下か脅したかして掛けさせて、解くのは多分簡単に出来る様な仕組みにしてあるはずよ」

「そんなの、あつ！ マリグノさんつてサージェント辺境伯の娘さんつてもしかしたらー！」

「うん、可能性はあるわね、ティに暗殺依頼を出す動機はあるから確実とはいえないけ

ど、早く王都に出向くべきよ、ライ急ぎましょう」

それを聞いたステファニーさんが、凄く速さで、しゃがんでいた僕を立たせシャツを握りしめてきました。

「あ、暗殺！　そ、そんな、サント辺境伯令嬢がですか！　それはいつの事ですか！　く、詳しく！」

「ち、ちよつと落ち着いて下さい、足、足浮いてますからー！」

ステファニーさんが詰め寄り、僕のシャツを掴んで持ち上げてます。

「はっ！　ラ、ライ殿申し訳ありません、聞き捨てならない事をお聞きしたので、辺境伯令嬢のマリグノ様は、急に王子との間が狭せはまり婚約者の候補に上がったお方ですよ、お手付きにされたと噂もありますが、その方がお嬢様の暗殺依頼を？」

僕はあの街で起こった事を説明しました。

ステファニーさんは、僕の話の聞きながら、眉間の皺を深くして行きます。

説明が終わるとステファニーさんは苦虫を噛み潰したような顔で牢屋の壁を殴り付きました。

「ライ殿、この事を早く公爵様にお知らせしなければなりません、戻りましょう」

「はい、ステファニーさん、その前に手を、ん、ほいっとー！」

回復魔法っぽい物をステファニーさんの手を握り、掛けて行きます。

最初は僕の膝を擦りむいた時にだけど、フィーアや僕が怪我した時のためについて思い直して練習した物です。

「嘘っ！ 回復魔法を使えるのですか！ そんな、教会の門外不出と言われている魔法を。」

「そうですね？ でも、膝を擦りむいた時に行つて、銀貨の寄付が欲しいって言われて、子供がそんなお金持っているわけ無いのに、ですからそれから練習して使えるようになりました」

「あはは、ライ殿は。ありがとうございます、行きましよう」

先を急ぐステファニーさんの後ろに付いて行きながら、呪いの玉をテラが封印してくれました。

「くふふふ♪ 王子とやらに返してやらないとね♪ ぬふふふ♪」

テラが何か悪巧みをしています、玉に向かつて手を伸ばして魔力の流れからして何かを送り込んでる？ あっ！ 何か玉の嫌レベルが上がりましたよ！ ぬふふふ、分かりました、呪いを強化してるか、新たに付け加えているのですね♪ 全面的に協力しましょう♪

「そうですね♪ 前世で病院の皆さんは、腰が痛いとか、膝が痛いなんて事を言ってきましたし、手術で髪の毛を剃られたお婆さんも悲しそうでしたし、ぬふふふ♪ そんな呪

いを掛けて上げましょう♪ くふふふ♪」

「ライ、付与も出来るのね、中々の物じゃん、他には……後……なんて物も付与してしまわない♪」

テラは物凄く悪者の顔ですよ♪

「付与？ テラがこの玉に何か付け加えてるみたいでしたから、真似したのですが、うぶぶ、ハゲ♪ 剃られるより生えてこなけりや良いのですね♪ その生殖不能はどんな意味ですか？」

「ん？ それはライがもう少し大きくなつた時に教えてやるつもりだから詳しくは言えないわね、むふふふ♪ 女誑しって言つてたから、悪さが出来なくなる呪いよ♪」

「ん〜つと、じゃあ、何て言つてたかな。びくえる？ 男の人と男の人に恋をして恋人になるヤツにすれば、女の人に悪さが出来ないよね、あつ！ ゴ布林好きにしてしまいましよう♪ 魅了はゴ布林にめっちゃやくちや効くように、ゴ布林限定にしておきましよう♪」

盛り沢山の呪いを付与して、収納しておきました。

お返しする時が楽しみですね♪

階段を上り終え地上に戻ると、ステファニーさんは近くに居たメイドさん呼び止

め、いつでも出発出来るように、シルキーさんに連絡を入れるようお願いをしています、メイドさんを見送りお義父さんの執務室に向かいます。

途中の中庭でテイ、フィーアと、お義母さん達、それに父さん母さんが居たので、簡単に事情を話し一緒に執務室へ、フィーアパパは執務室に居るらしい。

コンコンコン

『誰だ』

「ステファニーです、急ぎ伝えなければならぬ事がございます！」

『入れ』

扉を開け、皆で執務室に入りました。

中にはお義父さん達と家令さんがいて、何やら話をしていましたようです。

「何事だ？ 荷物に何かあったのか？」

「はっ！ コシヨン王子からの贈り物ですが、呪いと魅了の魔法が掛けられておりました」

「なんだと！ 真か！」

テイお義父さんの顔がみるみる険しくなり、怒りの形相に。

「はっ！ さらに、サート辺境伯令嬢のマリグノ嬢が、シヤクテイお嬢様の暗殺依頼を冒険者に出していた事が判明、しかしマリグノ嬢の急なコシヨン王子との接近も何か有

ると愚考します」

「サーント・辺境伯令嬢か、隣国の第二王子との婚約も噂されていたが、コシヨンの奴に心変わり・魅了か！　ぐぬぬぬ」

「公爵よ、人族の魅了などそう簡単には掛からんが、呪いか、心身喪失状態にすれば・
ファイアパパ、テラの推理と同じです。・

「よし、直ぐに王都へ向かう、準備は」

「はっ！　三番隊のシルキー隊長に動いて貰っております、正面に馬車を用意出来てい
るはずですよ」

「私も行くのか？　店は心配するな、今日は開けんからな、久しぶりに王になった坊主の
顔も見よう、くっくっく」

ファイアパパ、悪者の顔ですよ。

僕もテイにあんな贈り物をするコシヨンかケシヨンか知ったことではありませんが、
やつつける気満々ですから、不敬罪なんて知ったことではありません！

「王を坊主呼ばわりか、くふふ、よし兄を問い詰めあのクソ王子を吊し上げてくれる、行
くぞー！」

部屋の皆が執務室を出て、ステファニーさんの先導で足早に正面入口に向かいます。

大きな両開きの扉は全開に開けられており、エントランスの階段下には馬車が三台用

意されていて、シルキーさん達は僕達の到着を整理しながら待っていました。

「ライ、馬車と荷物を頼みますね、馬は転移で連れていけるわ」

「うん、母さん、収納！」

馬さんは急に馬具までもが消えたので、ちよつと驚いたようですが、シルキーさんの部下の方々がなだめて落ち着かせました。

「では、頼めるか」

「はい、最近覚えたやり方で行きますね、元のやり方ですと馬までは厳しいので、では
「ライ！ お母さんもぐるぐるやってるじゃない！」

あはは、本当ですね。

「転移！」

第24話 呪いと魅了

母さんの転移で、王都の別邸に到着しました。

外だったのに急に大きな部屋に視界が変わったのでお子様組は物凄く驚きましたが、他の皆は驚きもせず、大きな窓を開け外に出ました。

父さんは近くに居たお花に水を与えてるメイドさんに、一言、「しばらく滞在する」と言つて僕に馬車を出すよう促します。

「分かりました、ほいっとー」

出した馬車にシルキーさん達は、なれた手つきで馬さん達を誘導し、準備をしてしまいました。一台目は父さん達、二台目は母さん達、三台目に僕達とステファニーさんが乗り込み、シルキーさん達は馬に乗り、王都の街に別邸の門を抜け、馬車は出て行きま

す。
小窓から馬車の外を覗いてみると、シルキーさん達三番隊の皆さんが護衛をしているのが見えます。

初めての街並みを見ていたのですが貴族街ですのでお城まではそんなに掛からないのです。あつと言うまに到着しました。

どこかで待たされるのかなあとか思っていたのですが、流石は王様の弟なだけあり、ずんずん進むのですが、そろそろ付いていく僕達の事を見て、兵士の方が壁際に避けてから話し掛けてきました。

「公爵様、おはようございます、本日はどの様なご用向きでしょうか？」

「おはよう、兄に娘の事で報告にな、ちようど良い、案内を頼む」

「はっ、では前を失礼します」

兵士さんが先導して城の廊下を進み、思っていた物とは違い、質素な扉の前で止まり、ノックをしました。

コンコンコン

『誰だ?』

「公爵様をお連れしました」

『ふむ、弟か? 入れ』

「はっ」

カチャ

兵士さんが扉を開けて、僕達は中にそろそろと入りました。

「では、巡回に戻ります」

兵士さんが扉を閉め、離れて行くカチャカチャ鳴る足音が遠ざかって行きました。

「どうしたディーバ、シャクティの学院でも視察に来たのか？」

少しニヤニヤしながら悪戯っ子の顔で王様がお義父さんに問いかけます。

「それもだが、宰相、少し席を外せ」

チラッと王様とこの執務室に居た人を見た。

宰相様なのです。

「ん？ 居てはまずい話か？」

「うむ、まずは兄さんだけに」

「分かった、宰相、呼ぶまで先ほどの贖金にせがねの件についてそれを使え」

テーブルの上を指差します。

「はっ、では行って参ります、ディーバ公爵様も失礼します」

宰相さんは立っていた横のテーブルから首輪の様な物を取り部屋を出て行く前に一礼。

「贖金のだと？」

「あ！ 完全に忘れてました」

「あつ、ライ、あの事かしら、辺境伯様の所でライが捕まえた冒険者ギルドマスターの事ですわね」

「ん？ そのギルドマスターをシャクティと一緒に捕まえた？ ライと申すのか？」

サーバル男爵も居るようだが」

「はい、お初にお目にかかります、サーバル男爵家三男、ライリール・ドライ・サーバルです、よろしくお願いいいたします、その通りです、人攫いを捕まえた報酬を頂く際に捕まえました」

「ふむ、弟の娘を守りそのギルドマスターを取り押さえたと報告が来ている、良くやってくれた、眠り薬を用いた人攫いのグループを捕まえた報酬の事だな、今、その事で国庫を調べて貰うところだ」

「ライ、お前そんな事までやってたのか？」

あつ、その辺りも完全に忘れてました。

「あはは、はい、報告するのを完全に忘れていました」

テイ以外の皆さんがジト目です。

「ふむ、あの人攫い達は、ラビリンス王国からの者達だが末端に過ぎん、あるダンジョンに連れて行く所までしか奴らは知らされていなかった、目的、標的だが子供と、冒険者、この組み合わせで連れてくるように依頼されていたそうだ」

そんな組み合わせより、ダンジョンを攻略するなら冒険者の方が良さそうなのですが、子供は何に必要なのでしょうが？

「峠手前で冒険者達を攫い、山頂で、シャクテイ、中腹で、ライ君を攫ったそうだ、もし

国境を越えていたとすれば絶望するしか無かったが、それを覆し、シャクティ、それに冒険者達まで救い出した、その流れで贖金が出回っている出所の糸口を掴んだ、その功績は大きいものだ」

「ふむ、贖金か、貨幣を大々的に造れるのは帝国だが、そこまで大事なのか？」
隊長さんも何か個人では無理、そんな事を言っていましたね。

「ああ、各領地の貴族達に調べて貰ったが、結構な量の贖金の発見があったと先ほど届いてな、今から調べるところだった」

「王様、ライリール様に褒美を考えなくてはなりませんな」

宰相様、既にティを助けた事で叙爵の報酬は予定ですが貰ってますよ。

「じい、そうだな、叙爵か？ それとも何か良いものはあるか？」

「兄さん、叙爵は伯爵が決まっているぞ、その事について来たのだが、そうだな順を追って、シャクティとライ、ライリールは婚約した、それに、魔国のノスフェラトウ公爵令嬢フィーア嬢とも婚約だ、だからコシヨンの求婚は受けられん、それと」

「ご無沙汰いたしております師匠、師匠の娘ともこのライと、ふむ魔国との橋渡しが出来るではないか、伯爵か？ ならば叙爵は良いとして、バカ息子がまた何かしでかしたのか？」

「なんだ、覚えていたのか、ふふつ、十歳の時だろ、ちよつと手解きしてやったのは、そ

うだな、コシヨンは呪い付きの贈り物を届けてきやがった。それも、各国で使う事を禁じられた魅了魔法まで付与してな、もう甘いことは言わせんぞ、即刻呼び出し詰問だ」
「ぐつ、あのバカは、ちょうど良い、今夜、辺境伯令嬢マリグノ嬢を連れ夕食会が催される、ま、まさか！」

「その可能性が高いだろうな、隣国の王子との婚約を取り止めするなど、無理やり手を出したか、魅了魔法を使ったか、兄さんあれの損害賠償はとてつもなかっただろう」

「いや、まだ正式に決まっていはいなかったからな、学院での口約束程度ではあるが、それでもあちらには謝罪をする事になった、問いただし、真の事なら継承権はヤツにはやれんな、魅了の魔法は国家間の付き合いで使わないよう取り決めがされている、だから魔法の契約で縛ったのだ、それを使っていたならば私も覆せん、廃嫡、幽閉だな」

「でだ、兄さんその贈り物はライが呪いを払い、魅了魔法もだ、ここに持つてきているが、もう少し広い場所が良いだろうな、十八箱あるらしい」

「分かった、じい、今聞いた事は他言禁止だ、お主は国庫を調べる事にまずは集中してくれ、それと夕食会の兵の配置は最大級に変更だ、奴を取り押さえるなら魔法が使える奴を多めにな、あんな奴でも魔法は中々の物だからな」

「はっ、すぐに近衛兵に伝えておきます」

「私はそうだな、夜の食事会の場に行こうか」

「はっ、では先に失礼します」

宰相様は部屋を出て行きました。

王様が立ち上がりまさかの先導、一番前を歩き部屋から出て廊下を進みます。

流石に広いお城の中をしばらく歩き、やっと大きく細長いテーブルがある食堂にたどり着いたようです。

中に入ると王様は窓には近づくなど人払いをして、食堂の大きな窓からバルコニーに皆で出ると、ここに荷物を出すそうです。

「では出しますね、ほいっとー」

ズズン

十八個の木箱がバルコニーに並びました。

「中身は確認したのかね？」

王様は聞いてきました。そう言えば確認はしてませんね。

「申し訳ありません、中身の確認は出来ていません」

「ふむ、何かあるか分からんな、よし奴に開けさせることにしよう、夕刻まではしばし時間があるが、ノスフェラトウ公爵、ディーバ、サーバル男爵、執務室で今後の事について詰めたのだが良いだろうか？」

三人は、縦に首を振り、王様は僕達の方を見て、お城の中ならどこを見て回っても良

いと言ってくれました。

なので僕達三人はバルコニーから下の庭に下りられる階段から庭に下りて、庭園を散策することにしました。

第25話 立入禁止

庭に下り立ち二階のベランダから見えた小川方面へ向かいます。

その先に池が見えたからです、池と言えぼ。

「ライ、まさか人様の庭でハサミエビ釣りをまたするつもり？」

えー！ な、何で知ってるの、それはフイーアにだって内緒にしていたはずなのに
「な、なんの事かなくあはははは」

「知ってるんだからね、マシューさんと一緒に隣のお家の池からハサミエビとか釣つてくるの見たんだよ、夕食に出ていたし」

「まあ、ハサミエビが釣れますの♪ 美味しいですわよね♪」

「あはは、ここはいるかどうか分からないですから様子見はしたいかなって、お隣さんはマシューが昔から釣りに行っていたから、お隣の池には物凄く沢山いたんだよ、簡単に釣れたし」

魚の頭や、お肉の硬くて食べられない所を餌に、もちろん道具は収納してありますが。
「で、道具は三人分あるの？」

期待の目になっているティと、なぜか既に手を出し渡せて感じのフイーア。

「わ、分かりました、皆の分を用意しますから、じゃあ少しだけ待つてね」
池に到着して、二人に一メートルくらいの釣竿を渡し、仕掛けを作ります。

竿を握る手元の糸巻きに糸を十メートルほど巻き付け、竿先の輪っかに糸を通して、糸の先にはオークの皮を細切りにして長さ五センチの物をくくり付けます。

三人分用意が出来たので、池のまん中にある島へ渡る橋から釣るために二人を先導して、まん中辺りで橋を支える柱ごとに分かれ、各々水を張ったバケツを足元に置き、僕は最初に真下の柱に沿わせる様にオーク皮を沈めていきます。

フィーアは先に糸巻きから糸をある程度出しておいて、出来るだけ遠くに投げています。

ティは竿を前に伸ばしただけの所に、僕と同じように手元の糸巻きからほどいて仕掛けをどんどん下ろしていきます。

「皮が底に着くまで糸を伸ばしていつて、底に着いたら糸が緩むので、皮を浮かさないようにギリギリまで糸を張ると良いよ、ハサミエビが食いつくと糸が動くから、そつと竿を立てるんだ、するとハサミエビは餌を逃がさないためにハサミで餌を挟んで離さないから釣れるんだよ、ほら♪」

説明している途中に僕の仕掛けにハサミエビが食い付いた様です。

ティとフィーアが見守る中、そつと竿を立て糸を手繰り寄せます。

どンドン手繰り寄せ、オーク皮を挟んで離さないハサミエビが水面を離れ橋の上に上がりました。

僕はバケツの上まで持つてゆくとさっさと入れてしまつて、餌を外し、ハサミエビを上げて、完了です。

「ライ凄く大きいですわ♪」

「すごいわね♪ こんなに大きいハサミエビは見たこと無いよ♪」

「うん、僕も大きいからびっくりしちやつた、あははは♪」

三十センチくらいはあるハサミエビは見た事無いくらい大きいです。

「あつ！二人とも糸が動いているよ！ そつと竿を立てるんだ！」

「やつてみます分かつたわ!す！」

二人ともにそつと竿を立て、糸を手で掴み手繰り寄せます。

先にながつてきたのはティの方、これも僕が釣つたハサミエビと変わらない大きさです。

「ティ、バケツの上にまで持つていつて結び目を解ほどいて餌を外してやるんだ！」

「は、はい！」

ティは挟まれないように慎重に蝶々結びしてある紐を解き、ポチャンと音を立て、ハ

サミエビは見事にバケツに入りました。

その横ではフイーアもだいぶ近くまで手繰り寄せてきていました。

「ライ、大きいわ！ バケツの用意をお願いね、行くわよ、そ〜つと」

持ち上げてきたハサミエビは釣った中で一番大きく、ハサミもめちやくちや大きい、橋の上まで来たのでバケツを手に取り、フイーアが持ち上げているハサミエビの下に素早く差し入れ、はみ出しそうになりながらも確保。

これで、三人ともに釣り上げる事が出来ました。

「あなた達すごいわね！ 物凄く大きいじゃない！ どうしようムルムル、悔しいけれどあれは私達では出来ないわね、持ち上げられないわ！」

「あははは♪ テラ達より大きいからね、でもムルムルなら出来そうじゃない？」

ぷるぷる

「そう言えばそうね、糸の代わりに体を伸ばせば」

ぷるぷるぷるぷる

「あははは、ムルムルは嫌そうだね、餌じゃなくて直接ムルムルを挟んじやったら痛そうだし♪」

その後も釣つたり逃げられたりしながら楽しんでいたのですが、お昼の準備が出来たとメイドさん達がお迎えに来てハサミエビ釣りは終了になりました。

なんと夕食に出してくれるとの事で、逃がさないと駄目だと思っていたのですが、メイドさん達がバケツを持っていつてくれました。

「夕食が楽しみになったね、クシヨン？ ケシヨンか、アイツには出さないようにお願いしておこう♪」

「うふふ♪ それは良い考えですわ」

「そうね、そんな悪さする奴には食べさせて上げるもんですか！ オークの皮で良いんじゃない♪」

それ採用です♪

メイドさんに、餌のために切ったオークの皮を渡し、お願いしておきました。

少しだけ困った顔をしましたが、料理長にお願いはしてもらえるようです。

「あなた達、メイドさんを困らせるんじゃないわよ、ごめんなさいね、無理なら無理で良からね」

テラが良い子ちゃんな事を言ってますが、メイドさんは一瞬悪い顔をしたので、メイドさん達にも不評なのかもしれないね。

お昼ごはんが終わり、今度はお城の中を探検です。

「ねえねえ、屋上に行ってみない♪ お城の上から景色を見たら絶対気持ちいいよ♪」

「うんうん、賛成、ティもそれで良いかな？」

「はい♪ 私もそれを言おうとしましたの♪」

全員が賛成なので、上り階段を探し一つひとつ上っては確かめ、うろろろしているとメイドさんに出くわし、屋上への行き方を教えてもらいました。

って言うより、案内してもらいました♪

「こちらから、外に出ると屋上です、普段メイド以外は立入していませんので私がご案内させていただきますね」

「へえー！ そうなのですね！ でもそれなのに良いのですか？」

「はい、この何年か立入禁止でございました。王子様に出るなと命令されましたので、その後は庭にある林の中に洗濯物を干していたのですが、エンペラーイーグルと言う大きな鳥の魔物が巢作りを始めましたので、その邪魔をしないように干す場所を変更する許可を得るためメイド長様が王様にお伺いをして、昨日さくじつですが、屋上に洗濯物を干すお許しを頂きました」

ふくん、何故でしょうね？ ってエンペラーイーグル魔物ですか。

「その魔物をやっつけましょうか？」

悪さをする魔物でしたら、追い払うかやっつけちゃいますよ！

「うふふ、お強いのですね。でも大丈夫でございます、エンペラーイーグルはとても強い

魔物なのですが、こちらから何かをしなければ襲い掛かってきたりはしませんし、卵を孵かえし終われば出て行きます。それに、抜けた羽は魔法の杖の材料として優秀ですから大歓迎なのですよ♪」

「なるほど、良い子の魔物なのですね、その赤ちゃん見てみたいですわね♪」

「あつ、私も見てみたい♪」

「私もですわ♪」

「うふふ、まだまだ先でしょうね、巢が出来てからになりますから、では屋上に出ましよう。私も久しぶりに屋上へ出ますので楽しみです」

そして屋上に出たのですが

「ライ！……ここにあの呪いと同じ禍々しい気配が漂っているわ！ 気を付けなさい！

ライ以外はお城の中に戻って！ 早く！」

ティとフィーアは、テラが叫んだその言葉に反応し、メイドさんの手を引き出てきた扉から中に飛び込みました。

僕は、自身の周りの魔力をぐるぐるさせ嫌な物が入って来ない様にします。

「テラ！ どうすれば良いの！ 見た感じだと、あの真ん中のと、まだ何か所があるね、あれをまた浄化したら良いの！」

「そうよ！ ダメ！ ムルムルが持たないかも！ お願い急いで早く！ 結界！」

「なっ！ 全開です！ ダアアアアアー！」

ムルムルもう少し頑張っつて！

僕は屋上を中心にお城全てに意識を広げ、周囲にある魔力をこの嫌な気持ちにさせる物、それを吸い取る様にイメージしてぐるぐる回し始めた。

第26話 呪い回収

「よし！ 全体を把握しましたよ！ いっけえええー！」

嫌な気配をぐるぐる螺旋状に上空に押し上げて一か所に集めて行く。

最初は薄いねずみ色、徐々に濃くなり直径一メートルほどの球体を形成しだす。

「その調子よ！ ムルムルはなんとか無事よ、お願い魔石をちようだい、もう少して崩壊するところだったわ」

「嘘っ！ えつとえつと！ そうだ！ 魔狼の上位種ガルムの魔石を、ほいつと！ テ

ラ、これをムルムルに！」

「うん！ ガルムの魔石なら十分よ！ ほらムルムル取り込んでんじやえ！」

ぐるぐる回し続ける僕の肩にいるムルムルに三十センチほどの魔石を両手で持ち上げ近付ける。

ムルムルは弱々しく体を伸ばし、魔石を包み込んで行きます。

魔石を包みきり、僕は両手でムルムルごと抱えるようにして、ムルムルの魔力の流れを補助。

「ライ！ その調子で魔力も流し込んであげて！」

「うん！ 嫌な気配を抜いた魔力をムルムルに流し込むよ！ んく、ほいっど!!」

魔力を流し込み始めると、見てる間にガルムの魔力が小さくなって行きます。

僕は収納から同じ物をもう一つ追加。

上空の玉は黒さを増し、真つ黒になってきていますがまだまだ集めきれいていません。

ムルムルに七つ目の魔石を追加した辺りで集まってくる気配が無くなり、玉は三メー

トルほどにまで大きくなり漆黒、艶のある黒い玉が完成した。

「良いわ、収納しちやって、ムルムルももう大丈夫よ」

「分かった、収納！」

収納し終わると、お城中が綺麗になった感覚が分かりました。

「ライ、お疲れ様。そしてありがとうね、ガルムの魔石を七つも持つているなんて助かつ

たわ、ゴブリン、オークなら百個取り込んでもここまで復活するのに相当時間が掛かる

でしょうね」

「はあああ、良かったよムルムル、ごめんね、苦しかったよね」

ぶるぶる

「ところでテラ、あの石像みたいな置物も収納しちゃうの？」

「そうね、既に用をなさなくなっているけどあんな物無い方が良くに決まっているわ、ラ

イ、やっっちゃって」

「うん、収納ー」

屋上に置かれていた石像を回収して周り、屋上からは七つ、それから、あの王子の部屋から九つ回収しようとしたのですが。

「ライよ、それはそのままにしておいてもらおうか、奴が帰って来た時にそれが無ければ警戒もするだろうからな、奴は今宵捕縛し奴隷の首輪を着け全てを吐かせるとしよう」
なぜ王子の部屋に居るかと言うと、僕達は屋上の物を収納した後すぐに王様の執務室に行き、屋上の事を話しました。

屋上、それともう一つ、ある場所から呪いが出ていたのを話し、その場所に行くと王子の部屋だったわけです。

「分かりました、ではこのままです」

そして思い出しました。

「あの、屋上の物はどこにも向かわずあの付近にだけ漂っていたのですが、この部屋の物はどこかに繋がっていたようです、どこにこの呪いは向かっていたのでしょうか？」

「ふむ、方角は分かるか？」

屋上で感じた事を話すと王様は腕を組み難しい顔をしています。

「一つは学院であろうな、他は思い付かんが。」

すると屋上へ案内してくれたメイドさんが、直言の許しを貰い話し始めました。

「二つほど心当たりが、一つはスラム、もう一つは商業街、その他はもしかして、他の領地に」

「ふむ、その二つの方角は合っておるな、他領地か」

スラムと商業街ですか、王様は腕を組み眉間に皺を寄せています。

「王よ、ならばその場には王子の魅了に掛かった者が居るだろうな、まあ、一度魅了に掛かったならば、呪いが無くともしばらくは同じ状態を継続させ、何かの切っ掛けで魅了は解かれるが、早ければ数日中に解かれるだろうな」

おお、そうなのですね。

ならそのまま放っておくのでしょうか？ 僕なら魅了の魔力を抜く事も出来ませんが。

「うむ、猶予は数日か。だがそれは調べなければならんな、奴が何を企んでいたかは夕食時に判明するとして、ライよ、その場に行けば魅了を浄化する事が出来るのだな？」

「はい、出来ると思います、今から行ってきましようか？」

やるなら早い方がよいでしょうし。

あつ！ クシヨン？ ケシヨン？ もうクシヨンで良いか、クシヨンにバレるのが駄

目なら、捕まえてからの方が良いのですよね？

「むう、学院からだが、奴が学院を出た後、いや、馬車に乗り、走り出した後が良いな、

その後は夕食時の事が終わった後、宵闇に紛れ騎士団を連れてスラム、商業街を回って

貰いたいのだが頼めるか？」

頑張っちゃいますよ！ あつ、その前に。

「分かりました、頑張りますね、その前にお城の中をやっちゃいましょうか？ 絶対魅了

魔法を掛けられている人達がいると思いますので」

「うむ、頼めるか？」

よし、ならこれも頼めるかな？

「はい、どなたか案内をお願いしますね、僕はお城の中は詳しくありませんし、一人でうろつくのも時間の無駄ですから」

「そうだな、ディーバ、お前が一番良いと思うのだが、行つてくれるか？」

「ですね、他の貴族に合つて時間を取られる心配は無いしな、騎士を一人か二人付けて貰えれば良いか」

公爵様ですからね、ティパパお義父さん♪ もしかすると抵抗されるかも知れませんが、僕が守りますよ！

「うむ、副団長を付けよう」

まあ、それは付きますよね、あはは。

最初は騎士団、それからメイド、公務のため登城していた貴族達、料理人や馬番、庭師、色々回りました。

酷かったのは、王子の側近の貴族、王子付きのメイド達は全滅。

魅了を解いた途端、怒りのため喚く貴族達、静かに怒りを燃やすメイドさん達、幸いな事に体に手は出されてない事。

女の人に手を出して、怪我とかしたら駄目です、僕でしたら、絶対怪我とかさせないように守りますからね♪ そこだけは評価してあげても良いかも知れませんね。

お義父さんが貴族達には、今夜の事が終わるまでは今まで通りの態度をして貰うよう要請し、この場は納得して貰った。

メイドさん達にもお願いしたのですが、顔を見るのも嫌だと言う者もおり、難航しかけたのですが、数人の者に協力して貰えることになり、他の者は裏方に回って貰い、表には今夜だけ出なくても良い事となりました。

そして、僕は学院に向け、裏方に回ったメイドさんの一人と、騎士三人の少人数で目立たない様に小さめの馬車で、王子のお迎え馬車に続きお城を出発しました。

まだ、授業が行われている時間であり、学院の門をくぐり馬車を乗り入れても、学生は見当たらずお迎えの馬車はいつも通り校舎の正面に停めます。

僕は他の貴族用の駐車場に馬車を止め、しばらく待機になるようです。

「まだ少し時間があるみたいですから、一応魅了の魔力があるかどうか、調べてみますね」

「うむ、ライ殿よろしくお願いします」

騎士の二人は御者台にいますが（執事風に服を着替えています）、残りの騎士一人はいつも通りの騎士服に腰には剣を装備して馬車内にいます。

その横にはメイドさんがいるのですが小窓から王子が居るであろう教室を見て、動きが無いが監視してくれています。

僕は辺りの魔力を感じ取り、ゆつくりとぐるぐるさせ範囲を広げて行きます。

ん、あつ、いるね。

「メイドさんが見ている教室は全滅です」

そう全員が魅了に掛かっていました。

「なんと、王子のクラス全員がですか」

兄さん達は居なさそうですね、あれ？ 隣のクラス 兄さん達ですね、うんうん、

ちゃんとぐるぐるしている様です。

それに気が付いたみたいです♪ あははは。

「いかがなさいましたか？ また何か？」

「いえ、兄達が僕に気付いたようですね、兄達のクラスの先生も含めて約半数が魅了に掛かった状態です」

「そう言えば、この学院に通っていらっしやるとおっしゃっていましたね」

「サーバル男爵家のお二人は有名ですからね。学問、武術、魔法も学院の一位、二位を取り続けていると」

「その様な事を聞いています。僕の自慢の兄さん達です♪」

そして、カーン カーンと鐘が鳴り響き、授業の終わりを告げました。

僕はまだまだ途中だった魅了魔法をさぐりだしいつでも解除出来るようぐるぐるを、ぐるぐると広げておきましょう！

第27話 追い詰め

授業が終わったのですが、誰も出てきませんね？

「誰も出てこないのですが、いつもこんな感じなのですか？」

「はい、王子が一番最初に帰る事になっていまして、それまでは席を立つことすら許されておりません、ほら、王子が出てきましたよ」

メイドさんが小窓から外を監視しながら答えてくれました。

僕も、メイドさんと同じ小窓から覗き見すると、うん、王様と同じ焦げ茶色の巻き毛を手櫛でかき上げ、イケメンさんが顔を見せました。

そこそこ背も高く、スタイルも良さそうに見えます。

まあ、兄さん達には遠く及びませんが、一人馬車に乗り、あちらの御者さんが扉を閉め、御者台に戻り、ゆっくりと馬車が走り出しました。

「その後がラクシユミー王女様です」

「綺麗な方ですね」

金髪ストレートの長めの髪の毛で青い瞳、可愛いより既に綺麗な大人の女性の様な落ち着いた感じがします。

おっと、

そんな事を考えている場合ではありませんね。

「では、やっちゃいますね♪ せうの、ほいっと!」

待っている間に学校全体にまで範囲を広げていましたので、ぐるぐる回して魅了の魔力を集めるだけです。

王子の乗った馬車が学院の外に出たのを確認してから僕は馬車から降りて、集めた魅了を取り敢えず収納しておきます。

そして、馬車に向き直り騎士さんとメイドさんにお伺いを。

「少しだけ時間を貰って良いですか? 兄さん達が出てきますので」

「大丈夫ですよ、時間はまだ余裕がありますので」

騎士さんにはこやかに返事をしてくれました。

「ありがとうございます♪」

僕は、正面の入り口に近付き出てくるのを待ちます。

何台か貴族のお迎え馬車を見送っていると、兄さん達が出てきました。

「シー兄さん! アース兄さん!」

「ライ!」

兄さん達は一気に速度を上げ、僕に向かってきました。

「ふきゅー！」

左右からサンドイッチにされ揉みくちやにされます。

「ぷはっ！ もう！ 無茶苦茶ですよ兄さん♪」

「あははは♪ すまんすまん♪」

「二週間分のライ成分を補給したかったのな、あははは♪」

「まったくもう♪ そうです、父さんと母さんも王都に来ていますよ、今お城に居ます。

それに〜」

「勿体ぶるなよ」

「父さん母さんが来ているのか、王様にでも呼び出されたのかな？」

「なんと！ フィーアも来てます！」

「なに〜！」

「よし、王城に向かうかアース、走ればすぐだ！」

「ああ、フィーア成分を補給したかったからな、シー兄さん、よし♪ ライ行くぞ！」

「ちよつと待って下さい。馬車で来てないのですか？ でしたら僕は馬車で来てますの

で、兄さん達も乗りませんか？」

「馬車馬車で？」

この場で説明は出来ませんので、二人を乗ってきた馬車に引つ張って行きます。

騎士さんをお願いをして、二人も乗せて貰えました。

馬車の中で簡単に説明し終わり、魅了かどうかは分からないが、王子からの変な魔力は受け流していたそうです。

「王子はそんな事をしていたんだな、試合の時はさらに俺達に勝ったって顔で来るんだが、俺は何か妨害する魔法だと思っていて、さらつと受け流してたよ♪ 効かなくて驚いた顔をした時には笑いそうになったけれどな。それからうちのクラスの半数がそんな事に。」

「それにマリグノ嬢か、シー兄さんやっぱり俺が言った様におかしかつたんだよ、俺は絶対シー兄さんに気があるって思っていたからね」

おっと！ 隣国の王子様って聞いていましたが関係ありません♪ それならばその想いは遂げさせてあげたいですね♪ シー兄さん僕に任せておいて下さい♪

「ああ、それは俺も気付いていたが、隣国の事も噂になっていたし、王子に心変わりをしたものとはばかり思っていたからな、そう言うお前こそラクシユミー王女からのお誘いはどうするつもりだ？」

あはは、なんだか中にはいれない雰囲気ですね。

そうそう馬車に乗ってこないのは、兄さん達の修行だそうで、走って学院に通つていくとの事です。

馬車は僕達を乗せて走り出し、お城に向けて進みます。

「なあライ、その肩に乗ってるスライムと、可愛いお人形はなんだ？」

「うんうん♪ 流石ライのお兄さんね♪ 見る目があるわ♪ 私はテラ！ そして私の騎獣ムルムルよ！ よろしくね♪」

元気よくテラがムルムルの上で仁王立ちしながら自己紹介。

「うわっ！ よ、よろしく？」

「うわっ！ 動くし喋るし！ よ、よろしく？」

あはは、人形だと思っていたら動いて喋ると驚くよね。

「僕の旅の仲間になってくれたんだよ。色々助けて貰ったりしてるんだ♪ 仲良くしてね」

「あ、ああ、ライが世話になっているようだな。これからも仲良くしてくれると嬉しい。俺達ともね」

「うん、テラにムルムルだね。ライはまだまだ世間の常識だとか知らないから補助して貰えると嬉しいかな。よろしくお願いします」

「任せておいて！ 私が立派な紳士に育て上げてやるから心配
お、女の子とのつきあ
 い方は早急に教えないとお嫁さんだらけになりかねないからね」

「え？ ライのお嫁さんが決まったの？」

「誰なの！ 僕達の妹になるんだよね♪」

「えへへ、一人目はテイ、シヤクテイ・アン・ブラフマー公爵令嬢、二人目はファイアだ

よ♪」

「二人も！」

「え？ だつてファイアは吸血鬼しか駄目だつて聞いたぞ？」

「公爵令嬢？ いつの間に？ 俺達が王都に出発した後の二週間でながあつたの？」

「実はね。」

旅立ちから、今日までの事を兄さん達に話していると、お城に到着したよう馬車が止まりました。

「なるほど、じゃあ一気に二人の婚約者が出来たのは。」

「そうね、そこをなんとか早く教え込まないと、三人目四人目の犠牲者が出てしまうわね」

「テラ、僕達の力が必要な時は何でも言つて欲しい、僕達もその事を理解したのはライくらい、この学院の初等部に入つてからだつたからね、あはは」

「はあああ、貴族の弊害つてところかしら、普通にメイド達に体を洗わせたりするのだからね、なんとか頑張るわ」

なぜか三人は意気投合して仲良くなったようです。

廊下を歩き、執務室に向かいます。

コンコンコン

『誰だ』

「ライ殿とその兄、シーリール殿とアースリール殿を連れて参りました」

『ふむ、入れ』

カチャ

騎士さんが扉を開けてくれて、僕達は中に入りました。

中には、全員集合で、女性組はお茶とお茶菓子をいただきながらの、お喋り。

男性組は王様と別のソファアールでお話をしていましたようです。

扉を閉め、騎士さんが王様に一連の事を報告しました。

「では、私はこれで失礼します」

「うむ、ご苦労、この後は夕食会の警備に回ってくれるか」

「はっ！」

騎士さんは、一礼をして部屋を出て行きました。

「ライ、ご苦労だったな、シーリールとアースリール、そなた達の学院での活躍私の耳にも届いている。さすが剣聖と賢者の息子達だ、将来が楽しみでならん、ふふふ」

「「ありがとうございます陛下」」

「うむ、今宵の夕食会に出席して行け、我が家の恥を晒すこととなるだろうが、同じ学院、学年の者に見て貰うことも良いだろう」

「良いのですか？ ライだけでなく、この二人まで」

よし、ここは掩護射撃ですよね！

「アース兄さんとお姫様が良い関係になりたそうつて噂を聞きましたし、マリグノ辺境伯令嬢もシー兄さんに気があるつて噂を聞きましたのでくっ付けちゃいませんか？」

僕がそう言った瞬間、僕以外が、お喋りしていた女性組まで、あれ？ あの女の人は誰だろうか？ 可愛い子ですね。

まあ、良いですが喋るのを止め僕に視線を投げ掛けてきますのでこそばゆい感じがします。

「そ、それは真か？」

王様が聞いてきましたので、頷きながら返事をします。

「はい、噂を聞きましたので♪ もしそうなると王様とも親戚、あつ、既にそうなる予定でしたね、あははは♪」

テラが僕の耳を引っ張りながら

「ねえねえ、あのね、ライ、そう言うことは、本人達が頑張る事だと私は思うの、私も応援はするけれど、ほら兄さん達が真っ赤な顔になつてるじゃない、あつちの女の子もだ

けど、って誰?」

「私の娘だ、今の話題のな」

「あちやく、当人がいちやったのね。どうするのよライ」

どうするかって、まずは自己紹介だよね♪

「お姫様なのですわね♪ 初めまして、サーバル男爵家三男のライリールと言います。

アース兄さん共々仲良くして下さいね♪」

「ひゃい! よろしくお願ひいたします。

それとアースリールしゃま! じゅつとおしゆたいしちえましゆた! あわわわ、かみかみになってしまいました、アースリール様、初等部の頃よりずっとお慕いしております!」

やったあ〜! 大成功じゃないですか!

「くつくつくつ、のうディーバ、我が王家はサーバル男爵家に乗っ取られそうだぞ?」

「あはははは♪ やりおるなあ、そう思うだろ劍聖?」

「あはは、その様な事は。」

父さん達は放っておいて、頑張れアース兄さん!

アース兄さんはお姫様に歩みより、片ひぎを突きお姫様の手を取りました。

「俺も、ずっと君の事を見ていたんだ。将来僕の所に来てくれるかな?」

「はい、末永く。どうかお立ち下さい」

アース兄さんは手の甲にキスをして、立ち上がり王さまに向かって宣言をします。

「国王様、俺、私達の婚約をお認め下さいませ」

「お父様、私からもお願いいたします」

「うむ、お前の心は前々から気付いておったからな。学院卒業後にアースリールには叙爵するか、ディーバのブラフマー家に養子として入って貰うつもりであった、アースリール、娘と仲良く頼むぞ」

「はい！ 大切にします！」

ぬふふ、次はシー兄さんですね♪ 頑張っちゃいましょう♪

第28話 罪

アース兄さんをラクシユミー王女様とくっ付けちやう事が出来ましたので、夕食会でシー兄さんとマリグノさんをくっ付けようと意気込み始めて一旦停止、やっぱりテイの暗殺依頼の事をハッキリさせてからですね♪

「ライ、あなたまた何か突拍子もない事を考えてない？ 大丈夫？」

テラが僕の耳たぶを引っ張り小声で話し掛けてきます。

「ちやんと考えていますよ♪ 相手の真相を確認してからにするから心配しなくても大丈夫♪」

「はああ、さっきのお兄さんとお姫様の事はライが何もしなくても上手く行っていたの。あなたのお陰でもなんでもないのでよ、そこは分かっているでしょうね？」

うぐつ、た、確かにそうですね。

「あはは、も、もちろん。慎重に進めるからね、あはは、はは」

「はああ、頼むわよ、先走らないでね、ほら準備が出来たみたいよ」

その声でメイドさんが執務室の中に入ってきており、夕食会の準備が整ったとお迎えに来てくれている事に気が付きました。

「うむ、マリグノ嬢も到着したのかね？」

「はい、別室にて待機中です、お呼びしましょうか？」

「くつくくつ、シーリールよ、先に結果を知りたくは無いか？ それにシャクテイ、ライも、暗殺の件を解決してからのの方が食事の味も良くなるであろう？」

アース兄さん達は見詰めあつてそれどころではなさそうですが、テイ、シー兄さんは僕と同じく縦に首を振っています。

「あははは、よし、この執務室に呼んで貰えるか？」

「はい、ではすぐにお迎えに行つて参ります」

「うむ、早めにな、奴が動き出す前に知つておきたいからな」

メイドさんは一礼をした後部屋を出て行き、十分ほどでマリグノさん連れて戻つてきました。

「ライよ、もう魅了は解けているのだな？」

「そうだね、確認のため直接見て見ましよう。」

「ありや？ 首元に魅了の魔力が あつ！ それはそうですよね、魅了が解かれていたなら来ないと思いますし。」

「つて事は他にも人に直接ではなくて道具を使っている人がいるかもしれません！」

「まだ残ってました。取り除きますねー！」

良く見ると、原因の物はネックレスの様です。

先にぐるぐるさせながら魔力を崩して行き、外に出して丸め、吸い出し切ったところで収納しました。

マリグノさんは、吸い出しかけた途端顔色が変化し、徐々に青くなり、ティを見てガタガタと震えだしました。

吸い取りきり、収納する頃には跪き、もう土下座の様に手を床について頭も床に、ゴン、と音が鳴るほど叩きつけました。

「シャ、シャクティ様、この度は真に申し訳ありませんでした！　どうか！　どうか家には何の罪もございません！　私だけを罰して下さいませー！」

「マリグノ様、お顔を上げて下さいませ、マリグノ様は操られ、心にもない事をさせられた被害者と言う事になりますもの」

「ふむ、すまなかつたな、その辺りの事を詳しく聞かせて貰いたいのだが」
「は、はい、あれは。」

マリグノさんもティと同じ様に贈り物を貰い、その場で開けてしまった事。

そこからはなぜか王子を慕う気持ちになり、付き従っていた事。

王子はティの事を同じ様にして、自身の王位継承権を確実な物にするためだった事。

それが中々上手く行かず、マリグノさんに暗殺者を雇わせた事。
ラクシユミーにも、同じ様にする計画があつた事。

偽金の事も聞いたのですが、そこは分からないとの事。

「王様、僕は人についた魅了を目標に解除したので、こう言つたネックレスなどの魔道具に入っている魔力は、目標から外れていました、ごめんなさい」

僕は頭を下げ謝ります。

「なので、今もお城の中に魅了に掛かつた者がいて、王子に知らせてしまつているかも」
「何！ それは不味いな、ライ、とりあえず今、ここからでも魔道具を解除出来るか？」
「マリグノさんの物を見てからしか気付けなかつたので分かりませんが、やってみますね、ん、ほいっと！」

一気にお城を多い尽くすようにこの部屋から広げて行き、気配を探ります。

「あつ！ あります！ 解除しちゃいます！」

ぐるぐるを加速させ、手元にまとめてしまいます。

「ほいっと！」

量的に少なかつた様ですぐに集まり、そのまま収納しました。

「少ないですが、地下から四個と、この階から三個の魅了魔法の魔力が集まりました！」

王子様のお部屋は？ 確かもつと上にありましたよね？」

王子様の部屋に行くまで何度か階段の上り下りをしましたので、良く分かりません。

「この階は執務の部屋がほとんどです。王子様の部屋は最上階ですので、大丈夫だと思います」

戻ってきていた宰相さんが教えてくれました。

「じい、ライと共に三個あつた魔道具を回収してきて貰えるか?」

「分かりました。ライ様、よろしく願ひいたします」

「はい、すぐに行きましょう! まだ動いていませんので、では王様、行つてきます!」

宰相さんと一緒に執務室を出て集まつた方向を教えながら早足で進みます。

すると、進む方向にある一つの部屋から怒鳴り声が聞こえてきました。

「宰相さん、場所はあの怒鳴り声のする場所間違いなさそうです」

「なるほど、では入りましょう」

コンコンコン

『ぬっ、どなたかね』

「宰相にございます」

『おお! ちょうど良いところへ! どうぞお入り下さい!』

カチャ

「宰相様! 実は! ん? 宰相様、このお子は?」

迎え入れてくれた部屋は執務用の部屋のようで三人の方が作業できるよう三つの机が置かれた部屋でした。

その三人は初めに宰相様を見て、その後に僕を見て問いかけてきました。

「はい、ディーバ公爵様のお嬢様、シャクテイ様の婚約者になられた、サーバル男爵家のライリール様にございます」

「ここは自己紹介ですね、最近自己紹介ばかりしているような気がします、きちんとして下さいね。」

「初めまして。サーバル男爵家三男、ライリール・ドライ・サーバルです。この度シャクテイとの婚約が決まり、王様へご報告に来たところです」

「おお！ それはそれはおめでたい事です。剣聖殿のご子息ですな、ふむ、ライリール殿はまだ赤子の際にお目見えしたきりでございますな。おっと、私も名ばかりの男爵をしております、モーブスと申します、私は剣聖殿には剣を学びに、妻は賢者様に魔法を学びに行っております」

「ほわあ！ では僕の兄弟子様ですね♪ あつ！ そうです、モーブス様！ 王子様から何か買いませんでしたか、今その事でこちらに来たのですか？」

「ぬおっ！ そうでしたか、私も今その事で今から王様へご報告に行こうとしていたのですよ！ おいお前達もネックレスを出すのだ！」

「はっ！」

皆が持つていたのは引きちぎられたネックレスが三つ、数もあつてますし、形もさつき見たマリグノさんの物と同じです。

「間違いないようですね、宰相さん、ここは？」

「はい、ここは商人とのやり取りを受け持つ者達の執務室です、モーブス男爵様、もしや何か禁止されている事をやらされたのですか？」

モーブス男爵さん達は苦虫を噛み潰したような表情で語りだします。

「こちらのネックレスもそうですが、呪術系の魔道具や麻薬も仕入れておりました、取引先の証拠もあります、はああ、これで男爵家も私の代だけで終わりそうです」

「だけって事は新興の男爵家なのですね。せっかく功績を立て、叙爵したのに可哀想です。」

「あの、宰相さん、なんとかありませんか？ 魅了で操られていたのですから」

宰相さんは、にこやかに笑顔を作ります。

「ふふふ。ライリール様はお優しいですね。もちろん王様へ進言いたします、ライ様の兄弟子でもありますからね」

兄弟子のモーブスと残りの二人、それに僕はほっと胸を撫で下ろし、宰相さんの提案で、悪事の証拠をまとめ、すぐに王様の執務室に戻りました。

第29話 透けた心

王様、テイパパ、フィーアパパ、宰相さんとモーブス男爵さん達は、王様の執務机に集まり、モーブス男爵さん達が集め持ってきた資料に目を通しています。

僕はと言えば戻る時にシー兄さんとマリグノさんをどうやってくっ付けていくか、作戦を考えていたのですが。

「残念ねライ、あなたが何かする前にくっついちゃったみたいね、くふふつ」
肩の上で耳たぶを掴んでいるテラの言う通り、そうなのです。

シー兄さんとマリグノさんは、僕が帰ってきたことも気が付いていない様子で、手を取り合い、見つめ合う。

「シーリール様、隣国の王子様の事は何でもありません。お茶会が催もよおされるため、誘われただけなのを周りが親に紹介し婚約だと勘違いをしただけなのです。私は幼少の学院の頃よりシーリール様をお慕いしておりました」

「マリグノ、俺も君の事をずっと気に掛け、いつも、いつまでも一緒にいたいと思っていました。マリグノ、俺の婚約者になってくれますか？」

「はい！ どうか末永くよろしくお願いいたします」

てな具合でくつついちゃったみたいです。

「あはは、まあ、流石兄さん達と言うことですね」

そして、夕食会の会場にみんなで向かうことに、モーブス男爵さん達は行かないのですが、面白い物を準備していただき、それを利用して作戦を立ていざ出陣です！

王様が一番奥の席に座り、左右にお義父さん達、左の列にラクシユミー王女、フィーア、テイ、カリーアさんとお母さん。

向かい側に、アース兄さんシー兄さん、マリグノさん、僕、父さんが座りました。

一応王様の正面は、一つ席が用意されています。

皆が席についてすぐに王子がメイドさんの先導で会場に入ってきました。

「王子様をお連れしました」

「うむ、ご苦労」

メイドさんは軽く頭を下げ出て行きます。

入ってきた王子はメンバーが増え、知らない顔や、兄さん達がいることを怪訝に思ったのか、少し身構えている。

「お待たせしました。父上、予定に無い者達がいるようですが、何事ですか？」

「うむ、ラクシュミーの婚約者が決まったのでちやうど顔見せに良いであろう。相手はサーバル家の次男、アースリールだ。それとサーバル家と所縁ゆかりのある魔国のノスフェラトゥ公爵家にもその事で急遽この夕食会に出席してもらったのだ」

（ほう、相手が男爵家とは降家こつかだな、伯爵家以上なら王位継承も有り得るが、ならばラクシュミーは王位継承から外れる訳か。死なずにすむとは運の良い奴め、くはは）

「おお！ ラクシュミーおめでとう、それは良い事ですな」

「うむ、それからな、ディーバの娘シャクティと、ノスフェラトゥ公爵家のフィーア嬢二人の婚約者にサーバル家三男ライリールが決まった」

（何！ ならばシャクティも殺さなくても王位は私の物で決まりと言う訳か！ いや、奴の弟は殺しておかなければな。くつくつ、シャクティが生きていた事に驚いたが、暗殺もまともに来ぬ奴を雇うとは、マリグノめと思っていたが、なんともまあ、これで全てが上手く行くではないか、サージェント辺境伯の財力目当てのマリグノは既に私の魅了の虜であるしな）

「そうでございませうか、残念な思いもありますが、シャクティ嬢、フィーア嬢、おめでとうございませう」

（なんて、良い日だ、夕食会を催して正解だな、ふふふふ）

「それから」

「何？ まだなにかあるのか？」

「サーバル家長男、シーリールの婚約者にサント辺境伯令嬢、マリグノが正式に決定した」

「なっ！ ど、どういう事ですか！ マリグノは私の婚約者候補ですよ！ 学院卒業と同じくして正式に決まる予定になっていましたよね！」

「どういう事だ、何がどうなった！ シーリールだと！ コイツは魅了も効かぬし、中々の武と魔法の腕前だ、そう簡単には殺ることは出来んぞ！ 何度も刺客を送り何度も苦渋を味あわされたのだ！ それどころか、私になるべき生徒会長や、文武での順位争いでさえままならん！ コイツ達は、呪いを仕掛けて魅了を掛けようともなぜか効かん！ 忌々しい！ 仕方がない、後、財を持っている者を候補に上げるしか無いか」

「ただの候補だったお前から、正式な婚約者とシーリールに決まっただけだ。言いつけ通り手は出していなかった事は褒めてやろう」

「出すわけ無かろう！ そもそも！ いやその様な事をして要らぬ噂が立ち継承権に陰りが出ては敵わんからな、仕方がない、地下牢の奴らでしばらくは我慢だな、くそっ！ 四匹では足りんな、他に誰かを、いや、変な噂は立てられん！」

「はっ、マリグノ、一時期とはいえ、婚約者候補であつたのだ、そなたの幸せを心から祝いましよう」

（しかし、婚約者候補とは言え、王の進言では逆らえんか。ん？ 魅了はどうしたのだ？ ネットクレスは、着いているようだな。王の命令では私の魅了でも威力が半減か。まあ良い、私が玉になった暁には、家臣は全ての者達を、呪い、そして私の魅了で言いなりにしてしまえば良いからな）

「ありがとうございます」

「ライリールよ、頼めるか？」

「はい、王様♪」

僕は、耳から念話の魔道具を外し、テーブルに見えるように置きます。

「ぬっ！ 念話の魔道具だと！」

ここにいる皆が耳から念話の魔道具を外し、まだ料理の来ていないテーブルに置いて行きます。

「なっ！ 皆が魔道具をだと！」

（まずい、まずい、まずい、まずい、まずい、まずいではないか！ 念話と言う事は入ってきてから私は何を考えていた。くそっ！ 何としてでもこの場を乗り越えねば！）

青ざめた顔で、何やら逃げ出そうとしていますね♪ 実はみんなは両耳に魔道具を着けていて、片側を外しただけだったりします♪ この作戦は僕の作戦だったりします♪

（やむを得ん、屋上の呪いを解放してこの部屋に充満させてやる！ 王も最大級に魅了して、傀儡にしてくれるわ！）

王子は懐から黒いネックレスを取り出し、慌てて着けていますね〜♪ あれが呪いを解放させて操作する魔道具の様ですね♪

「あははははは、いやいや参りましたね、私の立てた計画を、何事も無いように進めるつもりでしたが、そうも言つてはいられないようです」

髪をかき上げ、僕たちに向かつて手を伸ばし広げていた手のひらを握りしめ、言い放つ。

「あははははは♪ せいぜい苦しみ、呪われるが良い！ // 深淵より彷徨い出し呪いよ

！ かの者に降り注ぎその身を焦がせ！」 あはははははは♪

握りしめた拳を今度は開き、僕達に何かを送っている様な雰囲気です♪

「あははは、は、は、は？」

（な、なぜだ！ なぜ誰も苦しまないのだ！）

「あく、クシヨンさん、呪いは来ないですよ」

「私はコシヨンだ！ それに不敬である！ 様を忘れておるぞー！」

何と！ コシヨンでしたか！ まあ、このまま煽り煽るのがテンプレでしたよね？

王子様が失脚する物のテンプレ♪

「あはは、クシヨンさん、その魔道具は役立たずの様ですぬ〜♪ あははは」

「不敬だぞ！ 私はクシヨンだ！ なぜだ！ なぜ集めた呪いが来ない！ これでは私の王になる計画が！ 失敗すれば全て我が身に降り注ぐ危険を冒させたのに！」

（くそっ！ これでは地下の四匹は死んでしまったであろうが、くそっ！ くそっ！ 後はもうこの手で奴らを殺すしかない！）

「ほいっどー！」

王子が持っていた、魔力を帯びた魔道具の魔力をバラバラにして、使えなくしてあげました。

「くらえ！ ダークバインドー！」

魔道具の指輪を掲げ、右手を上にした姿勢になる。

「クシヨンさん、中々カッコ良いポーズですね♪ でも、クシヨンさん、お腹がぶよぶよだったのですね、首も見えない三重顎ですし、脂ぎってますし、三倍ぐらいに大きくなりましたね？ 身長は低くなりました？」

「はへ？ ど、どうして？」

食堂の大きな窓に自身の姿が映っているのを見て困惑しています。

「なぜだ！ 幻惑と偽装の魔道具が壊れたのか！」

（まずい、まずい、まずい、まずい！ これでは暗殺と、盗賊ギルドの称号が見えてしま

うではないか！ 密輸出入の不法奴隸や麻薬についての称号も！ 後これだけは知られてはいけない物が)

へえ、そんな悪い事までしていたのですね。

王様が、奴隸の首輪を嵌めるでもなく、詰問するまでもなく、勝手に喋ってくれるなんて、くふふっ。

「チツ！ くそっ！ 貴様ら覚えておれ！」

ん？ 何をするのでしょうか？

第30話 王子様

「マリグノ！ 王を殺せ！ 命令だ！」

マリグノさんを指差し命令しましたが。

「なぜ動かない？ 俺の魅了が。」

「ねえ、クシヨンさん、もう捕まえちゃうね♪ ほいっと！」

マリグノさんを指差したまま固まってしまいましたので、魔力を一気にぐるぐるさせ、魔力欠乏に。

ボキッ

腕を伸ばしたまま、前に倒れたので床に腕をつき、指差していた腕から骨でも折れたのか、嫌な音が鳴り響き、ズズンとクシヨンは気絶し倒れてしまいました。

「うわっ、大丈夫かな？ えっと、王様、終わりましたが捕縛もしてしまいますか？」

「ぬう、しかし、我が息子とはいえ、何とだらしない体を、見るかげもないではないか、別人と見紛うほどだ。今までの姿は全て偽りだったと言うことか。ライよ、すまぬが縛り上げ地下牢に幽閉だな。それと地下にいる四人の確認を頼めるか？」

「はい、地下の四人の方も一応この目で確かめてきますね。騎士さんお手伝いお願いします」

ます」

僕が縛り上げている間に、騎士さんは応援を呼ぶのと台車を手配し、四人がかりで台車に引つ張り上げ、地下に向かいます。

しかし階段ではさらに応援を呼び、八人で何とか下りきり、地下牢へ。

王族が悪さをした時に幽閉する場所があり、そこにひとまず投獄しておくそうです。

そして、じめじめとした地下通路を進み、気配のある部屋に着きました。

扉の食事を入れる小窓から中を覗くと、物凄く臭い匂いがして、鼻を摘まみながら目をこらすと若い男性が四人、裸の状態で、足は鎖に繋がれていました。

ネックレスはしていないようですね。

ん？ 幻惑偽装していたクシオンを小さくしてガリガリさんにしたような人がいますよ？

「ねえ、テラ、あの人ってもしかして」

「何よ、あんまり近づきたくないのだけど、んんん神眼！ あちやあち、王子様じゃない、騎士さん、中に本物の王子様がいるみたいよ」

僕の首の後ろに避難していたテラがしぶしぶ肩に戻ってきて覗きながらそんな事を

言いました。

あはは、マジですか。

「何！　すぐに開けるぞ！　鍵はどれだ！　チイ！」

騎士さんは沢山の鍵束から一本ずつ確かめています。

「ねえテラ、じゃあアイツは何者なの？」

「それは気になるわね。うん、アイツのところに連れていってくれる？」

テラがそう言うので、少し通路を戻りさつきアイツを放り込んだ所まで戻ります。

「えっと、ここも食事を入れるところしか無いんだね」

少し腰を屈め、テラも一緒に中を覗けるように。

「んんん！　あはは、コイツの名前はクシヨンだって、ライ、正解していたわね。はああ、

確かに魅了の魔法が使える様だけど、盗賊ギルドと暗殺ギルド、王都のギルドマスター

の息子よ」

「あはは、それは、煽るためにわざと間違えていたのに名前あつてたじゃん。それに、盗

賊と暗殺ですか、その様な夫婦から産まれたのなら悪い事もやつちやうのですね。王子

様と入れ替わりなんてね、あはは」

数分後、鍵がやっと見つかり扉を開けることが出来たのですが、あまりにも不衛生な
 牢内、僕は遠慮しておきたいと思つたのですが、なんとムルムルがオークの魔石を二個
 で綺麗にしてくれました。

「王子様！……無事ですか！」

騎士さん達は王子様に駆け寄り足枷も外します。

王子様達は衰弱していて、今は喋る元気もなさそうです。

残りの三人も、テラに見てもらった結果、学院で行方不明になっている者達だと分かりました。

王子様達を地下牢から救いだし、地上に急ぎますが、クシオンを地下に下ろす数倍の早さで上げてしまったのは、この人達が痩せ細っていたからかもしれない。

治療のため、医務室に急ぐ王子様達をおんぶする四人以外の者が王様に知らせるために先行します。

やっと執務室がある階に到着し、王子様達をベッドに寝かせ、今夜は医務室長を中心に一晩中回復を続けるそうです。

そして医務室に王様達、夕食会にいた全員がやってきました。

「クシオンが地下牢にいたとは本当か！」

先頭は王様で、扉が凄いい勢いで壁に当たり、大きな音を立てます。

「はい、王様、今はクシオンさんも、他の三人も衰弱していてベッドにいますから」

「ああ、す、すまん、諦めておつたが、よもや奴が偽者、魔道具を使い入れ代わっていたとは、それに学友と聞いたのだから？」

そこにシー兄さんがベッドを見て、答えます。

「間違いなさそうですね、今思えば、私も元々学院にいた奴ですね学生ではないのですが、出入りしていた者によく似ている気がします」

そうですね。

王様はコシヨン王子のベッドに近付き顔を見て、大きく頷く。

「少し痩せて頬が酷く瘦けているが間違いない、私の息子だ」

「父さん、ご心配をお掛けしました。奴は、学院に魔道具を売りに来ていた奴は。」

「あの、ぶくぶく太った奴は捕まえ捜獄してあるから心配するな」

「あはは、良かったです。身体は汚されましたが、私は男ですので、ご心配はありませぬ。学友達ですが、父さん、親御さんに連絡を。心配されているはずですから」

「分かった。早急に連絡を入れよう」

王様は騎士に向かい三人の家族のもとに行き、この場に来て貰えるよう手配しました。

騎士さんは二名一組で馬車を使い、お迎えに行くそうです。

でも、コシヨン王子、汚されたのはムルムルが綺麗にしたから大丈夫ですよ♪

「ライ、多分あなたは勘違いしていると思うけど、汚れているの意味が違うからね、クシヨンの称号には男色の称号があったから」

「？」

「はああ、分からなければそのまま良いわ。ライはそのまま素直に育てて上げるから、私に任せておきなさいね」

よく分かりませんが、テラが色々教えてくれるそうです。

そして、お腹も空いてきたのですが、ハサミエビの事を思いつつ、コシヨン王子と王様の話は中々終わらなさそうですし、兄さん達も、三人の事を知っていたみたいで、ベッドに近付き、なにかお話をしていますし、そんな事を考えながら一時間くらい、医務室にあった水瓶の水を使いぐるぐるをティに教えて行きます。

「初めは全然動かないけれど、ある時魔力が見えてくるわよ、見えてきたらそこからはやり甲斐もあるし、私もそこからは早かったよね♪」

フィーアも一緒に教えてくれます。

「うん、フィーアは土からだったよね、あの頃は土遊びしながらだったもんね」

「そうそう、それから水を動かせるようになって、風、火は危ないから中々近くに行けなかったものね」

「僕はマシューにお願いして内緒の修行したよ」

「まあ♪ では私はどういたしましょう、日中は学院ですので、風でしょうか？」

ティはほつぺに人差し指を添え、首をかしげ考えています。

「うん、僕は風からだつたよ。風なら何も道具は要らないしね」
うんうんとフィーアも頷きながら同意してくれます。

「それから何をしていてもぐるぐるを続けるのが上達の秘訣よ。あの頃ライにしつこく言われたものね、あははは♪」

「まあ♪ フィーアが、羨ましいです、私も幼少の時にお逢いしたかったですわ」

「はああ、その素直さが古代魔法を覚えるコツなのかなあ。でも、古きものも、使えるものがなく、新たに使える者が現れたのなら嬉しいわね♪ ほらムルムルも頑張りなさいね♪」

ぶるぶる

肩の上でもムルムルが奮闘していますね。

そんな時、親御さん達が到着したとメイドさんが知らせに來てくれました。

そのお知らせメイドさんが退室して、ほんの少し後に騎士さんに先導され、医務室に六人の親御さんがやって來ましたので、僕たちは食堂に移動し、主催者のいない夕食会が始まりました。

「うん♪ ハサミエビ凄く美味しいね♪」

それはもうプリっぷりで、料理人さんの作ったソースも相あまって、マシユーの物とはまた違う美味しさです♪

「はい♪ 沢山釣り上げて正解でしたわ♪」

上品にナイフとフォークで一口大に切り分け、ソースを絡めて口に運びます。

この綺麗な食べ方は、流石お嬢様という事ですな♪

「うんうん♪ マッシューさんの好きだったけど、これは素晴らしい出来ね♪ 釣りでだから、泥臭さがあるかと思っただけけど、上手く処理されているわね♪」

流石お義父さんが料理人なだけあって、言うことが違いますな♪

滞りなく夕食会も終わり、僕は騎士さんと一緒に商人街へ向かい、ぐるぐるをやり。

その後に、奴隷の首輪を嵌められたクシヨンから聞き出した、スラムにある盗賊ギルドと、暗殺ギルドに向かいます。

商人街へ入った所で、僕は馬車の速度を落として貰い、ぐるぐるを始めました。

第31話 捕縛

お城を騎士さん達と出て、魅了魔法を解くためのぐるぐるを済ませた後、商人街の中でも王都で一、二を争う大きな商会の近くに来ました。

どうやって？ 馬車では音が五月蠅いため歩きで騎士さん達は革鎧に変え金属音を立たせないようにして足音も立てないように慎重に移動してきました。

何か所かあった少人数の所にも騎士さんを残し、さらに移動。

ここが商人街の中で一番魅了魔法があつた場所で、魅了を解き少しザワザワとしているのが聞こえます。

少ない人数の、商会にも別動隊が動いていますので、今頃は踏み込んでいるはずですから、僕達はこの商会に集中します。

商会の入口から騎士さん達が門番さんと話をして大扉を開いて貰い中に入ります。

その際、一応抜け穴もコシヨンから聞き出していて、そちらにも人員は配置済みなので逃げる事はまず無理です。

案内してくれている門番さんに続き、お屋敷の中に入ったのですが、入って直ぐのホールに沢山の人達が集まり騒然となっていました。

「静まって下さい！」

騎士さんの声に騒いでいた人達が一斉にこちらを向き、騎士さん達の姿を見て、止まりました。

僕は小声でテラにお願いをします。

「じゃあテラ、一緒にお願ひ出来るかな？ 僕だと詳しいところまで分からないから」

「任せておきなさい！ 神眼 んん〜！」

「ありがとう♪ 鑑定！」

テラも僕も、騎士さん達の後ろから、こっそり称号を見て行きます。

集まっていた十数名の内、二人の盗賊ギルド員がいましたので、騎士さんの手をつんつんして、小声で伝えると、隊長さんが商人さん達と話をしている内に素早く皆に伝達して行動を起こすタイミングを図ります。

「あの、僕がああ寝間着の二人を」

「ライ、五人よ、偽装している奴が三人、あの壁際に並んでいる三人も盗賊よ」

流石テラ師匠♪

「分かった、あの三人だね、皆さん僕がその五人を動けなくしますので拘束をお願いしますね」

騎士さん達は半信半疑な顔ですが、頷いてくれました。

「行きますよー！」

一気に魔力を回して上げると、中央に来て隊長の話聞いていた二人は崩れ落ち、壁際の三人も、壁に背中を擦らせながらその場に座り込むように気絶しました。

それを見た商人達は驚きこそしましたが、隊長さんが説明をして、寝間着の二人は商人さん達も鑑定をして納得し、壁際の三人も、装備していた腕輪を外すと偽装が外れ、称号が見えるようになりました。

「ここにいる人以外はどこにいるか分かりますか？」

「いいえ、今日はこの屋敷の持ち主、その壁際の三人に集められたのです」

ふくん、この三人は偉い人だったのですね。

「ここにいる者達で商人ギルドの役職持ちは全員揃っております」

商人ギルドの集まりがあつたのですね。

「その、この寝間着で倒れている者は小さな商会で最近売り上げを伸ばしてきたあの三人の弟子と聞いていたのですが、この会では出席者ではありませんでした。この屋敷に住み込みしていたと聞いております」

着崩れた寝間着ですもん、お話しする格好ではありませんし、他の人は清潔な白のシャツに高そうではあるけれど派手派手では無い服を着ていますものね。

「後は個々の商会にいるとは思いますが、王都から出ている者はどこにいるかまでは」

「ふむ、外は仕方がないか、よし話はここに残る者と進めて貰うとして、拘束を！」

騎士さん達は素早く五人を拘束をし終え、外の馬車に放り込んでしまいました。

次は魅了の魔力を崩した魔道具を回収して貰い、この屋敷の捜査のため騎士を十名残り残りはスラムに向かいます。

ここには盗賊、暗殺のギルドがあるので、お城から騎士さんと衛兵さん達も追加で包囲、外に抜ける通りを全て封鎖、抜け道にも騎士さん達を配置してしまいます。

「ねえ、さっきの偽装の魔道具を全部使えなくしてからなら、ライでもギルド員を探れるわよね？」

「そっか！ 夜だしみんなには寝て貰うつもりをしていたけど、それなら分かっちゃうよ♪ じゃあやっちゃうね、ほいっと！」

お城の敷地よりは小さいので、十分スラム全体の気配を探れます。

「うんうん、沢山あるね。あっ！ 地下にもいっぱいある！ 騎士さん、偽装の魔道具と併せて気絶させちゃいますから、お願いしますね♪」

「はい、ライリール様、いつでも踏み込めます」

「ありがとうございます、せくの、ほいっと！」

ぐるぐるを一気に加速させて行き、偽装の魔道具を持っていた者はこのまま続けて、スラム全体を鑑定して行きます。

「ん、偽装の魔道具をしていない方はギルド員ではない方ばかりですね」

「あら、そうなの？　じゃあそろそろ、騎士さん達を動かす頃合いじゃない？」

「そうだね、隊長さん、そろそろお願い出来ますか？」

「分かりました。よし！　伝達！　踏み込むぞ！」

小さな声ですが、騎士の皆さんは頷き、走り出しました。

僕は隊長さんと一緒に、古ぼけた掘っ立て小屋に入り、入口以外に一つしか扉がない部屋に入り、奥の戸を開け進むと、ぽっかりと開けた中庭に出ることが出来ました。

中庭にあるのは屋根付きの井戸だけですが、その井戸の裏側に地下に下りる階段が井戸の蓋で隠されており、そこが地下への入口のようです。

隊長さんと僕が最初に入り、その後を次々と騎士さんが地下に下りて行きます。

僕と隊長さんが一緒に、大人二人が並んで歩ける幅がある階段を下りて行き、突き当たりのドアは魔法の鍵なので僕がぐるぐるして開けちゃいます。

「任せて下さい、ん、ほいっと！」

カチャ

軽い音を立て鍵が開きましたので、中に進みました。

「はわああ！　広いし明るいですね！」

そう、中は所々太い柱はありますが、一辺が二十メートルほどある広場で、その壁に

はいくつもの扉があつて、部屋があるみたいです。

「ああ、これ程広い地下を作り、拠点にしていたのですか。これは見付からないはずですよ」

隊長さんも半ば呆れながら、部屋全体を見渡しています。

「では扉の鍵は僕が開けていきますね」

端から順にぐるぐるさせて鍵を開けていきます。

そして扉が無い所の奥はさらに通路がありそこにも扉が並んでいました。

それから地道に鍵を開けて行き、やっと最後の鍵を開け終わりました。

「よし、完了！」

だと思つたのですが、途中の部屋のさらに奥にまだ通路がありました。

それから三か所の通路が発見され、もう、眠くて仕方がない、「なっ！モイヒエルメ

ルダー伯爵様がいたぞ！」「奥様もだ！」「なんて事だ！二人ともギルマスじゃないか

！」「拘束して、他の者とは別の馬車へ！」^{もうろう}朦朧として目も半分閉じた状態で開けきり、

外に戻つて誰も乗つていない馬車で寝させて貰いました。

おやすみなさい。

ガタガタガタガタ

「ふあああ、ん？」

捕縛が終わつて帰るところでしょうか」

馬車の座席に寝ていたのですが、あははは、またムルムルとテラは胸に乗ってますね。そつと持ち上げ体を起こして、膝に乗せ、この事が終わった後どこに行こうか考えます。

「誰この人達？ あつ！ この馬車も捕まえる用の馬車だったのですね。あはは」
見てみると、ギルドマスターさん達ですね（笑）、クシヨンのパパとママですか。それに子爵なのね。

ん、この二人は痩せているのに、なぜクシヨンはあそこまでブクブクしちやつたのでしょうか？

つて、関係ないですわね。これから夏だから海！ を見たいところですね。確か東の森を抜ければ海があるはずでしたね。

確かエルフさん達が住む森とは正反対で、魔物の宝庫と本に書いてありました。うんうん、危険かも知れませんが、でも海は必要ですね。

でも、中々お城に到着しませんね？ 起きてから結構時間が経ったように思うのですが？

「まあ、ぐるぐるさせて時間潰しを再開しましょう。ほいっとー！」

馬車内から外へ広げて行くと。

あれ？ 馬車の周辺にいる方達が偽装の魔道具を持っているのですが？ どうして

でしょう？

僕は、ムルムルとテラを座席に下ろし、馬車の天井の開口部をそくつと梯子を登り開け、外を覗くと走る何台もの馬車を囲むように馬さんに乗って、真夜中の王都を結構な速度で進む、盗賊と暗殺ギルドの集団でした。

ありやく、騎士さん達がいないので捕まえた人達を奪われちゃった様ですね、あはは。門に向かって、王都を出るつもりそうですね、正面に篝火かがりびで浮き上がって見える門がみえますし。んん、もう少しで王都の門前ですね。

でも、逃がしませんよ♪ 偽装の魔道具と、あわせてぐるぐるですね（笑）♪
ほいっと！

この集団に付いて移動していて、偽装の魔道具を持っている人達全員の魔力を加速させて気絶させて行きます。

次々に落馬する盗賊と暗殺ギルドの面々、乗り主がいなくなった馬さんは速度が落ち、馬車の速度も、人が全力疾走しているくらいから、ジョギング、徒歩、といった具合に徐々にゆっくりになり、門前で止まりました。

門前では兵士達が、戦々恐々として、身構えていましたが二十メートルくらい手前で止まったので、ホツとした顔が見受けられました。

僕は馬車の屋根に上り、門番さんに声をかけました。

「門番さん、お城の騎士さんに連絡して下さい、この方達は盗賊と暗殺ギルドの人達なので♪。」

門番さん達は、鑑定をした人がいるのか口々に、「本当に盗賊だぞ!」「こつちは暗殺ギルドだ!」「すぐに王城に走れ!」「こいつらを縛り上げるぞ!」「応援を呼べ!」と門前は真夜中だと言うのに、物凄く賑やかになってしまいました。

王城に馬を走らせる者、気絶した者を縛り上げる者、僕の方に来る者。

「すまないが、君がこの者達を気絶させたのかい?」

「はい♪ 今夜、騎士さん達とこの人達を捕まえる作戦をしていました」

そう言うと、訝しげな顔ですが、騎士さん達が来ればすぐ分かるのにね、あはは。

騎士さん達が来たのは三十分ほど経ってからでした。

第32話 捕縛完了

「ライリール様！ 申し訳ありません！」

駆け付けた隊長さんは物凄い勢いで、跪き、頭を下げます。

「え？ え？ た、隊長さんどうしたのですか！ 頭をあげて下さい！ 立ち上がって下さい！」

隊長さんは何度目かのお願いで立ち上がってくれました。

「えっと、どうしたのですか？」

「実は……」

隊長さんの話だと、地下から運び出した盗賊、暗殺ギルドの者達を表の馬車に詰め込み、両ギルド、この国でのグランドマスター（モイヒエルメルダー伯爵夫妻）と、人数が多いため、オリに入れていた商人の屋敷にいたギルドマスター二人とサブマスター三人を特別車両、頑丈で、外から見えない様になっている僕が乗って寝ていた馬車に乗せ換えたそうです。

僕はツノガエルで作った全天候対応の黒いローブを布団のかわりに被っていたので気付かれなかったようです（物凄く暖かい）。

全ての者を馬車に乗せた後、資料などを集めている間に、両ギルド員と思われる者達が表の見張りを眠り薬で眠らせ、馬車を捕まえた全てのギルド員ごと奪われたと言うことです。

人攫いの奴達と同じような手口ですね。

でも、殺しではなく、眠らせるだけで済ませたのは、無駄な時間を省くためだと思われるようですが、数名が馬車に寝ているところを引かれ、それでも骨折ですんだそうです。悲痛な表情で嘆いて^{なげ}いる事がありありと窺^うえます。

「じゃあ、怪我した方もいらつしやいますが、あの場、商人街とスラム以外にいた者達も捕まえられたのですから良かったですよ。」

「はい、それは良かったのですが、ライリール様は眠り薬を吸い込まなかったのですか？」

ん？

「いえ、吸い込んだでしょうね。でも睡眠薬は僕には効かなかっただけですよ。前に人攫いにあつた時もあれ？ 僕って、人攫いに二回も攫われたのですね。あ、あは、あははは。」

騎士さんは哀れむような顔をしましたがその後、グランドマスター達を別の馬車に乗せかえると言ったのですが、僕が出ておきますよ。

そして門番さんの詰所にお邪魔して、僕はまだまだ日が昇らない時間でしたので寝させて貰うことにしました。

そう言えば、ぐるぐるで気配を感知してませんでしたしね。いっぱい騎士さんがいましたから。

僕が次に目が覚めたのは、お城のベッドの上でした。

誰かが運んで下さったのですね、あはは。また、全然気付きませんでしたねそれにムルムルとテラも、僕の胸の上にあります。

そつと持ち上げ起き上がると部屋の全貌が良く見えます。隣にもベッドがある二人部屋のようですが、誰もいません。

窓の外はまだ低い位置のようで、部屋の中に日の光が沢山射し込んでいます。

「ライ、このドタバタも終わりそうだし、今後の事なんだけど」

テラが起きたようです。ムルムルの上で上半身を起こして、ハンカチの布団はまだ半分くらいまで掛かったままです。

ムルムルも起きたのか、魔石を回し始めました。くふふ。

そうだ、今度テラ用の腹巻きを作りましょう♪ トレント柄が良いかな？ おつと、

今後の事だね。

「うん、海に行ってみたいかな。東の森を抜けるのが一番近いかなって思ってるけど、テラはどこか行きたい場所あるの？」

テラはなぜか驚いたような顔をしています。

「ぷっ！ あははははははは♪ 良いわよ♪ 魔物だらけの森を抜けて海が見たいからって！ あははははははは♪」

魔石を回すムルムルの上でお腹を抱えて、じたばたしながら笑うテラ。良いじゃん！
「あひいゝ、あく、笑わせて貰ったわ♪ 行きましよう♪ 私もちよつとあの森に行きたかったから」

「うん♪ テラが付いてきてくれるかちよつと心配だったんだ、何か用事があるなら手伝うからね♪ ムルムルも一緒に来てくれる？」

「あつたり前じゃない♪ ムルムルは私の騎獣なんだもの！」

ぶるぶる

うんうん、ムルムルも来てくれるみたいです。

「くふふっ♪ 楽しみだね、よし！ お腹空いたけど、ムルムル、何食べる？」

ぶるぶる

「ふんふん、オークが良いそうよ」

ぶっぶるぶる

「ゴブリン？」

ぶるぶる

「なっ！ 何よ！ ムルムルはゴブリンが良いの！ オークで良いじゃない！」

ぶるぶる

「あはは、オークとゴブリン二匹食べれるよね？ ほいっと！」

ズズン

僕はオークとゴブリンを床が汚れないように、ツノガエルで作ったシートを床に敷き、二匹を出して、ムルムルを上に乗せてあげました。

「ムルムル、下のツノガエルシートは食べないでね♪」

ぶるぶる

いつも通り、みによくんと伸び広がって、二匹を包み込み、あっという間に消えてしまいました。

「うんうん、ムルムルって凄いいね。自分の何倍もある物をあっという間に食べれて、大きさは変わらないんだもの、ムルムルが、収納を持っているって言われても、疑わずに納得しちゃうよ」

「そうね、そこがスライムの不思議なところでもあるわ。その辺にいるスライムより知能は高そうだから良いわね♪ 本当に古代魔法が使えるスライムになれるかも知れな

いわ！ 頑張るのよムルムル！」
 ぷるぷる

ムルムルの朝ごはんが終わってすぐにメイドさんがやって来て、僕も朝ごはんがいた
 だけるようです。

食堂は、昨日夕食会があつた場所で、美味しくいただきました。

「ライ、父さん達は公爵領に寄つてから領地に帰るが、お前はどうするんだ？」

この場には、王様、ティパパ、フィーアパパ、カリーアお義母さん、父さん母さん、シー
 兄さん、アース兄さん、マリグノさん、ラクシユミーさん、そしてティとフィーアが揃
 い、テーブルの花を頭に抜き差ししているテラの事は見ないようにして、僕の返答を
 待っています。

僕は今朝、決まったことを言うだけです。

「僕は、東に行きます。そして東の森を抜けて海を見に行こうと思つています」

それを聞いたみんなは、少し呆れたような顔をしました。

良いじゃん！ 海だよ！ 青くて、しょっぱいらしいんだよ！

「そうなのですね、私も付いて行きたいのですが、学院に行かねばならないので
 「そんなに寂しそうな顔をしないでね。ちゃんと帰ってきますから」

ティは笑顔になり頷いてくれました。

「あはは、やっぱりね。ライは昔から色んな所に行きたがってたもんね〜」
「何でも経験してみたいからね」

あきれ顔のフィーア。

「そうか、魔物には、いや、魔物にも気を付けるんだぞライ」

「あはは、そうですね父さん、この短期間で二回も人攫いに合いましたからね」

「ふはははは♪ そのお陰でシャクティは救われたのだからな。だが昨晩も二度目の人攫いの後にも騎士達に部屋に運ばれても気付かないと、心配しておったぞ」

「ちよつ！ お義父さん、そ、それちよつとは気にしているのですから！ でもティと出逢えたのは僕の中でも凄く良かった事です♪」

「ふふふ。ではライよ、すぐに旅立つのか？」

「はい♪ 王様」

「ならば、ライが捕まえた奴らの刑執行を見て行くが良い。その場でお主の事も発表する事に」

「ええ〜、見ていくのは良いですけど〜」

王様に被せるように声が出てしまいました。

「なんだ？ 王子とその学友を救い、王都の盗賊ギルドと暗殺ギルドを壊滅させたのだぞ。それもモイヒエルメルダー伯爵が絡んでいようとはな。ここだけの話だが、奴は偽

金に絡んでいた」

「おお！ ではそちらも解決の糸口を掴んだのですね！ でも、気ままな旅がしたいのです。だから有名になっちゃうと動き辛くなりそうで」

またみんなが呆れたような顔を。

だつて前世で読んでいた小説にも書いてあつたような気がしますし！

「ふむ。それは一理あるな。分かつた今はこの胸にしまつておこう。叙爵で文句を言うであろう貴族を黙らせるためにな、ふははは♪」

そして、王都の盗賊ギルド、暗殺ギルドのギルドマスター及び、サブマスター。

そして王子になりすましていた、クシヨンの処刑が、明日、王都の街壁の外に作られた大罪人を公開処刑する場で、執り行われる事になりました。

もちろんグランドマスターも処刑となるのですが、貴族のため秘密裏に全ての情報を吐かせ、精査した後に処刑をやるらしいです。

フィーア達が公爵領に帰り、ちゃんと元氣に行つてきますと挨拶もしましたよ。

テイや兄さん達にも挨拶をして来ました。

そして処刑が決まった今日の夜、処刑者が既に処刑場の舞台に繋がれ、篝火に照らされています。

そして近隣の街から集まる者達を、お昼寝をして僕は街壁の上から気配を探っています。

した。

相当広く範囲を広げたまま、探ると集まりが百人は超え、二百人近くになりました。薄いお月さまは夜を照らすには薄すぎて、時間もお月さまが中天ちゆうてんを既に越えていきます。

そろそろお昼寝したのに、目がしばしばしてきて、まだ全部集まらないのかなあと思っている、動き出しました。

「動き出しましたよ！ まだ後続も来ているようですので、引き付けるだけ引き付けてからやつちやいますので、騎士の皆さんはロープと荷台の用意をお願いします！」

「はっ！」

小さく鋭く返事をしてくれた騎士さん、衛兵さん達。

僕の立っている真下の大門前に待機して、大通りに音も立てないようにして静かに待機しています。

後、五十メートルほどのところまで近付いてきた者達は、篝火にはまだ照らされておらず、普通の人にはまだ確認は出来てません。

「後、五十メートルです！ 後続も、そろそろ打ち止めですから、先頭の人が篝火に照らされたところで気絶させて行きます！」

そしてその時が訪れました。

第33話 さてさて東に向かいました

なぜ、こんな事になつてゐるのかと言うと、盜賊ギルド、暗殺ギルドの者達は、僕達が商人の屋敷に乗り込んだ時には既に、二段構えで仲間の奪還を計画していたようで、ギルドマスターの屋敷とスラムが落ちた時は、一段目、睡眠薬の作戦。

二段目は、真夜中の処刑場襲撃で奪還を企てたとの事です。

計画をしていたのは、モイスチャー、違いますね。モイヒエ、ヒエ。伯爵夫妻がテイマーの部下を使い近隣の街に飛ばしていたそうです。

逃げれば良かったのにも思いましたが、まさか、地下、あそこが見付かり、特別製の魔法の鍵が開けられるとは思つてもいなかたそうです。

万が一、踏み込む事が出来ても、伯爵がいた一番奥部屋からは隠し扉があり、貴族街の自身の屋敷に戻る通路もあつたので、大丈夫と思つていたとの事です。

考え事をしてゐる最中もぐるぐるを続け、舞台にギリギリまで駆け寄つた者が倒れ、後続も次々と倒れていきます。

そろそろ半分くらいになつたところで、後続の者が気付き出しました。

「気付かれました！ 一気に行きますのでお願いします！」

「おおお！」

今度は声を殺さず、お腹の底から出した声は、たぶん外にも聞こえたでしょう。
ギギギギ

きしむ音が鳴り響き、大門が開かれていきます。

「一番隊から三番隊まで進め！」

「おお！」

開き出したところから、列を崩さず走り出ていきます。

「四番隊から五番隊左翼！ 六番隊から七番隊右翼！ 進め！」

「おお！」

「おお！」

「八番隊から十番隊、衛兵達は、王都内を警戒！」

「おお！」

「おお！」

次々と、王都の外に展開されて行く騎士さん達。

王都内からの動きを警戒する騎士さん達と衛兵さん達。

僕は外の奴達が終わり、今度は内向きに王都に向けて、偽装の魔道具を探し当て、魔力を崩し用をなさないようにしていきます。

「五十個ほど偽装の魔道具がありました！ 続けてやっちゃいますよ！ ほいっと！」
 門前にしか光の魔道具が無い大通りに蹄の音が鳴り響き、地鳴りを伴い近付いてき
 ました。

そして先頭が見えた頃には、馬さんに騎乗していた者も気絶し落馬、自身で走り込んできた者もその場で崩れ落ち、屋根づたいに近付いていた者は路地を飛び越える事も出来ず落下、運が良いものは屋上部分で崩れ落ちていきますので、よしよしですよね。

あつ！ 屋上の人達は場所を教えないと駄目ですね。あはは。

「屋上部分に倒れている人がいますので、その人達の捕縛も頼めますか？ それとも僕が行きましょうか？」

「いえ、ライリール様、場所を言っていただければ私共が捕縛して参ります」

「では、いる場所に光の玉、ライトボールを浮かべますね、ほいっと！」

ぬふふふ♪ 夜と昼間は布団に潜って練習した光の玉のデビューですよ！

シューー！ といくつもの光の玉が数か所に飛んでいき、倒れた者の上で静止させておきます。

「あの光の玉の下にいますのでお願いしますね」

「分かりました。衛兵！ 屋上に浮かぶ光の玉の下に倒れている者を捕縛せよ！」

「はっ！」

衛兵さん達は用意してあつた梯子を持ち、屋根の上に浮かぶ光の玉に向かい次々と縛縛して行きます。

「後は。」

「僕は出来るだけ範囲を広げ気配を探っていきます。」

「よしよし、これで終わりのようです」

「本当ですか！ あはははは♪ 素晴らしい事です。誰も犠牲にならず、向かつてきた者を全て捕縛。ライリール様ありがとうございました。」

「いえいえ♪ 僕は僕の出来る事をしただけです。皆さんがいなければ僕一人では出来ませんでしたから♪」

そう言つて、横の木箱の上にいるムルムルと爆睡中のテラを持ち上げテラが落ちないように気を付けないとですね。

「では、僕はここでテントを張つて夜営しておきますから、何かあれば起こしてくださいね」

「はい。何かあれば、無いようにします。くふふ」

テラ、笑われちゃいましたよ。

「あはは。おやすみなさい」

テントを取り出し素早く張り、ぐそぐそと潜り込む頃には、眠気も出てきて布団を出

ター並びにサブマスターの処刑と、私が理事をしている学院の人攫い事件の首謀者の処刑を行う！」

王様がそう言い終わった後、ざわめきが再開し、うねる波のように広がり辺りを包みます。

さてさて、見ていけって言われましたが、僕の出番は終わったようですし、こそつと東門に移動して旅立ちましょう♪

「ライ、あなた悪巧みは出来ないわね。はああ、良いことよね？ ムルムルもそう思うよね？」

ぶるぶる

「ライ、出発するんでしょ？」

「うん♪ だって僕の出番は終わったし、早く次のテンプレ、もとい、冒険！ 海だよ♪ まだまだ朝だし今なら東行きの馬車を捕まえられるだろうしね」

「くふふふ、王様に見ていけって言われても見ていかないなんて、良いわ！ 行きましよう！」

ぶるぶる

僕は街壁の上を見張りの兵士さんの後ろを通り抜け、東に向かいます。

東門のところで、階段を使い下に。

大門前に集まる中で、東の森手前まで行く馬車を見付けました。

「なんだ坊主、辺境伯領に行くのか？ なら乗っていきな銀貨二枚だ」

「はい♪ 道中よろしくお願ひします♪」

出門の順番を待ち、とろとろ進む馬車の上で僕は、どんなテンプレが待っているのかドキドキワクワクしながら、馬車は王都を出発して行きました。

小高い丘を登る馬車から眼下に処刑場が見えて

「あつー！」

「どうしたのライ？」

「呪いをクシヨンにお返しするの忘れてました♪ 今からでも良いですよね♪」

僕は呪いを固めた漆黒の大玉を風で空中に浮かべ、気配を探りクシヨンを見付けました。

「ぬふふふ♪ 見付けましたよ♪」

「この距離で一人の気配を見付けられるの！」

「いっけー！」

漆黒の大玉は、風により加速しながら一直線に処刑場に飛んで行きます。

一緒に乗っていたお客さん達は驚きの顔をして、声も出ません。

そして舞台の上空で止まると、大玉のそこが抜けたように舞台に吸い込まれるように

見えなくなりました。

「な！ なんだこれは！ 王様を守れ！」

「底が崩れだしたぞ！ 離れるんだ！」

「おい！ 私と一緒に逃がしてくれ！ 呪いだ！ 呪いが私の元に来てしまうのではないか！」

「クシヨン！ 避けるのよ！」

「おい！ 誰か息子を！」

「い、いやだ、いやだ！ く、来るなあああー！」

「いやー！」

「クシヨン！」

「うががが、気持ち悪ぎもぢわるい、い痛だい、ぐる苦じい、だ立つてられないい」

「呪いだと！ 皆！ もつと離れよ！ クシヨンだけで内封出来るか分からんぞ！」

「あがががが」

ドサツ

「よしよし♪ ちゃんと称号に呪いって出たね♪」

「あははは。この距離で鑑定も出来ちゃうのね。んん神眼、ライ、隣にいたクシヨンの両親にも呪いが掛かつてるわよ。くふふふ、一人では許容範囲を超えちゃったようね」

「そうなんだ、うんうんなら後は王様達に任せておけば良いよね♪」

「あははは♪ そうね♪」

ぶるぶる

馬車は坂を登りきり、舞台も見えなくなった頃、驚いて放心していた他のお客さんにちよびつと怒られましたが、まっすぐ続く街道を、馬車は順調に進みました。

く第一章 完く

第二章

第34話 新たな旅路の始まり

ガタガタと緩い坂道を進んで、平坦な道に変わりました。

立て札があり、『これよりヴァルト辺境伯領』と書かれています。

「やつと辺境伯領に入ったね、十日掛かるんだもの、お尻が潰れちゃうかと思つたよ」

「仕方ないわよ、一日に頑張つても五十キロくらいでしょ、そんなものよ。それ以上だと馬が可哀想よ」

薄紅色の花を頭に刺したテラがそんな事を。

うん、それはそうだね。

辺境伯領に入ったけれど、目的の街までは二日掛かるそうだし、それから馬車を乗り継ぐか、徒歩で森に向かうしかありません。

最初に乗り合わせたお客さん達も、入れ替わり、最初から乗っているのは僕だけになりました。

「あははは、坊主。そんな時は尻の下に厚手のローブかマントを敷いとけばマシになるぞ」

一つ手前の町から乗ってきた親子連れのおじさんが話し掛けてきました。

「おお！　そうですよ！　僕は何でそんな簡単な事に思い至らなかつたのでしょうか！
ありがとうございます♪　では早速」

収納からお布団にしたりする、ツノガエルのローブを出してお尻サイズに折り畳んで
座席に置き腰を下ろします。

「うんうん♪　これは良いです♪　おじさんありがとうございます♪」

「あははは♪　俺達は次の町で下りるからそこまで必要ないが、あるのと無いのでは全然違うからな」

「うふふ♪　十日って聞きました、さぞお尻が傷んだでしょうね」

「だう〜」

赤ちやんにまで笑われた気がします。

「はい、それはもうペったんこになってましたよ♪　でもこれで快適な旅になります♪」
次の町でその親子が下りて行き、冒険者パーティーの男女二名ずつの四人が新たなお客さんのようです。

馬車が走り出して門をくぐる時、僕はこの馬車の一番御者台に近いところに座っていたので、前を向き座席に膝立ちで進む方を向いていました。

ガタン

おほほほっ！ 轍わだちにはまり少し浮き上がりましたよ♪

「おいガキ！ 危ねえから座つとけ！ 落ちてもしんねえぞ！」

「はへ？ すいません。ガタガタが楽しくてつい、あはは」

僕は膝立ちをやめ、正座にしました。

「だから、それも危ねえだろ！ 床に足を付けてねえと踏ん張りが効かねえから」

ガタンガタン

うほほほ♪ 二回弾みました♪

「つたく、しゃくねえくなあく、ほら、ちゃんと座つとけ」

四人パーティーのお兄さんの一人が、僕の脇の下に手を入れ持ち上げる。

そして、座席に座らせられました。

「あく、足が付かないのか」

ぶく。

え？ 僕つて短足なの！ だ、大丈夫！ これから伸びるはず！

「ありがとうございます。この辺りは轍が多くてですね、ぴよんぴよん跳ねるので面白かったです。あはは」

「あつ！ それあんたも駆け出しの頃やつてたじゃない」

やつぱり面白いですもんね。

「なっ!」

「あははは♪ それで落っこちてたよね♪」

あははは♪ 落ちちゃいましたか。

「おお! 思い出した! 落ちてた落ちてた。あははは♪」

「お、お前ら! 忘れろ! じゃなくて、この子が聞いているじゃないか! ち、違うんだ

ぞ、危ないのは本当だからな!」

「はい♪ お兄さんの言うとおりちゃんと座っておきます」

お兄さんは気まずそうな顔をしながらそっぽを向いて黙ってしまいました。

でも、前の景色も見たいので仕方がなく首と上半身だけひねって、進行方向を見て楽しみます。

しばらく行くと、街道の途中で数台馬車が止まり、人を乗せたり降ろしているようです。

僕が乗る馬車も漏れずに止まり、四人パーティーのお兄さん達が降りるようです。

「ダンジョンがあるよね。ライはダンジョンには興味はないの?」

「ダンジョン! ありますあります! ここにダンジョンがあるのですか!」

思わず降りかけていたお兄さん達を呼び止めてしまいました。

「ん? あるぞ。入ったこと無いのか?」

「はい、薬草採取の依頼ばかり受けてましたし、Eランクですから」

「ああ、Dランクからだもんな。なくに、EからDなんてすぐだ、ゴブリンの討伐依頼をやつてりやその内上がるつてもんだ。お前も頑張れ！」

「はい♪ 頑張ります！」

なくんて、こつそり入る事だつて出来るのですよ！ その方法は
新ダンジョンを見
付ける事です！

お兄さん達を見送りながら、ダンジョンの気配を覚えておきます。

「くふふふ。この感じがダンジョンですね♪ これは異世界でダンジョンマスターになるお話にあつた、ダンジョンのテンプレの足掛かりに出来るかも知れませんね♪」

「何？ ダンジョンマスターになりたいの？」

「ん？ あれ？ 口に出てた？」

あちやく、たまにやっちゃいますね。

「うん。しつかり出てたわよ」

「ん、なつてもならなくても良いのだけど、ダンジョンマスターになつたらダンジョンから出れなくなつたりする？」

「それはないわね。ダンジョンに魔力の供給を続けなといけなから、出るに出れないだけだから。出ちゃうとそのダンジョンは成長しなくなるからね」

「崩れちゃったりはしないの?」

崩れちゃうなら流石になるのは嫌だなあ。

つてかマスターにならなくてもダンジョンのテンプレは出きるのか!

「それはないわ、攻略に来た冒険者達から勝手に魔力を貰っちゃうから」

冒険者達が入れば、魔力の供給は問題ないのか。

「ん、まあ、その時になったら考えるよ。僕がやりたいのは、どこかのパー・・・やっぱり内緒♪」

テラと話をしていたら、ガクンと衝撃があつた後、馬車は乗せている人数が減り、軽快に進み始めました。

夕方、少し日が山に隠れ出した時、今夜の夜営地に到着しました。

寝床などを準備しないと駄目なので、馬車の近くにテントを出し、焚き火の用意をして行きます。

「ライ、下に降ろして。花を交換したいの」

「は〜い♪ 今度はどの花にするの?」

ムルムルごと降ろされたテラは、もう決めていたのか、頭の花を引き抜き、ぽいっと捨てると、ムルムルから飛び降りて、足元の、小さな二葉を引き抜き頭に刺す。

「うんうん♪ この子にするわ一晚でいけないから明日まではこの子よ♪」

よく分からないですが、決まったようです。

「ムルムル、今夜は何食べるの？ またゴブリンが良いのかな？」

ぷるぷる

「オークだって言ってるわよ」

ぷっぷるぷる

「あははは♪ 二匹だすよ♪ ほいっと！」

ズンズンと二匹出してテラによし登られている途中のムルムルを、テラが乗るのを手助けしながら持ち上げ、上に乗せてあげる。

いつものように、みによくんと広がり二匹を包んだと思ったら、あつという間に吸収されて元の大きさに戻りました。

「よし♪ 少し枝を補充しないと駄目だよな。おじさん！ たぎぎ薪を拾いに行つてきますね

♪

「ああ。気を付けて行くんだぞ」

御者のおじさんにこの場を離れる事を知らせておいて、森に踏み込みます。

「やっぱり、入つてすぐのところはみんなが拾っちゃうから全然無いね」

「そのようね。あつ！ あそこにあるわよ！」

「おつ！ テラありがとう。一本だけ大きいし寝る前にしちゃおう♪」

少しずつ奥に行きながら薪拾いを続け、明日の分くらいまで集まった時変な気配が森の奥からしました。

今にも消えそうな気配と、もう一つ。

「テラ、何かやられそうになつてる。見に行くよ!」

そう言い僕は、肩のムルムルとテラを手に乗せ振り落とさないようにしてから一気に加速して消えそうな気配に向かいます。

木々をすすると避けながら走り抜け、下草が邪魔になつてきたので枝に飛び上がり、さらに枝から枝へ飛び、枝づたいに奥を目指します。

森が開けた場所に大きな熊。

「真つ赤な毛皮! ライ! キリンググベアーよ!」

「任せて! ぐるぐるしちゃうから! ほいっと!」

後ろ足で立ち上がり、振り下ろそうとしていた手が、僕達の声に気付き一瞬止まった。一気に魔力を回しながら、漏れ出た魔力を倒れている子に回復するように変化させ流し込んでおく。

「気絶までは無理!」

僕は父さんに貰った刀を抜き、こちらを向いたキリンググベアーの喉元に突き立てた。

「グボッ!」

「いっけー!!」

グリッ!

刀をひねりながら熊の胸を前蹴り。

ドンッ!

「倒れる! せい!」

ドンドンッ!

足踏みするように蹴りながら刀を抜き、後方宙返りをして地面に着地。

その間も魔力をぐるぐるさせるのは止めない。

「大きいから流石にしぶといね。なら、これだ! ほいっと!」

ウインドニードルを、眉間に五発。

プシユシユ

キリングベアーはよろけたと思ったら、ビクンッと大きく痙攣した後、仰向けにゆっ

くり倒れていききました。

「ひゅく、やるわねライ」

「あははは、流石に強かったよ。おっと、収納! ムルムル血を掃除しておいてくれる?

違う魔物が来るかもしれないから。そっちが終わったらこっちもお願いね」

ぶるぶる

テラを肩に残してムルムルはみによく伸びて、キリンググベアーが流した血を掃除しに行ってくれた。

そして僕は

「今治すからかじらないでね♪ んん、ほいっと！」

辺りの魔力も使い回復魔法をかけて行く。

大きな傷口に手を添え。

第35話 ナインテール

「この子はナインテールね。キリンググベアーごときにやられる奴では無いのだけど、神眼んん、あらあら♪ ライ、お腹に赤ちゃんがいるわよ♪」

「おお♪ そう言えばお腹がぼんぼこぼんだね♪ よしよし♪ お母さんなんだね、もう少しで治るから」

だから、上半身だけ怪我してたのね。

胸より後ろは一つも怪我してないし、よしよし。

首を撫でると、こちらに向けていた大きな三十センチくらいある目を細め、気持ち良さそうにしてくれます。

「よし一番大きな傷はふさがったよ。あつ！ 足も折れてるじゃん！ ごめん、体を横に寝かせてくれる？ ムルムル、お母さんの血を綺麗にしてくれるかな？」

ぶるぶる

戻ってきていたムルムルに掃除を頼んで、ゆっくり倒れて体の下になっていた手をさら晒してくれる。

「ん、どうやって真っ直ぐに引つ張ろうかな。ん、土いじりでやってみよう」

お母さんの折れた右手の下から土を盛り上げ、ちょうど手首と肘の間だから肘の方を固定して、僕が引つ張ればいけるかな？

「お母さん、ちよつと引つ張つて痛いかもだけど我慢してね」

手首にロープをくくりつけ、綱引きの要領で引つ張る。

「行くよ、せいの！」

キャン！

「回復！」

僕の肩からテラが指示をくれる。

「まだ駄目！ もう少し引つ張りなさい！ 私が良いつて言うまで引つ張るのよ！ 神

眼！」

「分かった！ お母さん我慢だよ！ せいの！」

今度は呻き声も出さないで、我慢してくれています。

「少し左に！ そのままだと曲がつてくつつかいちゃうから！ そのままそのまま、そこ

！」

「回復！」

十分ほど経つただろうか、痛そうに強く閉じられた目蓋が緩み、目を開ける。

「もう良いわよライ。ちゃんと引っ付いたわよ♪」

「ふい、良かったあ♪ お母さんまだ痛いところある？」

お母さんは首を持ち上げ、確認しているようです。

「私の見立てでは大丈夫ですよ」

きゅん

「あははは♪ 良さそうだね。あつ！ 夕焼けだよ！ 早く戻らないとおじさん心配しちゃう！ お母さんじゃあね。頑張つて元気な子供を産んでね♪ ムルムルおいで」

ムルムルを手のひらに乗せ、肩のテラもムルムルと一緒に。

「ダツシユで行くよ、せゝの！」

シユン！

『なんとも優しい子ですね。うふふ。あつ！ 産まれそうです。巣に戻りましょう』

「おじさんただいま、遅くなっちゃった」

「近くには無かったのだから？ ここは沢山の馬車が止まる所だからな」

「そうなのですよ、でも明日の分まで拾えたので。さあ暗くなる前に夕ごはんにしちゃいましょう♪」

僕はおじさんにオークのお肉を提供して夕ごはんを済ませ、テントに潜り込みまし

た。

「テラ、これ作つただけかどうか？」

「なに？」

僕は指輪のサイズの腹巻きをテラに見せる。

「腹巻き？」

「うん♪ トレント柄にしてみたんだ。どうか？」

テラは僕の手から腹巻きを手に取り、柄を見てうんうんと頷いています。

「上手いじゃない♪ これを私にくれるの？」

「うん♪ テラつてたまにハンカチの布団を蹴っ飛ばしてる時があるから、お腹が冷えちゃわないようにね♪」

（うふふ。私はそんな事にはならないんだけどね）

「ありがたく貰っておくわ♪ うんしよ♪」

テラは頭から腹巻きを着けるタイプのようです。

僕は足から派なのです。

つてか上手く着れましたが、足首までの髪の毛が腹巻きの中なのでちよつとおかしな事になってます。

「うんうん♪ ぴったりよ♪ ありがとうライ」

「どういたしまして♪ ムルムルにはムルムル用の布団つて言うより座布団を作ってみ
 たんだ、ほらこれだよ♪」

手のひらサイズの正方形で、僕と同じゴブリン村長柄です。

ふるふる！

ムルムルは座布団の上に移動して、ふるふる震えて嬉しそうです♪

「良いわね。ライとお揃いの柄ね♪ くふふふ。そんなに揺れてると寝れないじゃない
 ♪」

「良かった。気に入ってくれたみたいで、よし、寝ようか」

僕も布団の上に寝転がり、薄いシーツを、体にかけます。

「じゃあおやすみ」

翌朝もスツキリ目覚め、今日は峠越えです。休憩を沢山取るので早めの出発です。

昨日言われた事を守って、座席に座りながら前を覗いて行きます。

僕に乗る馬車は、ちょうど車列の真ん中あたりなので、一番安全とされる位置だそう
 で、たまに前方の馬車を狙うゴブリンがいたり、最後尾を狙う魔狼が追いかけてきたり
 するそうですが、真ん中はいったってのんびり。

岩山の裂け目を通るような場所に差し掛かり、両側が切り立った崖、上までは三十

メートルくらいかなあ？

裂け目を越えると今度は山登りです。

ここの九十九折つづらおりを越えた所が今日の夜営地です。真つ直ぐな道なら昼過ぎには着くのですが、これだけぐねぐねしていたらどうしても時間がかかってしまいます。

それなのに馬車の速度が落ち、ついには止まってしまいました。

「お客さん達、前で何かあったみたいだ。ちよつくら待つ事になるかもしれない」

「ほお、何があったのか見てきましたようか？」

ちよつど暇をもて余しかけてましたので♪

「あははは♪ そりや助かるが良いのかい？」

「はい♪ では行つてきますね♪」

馬車を飛び降り、前方に走り出しました。

前の馬車との間は余裕を持つて開けていきますので、そこそこ距離を走らないと行けません。

二つの曲がり角を曲がつたあたりで先頭を走っていた馬車が見え、車輪が外れ横倒しになり、道をふさいでいるのが見えました。

「あちやう、馬車が転けちやつてますね。あはは」

「馬は大丈夫かしら。それに乗っていた人達も」

「そうだね近くまで行ってみよう」

そばまで行くと、荷物が散乱しているところを見るとこの馬車は貨物用の馬車のようで、車軸が真途中で折れているのが分かりました。

散乱した荷物を、近くの人達で拾い集めています。結構な量がありますからそう簡単には終わらないですね。

あつ！

「あの、荷物を避けるの手伝っても良いですか？」

部下でしょうか、商人のようですから、お弟子さんになるのかな？ その方達に指示をしながら避け終わった物が壊れていないか確認して、それが終わればまた馬車に走り、荷物を避けに行っていた人に声をかけました。

「おお！ それはありがたいです！ 皆様の通行の妨げになっておりますので、いち早く通れる様にしたいものですから」

「はい♪ ではやっちゃいますね♪ 収納です！ ほいっと！」

倒れた馬車の方を見て、ちょうど馬車からみんなが離れていたの、馬車以外を全部収納しました。

「へ？」

商人さんは目の玉がこぼれ落ちそうなくらい目を見開き、口を閉じるのを忘れたよう

に開いたまま止まっちゃいました。

「あははは♪ では、ここに出しますね。ほいっと！」

街道の端に、通行出来るように荷物を出していき、ついでに、馬さんが外され、何も無くなった馬車を収納してそれも元のように、こけてないように出しました。

「あつ、そうです、土いじりで馬車の後ろを持ち上げれば直しやすいですよ、ほいっと！」

馬車の後部を土でしたから少しずつ持上げ、良さそうところで止めました。

「では商人のおじさん、僕はこれで♪」

乗り合い馬車に戻ろうとしたのですが、商人さんに呼び止められました。

「あ！ お待ち下さい！ 本当に、本当に凄く助かりました！ なんとお礼を言えば良いか」

商人さんは僕の手を両手でつかみブンブンふります。あはは、大袈裟です。

「いえいえ、困った時はお互い様ですよ。気にしないで下さいね。後、あの馬車を持上げている柱は、簡単に壊せるようになってますから」

大人の人が蹴ればポキッと折れるはずです。

「見たところ冒険者とお見受けしますが、今は依頼の途中ですか？」

「いえ、乗り合い馬車での旅です。東の森に行きますから」

「おお♪ では私の依頼を請けてくれませんか？ 私共は東の森に一番近い村にも行くのですよ。ですから護衛依頼を頼みたいのです」

んん、どうしましょうか。

「ライ、請けても良いんじゃない。どうせそこまでは行き方も考えてなかったでしょ？」
うっ、それはそうですね。うん！

「僕で良ければ護衛のお仕事を請けさせて貰います。報酬は、僕Eランクですから、安くても大丈夫ですよ♪ その代わり、その村までお願いします♪」

「あははは♪ 自身からお安くと言う冒険者初めて見ました。今の横倒しの事故で怪我をした者がおりますので助かります。報酬は同じだけ出させて貰いますのでよろしくお願いいたします」

おお、怪我した人が、よし！

「その方はどこにいますか？ 僕で良ければ回復出来ると思うので」
「な、なんと！ 本当ですか！ お願いします。こちらです！」

商人さんに付いていくと、革鎧を脱がされ、背中を強く打ち付けられたのか赤紫に変色した背中をあらわにしたごっついおじさんが座り込んでいました。

第36話 護衛依頼を請けましょう♪

「うわっ！ おじさん大丈夫ですか！ テラ、具合はどんな感じなのか見てくれる！」
おじさんに走りより、テラにしつかり見て貰おうと走りよります。

「良いわよ！ 神眼 んんく！ ほっ、大丈夫よ。少しヒビが入っているだけだから、ライ！
やっっておしまい！」

「うん！ おじさん、今から治すからね。回復！ ほいっと！」
「んぐっ！」

ちよつと痛りましたが、優しくおじさんの背中に手を添え、辺りから魔力をぐるぐる集めておじさんに掛けていきます。

鬱血うっけつしていた背中が徐々に肌色に戻って来ました。

「良いわよ、ヒビはちゃんと引っ付いたわ。後はその青くなつたところだけね」
まわりに人が集まっていました。取り敢えず怪我は治りそうです。

そして五分もかからず鬱血の部分が小さくなり点になって、消えました。

「はい♪ 治りましたよ、他に痛いところありますか？」

「なんと！ 痛みが完全に無くなったぞ！ 坊主、助かった、あの痛みのまま馬車に乗

るのは辛かったからな、感謝するありがとうな」

怪我してたおじさんが、こちらを振り向きお礼を言ってくれました。

ってか、それよりドワーフさんでした。

髭もじゃで、立ち上がると僕より少し背が高いくらいですが、それはもう腕もですが全体的にゴツゴツマツチョさんです。

「あははは♪ いえいえ、骨にヒビが入っていてあの振動は辛いですからね♪ よし、商人さん、僕は乗り合い馬車のおじさんに護衛のお仕事を請けたって言うてから戻ってきますね」

振り向くと、驚きで固まったのは、治ってましたが、なにやらぶつぶつ言ってますね。
 「ふむ、回復魔法が使えるのですね、素晴らしい！ おっと、そ、そうですね、こちらの方に報告しておかないといけません。お待ちしながら馬車の修理を進めておきます」

「はい、ではのちほど」

街道脇に馬車を寄せたので、後続の馬車が早速動きだし、追い抜いて行ってます。

乗っていた乗り合い馬車も、こちらに進んで来ていたので、思ったより早く合流する事が出来ました。

「飛び乗るからこつちおいで。行くよ、ほいっとー！」

馬車の後ろに回り込み、ぴよんと荷台に飛び乗りました。

一緒に乗っていたお客さんに、ペコリとお辞儀しながら、荷台を前に進み、御者台にいるおじさんに、降りる事を話さないかね。

「おじさんただいま」

「あははは♪ 元気だな。前は何かあつたんだ？」

「商人さんの馬車で、馬車の車軸が折れて横倒しになってました。荷物を街道脇によせて、馬車もよせて、そして道を開けました」

「ほう、それにしても早かったな。てつきりここで夜営になるかと心配していたが」

「あははは、それは馬さん達が辛いですね、お水も調達が難しいですから。回避出来て良かったです。それでですね、その馬車の商人さんに護衛のお仕事を貰ったのでこの乗り合い馬車を降りることになりました」

「なんじゃ王都から一緒だったから寂しいな。まあ、明日に到着の所まで来ているからな。一日別れが早まっただけだが、だか料金は貰っておるし構わないのか？」

「その馬車なら僕が行きたいって言つてました東の森の手前まで行くそうなので、ちょうど良いかなって。残りの料金はおじさんのお小遣いにして下さい♪」

「うむ、それは良かったじゃないか、護衛の報酬も貰えるわけだ。ライ君、王都から十二日ほどだが楽しかったぞ。あははは♪ 子供にお小遣いを貰うとはな、到着した時の楽

しみに酒でも飲む事にするよ」

「はい♪ 僕も楽しくさせて貰いました。では、ここで降りますね」

ちようど、倒れた馬車の所まで来たので飛び降り、おじさんに手をふります。

おじさんも軽く手を上げ、「またな！」と声を掛けて遠ざかっていきました。

その後、馬車の修理が終わって、荷物を積み、走り出した時にはもうお昼も過ぎて、今日中には夜営予定地には到着出来ない時間でしたので、この九十九折の登り唯一の夜営地に向かう事にしました。

そこは元々徒歩の旅人や、この馬車のように今日中に山頂の夜営地にたどり着けない者達で、湧き水がごんごんと湧き出る泉があり、馬さんも僕達も安心です。

途中何人が徒歩の人達を追い抜き、ようやく今夜の夜営地に到着しました。

僕達はテントを準備する者と、焚き火で夕ごはんの準備をする者に分かれます。

僕は自分のテントを張った後、夕ごはんのお手伝いに。

暗くなる前にはテントが馬車を囲むように夜営準備が整い、僕が提供したオーク肉のシチューも完成しました。

「ライ君、シチューのオーク肉を提供していただいたようですね。ありがとうございませす」

「商人さん。沢山あつて僕だけでは食べきれませんので気にしないで下さい。それより

僕は見張りをしなくて良いと聞いたのですが良いのかな？」

ドワーフのおじさんが、『今日のお礼だ』と言ってくれたのですが、申し訳ない気持ちもあります。

それにこの護衛依頼を請けている者達の護衛と兼ねて、試験官として付いてきているそうです。

聞くとビックリ、何と護衛依頼を請けていないとCランクにアップ出来ない決まりがあるそうです。

なのでやり方を教えながら今回の依頼を請けているんだとか。

そしてそのランクアップのための護衛を請けているのが、異世界転移してきた男性、僕よりは年上で兄さん達よりは年下かな？ その人達の五人組だそうです。

「はい。あの方はAランクで、他の五人の指導をしながら付いてきたのですよ。本来ならAランクの方を護衛に雇おうとすれば大金が掛かりますので。あの怪我也投げ出された子を庇^{かば}って背中で落ちてきた木箱を受け止めたのですよ」

「おお！ 名誉の負傷ですね♪」

「名誉でも何でもないぞ、俺達を護るのは当たり前前的事だ」

「このお兄さんは何を言ってるのでしょうか？」

「俺達は異世界転移者で、必ず強くなる事を約束された英雄！ 勇者！ 最初の成長を

乗り越えるまではこの異世界のNPCどもは俺達を護るのが当たり前なんだよ！」

えぬびーしー？ 何なのでしょうか？ 僕もそうなのでしょうか？

「おい、ガキ！ テメエアイテムボックス持つてるから俺達のパーティー専属にしてやるぜ、そうだな、一月大銅貨ひとつきで雇ってやるよ。ありがたく思いな！」

「えっと、嫌ですが」

お兄さん達は僕の返事に驚いて、固まっています。

「僕はいろんな所に旅をしたいので、それには付いていきませんよ」

「何！ NPCが口答えすんな！」

「おい！ 貴様らその様な態度ではこの護衛依頼は無効だぞ！ 異世界転移か何か知らないが、そんな事を続けていれば、一生Dランクから上がらんぞ！」

「何だと！ クソジジイ！ こんな長つたらしい依頼なんぞ請けるのも嫌だったんだ！」

明日の町で終わりだ、その後は好きにさせて貰うぞ！ みんな行くぞ！」

「けっ！ クソだな」「ギャハハ♪ テメエが言うなよ。護って貰ったのによ♪」「おらおら、あつちで酒でも飲んで寝ちまおうぜ」「クソガキは荷物持ち忘れんなよ！」「俺もアイテムボックスほすいっ♪」

何なのでしょうか？ 護衛のお仕事を請けているのに夜営でお酒は駄目だと思うのですが。

「坊主すまないな。奴らはあれでもそこそこ強くてな、ギルドから頼まれているんだが、あれではな」

「あはは♪ 大丈夫です。僕から見てもあれはダメダメです」

「うゝむ。往復の護衛のお仕事を頼み、この三日間を見てきましたが帰りは違う者をお願いしようと思います」

じゃあ領境の町からなんだ。

あんな態度ではよっぽどの良い雇い主でもお断りするでしょうね。

「それが良いだろう。護衛中に酒なんぞ飲みおつて、俺の事は最後まで雇って欲しいがな」

「はい。後数名追加で貴方と帰りの護衛を頼むことにします」

しばらく、おじさんに護衛の仕事のやり方を教えて貰ったり、商人さんが計算を教えてやろうと言つてきて、問題を僕がすらすら答えて、商人に誘われたりしていたのですが、一時間ほどでお兄さん達はどんどん酒をあおり、焚き火の側で寝てしまいました。

お酒弱いのにあんなに飲んじやうし、それから見張りをしなくちやダメなのに寝ちやうなんて、本当に護衛の仕事は何だと思つているのか分かりませんね。

「おじさん僕も夜警しますね」

「はああ、お礼に今晚だけはと思つたが、すまないが頼めるか？俺が先にやるから、坊

主は先に寝てくれ」

「はい、分かりました。では寝ちやいますね」

テントに入り、お布団に潜り込んで、一応ぐるぐるして近づくものがいたら気付けるようにして目を閉じました。

どれくらい経ったのか分かりませんが、僕のテントに近づく気配で目が覚めました。交代かな？

起き上がろうとした瞬間誰かがテントの入り口を開けた。

第37話 ほくつときましょく♪

「ん？ 坊主、寝れなかったのか？」

入ってきたのはドワーフおじさんです。

「いえいえ、ちょうど目が覚めたところです。交代ですな？」

「ああ、後数時間で日が登り始めるから頼んだぞ」

そう言いながら遠ざかるおじさんの背中に向けて

「はい♪ 任せて下さい！」

まだ寝てるムルムルと、その上で寝ているテラのハンカチ布団を掛け直してテントに残し、外に出ました。

ちょうどおじさんは自分のテントに入る所でお尻が見えました。

少ししてイビキが聞こえてきました。くふふふ。

お兄さん達は、起きる気配もありませんが焚き火が消えそうになっていましたので、薪たきぎを追加しておきました。

「本当に、これで護衛の仕事をしているつもりなのでしょうか？」

その後は暇潰しに焚き火の火でぐるぐるしながら見張りを続け、朝、うつすらと日が

差し出した頃、朝ごはんの準備を始めます。

薪を追加してお湯を沸かし、適当に野菜とオーク肉を煮込んでいきます。

「うんうん♪ 良い感じですね、灰汁あかを取って、マシユー直伝の調味料と安物ワインを入れるんでしたね。あれ？ ワインは先に入れるんでしたっけ？ ん〜、間違っちゃったかな？」

「まあ、煮込めば良いでしょう♪」

「ワインを一瓶入れて、調味料を入れながら、底が焦げ付かない様に、かき混ぜ続けま
す。」

とろみが付いてきた時に味見。

「うんうん♪ 上出来ですね♪」

煮詰まってしまう様にならずに少し焚き火から離しておきましょう♪ パンはどうしま
しょうかね〜♪ あつ、よく考えたら、あのお兄さん達には食べさせたくない気がしま
すね。

「あふあああ、おふあよ。ライ今朝もムルムルのごはん出してくれる？」

「テラとムルムルが起きてきました。」

「うん。今日もゴブリンとオークにしちやう？」

ぶるぶる

「そのようね、お願い、私はこの子が思ったより早く成長したから、違う子探してくるわ、うんしょ！」

テラが指差した頭の先には、小さな二葉だった物が黄色い花を咲かせ、立派に育っています。

そして、やつぱり、スポットと頭から抜くと、ぽいつつと捨てて、ムルムルから降り、所々に生えている草を見てまわっています。

「じゃあムルムルにはこれね♪ ほいつと！」

ゴブリンとオーク出して、ムルムルを乗せてあげるといつものようにあつという間です。

そんなこんなで、テラは頭に団栗どんぐりを乗せて帰ってきました。

「ねえテラ、それって物凄く大きくならない？」

「ぬふふふ♪ 大きくなるわよ♪ でもすぐじゃ無いわ。三日ほどのままね」

「じゃあ三日後は外にいなきや駄目だね。国境の宿屋みたいになつたらと思うと。あはは」

「そ、それもそうね」。大きくなる前に言うからお願いね」

「うん、お願いだから忘れないでね」

一抹の不安を抱いていると、まず最初に起きてきたのは、ドワーフおじさん。その後に商人さんとお弟子さんが起きてきました。

僕はシチューとパンの朝ごはんを済ませ、残り（お兄さん達にはあげません）は収納しておきます。

そして五人で馬車に馬を繋ぎ出発の準備を終わらせました。

「奴らは放っておこう。あんな奴らは育ててもろくな事にはならん」

「僕もそう思います。護衛は任せて下さい♪ こう見えてもそこそこ強いのですよ♪

それと、荷物は僕が収納しておけば馬さんの負担を減らせますよね？」

「おお！ それは名案ですね、馬への負担が減り、速度も上がります！ ぜひそうしましよう♪」

「くふくふ。お兄さん達には追い付けない様になりたいですね♪」

みんながうんうんと頷きました。

荷物を収納し、みんなが乗り込んだのを見て商人さんは、四頭の馬さんに軽くムチを当てるとガクンと出足の反動があつた後軽快に走り出し、街道に出ました。

そうだ！ あのお兄さん達にはもう少し寝ていて貰いましょう♪

ぐるぐるさせて、気絶寸前まで持っていきます。

お兄さん達が目覚めたら、後少しぐるぐるして気絶して貰おうと思っていたのですが。

起きることはなく、夜営地が見えなくなつたので、残念ですが気絶は無しのようです。そして、荷物がなかったのでやっぱり速かつたのですよ！ 予定では日が落ちたくらいの到着が夕方前、まだ高い山にも隠れ出す前には街に到着して、明日の予定だったギルドへの報告が出来そうです。

入門してすぐの商人さんと一緒に冒険者ギルドに行く事になりました。

冒険者ギルドに着いた僕達、ドワーフのおじさんが受け付けのお姉さんに、お兄さん達の依頼失敗、どんな状況だったかを伝えると。

「まあ、それは酷いですね。ギルドで一番優しい試験官と言われる貴方にそう言わせる何て、ギルドの登録抹消を考えなくてはいけないでしょうね。分かりました」

お姉さんは後ろを振り向き声をかけます。

「サブマスター、少しよろしいですか？」

奥にいた、初老の男の人がこちらを向き、席を離れやって来ました。

「いかがなさいましたかギルドマスター」

ええ！ このお姉さんがギルドマスター！

「ええ、噂の新人五人パーティーのCランクへの試験は失敗、それから降格、見習いにまで下げます」

「それは、期待されていたと聞いておりますが、それではその者達の昇格は無くなったと見てよろしいのですか？」

「はい。依頼途中の事故があつた場合は護衛及び、その復旧に携たずさわられる決まりですが、それを怠り、夜営時にお酒を飲み、依頼者を放つて寝こけ、朝も起きないような奴らは冒険者ギルドには不必要。即刻除名、永久追放でも良いくらいです」

うん。まったくその通りです。

「うゝむ、それは酷いですね。では、冒険者ギルド各支部にその内容を伝えます」

・サブマスさんは他のギルド職員に指示をして、手の空いていた人達が魔道具を手に、
・の昇格不可、見習いへの降格。」と電話みたいな魔道具で各ギルドにさっきの内容の連絡を入れているようです。

「すまんな、それとこの坊主が途中からではあるが、護衛依頼を請けた」

「はい。事後にはなりますが、依頼書を登録させて貰います」

おお！ そうでした♪ くふふ。お小遣いが増えますね♪

商人さんが紙に何かを書いて、ギルマスお姉さんに渡します。

お姉さんは受け取り、目が文字を追っていき、頷くと。

「問題無いようですね、報酬も夜営と一日半の護衛の基準内です。では、えっと」
「ライと言います。Eランクです♪」

僕はギルドカードをカウンターに乗せます。

「まあ！ うふふ、じゃあこれでランクアップ出来るかも知れませんね。お預かりします」

お姉さんはそんな事を言いながら僕のギルドカードを魔道具に通しました。

「あら、薬草依頼がほとんどね。討伐依頼が無い様ですね。残念ですが今回は昇格とはいきませんでした」

「なんだ、坊主は討伐の依頼を請けてなかったのか？」

「はい。十歳までは請けるなど言われていましたので、こつそり討伐しました♪ 次から請けていきますね♪」

残念ですが仕方ありません。

「うふふ♪ こつそりですか。あまり危険な事はしちや駄目ですよ。では今回の護衛の報酬銀貨二枚です♪ どうぞライ君」

「やったあ！ 銀貨二枚もですか！」

「それとお預かりしているこの依頼金は繰り越しますか？」

僕が喜んでいる内に商人さんとお姉さんが話を続けています。

「はい。まだこの二人には東の開拓村までお付き合いただききます。ライ君はそこで別れですが、復路を頼まなくてはならないので預けてあるものはそのまま、それと何人か護衛を追加したいので、募集をお願いします」

「分かりました」

「あの！ その依頼私じゃ無理ですきや！」

「やだ、噛んじやった」

両手を上げ自己主張をしながら話しかけ、噛んだ後は、しおしおしおぼんでいきました。身長は僕と一緒にくらいで赤毛のくせつ毛で、茶色の瞳、つぎはぎだらけの革の胸当てと、鈍なたの様な物を背中に背負った女の子。

「お嬢ちゃん一人かな？ それともパーティー？」

「がばつ！ と顔を上げ、良いの？ って顔をしながら、返答しそうです。」

「私は一人、ソロです」

「ふむ、見たところ剣士ですか？ 依頼内容は、この街から東の開拓村までと、この街までの往復で様子を見せて貰い、良ければその後も頼む事になるかもしれませぬ。ギルドマスター殿、この方の他にも数名頼めますか？」

「良いの！ やった！」

「良かったね♪ 僕はライです。よろしくお願いします♪」

「おお！ ライ君よろしくお願いします！ 私は、アマラです」

「俺達も良いかな？」

僕達の後ろで順番待ちをしていた人達が、声をかけてきました。

第38話 忘れていた事

「君達は、ふむ、三人パーティーかな？」

「はい。剣士二人と魔法使い一人で三人、Cランクパーティーです」

男の三人ですね♪ それにCランクですか！ えつと、だとすれば護衛依頼をして
ランクアップ、昇格したのですね♪

「ほお。それはそれは頼もしいですね。明日の朝出発になりますが、ご準備は大丈夫で
すかな？」

三人は顔を見合せ、頷き合うと

「よろしくお願いいします」

うんうん。まともな方達の様ですね。

あの異世界転移してきた人達みたいだったら嫌ですもんね。

「では、依頼書を作つて貰いますので。ギルドマスターよろしくお願いいします」

「はい。では皆さんギルドカードをお出し下さい。そちらのパーティーはリーダーの物
だけで大丈夫です」

そして依頼を請け、明日から二日間は八人での旅になりました。

そして宿は商人さんの良く使っている宿に全員が泊まる事になり、僕はお風呂付きの部屋が良かったのですが、撤回します！ 宿に泊まれば誰でも入れるお風呂が、そう！

大浴場ですよ♪ 僕は早速大浴場に向かい、ひと泳ぎするため、宿の裏手にある建屋に向かいます。

入口が男性用と女性用に分かれていましたので、僕は当然男性用に向かいます。

「くふふふ。どれどれどんなお風呂かなあ♪」

「ふう。テラ、お風呂泳げなかったね」

そうです。

脱衣場で服を脱いで中にはいると壁際が階段状になり、座れるようになっていて物凄く熱い部屋でした。

「ふいい〜♪ サウナ風呂とはね。ライにはまだ早かったかしら。そんなに落ち込まなくてもまだまだ暑い日が続くんだから川や、湖、それに海に行くんでしょ？ そこで私が教えてあげるから」

「うん。うんうん♪ そうだよね♪ よし、明日も早いし寝ちやいましょう♪」

そして翌早朝、朝ごはんも八人で済ませ、何も乗っていない馬車に乗り込み、昨日入ってきた門前に行くとい番乗りでした。

徐々に明るくなつて来る中開門を待っていると門兵さんが二人出てきて、十センチ角くらいの門かんぬきを外していきます。

そして最後に、倍以上太い門は少しずらずらしながら外しました。

それはもう汗だくになってますので、お疲れ様ですね。

「つてか門がいつばいなのですね？」

「ん？ お前がいたところは魔物が少なかったのか？ この街は何度かスタンピードにあつてからだなここまで頑丈な門と、門に変わったのは。昔はあの細い方だけだったらしいぞ」

お兄さんの一人が答えてくれたのですが、スタンピードですか、それなら頑丈にしちやいますね。

「でも毎朝あれをしていたら力持ちになりそうですね♪」

「くふふふ。ありそう♪ でもあの程度簡単に壊しちゃうのもいるのよ。ライでも出きるんじゃない？」

「テラ、流石に、魔法使えば出来ちゃうか？ ウィンドカッター使えば出来ちゃうね。

あはは♪」

「ライ、出来てもやつちや駄目よ。ほらほら門が開くわよ」

やりませんよ！　ちよつとぐるぐるさせていたのは内緒です。

門が開ききると商人さんは手綱を操作して、馬車を進めます。

門をくぐり外に出て目についたのは、消えた焚き火のまわりに酒樽や瓶が転がされていて、馬車がすぐ近くを通つても寝ている異世界転移のお兄さん達でした。

「こいつらこゝまでたどり着いてたのか、これだけ音を立てているにもかかわらず起きんとは」

おじさんがあきれ顔でそう呟いていますが僕もそう思います。

起きられても嫌なので、ぐるぐるしておきましよう♪　ほいっと！

「ライあなた、今度は気絶させておきなさいよ♪」

「うん♪　そのつもりだよ、気付かれて付いてこられても嫌だしね♪」

そして馬車は開拓の村に向けて快調に進み、二日目の夕方に到着しました。

「お疲れ様です。では私は村長さんに到着した事をお伝えしに行つてきますね。ライ君、荷物を馬車にお願いできますか？」

「はい。では乗せちゃいますね、ほいっと！」

同じ大きさの木箱ばかりですから、積みながら出すのも楽々です♪ 一応きちんと隙間無くならべて出していきます。

「はい。全部出ました」

「はい、確かに。では皆さんは冒険者ギルドの出張所で、途中で狩った魔物を売りに行くのですよね。村には宿が一つしかないのです。そこで、合流しましょう」

「はっはい♪」

馬車を見送り僕達は、門を入れてすぐのギルドに入ります。

「坊主はここでお別れだな。夜は再会を祈り飯でもみんなで食べるか」

おじさん、それ良い♪

「そうだな、ギルドで会ってから、たった三日だったがお前には助けられたし」
怪我しちやって回復しましたからね。

寝ぼけて馬車から落ちるなんて、くふふ。

「そうですライ！ 私なんてもう少しで魔狼に噛られるところでしたよ！」

「アマラったら前のゴブリンしか見てなくて、後ろ全然見てなかったもんね♪」

「俺もヤバいところ加勢して貰ったしな、魔法は使えるし剣も使える俺達のパーティに欲しいくらいだぜ、あはははは♪」

「そうだな。よし買い取りカウンターは裏手の倉庫になるようだ。そっちに移るぞ」

おじさんの先導で一度ギルドから出て、横の路地に入り抜けるとそこそこ大きめの倉庫があり、中に入つてすぐのところを受け付けがありました。

受け付けのおじさんの言うがまま、魔物を出し、オークを出すとニコニコになつて、「おお♪ 今夜はオークステーキだな」つてつぶや呟いていました。

オマケで僕が元々持っていたゴブリンとオーク、魔狼も数匹ずつ追加して、買い取つてもらいました。

中々のお小遣いになりました♪ みんなの買い取りも滞りなく終わり、宿に向かいます。

遠くからでも分かる立派な宿、開拓をやりに来た職人さん達が泊まるため大きいそうです。

立派な宿に着くとすでに商人さんが帰つてきていて凄く広い食堂、いいや、もの凄く広い食堂（百人は余裕でしょこれ）で待つていてくれたようです。

部屋も僕とアマラは一人部屋、おじさんとお兄さん達は四人部屋を準備してくれてあるそうです。

「では、お疲れ様です、乾杯♪」

商人さんの音頭で目的地到着のお食事会が始まりました。

「坊主、明日の朝には出発か？」

「はい♪ その予定ですね、なにかあるのですか？」

「いや、坊主の事はこの二日ほど見てきて強いのは分かったが心配だな」

おじさんがお酒をちびちび飲みながら真剣な顔をして心配してくれます。

「ライの事は私にドゥンと任せておいて！ ムルムルもいるし大丈夫よ！」

「うゝむ、ちびつ子とスライム、心配だな」

みんなが、うんうんと頷くのを見て、テラが、ガーン！ ムルムルは、ぷるぷる。

「あはは、テラもムルムルもいてくれるから僕はどこにいても安心できるよ！」

「ラ、ライいい〜！ あなただけだわ私の凄さを分かってくれるのは！ それにムルムルだって、私の騎獣で凄いですからね！」

ぷるぷる？

「うんうん♪ あれ？」

「どうしたの？」

少しずつ大きくなっていく気が、なにか忘れているような。

「ああー！ テラ外に行かなきゃ！」

僕はテラを素早く手のひらに乗せ、外に向かう。

広すぎる食堂のため出口までが遠い！ 間に合え！

「な、な、な、なんなのライー！ どうしたのよおー！」

僕は開けつばなしになっている出口をくぐり、目の前の広場に飛び出した。

「ああああー！ 忘れてたあああー！ ライせめて、広場の真ん中にお願ひ！ 物凄く大きくなるはずだから！」

「ぬおおおー！」

さらに加速してもう僕より大きくなった団栗どんぐりをテラの頭から外して

ズズン

広場の中央に放り落とした瞬間、ピキツと音がなり、殻がはじけ巨大な双葉が出たと
思った次の瞬間には根が地面に突き刺さり、ズズズズとみるみる太く高くなっていきま
す。

「テラ！ デカ過ぎですよ！」

「あわわわ！ ライ、魔力！ 魔力を発散させて！」

「なっ！ よし行くよ！ ほいっと！」

バックステップをしながら団栗の木にぐるぐるを仕掛けますが、その間も、どんどん
大きく育っていきます。

枝葉はもう広場を覆い尽くすほど広がり、夜の月明かりを隠していきました。

第39話 大きなどんぐりの木の下で

「テラ止まんないよ！ 広場に屋根が出来ちゃったよ！」

「^{神眼}んん〜！ 大丈夫よ！ 後もう少して成長が止まるわ！」

テラの言う通り、急激に成長速度が遅くなつて、たぶん十メートルほど伸びた所で成長が止まりました。

見上げているのですが、枝葉が生い茂り、夜空の星も見えません。

幹の太さは大人の人が三十人くらいで手を伸ばし繋いだくらいありまして、単純に計算すると、木の幹の周囲は五十メートル以上ありますね。

「テラ、今度こそは謝らないと駄目だろうね、あはは。」

「まさかここまで大きくなるなんて、謝るのは村長さんによね？」

商人さん達と、ドワーフおじさんやアマラ、お兄さん達に続き、宿にいた人達が広場に出てきています。

広場に面した家からも、家族連れで玄関から出て来て、さつきまで無かつた大きなどんぐりの木を見上げています。

「ええええええええ〜！」

その後僕は商人さんと一緒に村長さんのお家に行き、テラと一緒にそれはもう物凄く謝りました。

何がどうしてそうなったかは、テラが説明して、それを僕がフォローする。

何とか納得してくれた村長さんは、明日の朝どんな様子か見てから決めるとの事で、夜も遅くなりましたが宿に戻りました。

宿に入るとみんなが僕達の帰りを待っていてくれたようで、どうなったか、村長さんに説明した事をもう一度説明しました。

「くははは♪ ではテラの頭に団栗どんぐりを乗せていたのは魔力なんかの栄養をやっていたのか。飾りだと思っていたぞ」

おじさんはお酒の入ったカップを傾けながら、そんな事を言います。

それはそうだよ、普通はそう思うよね。

「私も。何で団栗なんだろうって思っていました、あはは」

アマラもジュースの入ったカップを持ちながら呆れた顔を向けてきます。

「まあ、なんだ、どこの家も夜だから全部は見れていないが大丈夫そうだったぞ」

パツと見は被害は無かったようですがたぶん昼間でも木陰こかげで夏場は涼しくなるんじゃないかなって思います。

「そうだな、一番下の枝までの高さもあるから洗濯した物が乾かないってことも無さそ

うだったからな」

おっと、それは考えていませんでした。

「その様子なら、なに事もなく穏便に済まして貰えそうですね。皆さん、ライ君以外ですが荷物の受け渡しのお手伝いして貰えないでしょうか？」

僕は村長さんを待つていないといけませんからね。

「ふむ、重いものがほとんどなので、アマラちゃんも厳しいですね、アマラちゃんはライ君のフォローを頼んでも良いですか？」

「はい♪ 力仕事は苦手と言うか、逆に邪魔しちゃうと思いますから、ライ君のお手伝いしておきます」

おお、そうですね、僕に分からないことを教えて貰えそうですね♪
「アマラよろしくね」

「はい。お役に立てるかどうかわからないですけど、あはは」

「では皆さん今日はお開きでしょうか？ この時間からですとお酒がメインに……ライ君、また花を頭に刺していますが大丈夫ですか？」

テラを見ると、テーブルのある切り花をいつも通り頭に刺していました。

「ねえテラ、それは大丈夫だよね？」

みんなの視線が集まるムルムルの上のテラはというと。

「も、もちろんよ！　この子は普通の花よ、大きくはならないわよ！　たぶん！」
 「たぶんって、テラ、テントに行っておこうね。あはは。」

僕はテラとムルムルを肩に乗せ宿を出ておく事にしました。

「商人さん、せっかく部屋を取って貰ったのにすいません、外の木の下でテントを張って寝ますね。」

「あはは。そ、そうですね、その方が安心できますね、あはは」
 乾いた笑いの声の商人さんと呆れた顔のみんな。

僕は席を立つておやすみなさいと挨拶をしてから外へ。

木の根元にテントを張ってもぐり込むと、疲れたのかすぐ寝てしまいました。

翌朝、「でけえな」「そうなんだよ昨晚急に生えたんだ」「これって団栗の木？」「秋に団栗のクッキーを作れるわね」「まわりに芝を植えて公園にすれば？」等々声などなどが聞こえてきて目が覚めました。

「なんだか騒がしいわね？　どうしたのかしら？」

「いやいや、テラ、君の団栗の木のせいだと思うよ。ふあああ」

「そ、そうなの！　私捕まっちゃうの？」

「いや、捕まらないと思うよ。よし、着替えて外に出よう」

おろおろしているテラ、僕は着替えを済ませ、ムルムルごとテラを肩に乗せテントを

出ました。

「外は木と、テントを取り囲む様に村人達が集まり、見上げていました。

僕がテントから出てきたのを見て、そこにいた村長さんが近付いて声をかけてくれそうです。

「村長さん、おはようございます」

「ライ君おはよう。ここで寝ていたのかい？」

「はい。またなにか起こった時に対処出来るように」

まさかまた、頭に栄養を与えている物があつたからとは言えません。

「ふむ。良い心掛けですよ。しかし立派な木だね。それに昼間の暑さをしのげる木陰も出来るようですし、被害もありませんので、罪にはなりませんね」

「はふうう、良かったああ」

テラ、本当に良かったね♪

「それに、皆にも好評なようですので、この団栗の木は開拓村の象徴しょうちようとして、このまま切り倒さずに辺りを整備していこうと考えますが、良いですか？」

「良いのですか！ テラ！ 捕まらなくても良いみたいだよ♪」

「やったああ〜！ ちよ〜つと心配してたけど、流石私！ どんどん象徴にしてあげてね！ この子の団栗は美容に良いわよ♪ それを売りに出来るくらい実るから、この村

の特産品にしちやいなよ♪」

いやいや、なんで途中から偉そうになつちやうの！ くふふふ。でも良かったねテ
ラ。

「ほお。それは良いですね。この村は鉾山があり、農地としても平坦な場所が多く、そして肥沃な土地でして、鉾山と作物の二つを目的として開拓しているのですが、それに加え美容ですか、聞いたことがありますね。貴族の方々にも好評だとか。ふむふむ」

村長さんはなにやら考え込んでしまいました。

他のみんな、いえ、女性達は目をキラキラさせながら、「美容♪」「嘘っ、私も綺麗に♪」「農地にこの木を、株分け♪」「野菜作るより私はそれを♪」等々ざわざわしちやつてますね。

男性の方々も、「売りが増えるんなら良いな」「俺どんぐりのクッキー好きだぜ」「いやいや、焼き団栗だろ、ほのかな甘味が」「パンに入れても美味しいよな」と、少し食べる方に片寄っている気もしますが、悪い意見は無さそうなので一安心です。

「そうですね。よしこの村の名は団栗の別の呼び名で、エイコーン、エイコーンを、候補にしませう！」

捕まるかもと心配していたのですが、良い方に話は流れ、なんとこの村の名前になるかもしれないなんて。

「良かったねテラ、みんな良い人達で」

「うんうん♪ 海に行つた帰りに、もう何本か村のまわりに団栗の木を植えてあげましょう♪ 言つとくけど、普通はここまで大きくならないからね、この子は特別沢山栄養を食べる子だっただけなのよ」

「うん♪ 団栗の林を作っちゃいましょう♪」

「あはは、ライにテラつたらそんな事したら怒られるかも知れないよ」

「あつ、おはようアマラ」

アマラが起きて来たようです。

「おはようつて、なんだかうまくまとまったみたいですね？ 皆さん笑顔です」

集まっている人達を見渡しながらかもほつ、つと一息ついていきます。

「うん、この村の名前になるかもしれないっ♪」

「あら！ そうなの！ 凄いやない！ それならいっぱい植えるの賛成かも♪」

「ぬふふふ♪ 任せて！ 私が良い子達を集めてあげるわ！」

それでまた、怒られそうになるのは、またいつかの話です。

第40話 開拓村のお手伝い

団栗どんぐりの木の騒動はひとまずおさまり、木のまわりに芝生しばふを植えて、この広場を石畳で綺麗に整備しちやおうって事になり、僕も手伝う事になりました。

「ライ君ここのの石板を広場へ運んで貰いたいんだが頼めるかい？」

村の中を開拓するリーダーさんが、石切場に連れてきてくれて、平らに加工した石を指差し依頼をして来ました。

「はい。大丈夫ですよ♪ 収納を使えば簡単ですから」

「うんうん♪ 頼もしいね。普通なら一人で五枚ほど担かつげばいいっぱいになるんだけどね。あの広場全部だから、沢山運んでくれると助かるよ」

「じゃあ運んでしまえますね」

「まあ、加工が追い付いていないから今日中に完成は出来ないんだけどな。じゃあ俺は加工する者達に知らせてくるよ」

リーダーさんはそう言って、他の作業者に指示をするため離れていきました。

結構沢山ある様に見えるのですが、足りないんですねえ、それによく見ると結構デコボコですね、土魔法で滑なめらかに出来るかなあ、ほいっ！

一枚を試しにやってみたのですが、ピカピカです♪ むふふ♪

「ライ、それって滑って転げない？ 雨なんか降ったらみんな怪我しそうよ」

「あつ！ そ、そうだよね、滑り止めが必要だよね、ほいっと！」

顔が映るくらいのも物から、石の質感に戻って、今度は触るとざらざらの手触り、これなら雨が降っても大丈夫そうになりました。

「こんな感じはどうかかな？」

テラの意見を聞くため、よいしょと持ち上げると、テラは石板に飛び乗り感触を確かめているようです。

「うんうん♪ 上出来ね。じゃあさっさと運んじやいましょう！」

「うん♪ ほいっと！」

その場にあつた加工済みの石板を全部収納してしまつて、ついでに加工前の岩の大きい塊かたまりも土魔法で同じ形に加工して収納してしまひましょう♪

いつの間にか、加工をする人達を連れて戻ってきていたリーダーさん達は、無くなつていく大きい岩が削られ、さらに加工されて消えるのと、僕を交互に見ていますが首からは微動もしません。

大きな岩をいくつか加工したところで、リーダーさん達は首も動かなくなりました。

「あはは、リーダーさん達が固まっちゃったね」

「そのようね。まあ、放つといて広場にいきましよう。今ので足りなかつたらまた来なくちやいけないんだから」

「うん♪ じゃあ行こう！」

そして広場に到着して、ここを担当している人に場所を教えて貰い、やり方を聴きながら置いていきます。

「最初はこのロープに合わせて並べていくんだ、そうすれば木を八角形に囲う様にある程度土の部分を残せるだろ？ そこには芝を植えるんだ」

なるほどです。石畳にしちやうとお水が土に染み込むのが少なくなつちやいますもんね。

「はい」

「でだ、置く前にこの木槌で俺が平らになるよう叩いていくから叩いた後に並べてくれるかい」

ふむふむ、それも僕がやつちやえますね。

「あの、その叩くのもやつちやえますよ。こうやるのですよね？ ほいつと！」
何枚か置けるくらい地均じなちししてみます。

「こんな感じですよね？」

「ほお、どれどれ、ふん！」

ズン!

重い木槌を持ち上げ打ち落とす。

「おお!　へこまないぞ!　これなら文句無しだが土魔法だろうか?　魔力は大丈夫なのか?」

「はい♪　全然余裕がありますよ♪　僕が地均ししながら敷いていきますので、おじさんは芝をやつて来て貰つても大丈夫です♪」

「うむ、では頼もうか。もし分らないところがあれば呼んでくれ」
「はい♪」

おじさんは木の根元にある大量に置かれた芝をやりに行きました。

んじやく僕は木を囲つたロープの外側をやつていきましよう♪

地均しく石板く地均しくと順調にロープ際をぐるりと一周並べていきますが角の所でどうしても隙間が開きます。

「ねえライ、この広場丸いのよね。すると放射状つて分かる?」

「んく、なんとなく?　こう真ん中から広がつていく感じだよね?」

「そうそう。だからそのままの石板を並べるだけじゃ隙間が空くの分かる?」

んく、そつかそつという事だよね。

「空いちやうね、大きい三角みたいな形に」

「正解。だから置いていく時ってこういう風に半分ずつぐらいずらして置いていくんだけど、三角の部分は残っちゃうよね？」

うんうんと僕は頷きます。

「ならその空いた隙間の形に石板を加工しちゃうの。そうすれば隙間無く置けるでしょ」

「うんうん。でも半分ずつずらしながらだから、こうぐるぐる木のまわりをまわりながら置いていけば良いんだね」 そうだよね」

「うんうん」 少し効率は悪くなるけど、仕上がった時、それはもう綺麗に仕上がるわよ」

「よしよし」 やっちゃいましよう！」

十周位したところで在庫がなくなり、石切場にダツシユ！

大岩をさつきの五倍ほど収納して広場に戻り敷き詰めていきます。

少し飽きてきたので、一か所♡の形の石板を少し色の違う石板で作り返し詰めていきます。

またムルムル形の石板や、どんぐりを乗せたテラ形、ゴブリン村長形の石板、を作っているとテラに止められ、断念。

ちえつ、結構上手く出来たのに。

それからもう一回石切場に大岩を取りに行き、広場の石畳は完成しました。

途中テラがお昼寝しちゃったので、さつき作った石板と、どんぐり形の石板を沢山作り嵌め込んでおきました♪

「よし♪ 広場完成♪」

「ふあああ、ん？ 終わったの？」

「うん♪ 完璧だよ、ほら見てよ♪」

テラはムルムルベッドの上で体を起こし、広場を見渡しながらいふ。うんうんと頷いています。

「良いじゃない。上出来よ♪ じゃあここのリーダーさんと村長さんに報告しなさいね」

「うん。リーダーさんは、あつ、あそこだね」

リーダーさんは、芝生を、荷馬車から荷下ろししていたのでそこに向かいます。

近付いてきた僕に気付き声をかけてくれました。

「おお！ ライ君。もしや広場の石畳が完成したのかな！」

「はい。ちゃんと出来たと思いますので見て貰えますか？」

「うんうん♪ いや、早いね♪ 土魔法俺も覚えようかな。あはは。よし見てまわろうか」

「お願いします♪」

ぐるりと一周しながら見ていくのですが、最初にどんぐり形を見つけ、次に♡形を見つけて大絶賛。

「良いじゃないかどんぐり形や♡形も。俺達では考え付かなかったよ。この広場の名はどんぐり広場って名になるかもな。あはは♪」

「ライ、私が寝ている間にどんぐり形を作ったのね。まあ、喜んでくれているから良いとしましょう」

そして、やっぱり見付かってしまいました。

「ねえライ、ムルムルと私、それにゴブリン村長はダメって言ったでしょ！」

「あはは♪でも良くできてるでしょ？」

傑作だと思っただけ。

「ふむふむ、これはこれで良いとしましょう」

でしょでしょ♪

「え？ 良いの？ ずっと残っちゃうよね！ 私もムルムルもゴブリン村長は良いと

してー」

「あはは。この木を育てた方の姿ですからこれはこれでこの村のシンボルみたいなものですよ」

「はああ、まあ、怒られないなら良いか？」

「うんうん、テラはこの木の育ての親なんだからね♪ よし、後は何かやることありますか？」

「後はそうですね、この広場から伸びる大通りにこの石畳を敷く事かなあ」

ん〜と、まだまだ大岩は収納されてますし、道は真っ直ぐだけだから簡単ですね♪

「分かりました！ では、一番最初は僕達が入門したあつちの門からですか？」

「そうだな西門が今は一番使うからそこに続く通りをやって貰えると助かる。頼めるかい？」

「はい♪ ではやつちやいますね♪」

広場から、馬車が片側二台走れるほどの通りですが、真っ直ぐですから一気に敷き詰めていきます。

門が目と鼻の先になった時、村長さんがどこかで観たことあるお兄さん達ともめているのが見えました。

「ライ、気絶させちやいなよ」

「なんでここにいいのか聞きたい気もするけど」

そんな事を言っている内に見付かったようです。

「あつ！ テメエ！ こんなところじゃがったのか！」

第41話 要らないものは捨てちやいませう♪

「あつ！ あの時のガキ！ おい、あの商人ここにいるのか！ あいつ俺達を置いてけぼりにしやがる悪徳商人だ！」

「おつ！ マジあの時のガキじゃん！ お前あの商人達どこにいるか知らねえか！」

「あちやー、ぐるぐるしちやいませうか。あはは。」

「おい！ 村長も悪徳商人の居場所を教えろ！ 教えねえと魔法ぶつ放すぞ！」

村長に詰め寄る二人と僕に気付いた三人。

「ねえライ、もうぐるぐるしちやいませうよ。商人さん達が荷を積み終わって出て行く前に」

テラが耳たぶをクイクイ引つ張りながら、小声で囁きます。

「ダヨネ〜アハハ〜」

五人の魔力を一気にぐるぐる発散させます。

「おいコラ、何ぶつぶつ言ってるんだガキ」

ドサツ

「なっ？ どうしたんだおま」

ドサツ、ドサツ、と次々に気絶し倒れていきます。

「おいみんなどうしたんだよ、何ふざけ。」

村長さんの胸ぐらを掴んでいた手が離れ、その場に崩れるように気絶しました。

「こ、これは。これはライ君、君がやってくれたのかい？」

「はい。このお兄さん達は、商人さんの護衛依頼を請けていたのですが、何もせず依頼の護衛をしないで、お酒は飲んじやうし、夜警もしないで寝ちやうような人達だったので、途中で辞めてもらったのですよ」

「ふむ、ではそれを逆恨みして、ここまで追いかけてきたと言う事でしょうか、それはなんともし難いですね、あはは。」

心底呆れました。顔で、ひきつった笑顔の村長さん。

「そうだ♪ 良いこと思い付きました。」

「村長さん。商人さん達は東の森に素材を収穫に行つたと言つておいてもらえませんか？　そして、そのまま海沿いを通つて隣の国に行つた事にしましょう♪」

「ふむ、そうすれば、月に二回も通つて下さる商人さん達に迷惑はかかりませんね」

「はい。お願い出来ますか？」

「あははは♪ 良いでしょう。この者達の話の聞いている限り、迷惑にしかならないようですので、隣の帝国には悪い気もしますが、行つてもらいましょう」

村長さんと領き合い、近くに有った荷台に五人を乗せ、門の脇に移動させておきます。すると、鉾物を仕入れた商人さん達が馬車でやって来ました。

そして速度を落とし、門前、僕達の前で止まりました。

「ライ君、この広場から続く通りの石畳も敷いたのですね♪ 快適に走れましたよ♪」
御者台に座る商人さんがにこやかに話しかけてきました。

「えへへ♪ 頑張っちゃいました。それに、このお兄さん達も撃退しておきましたよ♪」
商人さん達とドワーフおじさんはうんうんと領き、お兄さんパーティーと、なぜか馬車を降りてくるアマラは誰これって顔をしています。

「ねえライ、あのね、この依頼が終わったら私達とパーティー組んでくれないかな？
一月後ひとつきにまたこの村に護衛で来る時になるんだけどダメ？ 私今回お兄さん達のパーティーパーティーにいられて貰ったから一緒にどうかなくて」

首をコテンと傾げ、返事を待つアマラ。

「ん、それって護衛を続けるって事ですか？」

「うん。そうなるわ、専属よ♪ 駆け出しの私の中々なれるものじゃないし」

それだと旅が続けられませんね。

「ごめんなさい。僕はいろんな所に行きたいのですよ。今はこの王国をぐるりと一周するつもりで、この東の端まで来たんです」

「そうなんだ。残念です」

「坊主は、中々デカイ目標を立てたんだな。良いぞ、若い内はその目標に向かって突き進むのが良い。頑張れ」

「ありがとう♪ おじさんもお仕事頑張つて下さいね。このお兄さん達みたいな人に会わないように♪」

「まったくだ。あはははは♪」

「ライ君、君に会えて良かったです。君が居なければまだ開拓村に到着していなかったでしょうね。その冒険者に足を引つ張られてね♪」

「あはは♪ ですね。あつ、このお兄さん達には商人さん達は東の森を抜けて隣の帝国に行つたと伝えてもらいますから、たぶん会うことはもう無いはずですよ♪」

商人さん達は、大きく頷き笑顔です♪

「そっかあ、残念だけどいつかまた会えるよね♪ 元気でね♪」

アマラはそう言うのと馬車に乗り込んでしまいました。

「はい、いつか会いましょう♪」

「じゃあな!」

「坊主、またいつか会おう!」

そう別れの挨拶をして、馬車は先日通つた街道を走り、しばらくアマラ達は手を振つ

ていましたが、徐々に小さくなり、見えなくなりました。

その後僕は通りを一通りまわり石畳を敷いてしまい、昨晚泊まれなかつた宿に泊まり、翌日早朝東門から東の森に向けて出発しました。

その際、転移者のお兄さん達をもう一度ぐるぐるさせます。

だって、昨日は気絶して早くに寝たお陰で今朝は早くに起きて、村長さんに話を聞いたのか、東の森に出発するため開門しろって門番さんに詰め寄っていたので、さつさと気絶させてあげました。

「門番さん、この人達は適当に、外に放り出しておきますね♪」

「あはは♪ いや、助かったよ。いきなり来て早く開けるとか言われてもなあ」

「ですよね、荷台は、ありませんでした♪ これに乗せて森の入口辺りに捨ててきますよ」
「そうだな、あの森の魔物はなぜか森から出ないから放つておいても大丈夫だ。頼むよ」

「は〜い♪」

収納にあつた荷台に五人を適当に乗せて、門が開くのを待ちます。

しばらくすると、農具を持った人達が集まりだして、門番さんがかんぬき門を外し始めました。

我先にと開きかけた門の隙間からぞろぞろと農具を持って出て行きますが、僕は後ろから荷台を引っ張り門をくぐりました。

みんなは広げつつある畑に散らばり、草を刈る者、土をおこして出てきた石を取り除

いたり、既に畑になっているところは畝を作り、作付けしていたりしています。

「ここ一面畑になって、麦畑とかになるのかな、今は野菜を植えてるみたいだけど」
ガラガラガラガラ

「そのようね。もう夏だから秋から冬にかけて収穫する用ね」

「この国を一周してきたらここも大きくなってそうだね♪ 楽しみができたよ♪」

そしてお昼過ぎに荷台の上で起きそうになったので、もう一度ぐるぐるさせて気絶してもらい、まだ日が高いうちに、森が遠くに見えてきました。

「ライ、もう結構走っているし、この辺りに捨てちゃわない？ その荷台が無かったらもっと早く走れるでしょ？ まあ、今でも普通の馬車より早いんだけど」

「そうだね♪ ちやうど森が見えて、歩いて数時間くらいかな？」

「よし♪ 荷台を、収納♪」

ズザザザザー！

走りながら荷台を収納したので、五人のお兄さん達は地面に投げ出され、数メートル地面を滑り、止まりました。

「あはは♪ ライったら酷いっ♪ ズザザザザーって顔とか擦りむいてるわよあれ♪」

「あはは♪ 回復でくす♪ ほいっとなー！」

一応回復がつつり、お兄さん達の魔力を使い、擦り傷を直してあげました。

「うんうん、ちゃんと治しておいたよ♪」

「ぷふっ♪ あははははは♪」

そのまま僕は走り続け、東の森の入口で夜営をすることにしました。

一応ぐるぐるして気配を探ると、十キロ以内にいるのはゴブリンが主流で他の魔物がちらほらいるだけですし、安心して夜営が出来そうです。

翌朝、朝ごはんを食べながら気配を探るためぐるぐるしていると、転移者のお兄さん達がこちらに向かって近付いているのが分かりました。

「くふふ。テラ、あの人達狙い通りこの森に向かって来ていますよ♪ お昼くらいにはここに到着しそうですね」

「そうなの？ なら開拓村は安心ね。ん〜じゃあ、今日はこの蔓つるにしようかしら！

荆棘いばらにしましょう♪」

そう言うのと、棘とげをポキッと二つ取って、頭に、
角が生えたテラ、
まあ、本人が満
足そうですから何も言わずに置いておきましょう♪

そして僕は東の森に足を踏み入れたのです。

第4 2話 あるう〜ひい〜♪ 森の中あ〜♪

腰高の草が両脇に生い茂る獣道、大人二人がギリギリ並んで通れるくらい少し広くなった小道を進んで行きます、たぶん開拓村の人達も何かを取りに来ることがあるのでしょうね。

そして森の中は木漏れ日が差して森の外より涼しくて良い感じですよ。

「そうだ、テラ、何か用事があるって言ってたよね？ それって森の中でしょ？」

「そうよ♪ だいぶ前に栄養をあげた木の様子を見たいの♪ その子も団栗の木みたい
に沢山栄養を欲しがる子だったから大きいわよ♪」

「へえ〜♪ それは楽しみだね♪ どんな実があるんだろ、食べられると良いよね〜♪」

「ん〜、どうかしら？ あの時は確かりんごみたいな果実を乗せてた記憶があるから
もしかしたら食べられるかもね。何個か貰えるように私がお願いしてあげるわ！
ムルムルの分も貰うから心配しないでね♪」

座ってるテラが、ポムポムとムルムルを優しく叩き、ムルムルは、ふるふる震えてい
ます。

「あはは♪ ムルムルも嬉しそうだね。ん？ 魔物がいる、
それに、人の気配も！ テ

ラ！ 走るからこつちへ！」

「うん！ ムルムル！ ライの手のひらに移動よ！」
ぷるぷる！

手のひらを上に向けた所へムルムルが、みによくんと伸びてテラごと移動して来たのを胸に引き寄せ、走る速度を上げます。

小道からはずれ、鬱蒼うつせうとした草をかき分けていましたが邪魔で仕方ありません、木の枝に飛び上がり枝から枝に飛び移りながら、現場に急ぎます。

「見えたー！」

「ライ！ ヤバいわよ！ 早く倒しなさい！」

「ウインドニードル！ いっけえー！」

沢山のウインドニードルを浮かべた瞬間に、オークに向けて発射！

シュパパパパッ！

「いやあー！」

あちこち服が剥ぎ取られながらも逃げ惑っている女の子に、ガバツと両手を広げながら覆い被さるうとしていたオーク達の眉間にウインドニードルが突き刺さり、後頭部へ抜けて行きました。

それを残りのオークにも一匹一発ずつ撃ち込み、オーク達はビクンツと痙攣けいれんした後そ

の場に崩れ、動かなくなりました。

「ライ！ まだまだ集まってきているわよ！ 大丈夫なの！」

「うん！ 任せて、収納！ そして土魔法！」

十匹ほどいたオークを収納し、女の子の足元から土魔法で太い柱を作り持ち上げ、僕も女の子の横に木の枝から飛び乗りました。

「大丈夫だよ。動かないでじっとしててね。まだまだオークが集まってきているから」

「ひっ、ひゃい！^{はいっ！} うぎよきま^{動きよきま}しえん^{せん！}！」

足元が持ち上がった拍子にしゃがみこんでしまった女の子は僕の足にしがみつき、ガタガタ震えていました。

ムルムルとテラを肩に戻して、女の子の頭をナデナデしながら、集まってくるオーク用に、ウインドニードルを大量に浮かべながら、広範囲の魔力をぐるぐるさせていきます。

僕が作ったこの柱にたどり着く前に動きが鈍り、そこに向けてニードルを発射して行きます。

森の奥から次々とこちらに向かって走って来ます。

「ライ！ あの一番奥つてオークキングよ！ 気を付けて！ 手前にジエネラルと回復魔法を使うヒーラーもいるわ！」

テラは少し止まって、何かを考えているようです。

「あれ？ そんなのライのぐるぐる使えば特殊スキルがあつても魔力が乱されて発動しない？」

「うーん。今集まつてきているオーク達はもうぐるぐるしているから、まともに魔力を使えないから、魔法もスキルもたぶん使えないと思うよ？」

ウインドニードルを放ち、倒れたら収納を繰り返しています。

「それに、打ち止めかな？ だんだん奥から出てくるオークがいなくなってきたしね。」

オークの王様は最後にして、一気にやっちゃいますね、ほいっと！」
ウインドニードルを、オークの頭の高さに作り、一気に放ちました。

シュパパパパッ！

「からの、収納！」

「ねえライ、オークキングが、「え？」って顔してるわよ。」

キョロキョロまわりを見渡すオークキングは、いきなりまわりの仲間が倒れ、倒れたと思つた次の瞬間に消えてしまった訳ですからビックリするでしょうね♪

「あはは♪ ちよつといじわるだったね♪ ウインドニードル！」

次の瞬間、眉間を撃ち抜き、オークキングは収納されました。

「よし♪ ムルムルのごはんはもうしばらく狩らなくても十分かもね♪」

「あはは♪ 今の何匹いたと思ってるの、ムルムルでも流石に食べきるまで何年もかかるでしょうね♪ それよりその子の事はどうするの?」

「ん? どうするって? ねえ君、そう言えば何でこんな森の中に? 迷子?」

「い、いえ、迷子違います。この森のエルフの村から追い出されちゃったの、だから外の町に行こうとしていたのだけど、もうちょっとの所でオークに見つかっちゃったのです」

「おお〜♪ エルフなんだ♪ 耳が長いからもしかしたらって思ってたんだ♪ うんうん綺麗なお顔もイメージ通りですよ♪ あっ! これは、魔物に襲われる女の人を助けるテンプレなんじゃ!」

で、公爵令嬢は盗賊の時にテイで、達成したのですから、王女様かも!

「て、てんぷれ? よく分かりませんが、助けてくれてありがとうございます」

「ねえ、なぜエンシエントエルフのあなたが村をおいだされるわけ? 普通ならエルフの王になって当たり前の種族よ?」

おお! もしかして女王様なの!

「えんしえ? よく分からないですが、私の村はハイエルフの村なので、私だけみんなとは違うのです」

村なら違いますね、ああ! また駄目な癖が、今はそれよりうつむき加減になり、僕

の足に額を押し付けながら話を続けようとしてるこの子の事を考える時間です。

「なんでも数千年に一度あるか無いかの突然変異のようで、十歳の洗礼の儀式で、私だけがハイエルフじゃないと分かり、いじめが始まりました」

鼻をすすり、それでも話を続けます。

「みんなとは違つても父さんと母さんがギリギリまで庇つてくれたの。でも私、外の世界を見てみたくて」

顔を上げ、見詰めてきます。

「父さんと母さんを説得して出て来たのにオークの群れに見付かつて」

「なによそれ！ バカじゃないの！ エンシエントエルフはその辺のエルフやハイエルフなんかより魔力も素質も何もかも優れているのよ！ ライ！ この子私の弟子にするわよ！」

「うん♪ 僕もそう思つてた♪ いっぱい凄くなつて見返してやれば良いんだよ♪ そうです。僕はライリール、ライつて呼んでね♪」

「私はテラよ！ そして私の騎獣ムルムルよ！」

ぶるぶる♪

「ふへ、わ、私はプシユケ、ライ、テラ、ムルムル、よ、よろしくお願いします」

プシユケは綺麗な金髪を後ろで一つに縛つてとんがり長耳がピコピコ動いています

本当に肌も白くて大きく青い目がキラキラ綺麗です。ね。

何だかんだで、ちようどお昼になったので、足元の柱を消して、地面に降り立ち、服はパンツ以外無事なところが無いのに、怪我がなくて良かったのですが、テラが怒るので、おっぱいが見えたままのプシユケに僕の服を着てもらいました。

「服ありがとう♪ 着替えが入ったリユックも無くしちやつたからお金もないから買えないし、今は裸ん坊でも寒くないから良いけど、どうしようかって思ってた♪」

「はああ、プシユケも、ティやファイアと一緒に、ムルムル、私達がライとこの子をまともな大人に育てましょうね」

ぶるぶる！

小道に戻り、お茶用に火をおこしてお湯を沸かします。

献立は、オークの燻製を少し焼き火であぶり、僕が形を作ったパンに挟んでサンドイッチにしました。

そして、お昼ごはんを食べながらプシユケにも、早速ぐるぐるを教えます。

まだ魔法などは教わっていないなかったので、やり方だけを教え、暇があればやるんだよって言うておきました。

ムルムルも、「これがお手本！」って感じで魔石を回しています。

それが前みたいにぐるぐるんと回すのではなくて、ちゃんと魔力が回り始めています。

テラは、それを見て、うんうん頷きながらポムポムとムルムルを優しく叩いています。プシケは始めたばかりなので、動くわけありませんが、でもそれだけでは旅がしにくいので、短剣と手槍を持って貰うことにしました。

「うんうん、似合ってるよ、着た感じキツいとか緩いところは無いかな？」

プシケは色々体を動かしてたしかめているようで、曲げたり捻ったりしています。

「はい♪ ちょうど良い感じですよ！ 確か冒険者と言うのですよね？ ずっと昔に冒険者が、村に来たことがあるらしく、伝わっていた格好がこんな感じって言っていました」

「うん、冒険者だよ。少し先になるけど、町に寄ったときに登録して、パーティーを組もうね」

「はい♪ よろしくお願いします！」

こうして、テラ、ムルムルに続き、新しい仲間と旅をする事になりました。

第43話 異世界転移者達は今

「ふあああ、なんだ？ 何でこんなところで寝てるんだ？ おい、お前ら起きろ！」

「んぐ？ な、なんだここ？」

「イテツ！ 何すんだよ！」

俺は、みんなを軽くシバいて回り、それでやつとみんなが起き出した。

「おい、お前ら！ また俺達はどっかに置いていかれたか、いや、今回は転移したのか？」
まわりを見たら遠くに森っぽい物が見える、後は草原とポツポツ岩が見え、さらに遠くには山が見えているくらいだ。

「転移か。ありそうだな。って事はあつちに見えるのがもしかしたら、東の森って事だな」

「おおー！ 転移だ！ で、誰の能力だ？ それとも、ゲームだしあれか？ ご都合主義か？ それか、えーつとなんだつけチュー何とか！」

ゲーマーの俺からすれば、五人全員が揃って気絶、これは俺達が揃った時に発生する強制イベントだと考えるのが当然だ。

「おう、その通りだ。俺達が揃って気絶していたんだ、五人の魔力を使って転移したとみ

て間違いないな。そして、見えている森があの悪徳商人が向かった森だ。間違いない！」

「おお！ 流石ゲーマーはスラスラと正解が分かるんだな、その発想はシューティングしかしらない俺には分かんねえぞ」

「お、俺も分かってたぞ！ こんな常識だぜ！」

「お前から頭良いな！ クソー俺もゲームしとくんだったぜ！ んじゃ、あの森に向かうんだよな？」

「おう、とつと追いついて、有り金巻き上げてやろう！ ついでに俺達の専属馬車にするつても良いな、あははははは！」

「おつ、馬車良いな、歩くのめんどろつて思つてたんだ。よし、取っ捕まえに行こうぜ！」
たまに出てくるゴブリンを追い払いながら、絶対あのゴブリンはレア物だ、俺達の魔法を受けてもちよつと傷付くだけで向かって来やがったし、絶対魔法防御のスキル持ちだ。

だが俺達は夜の武器屋で拾った武器を振り回し何とか全員が無事な状態で乗り越えた次は、スライムの大群だ。

奴らは俺がやってきたゲームとは違い、ブヨブヨなのにスゲー防御力がある。

いくら剣や槍でシバこうと、ブヨブヨして潰れねえ。

魔法は吸い込みやがるし、だから俺達はさっさと、避けて森へ向かう。

「なあ、またオークでも落ちてねえかな？」

「おお、あれはラッキーだったよなあ、魔法の革袋付きで落ちてたし、金も入ってたしな。まあチュー何とかだったからつてももあるからだろ。主人公の勇者パーティーが冒険者見習いじゃ話が進まねえからな」

「だな、あれで登録しに行つてすぐのランクアップ、オークを出した時の受付の姉ちゃんの顔、あれは俺達の誰かにぜつてえ惚れてるぜ」

「だが、それは俺にだな」

「「いやいや」

「ひでーな！」

「んな事より、ステータスが見れないつてのが使えねえゲームだよな。教会とかで聞くパターンか？」

「だろうな、そこはマジでハードモードだけ、魔法も、叫ばねえと出ねえし、なんでシヨボい水と火しか出ねーんだよ！」

レベルアップしてねえ今はボールしか出ないからなあ。

「俺なんか風だぞ、お前から水も火も見える魔法が出るじゃねえか！ 教えろよ！」

「つてか、腹減つてきたな、森の入口で飯でも食うか、まだ袋にたんまり残つてんだろ？」

「おう、酒も一年分はあるぜ、飲むか？」

そんな事を言いながら、森の入口に到着した。

「てかよ、さっきの分かれ道の看板に帝国↑ってあったじゃん、先回りしねえか？」

「どういう事だ？」

「悪徳商人はこの森でなんか拾いに来たんذار？ じゃあ俺達は先に帝国へ向かえば良

いじゃねえか、態々森の中に探しに行かなくても勝手に来てくれんذارうが」

「頭頭丈夫か？打ったのか？」

「お前らひでーな！」

「あははははは！ それ採用だな。森なんか入っても仕方ねえし、先回りするぞ」

「んじや前祝いに一杯やるか！」

「飲おもう！」

そのまま飲み食いし続け、適当に焚き火を囲い、寝ることにした。

「んあああ、朝か、げふつ、飲みすぎたな。おら！ 起きろ！ 今日中に次の町に行こうって言ってただろ！」

まったくこいつらはだらしねえ奴らだぜ。

「ふああ、てめえも蹴んなよ、ほら起きろ！」

「っ！ いてえな、げふっ、はああ、歩くのか、乗り合い馬車でも通らねえかな」

俺達は、干し肉を嚙り、ワインを飲みながら、看板のあった場所まで戻り、帝国に向けて進む。

「いや、通つてくれて助かったぜおっさん！ おら、お前らも馬車を止めた俺を褒めても良いぜ！」

「わーえらいえらい」

「なげやりだな！ たたくよ、んでおっさんは帝国に行くんだろ？」

「はい♪ 売るものが出来ましたので（笑）。大銀貨にはなりますね♪ あつ、皆さん、この腕輪なんですがいかがですか？ 丈夫なツノガエルの革で作つてあるのですが」

おっさんは、五つの腕輪を渡してきた。

「ん？ おお、中々カッコいいじゃねえか。嵌めてみても良いか？ つか嵌めちゃうけどな、あははは！」

そして俺達は、革の腕輪を嵌めた。

「おお、良いじゃんぴつたりサイズが、変わるんか」

「おっさんこれくれるんだろ？ つか返さねえけどな、あはははは！」

「うんうん」

「あははは♪ はい♪ それは皆さんにお似合いです♪」

「だろ。おっさん良いやつだから酒をやるよ、今晚にでも飲んでくれや」

「はい♪ 臨時収入も手に入る事ですし美味しくいただきますね♪ あははは♪」

「んじや、帝国まで頼むぜ、俺達は、適当にこの積み荷でも物色しとくから。おい、良いの探せ！」

「任せろ！」

その時、おっさんが何かを言った。

「命令です。黙って下さい。大人しく座って動かないで下さい。盗賊ども」

何て言ったか理解出来ないが俺達は口が聞けなくなり、その場に座り、動けなくなつた。

「はああ、まったくこいつらはどこにでも出てきますね。盗賊っていう奴らは」

何！ 盗賊だと！ んな訳あるか！ 俺達は勇者になるんだぞ！

「まあ、冒険者ランクAで、商人やつてる私に向かつて来たのですから終わりですね。それにオークを倒して血抜きのため放っておいた時に無くしたと思つていたその革袋の元持ち主ですから後で返して貰いますし、今渡されたワインも、元々は私の物ですので、犯罪奴隷を売つたお金で美味しい夕食と、私のワインを美味しくいただきますね♪」

嘘だろ！ 木にぶら下げてあつたが、誰もいなかったじゃねえか！ 革袋もテントも

俺達のためにあつたんじやないのかよ！

「それから帝国まで数日かかりますので、大人しくして下さいね。帝国の奴隷死亡率は高くは無いですので、頑張つて鉾山にでも行って下さい♪」

なんでだあー！

心の中で叫ぼうが声には出来ず、数日間の馬車の旅が始まった。

第44話 ハイエルフの村 ①

小道を森の奥に向かつて進んでいると、ぽつかり木々が無くなりサーバル家のお屋敷くらいが空き地になっていました。

その空き地に小屋がぽつんと建っていて、その横にはこんもりとした物がいくつもあります。

「たぶん人族の炭焼き小屋ですね。この森にたまに来てるって聞いたことがあります」
プシユケがそれを見て、教えてくれました。

「へえ、ここに寝泊まりしながら炭を作っているのか。だから小道に馬車にしては幅の狭い轍わだちがあつたんだね♪ 納得です♪ プシユケ、ちよつとだけ窯の造りを覗いてみるから待っててね♪」

「はい。そつちが窯です、村にもありました。でも屋根は魔物に壊されているみたいですね」

窯の入口は土壁みたいな物で蓋をされているので中を見ることが出来ませんが、全体は丸くこんもりと膨らんでいます。

「いくつもあるから結構大量に作っていたみたいですね。家の方はと」

扉に手を掛けるとやっぱり閉まっていました。

「ん、次はいつテントが張れる場所があるか分からないので、今日はここで泊まることにしましょう♪ テントを出しますね」

「扉が開いていれば一晩だけ借りられたのですが残念ですね。でもテントって私好きですよ♪ 村から出て三日テントで寝ましたから。一人は寂しいですが。あはは」

「だよね♪ 僕なんか冒険に出る前も家の前でテントを張って、遊んだよ。そして焚き火をしてハサミエビを焼いて食べたりにしてたんだ♪」

「まあ！ それは楽しそうです♪ あつ、手伝いますね♪」

二人で小屋と窯の間にテントを張り焚き火の用意もおきます。

するとテラが一つの方向を指差しました。

「ねえライ。この方向に目的の木があるんだけど、何か感じるのよ。ちよつとライも見てくれない？」

「いいよ♪ ん、ほいっと！」

テラが指差す方向に魔力を広げ伸ばしていきます。

すると壁があるように感じました。

「壁がありますね？ ん、それも炭焼き窯みたいにこんもりとした感じかな？」

「それね。あの木を覆おおえるほどの結界を張っているなら中々のものね」

「あつ、それがいた村だと思ひます。御神樹様の根元に住んでいましたから」
御神樹様か、うんうん相当高い所まで結界があるようですから立派な木なのでしょうね。

「そうなの？ プシユケ、私達はそこに寄りたいのだけど大丈夫？ なんなら隠れていても良いわよ？」

「いえ、父さん母さんに冒険者の仲間が出来た事を報告出来ますから一緒に行きましよう」

夕ごはんを食べ、一緒にテントで寝て、魔物の襲撃もなく夜が明けました。

朝ごはんはサンドイッチにして、食べ終わり片付けをして出発です。

炭焼き小屋の空き地からは道無き道、本当に獣道を進む事になりました。

方角は、壁（結界）目印にしていますので、迷う事はありませんが下草をかき分け進むので、どうしても時間がかかってしまいます。

「ん、プシユケが三日かかったつて言う原因はこの下草があるからですね。よし、プシユケを背負つて、木の枝を使い進みましょう♪ おいでプシユケ」

「へ？ 背負うのですか？ 私を？ ですか？」

「うんうん♪ んくと背負子があつたはず、あつた！ はい、乗つて♪」

僕はずつと前マシユに頼まれて作った薪用の背負子、僕に合わせて作ったのでマ

シユーには小さすぎて、使えなかった背負子です。

それを背負いしやがみこんで、プシユケが乗るのを待ちます。

「じゃあ乗りますよ？ 良いのかな？ よいしよ」

プシユケが前向きに乗ったので、立ち上がり、ロープを使い僕とプシユケを結びます。

「よし♪ これでプシユケが落ちることはないね♪ んじやくムルムルとテラは昨日と同じで抱えるね」

「頼んだわ♪ でも落とさないでよね、しつかり持つててよ！」

「は〜い♪ よ〜い、ドン！」

びよんびよん枝から枝へ跳び移りながら進んでいると、下から見上げているゴプリンさんがいて、「えっ？」って顔で見えてきましたが、ウインドニードルを飛ばしやつつけながら進んで行きます。

「はわわわ！ はや！ 速いです！ 高いです！ もう山菜を採りに来ていた場所ですよ！ もう少ししたら大きな岩がありますので、そこで止まって下さい。中に入るのにやり方があるんですよ」

「ん〜、分かりました。あ、あれですね〜♪ と・う・ちゃ・く〜！」

スタツ

「着地も完璧！」

「凄いです！ 私が三日かかったのに、半日もかかっていませんよ！ ライ凄すぎです！」

「ぬふふ。頑張つて修行した成果なのです♪」

着地した目の前には大きな岩がちょうど門のようになっていて、横並びの岩の上に橋渡し状態で岩が乗っています。

そこから入るんだと思うのですが、見られてますね。

とりあえず門番さんのところに向かいましょうか。

そして門番さんに声をかけようとした時門番さんから声がかかりました。

「生まれ！ 人族がこの村になんのようにだ！」

「この村にある木の様子を見に来たのですよ。以前その木のお世話をしたそうですから」

「ならん！ ここはハイエルフの聖地！ 野蛮な人族など入れたのは相当昔の事だ！

貴様のような子供がいつ世話が出来ると思っている！ 帰れ！」

あら、簡単には入れてもらえないようですね。

背中から弓を外し、矢も矢筒から引き抜き僕に向けて構えてきました。

「ちよつと待つて下さい！ 私です！ プシユケです！ あ、あのライ、下ろしてもらえますか？」

「ん？ 良いけど、今弓矢で狙われているからきをつけてね」

「は、はい」

「まあ危なくなっても僕が守りますから」

結ゆわえていたロープを外し、しゃがむとプシユケは、「よいしょ」と背負子から降り、門番さんに向きなおります。

「プシユケか、三日前に出ていったと聞いたが、何しに戻ってきた」

弓矢は構えたままなので、少しぐるぐるさせておきましょう。

「ライ、この結界破れるわよね？」

テラはまた耳たぶを引つ張りながら小声で聞いてきます。

「うん。思ったより簡単そうだよ。 やっちやう？」

「くふふふ。まあ、そうなのね♪ なら今じゃなくても良いわ。入れてもらえないならその時破れば良いだけだし。でも弓矢はちよつと嫌ね。プシユケの話が上手く行けば良いけど、ダメなら引く前に気絶させるのよ」

そうですね。気絶した瞬間に矢が飛んで来ちゃいますし。

「うん」

「冒険者になり、共に活動する仲間が出来たので、父さんと母さんに報告しに来たので。どうか入れてもらえませんか？ ちゃんと通行の札を持っています」

プシユケは、首からネックレス。紐で小さな木札が吊つてあるだけの物を門番さんに見せていますが。

「残念だが入る事は出来ん。今日のお昼にハイエルフでは無い者を産んだお前の母親の処刑が執行される。それを阻止しようとした父親も、反逆者として同じく処刑が執行される事になっている」

えっ？

「だから立ち去れ！ 仕事のじやまだ！」

「うそ。」

何ですかそれは！ 罪なんてどこにもないじゃないですか！

「テラ、もう僕はやっちゃいますよ！」

「やっちゃえ！ そんな理由で私の弟子になったプシユケの親が殺されるなんて許せない！」

「行くぞ！ ほいっと！」

最初に結界の魔力の流れを無茶苦茶にして解除してしまう。

パシツ

「よし！ 次は村の全員をやっちゃうよ！ せいの」

「何！ け、結界が！ 結界が消えただと！」

村全体にぐるぐるを広げ伸ばしていきます。

村人全てを包み込んで――。

「ほいつと!」

プシユケの目の前にいる門番さんはこの場で一気に魔力を発散させて気絶させます!
矢を落とし、足元から崩れるように気絶しました。

「プシユケ! 二人を助けに行くよ!」

「えっ? えっ? は、はい! 処刑なら、御神樹様の所だと! 門をくぐりまっすぐ、

御神樹様の不可視境界が無くなり見えていますからそこに!」

「うん! 急いであの大きな木まで行くよ!」

プシユケをお姫様抱っこして、テラとムルムルはプシユケに抱っこしてもらいました。

「きゃ」

「プシユケ! ムルムルとテラをお願いね」

「は、はい!」

ムルムルとテラを大事そうに抱えたのを見て門をくぐり抜け正面に見える大きな木に向かつて加速しました。

第45話 ハイエルフの村 ②

向かう先の凄く大きな木の方向に沢山の気配があります。

その集まっている気配全員の魔力を発散させながら近付いて行くにつれて人集りがひとだか見えてきました。

その人集りの向いている先には舞台か何かあるのか数名の人達が見えます。

「父さんと母さんです！ 捕まっています！ それと前にいるのが村長さんです！」

見えている内の拘束されている二人はプシユケの父さんと母さんのようで、他の人達は、前に村長さん、二人を拘束している四人の七人です。

「分かりました！ よし、じゃああの舞台の上の人はプシユケの父さん母さん以外を気絶させます！ ほいっと！」

気絶するギリギリまで魔力を発散させておいたので、その効果はすぐに表れ舞台上で立っている者は、五人が崩れ落ちプシユケの父さん母さん二人だけが立っている状態になりました。

それを見たまわりに集まっていた人達は騒ぎ始めました。

「おい！ どうしたんだ！」「あの二人が何かやったの！」「殺されたのか！」「逃げなきや

「！」「こゝ、殺される！」「殺られる前に殺つてやる！」

わらわらと逃げようと、まわりの人達を押し退けかき分け我先にと逃げ出す者達がい
ます。

中には、武器を、弓を取り出し舞台上のプシユケの両親を狙い撃とうとしている人も
います！

「ライ！ 速く気絶させなきゃ！」

「つ！ やつちやいますよ！ ほいつと！」

ぐるぐるを加速させ、集まっている人達を気絶させながら、さらに加速して舞台に。

「父さん母さん！」

「プシユケ！」

「プシユケちゃんどうしてここに！」

倒れた人達を飛び越え舞台に飛び上がりました。

「助けに来たの、門番さんに父さんと母さんが処刑されるって聞いたから」

プシユケが声をかけた時、立っていた最後の人が崩れ落ち、全員を気絶させる事に成
功しました。

「そうか。しかしこれは、何ですれば村人全てが倒れるのだ？ いやそれよりプシユ

ケ、こんな危険なところに、ありがとう助かった」

「本当にもう助からな^いと思つてました。こうなる前にプシユケを外に出せて良かったと思つてましたが、^{ねえ}、プシユケ、今はそんな時ではないかもしれないけれどちよつと気になるの^{その方は？}」

「この人はライ、私の冒険者仲間になつてくれたの。そしてライが気絶させただよ。だよねライ？」

「はい。初めまして、ライです。プシユケと一緒に冒険する事になりました。気絶はです、ね、魔力を発散させて、魔力欠乏にする事で気絶させましたので誰も傷ついてはいませんよ」

「ふむ、スキルか何かかな。いや、そんな事より、ありがとう本当に助かった。助かったのだが、^{なぜライ君は娘を抱っこしているのかな？}」

なぜか笑顔なのに怒っている気がしますね？

「私も気になつていました。プシユケちゃん。どういう事？　もしかして結婚？　母さんはまだプシユケちゃんには早いと思うの」

プシユケ母さんの方は僕の事を頭の前から足の先まで観察して興味津々つて感じですかね。

「ん？　あつ、抱っこされたままでしたね。ライ下ろしてくれるかな？」

「あはは、すっかり忘れていました」

完全に忘れていましたね。そつと足から下ろして立つてもらいました。

「よいしょ。今日処刑されるって聞いたから急がないといけなかつたので、別々に走るより僕が抱っこして走った方が早く走れますから、抱っこさせてもらいました」

「そうだよ、私が走るよりずつと速く走るんだからビックリしちゃったよ」

「ふむ、プシユケ、憧れていた冒険者になるんだな」

「うふふ。そうね、でもこれからどうしましょう。この村にはもう私達のいる場所が無いですから」

「そうだよね、二人とも、ん！」

「そうだ！ サバル男爵領に行きませんか？ 僕の生まれた所なのですが、ここと同じ様に森も沢山あります！」

「そうです、開墾が進まない森がまだ沢山ありますからね♪」

「ふむ、そうだな、このままこの村に残るわけにはいかんからなお前はそれで良いか？」

「ええ。あなたが決めて下さい♪ 付いていきますよ♪」

くふふふ。仲の良い夫婦です♪

ファイアとティとこのプシユケ父さん母さんみたいにならずと仲良くしたいですね♪
学院が終わったら、一緒に冒険の旅に出掛けるのも良いかもしれませんね♪

そんな事を考えていると、いつの間にか僕の肩に戻ってきていたテラが耳たぶを引っ張りながら僕に

「ねえライ、この子もうダメみたい。永く生きてたけれど限界のようね。んんん。よし、良かったわなんとか残してあるわね。ライ、この子の凄く高い場所に実が一つだけ残ってるの」

くいくいつと耳たぶを。

「うん任せて、木登りは得意だから、行くよつ、ほいつとー」

僕は舞台端から木に向かって飛び、幹をつたつて一番下の枝まで飛び上がり、するすると微かにこの木とは違う魔力がある場所に向かって登って行きます。

途中剥がれかけた樹皮もあって、本当にもうすぐ枯れてしまうだろうと、感じました。そして木の中腹、百メートルは登った所に樹洞じゅどうがあって、僕でも余裕を持って入れる大きさ。

その中に、どうやって入れたのか分かりませんが、小さなプチマトくらいのおおきさしかない金色のリングが一つありました。

「それよ、それをちょうだい」

「うん、また頭にのせるの？ プチマトくらいあるけど重くない？ ほら」

テラは抱えるようにリングを抱えると。

「よいしょ！ おろろつ、中々重いわね♪ 今からしばらく私が栄養をあげるから元気に育つのよ」

そう言うのと、頭に乗せてしまいました。

「この感じだとしばらくかかるわね♪ ちよつと重いけれど問題ないわ♪」
うんうんと満足そうに頷くテラ。頭にもう一つ頭が乗ったくらい背が高くなつてます。まあ本人が良いなら良いんでしょう。あはは。

そして樹洞から出ようとした時

ミシミシ

「寿命ね。なん万年も良く頑張ったわね。この子は私が良いところを探して植えておくから安心してね」

ギシイッ

「え？ 傾いてない？ っていうかこの木の魔力が一気に抜けていつてるよ！」

「寿命が尽きたのね。もう少し先かと思つていたけど。ライ。その魔力を集めてくれな
い？ そしてこの子に」

「了解！ 集めながら下に降りるよ！ ぐるぐる、ほいっと！ それっ！」

僕は勢い良く樹洞から出ると、枝から枝に跳び移りながら下へ下へと飛び降りて行きます。

その間も徐々に傾き続ける御神樹様。

「んあ〜！ ヤバいよ！」

「まずいわね！ 下の村が壊滅するわよ！ 根っこごと倒れそうだし、大穴も空いちやうわ！」

「えつとえつと、収納しちやおうか！」

「そ、それよ！ それしかないわ！」

「んじゃ行くよ！」

そして最後の枝から舞台に飛び降り、ゆつくりと傾いてくる御神樹様を見上げ、収納する事にしました。

「お疲れ様です。良いところを探しますね。収納！」

集めていた魔力が止まり、完全に寿命が尽きた事が分かり収納しました。

「くうつ、結構ギリギリでした」

「あ、あの、御神樹様は？」

僕とテラはプシケ達に御神樹様の事を説明。

途中からはテラに任せ、御神樹様から集めた魔力をテラの頭のリングに移し、次に根っこぎ無くなった地面に大きく空いた穴を埋める事にしました。

そして土魔法で埋め直してしまった時、ふと試したい事があったので、この前の団栗

を取り出し、テラの真似をして魔力を移して穴をふさいだ真ん中に植えました。
そして植えたたん！

第46話 ハイエルフの村 ③

ずんずんと大きくなる団栗の木は、あつという間に僕の背丈を追い越し、根っこも地下に広がっているのか、所々ボコボコと顔を出したり、土を盛り上げたりしています。

上にもさらに伸びて成長止まらず見上げるような高さになり、幹もどんどん太くなつて行きます。

「ああー！ なにやつてるのライー！ それは私のやるべき事なのにー！」

テラが舞台を走り僕の足元へやつて来ました。

「どうして！ なんで出来るのよ！ それは大地ゴニョゴニョ、ああもうー！ ちゃんと出来てるしー！」

ムルムルが後ろから追い付いてきて、ぶるぶる。

「どうしたの？」って言ってるみたいに感じます。

「駄目だったかな？ ごめん。テラのやつていたのを見て出来るかなって。」

「はああ、それだけで出来るはずがないんだけど。まあ良いわ、次からは私に相談して！ やり方も教えてあげるからね！」

「う、うん。よろしくね」

「一つ間違うととんでもない事なのよ！ 変化がドライアドならまだ良いけど、トレントになつたりもするんだからね！ んく見たところ大丈夫そうだけど、一応、神眼 んんく、はああ良かった、大丈夫ただの大き過ぎるだけの団栗の木よ、私のものよりは少し小さいくらいね」

テラは凄いい剣幕で捲し立てるようにしやがんだ僕のスポンの裾を引つ張りながらそう言つてきました。

「そ、そうなんだ、あ、あはは、トレントの弱点は火だから森の中で戦うから火事になつちやうしやつつけるの面倒なんだよね。ところでドライアドって？」

「ドライアドは森の妖精ね。力がある木はごく稀まれに生まれ変わることがあるのよ。そうそうドライアドがいる森は豊かになるわよ」

「そうなんだ！ サーバル領に来てくれないかな？ 果実が実る木とか沢山あると嬉しいし♪」

「んく、そうね。旅でこの国一周し終る頃にそこにも寄るでしょ？ その時に頼んであげるわ」

「本当！ ありがとうテラ♪」

そんな事を話している内に、成長も止まり、下から見ているとテラの育てた団栗の木と変わらないくらい大きくなって成長が止まりました。

「ねえライ、御神樹様が新しくなったって事なの？ 木の種類が違うみたいだけと」

「そうだよプシケ。団栗の木に変わったんだ。御神樹では無いと思うよ？ だよね？」

テラとムルムルを掬い上げ、立ち上がりながら肩に乗せ聞いてみる。

「そうね。元々の木も神樹では無かったんだから」

「「え？」」

「だって、ここにあった御神樹と呼ばれていたのはただ大きいだけのリングゴの木だもの、本物の神樹は世界樹よ。別のところにあるし、ドラゴンが護っているわ」

「世界樹！」

おお！ 世界樹ですか！ それは見に行かないとですね♪ 異世界の定番中の定番ですよ！ ぬふふふ、そこに行きつくためのテンプレはドラゴンもいるとぬふふふ。

「ふああ、む？ なぜ私は倒れて。なっ！ お前はプシケ！ アレス、ディオネ！ 貴様達はなぜ拘束を解いているのだ！ 処刑はどうなった！」

村長は立ち上がりながら周りを見渡しています。

「なに！ どういう事だ？ 皆が倒れているだと理解出来ん！ おい！ どういう事だ！ アレス説明をせい！」

村長さんが、思ったより早く目覚めてしまったようです。

「へえ。魔力回復のスキルかな？」

「その可能性はあるわね。調べるわ、んん神眼、違うわよライ、魔道具、魔力回復のピアスを身に付けているわね、しょぼしょぼのヤツだけど。ライのピアスとは比べようもないくらい低レベルの物よ」

そうなのでですね。ふむふむ、なるほど他にも色々魔道具を身に付けていますね、色々魔力を帯びた物がありますからなにをするか分かりません。

僕は村長さんの魔力をぐるぐるさせ、もう一度気絶させる事にします。ほいっと！

「アレス、答えんか！ デイオネでも良い！ さっさと」

ドサツ

「よし。後は魔道具をく収納！ プシユケ、それにえつとアレスさんとデイオネさん、さっさとこの村を出しましょうか」

「はい、そうしましょう。この村に住む事はもう出来ないのでから。しかし素晴らしい物ですね、傷付けずに意識を刈り取るとは」

「本当にそうねあなた。私のお婆ちゃんに聞いた話に出て来るって、それもですけど、今はそんな事を話している場合ではありませんね、早く荷物をまとめませんかといけませんわ」

「うむ、そうだな、すまないが少し荷物をまとめる時間が欲しいのだが」

「あつ、それなら僕が収納で持つていきますよ」

「なんと！ 御神樹、いや、あのリンゴの木を収納出来たのも驚きだがまだ入る方が驚きなんだが。まあ今はそれどころではないですね、分かりました。では家に案内しますの
でお願いします」

そして僕はアレスさんの先導でお宅訪問です。

家に着いてからはもう時間ももったいないので片っ端から収納して行きました。

アレスさんとディオネさんは冒険者の装備をして、そこそこ大きな背負い袋、リュックに必要な物を詰めていきます。

残りの家具などの全てと、他の本や、服、料理道具や、狩猟道具など雑多な物は全部僕が。

全ての部屋を周り、全ての物をを収納してしまいました。

そしてみんなで村の門に向かい、外に出てから村の結界を張り直しました。

「よしよし、結界の形を覚えていて良かったですね。アレスさん、ディオネさん、忘れ物は無いですよね？」

アレスさんとディオネさんは頷いてくれました。

一緒に開拓村に一旦帰ることも考えたのですが、アレスさん達は必要なものだけ

リュックに詰めてあるので自分達だけでサーバル領に向けて旅して行くと言いました。

「ライ君、プシユケを頼みます」

「はい。任せて下さい」

「お願いしますね。それからプシユケ、父さん達もプシユケが生まれるずっと前、若い頃冒険者をして色々と学んだ」

「そうよ。だからあなたも旅をして色々学んできなさい♪ 私は久しぶりにお父さんと二人つきりで旅をします♪ うふふ♪ 次に会う時が楽しみね♪」

「うん♪ 私妹が良いな♪」

「なっ!」

うんうん。良く分かりませんがプシユケの妹なら可愛い子になるでしょうね♪ 楽しみですよ♪

二人は大きめのリュックを背負い、僕たちがこの村に来た方向に進み森に消えていきましました。

僕達は、最初の目的の海に向かって東に向かい、森に入りました。

そして、一日ほど歩き夜営の準備をしていた時です。

「ん〜? プシユケ、この森に違う村ってあるの?」

僕達が向かっている東側に、沢山の人の気配があります。たぶん今日のペースで歩くと数日はある距離ですが。

「うん、この森にある村はあそこだけだよ」

「おかしいですね？ 千人、もつとかな？ でも沢山の人がいるみたいだよ」

「ライ、向かっている方向よね？」

「うん。そうだね」

「帝国の兵士かもしれないわね、一応この森は王国の物だけど帝国ともせっしているのよね？ なら考えるられる事は侵略よね」

「本当に？」

「可能性よ。今から様子を見に行きたいところだけど、この時間から森を歩くのは危険よ」

「うん。そうだね、明日の朝日が昇ったら背負子で行こう。もし攻めいるつもりなら追いついてしまうか、王様に報せてあげないとだよね」

そのため僕達は夕ごはんを食べ、早めに寝る事にしました。

第47話 魔物が近づいて来ているようです

「ねえ、あの畑仕事してるのってエルフさんだよな？」

高い木の枝から眼下を見下ろす感じで目に映るのはたぶんエルフさん。

物凄く大きく開墾された一面に畑が広がり、その中央に町があつて数名ずつに分かれ畑仕事をしているようです。

「ん、良く見えませんが耳が私みたいに長いですからその様ですね。それに大きな町があります♪」

「なによ、慌てて来たのに問題無しっばいわね。一応見ておこうかしら、んん神眼、普通のエルフね。あの村と同じ様に思っていたけどこの町にはハイエルフすらいないわよ。どうするの？ 寄つてく？」

今朝は夜が明けきらない内から出発準備をして、歩くと数日かかる道のりを枝から枝に跳びながら休憩無しで数時間かけ進み、昨日の夜に感じた千人以上いる場所まで来たのですが、見えるのは畑を耕したり、収穫する人々と町を行き来する人々でした。

「なんだかほのぼのしてますね、まあ攻め込んで来そうに無いですし、どんな町なのか見ていきましょうか」

「うん。本当にのんびりですね。それに私がいた村は私以外全員がハイエルフでしたから普通のエルフなんて初めて見ましたよ♪」

「じゃあライ。あの門に向かって進むのよ！」

テラは僕の肩の上で町の門を指差し、なぜかムルムルの上で仁王立ちです。

まあ可愛いので何も言いません。

森の切れ目まで枝を伝い移動して、ぴよんつと木から飛び下りました。

町まで畑と畑の間を通り門前にまで来たのですが、誰も門番をしていません。

「これって勝手に入っても良いのかな？」

「ライ、人様のところに入る時は声をかけるのが常識でしょ。呼べば誰か来てくれるわ

よ」

「うんうん。その通りですね♪ ライちゃんと声かけしましょうね」

「そうだよね♪ よくし！ すいませくん！ 旅の者ですが町に入っても良いでしょう

か〜！」

返事はない様ですね。

「すいませくん！」

「誰だ？ ん？ 見かけない者達だな。ん〜もしかして、ハ、ハイエルフ様でしょうか！

も、申し訳ありません！ 次の作物は出来が今一つでして、もう少しお待ちいただき

たいのですが!」

現れた男性のエルフさんは、プシユケを見たときとたん跪きました。

「あわわわ! わてしは! し、舌噛みました! 私はハイエルフじゃないですよ!」

「そうハイエルフではないけれど、エンシエントエルフではあるけどね♪」

「えんしえんとえるふ? ハイエルフの村から来たのでは無いのですか? それにそれ

はどの様なエルフなのでしょう?」

ハイエルフではないと聞いて、ほっとした顔で立ち上がり膝の土をはらっています。

そこにテラが説明するみたいです。少し意地悪な顔で「あはは。

「エンシエントエルフはエルフの種族では一番数も少なく、一番魔力が高く一番寿命も、

まあ寿命は有って無いような物ね。取り敢えずハイエルフなんかより数段上位ね」

「なんですと!あわわわ!」

エルフさんが驚くのはまあ分かります、慌ててまた跪いています。

それにプシユケも一緒になって驚いていますね。

「わ、私ってそんなに長生きするの?」

「するわよ。現存する寿命がある種族では上位の長生きさんね、確かあの子は三千万年

ほど生きてるわね。ほとんど寝てるけど今度行くことがあったら紹介してあげるわよ、

起きてたらだけ♪」

さ、三十万年って凄すぎるでしょ！」

「はわく、そんな凄い方がいるのですね。」

「そ、それでは、エルフの女王！ ど、どうか不敬な私をお許し下さいませ！」

跪いていたところから、頭を地面に押し付けるような土下座状態になってしまったエルフさんを何とか説得して立つてもらい、町を案内してもらったことになりました。

聞くところはハイエルフの村に食料を献上するためだけに作られた町で、三か月に一度ハイエルフの村に食料を献上するため森に入るそうです。

なぜそうなったのか聞いても、ずっと昔からそうだったらしいです。

その時いつも通りぐるぐるしていると遠くの気配がこっちに近づいてくるのが分かりました。

「ん？ んく、この感じはたぶんゴ布林ですね。テラ、プシユケ、ゴ布林がこちらに向かっていているみたいです。動きはゆっくりなので明日くらいかな？」

「どれどれ、んんく！ そうね、ゴ布林リーダーがトップの五十匹くらいかしら」

「うん。そんなもんだね、リーダーさん一匹だけ魔力が強いもん、村長を思い出したよ、あはは」

「ゴ布林が五十匹ですか、明日なら今からみんなに報せて準備をすれば大丈夫ですが作物を何とかしないと駄目ですね。え？ そ、そんな遠くのゴ布林の気配が分かるの

ですか!」

「うん♪ 僕とテラは分かりますよ」

「そうね。索敵の広さはライの方が広範囲で正確よね。内容は私が上だけどね♪」

「それはテラが本気を出していないからでしょ?」

「まあそうだけど、常時索敵なんかしないわよ私。ライはそうしているから膨大な魔力と類いまれな魔力操作が

身に付いたのね」

「ライ凄いです! 私も頑張りますね♪」

「分かりました、ではどの方向から来るか分かりますか? それが分かれば対策も取りやすいので」

「方向はつて言うより僕がやつつけちゃいますよ? もう気絶させちゃったしね。また戻ってきますので、門のところにおいて下さいね♪」

僕はプシケを背負ったまま、走りだしゴブリンを目指します。

「あつ! 気絶させたゴブリンに何か近づいて来てる! 早いよ!」

「そうなの? ん、魔狼ね。放つとしてもゴブリンを始末してくれそうね」

「魔狼ですか? ライ、魔狼にゴブリンをやっつけさせて、ライが魔狼をやっつければ毛皮が売れますよ」

「そうねムルムルのごはんはまだ余裕あるしそうしても良いわよ」

「そうだね。じゃあ少し様子を見てやっちゃいましょう♪」

そうして少し余裕を持って現場にきました。

木の枝から眼下を見ると、もうゴブリンはほとんど生き残っていないです。

魔狼の群れの中で一匹だけ少し大きな魔狼がリーダーのようです。

「ふくん、あの大きい子ちゃんと仲間が食事している間まわりを警戒してるじゃない」

「そうだね。どうしようか、やつつけるつもりだったけど、ゴブリンを倒してくれるなら

このままの方が良くないかなって思ってきたんだけど」

「魔狼も畑を荒らしちゃいますよ？ それに群れが結構大きいのでその内被害が出てし

まうかもです」

「そうね。まあライの好きにすれば良いわよ」

「んー、そうか、どちらにしても畑は荒らすし、人を襲っちゃうなら倒しておく方が良い

ね。じゃあー、ぐるぐるです！ ほいっと！」

魔力欠乏でバタバタと気絶して倒れていく魔狼をそれを見たリーダーの魔狼はキョ

ロキョロと辺りを見渡し僕達を探しているのですが、リーダー以外はもう動く事が

無くなりました。

「おお、やっぱりリーダーですね。でもあと少しですよ。ウインドニードル！ ほいっ

とー」

次々に魔狼を倒し収納していきますが流石はリーダーさんは最初のニードルは素早く動き避けたのです、そして見つけた僕達に向かつて突進して来て後少しのところで魔力切れになり。

プシュッ！

眉間に当たったニードルでその場に倒れ、まだ食べられていない全てのゴブリンと、魔狼は収納されました。

「おお！ 流石はライ♪ あつという間だね♪」

「あはは♪ ありがとう。さてさて残りはどうしましょう。ムルムルでもここまで多いと無理だよね？」

「どうなのかしら？ ムルムル、三十匹ほどいるけど食べちゃえる？」

ぷるぷる

「なんだかいけそうだよね？」

「じゃあムルムルを下ろしてやってくれるかしら」

「うん。じゃあムルムル頑張つてね♪」

枝から飛び下りてムルムルを地面に下ろすと、みによくくと伸び広がると、数匹ずつ一気に包み込み始めました。

第48話 エルフの町の今後について

「ムルムル凄いいよ！ 凄いですけどお腹は大丈夫なの？」

辺り一面に散らばっていたゴブリンの血液なんかも全て綺麗に取り込んで戻ってきました。

ふるふる

「もちろんよ♪ ムルムルは私の騎獣ですもの♪ こんな余裕よ♪」

ふるふる

余裕そうです。

「あはは♪ よしこれで取り敢えずの心配は無くなったね。戻るよ」

ムルムルを地面から掬い上げ、肩に乗せます。

そう言えばプシケは背負子に乗ったままでしたね。

「何だかんだでそろそろお昼ごはんだよね、早く帰ってお昼ごはんにしよう」

「はい、私も背負子に乗っていただけなのですが、お腹は空きますね♪」

「でしょ♪ よし帰ろう」

ここに来た時と同じ様に枝から枝へ。

「あつ！ これってクルミだよね！」

途中まで帰ってきて気付いたのですが、ポコポコ緑色の果実が実った木がそこかしこにあつて、行きには気付きませんでした。が沢山ありました。

「まあ！ そうです沢山ありますよ！ 村の近くにもあつたのでよく採取しに行つてました！ ここは沢山あるので取り放題です♪」

「あら、気付いてなかったの？ この辺りは結構広い範囲でクルミが群生しているから私用に一つ残しておいて、木の半分くらいは取つちやつても良いわよ。野生動物もこの辺りはあまりいないから」

「そうなの？ イノシシさんとかいないのかな？ 後はサルさんにリスさんとか？」

「リスはいるけれど、イノシシやサルは魔物にほとんどやられちゃつてこの辺りにはいないわ。海近くにはいるかも知れないわね」

「ならリスの分を残してクルミを取りましょう！」

プシユケを背負子から下ろして、籠を渡してあげます。

僕は木に登つて枝から、プシユケは低い所と落ちてしまつている物で虫食いしていないものを拾いながら籠にある程度集まつたら僕が収納をします。

途中やつぱりお腹が空いたのでマシユー特製シチューと、僕が色んな魔物の形にした魔物パンでお昼を済ませ、何籠収納したのか分かりませんが採取を終え、町に戻つた時

はもう夕方でみんな畑仕事が終わったのか外には誰もいませんでした。

ですが町の中には昼間と違い大通りには人が溢れていました。

門のところまで再会した朝の門番さんに連れられ、泊まるところを紹介してもらいます。

「ここは外から人が来ないから宿はないんですよ。ですから私の家で泊まって下さい」

指差したのは大通りを進み広場に面した家が門番さんの家のようです。

「そっかー！ ハイエルフの村も、このエルフの町も知られてないですからね。でもどうやってこんなに人が集まったのですか？」

家に着き、応接室のような部屋でお茶をいただきながらちよつと疑問だった事を聞いてみました。

「元々ここには小さな村があったそうです。伝わっているのは海の向こうからこの地に流れ着いたのが始まりと」

へえ。海の向こうにも大陸があるとは知っていましたが。そんな昔から海を渡る船を作っていたのですね。

「そしてこの場所を切り開き村を作りました。そしてその小さな村から出ていく者がいて、そしてその者達に聞いたのか、この村に来るものが現れ、出ていく者より来る者が

増え、村から町になっていったのです」

ほお、少しずつ増えて沢山になったのですね。こんなに開墾できるのでしたらサーバル男爵領の領地を開拓してもらいたいですね。

あつ、そうするとハイエルフの村の食料が……ん？ それは自分達でやつてもらえば良いのかな？

「あの、少し聞いても良いですか？」

「はい。何か分からないところがありましたか？」

「いえ、皆さんはここでハイエルフの村の用の食料も作っているのですよね？ なぜそんな事になって、いるのかなって気になったので」

「ああ、それは……それはなぜそんな事をやり始めたのでしょうか……」

腕を組み考える体勢になった時、腕に魔力を帯びた質素な腕輪が見えました。

「ねえテラ。こここゝの皆さん同じ腕輪かネックレス着けていて、それらそれらか魔力が出てるのですよ。これって」

「ちよつと待つてね。んん神眼！ あちやくそのせいね。これって偽装されているから普通なら分からないけれど奴隷にする魔道具よ」

「「なんですと！」」

エルフのおじさんは信じられないって顔で叫び、プシユケは口に手を当てこちらも信

じられないって顔をしています。

「じゃあそれを取ってしまえば良いのかな？ どう思う？」

「そうね、取ってもまだ食料を渡すって思っているなら良いけど、たぶんそんな人はいないでしょうね♪ うふふ♪ プシユケの両親を殺そうとした仕返しが出来そうね♪」

「えー！ じ、じゃあ」

「うんうん♪ あの人達にはあの人達で頑張つてねつて事かな♪」

「それにこの土地はしばらく休ませないとどんどん収穫量が減るはずよ。そうでしょう？」

テラはそんな事を言いましたが、どうなのでしょう？

「は、はい。ハイエルフの村に食料を持っていった後の残りではこの冬を越すのは難しいかと。収穫量は年々減り続けここ数年は毎年冬になると食べるものが少なく何人か亡くなっております」

おお、流石テラ。植物に関してだからお見通しなんだね。でも
 「そんな 私達って」

やっぱりそれを聞いたプシユケはうつむき、黙ってしまいました。

よし、なににせよまずは奴隷の腕輪を使えなくしてからです！

「じゃあそれ使えなくしても良いですよね？」

「そうね、ライやっちゃいなさい！」

「うん、よろし！ 町ごといつくよ！ ほいっと！」

町全体に魔力行き渡らせ、奴隷の魔道具に内封されている魔力をぐるぐるさせて吸い上げてしましましょう！

どんだんこの家の上空に魔力を集めて行きます。

すると家の外から沢山の怒声が聞こえました。

『俺達は今まで何やらされてたんだ！』『嘘っ！ 去年死んだ娘が生きられたかもしれないの！』『うちの息子もだ！ まだ三歳だったんだぞ！』『こんなところにいられるか！ 町長だ！ 町長に相談するんだ！』『よし！ みんなを村長宅の前に集めるんだ！』『分かった！ よし！ そっちのお前は、すまないが長老達も呼んで来てくれ！』『分かったわ！ 馬車で迎えに行つてくる！』

何やら騒がしくなってきましたよ。

「ねえテラ、ヤバくないかな？」

「くふくふ。ライ、あなたのお父さんの領地に招待してあげれば？ 開墾する場所はあるのでしょ？」

するとその事を聞いていたのか、ズザザと膝をついたままこちらに向かつてきました。

「ほ、本当ですか！ この町の住民全てが行く事は無いかもしれませんが数千人、いくら少なく見積もってもも千人は移動しかねませんよ！ この町には三千人近くいます、それでも大丈夫なのでしょうか！」

「はい、たぶん全員来ても大丈夫ですよ。山や森もありますが、大きな川と湖、それに支流も通っていたし、草原もまだまだ沢山ありますし、開拓し始めてそんなに経っていないですから手付かずな土地はいっぱいありますね」

跪いた体勢のまま僕の言葉を真剣な目で見ています。

「その土地だつて父さんが若い時に戦争で武勲を上げ騎士爵から陞しょうしゃく爵して男爵になったのと同時に領地をいただいたそうで、まあ元々は誰も見向きもしない辺鄙へんびな場所なので国の直轄地でしたし、今も少ない人達で細々と開墾している最中ですから」

「きつ、貴族のご子息様でしたか！ ぶご無礼いたしました！」

詰め寄っていたのに、向かってきた時とは逆に、ズザザと離れていきました。

「くふふふ。良いですよ♪ 僕は三男ですから家は継ぎませんので♪」

叙爵は決まっていますがこの場では誰も、テラとムルムルは知ってますが内緒で良いですよ。

「ほつ、ではお父上の領地に私達が行く事になっても良いのでしょうか？」

「この森には住んでいる人がいるなんて知らないと思いますので、ここの領主さんもい

なくなっても気付くことは無いでしょうね♪」

「な、なるほど。ではその事を皆に報せなければなりませんね町長として」

えー！ 町長さんだったの！

横を見ると目の前のテラも、横に座っているプシユケも驚いているようです。

コンコンコン

『町長、皆さんが町長に合いたいと前の広場に集まってきましたが』

「分かった！ すぐに行くので広場を照らすように、篝火の用意を頼む！」

『はい、分かりました』

「では私は皆のところに行きます。サーバル男爵領、場所は知るものがいれば良いので

すが」

「一番近くの町で聞くのが一番かな。そうだ！ 手紙を、父さん宛の手紙を書きますね

♪

「はい。助かります！ では後程！」

町長は立ち上がり部屋を出ていきました。

第49話 お手紙を書きました

町長さんを見送って僕達だけになったのですが、あれ？住民の皆さんが集まって来てるのでしたら夕ごはんって外出出来ないよね？それに町長さんが町のみんなに話をするために出て行っただけで夕ごはんって事ですかね？

「ん〜と、プシユケ、サンドイツチ食べる？」

「はい♪ 何を挟むのかな？ 私は好き嫌いが無いから何でも好きだよ♪」

うんうん♪ 好き嫌いは駄目だよね♪ 僕が転生してきてから始めて食べたタマネギと、ネギは辛いから苦手なのは内緒にしておきましょう。

病院だとタマネギはしっかり火が通っていて甘かったのに、こっちのタマネギ、ネギは大人の味だと思います。

でも、こちらに来てから食べたニンニクさんは僕にも食べれましたし、記憶では臭いイメージだったのですが、辛くも臭くもなくて仄かな甘味が気に入っています。

おっと、またやっちゃってますね。

さてさて、何を挟みましょうか。

「ん〜と、オークベーコンと、あつ！腸詰めもありますね。贅沢に二つとも挟みま

しよう♪ お野菜は何にしましょうかね、うんうんトマトがありました♪ それと、レタスがありますからそれで良いですか？」

「はい♪ 美味しそうです。想像しただけでよだれが口の中に溢れてきました♪」

「僕も♪ じゃあ作っちゃうね♪」

火魔法でベーコンと腸詰めをあぶりながらトマトを切って、レタスはちぎります。

パンに切れ目をいれた所にレタスとトマトを挟んで焼けたベーコンと腸詰めを乗つけました。

「ぬふふふ。ここまでならどこにでもありそうなサンドイッチですが、果実ジュースもあるですよ♪」

「すごいです！ それに冷たいですよ！」

「ぬふふふ。お気付きになりましたね♪ 実は秋に沢山の果物を絞って作ったジュースを冬に外に出して冷やしたのですよ！ なので夏でもヒエヒエジュースがのめるのです！」

僕はドヤ顔になっていると思います。がテラはとんでもない事を言ってきました。

「ねえライ。それって古代魔法でも出来るよね？ なぜそんな面倒な事をするの？」

「え？ そ、そんな事出来るの？ もしかして水魔法？」

「水魔法の上級編ってどこかしら。水って言うのは止まっているように見えて実は動い

ているのよ。動きを早くすると熱くなって、止めちゃうと凍るの。やってみれば分かるわよ」

「そうなんだ！ よし！ やるのはごはん食べてからにしましょう♪ はいプシユケの分」

プシユケの前にお皿に乗せたサンドイッチを置いて僕のも作ってしまいます。

「よし完成♪ じゃあいただきます」

「いただきます♪」

少し足りなかったのもう一つ作って半分ずつ食べました。

じゃあ、お水の実験をやってみましょう。

まずはお水を出してぐるぐるですよく、ほいと！

パシヤ

「ライ！ コップか何かに入れなさいよ！ ああもう床が水浸しじゃない！ ムルムルお願い片付けてあげて」

ぷるぷる

「あはは、ごめんねムルムル。ありがとう」

ムルムルはあつという間にこぼした水を吸収してしまって、こぼした事がなかったかのようにじっくり見ても跡もありません。

「よし！ コップで再挑戦ですよ！ ほいっと！」

パキッ

「あつ！ 氷は出来たけどコップ壊れちゃった」

「はああ、簡単に出来ちゃうのね。まあ良いわ。言うの忘れていたわね。あのね水で作る時は少し大きくなるのよ。仕組みは難しいから省くけど、そう言う物だと覚えておけば良いわ。でも、コップはもつたない事しちゃうたわね。普通なら壊れるほどにはならないと思ってたけど」

「ん、何度も落としたりしていたからヒビでも入っていたのかな？ 仕方がないですね、また作ります。じゃあ次は温めてみよう！」

別の、今度はお皿にしておきます。

「水を入れて、ぐるぐる、ほいっと！」

ボン

「どわああ！ 熱っ！ ば、爆発したよテラ！」

「あなたね！ ゆっくりやりなさいよ！ 急激にしちゃうたら爆発もするわよ！ ほんともう、またそこらじゅうに水が飛んじやったじやないの。はああ、ムルムルお願いね、ちよつと熱いかも知れないから気をつけてね」

「うう、ごめんなさい。ムルムル何度もごめんね。テラもプシケもごめんなさい」

ふんふん
ふん

「あはは。凄くビックリしましたよ。これは攻撃魔法ですつて言われても信じちゃいますよ」

「目眩ましにはなるわね。練習するなら外でしなさいよ」

「うん、攻撃系の目眩ましか。良いかも♪ 海に行ったら練習し放題ですからそこでやりますね♪」

ダダダダ

バタン

「何事ですか！ お怪我はありませんか！」

町長さんと、見た事無い数人が部屋になだれ込んできました。

「あつ！ ごめんなさい！ ちよつとお水で実験したら爆発しちゃつて。皆さん心配をおかけしてごめんなさい」

僕が立ち上がり頭を下げるとプシユケも同じ様に頭を下げてくれました。

「大丈夫よ。怪我も無いし部屋もちよつと濡れただけだからそこはごめんなさいね。ところで町長、サーバル男爵領への移動は決まったの？」

テラがちよつと偉そうですが、話をそらしてくれています。

「部屋がすこし濡れていると言っても気にするほどの事では無いようですし大丈夫で

す。それがですね。今確認中なのですが、今集まっている全ての者がサーバル男爵領へ移りたいと言っています。一応地区ごとに集計して貰っております、三千人全員が行く事は無いとは思いますが。」

「おお！ それは凄いですよ！ それだけ領民が増えれば最初の数年は食料を輸入しなくちや駄目だけど、開墾が進み自給自足出来るようになりますね♪」

「なんと。その人数でも受け入れて貰えるなら外の町や村にある人頭税も外から来た者に聞いた限りでは納められるはずです」

「ああ、父さんが税は入領して数年は取らないって言っていましたよ。でも人数が人数ですから国に納める税が払えるかですよ。分かりました。その事も出来るだけ少なくなるように手紙に書いておきますね」

「はい、そうして貰えると助かります。ではその事をふまえて皆にもう一度確認してきます」

そう言つて町長さん達は部屋を出ていきました。

僕はさつそく父さん宛にてごみをかくことにしました。

ん、何て書きましょうか。

に僕の名前を書いておきましょう♪」

「書き終わったの？ それでなぜ私とムルムルの絵が描かれてるのよ、って上手いじゃない！ ライ！ そこおっぱいはもつと大きくして描いてよ！ こゝバインバインに！」

「えゝ、せつかく上手くテラの可愛さが描けたのに、僕はそのままのテラが好きだよ」「なっ！ そ、そうなの！ どうしましょう私の魅力でライを虜とりこにしちゃった。今はまだ大きくなれないけどゴニョゴニョ」

途中から聞き取れなかったですが、くねくねするテラも可愛いです♪
描き直しました
書けた手紙を翌朝町長さんに渡しました。

第50話 お引越ししちやいましょう

「おはようございます町長さん、父さん宛の手紙が書けたので渡しておきますね。それで何人くらいになりそうですか？」

「おはようございます。昨晚あの後に書いて下さったのですね、ありがとうございます」
町長さんは手紙を大事そうに受け取りました。

「あはは、人数ですか。人数は、全員が向かう事にしましたので、三千七十二人ですね」「凄いです！ 僕は何人かは冒険者になって来る人は減るだろうと思っていましたよ」
そうしたらその人をサーバル男爵領で活動するように誘おうと思っていたのに全員が来てくれるのですね」

「ああ、それも含めてです。若者の中には将来的にこの町を出て冒険者になりたいと言う者がそこそこいますからね」

計算通りになってきましたよ。これは誰一人欠ける事無くサーバル男爵領にお引越しして貰いましょう！

「分かりました。ん、と、転移練習して領地まで送迎しちやいましょうか」
母さんの
やっていたやり方は

「ライ。転移でつてそう簡単には」

「転移！」

パツ

「どうだ？ よしよし出来てるね。あつ、テラ何か言った？」

確か転移前に何か言っていたような気がします。

テラの方を見ると目を見開き口も開けたまま僕を見ています。

うんうん。可愛いですね〜♪

「なんで転移出来てるのよ！ お母さんにちよつとやり方聞いて練習しなさいよつて言われただけじゃない！ 時空間魔法よ転移は！ 収納が出来ているから才能はあるとは思っていたけど一発で成功なんてあり得ないんだから！」

え？ でも時空間魔法使える小説にも見えるところと、行った事がある場所には転移出来てましたよ？ 時空間魔法のスキルがあれば普通少し練習すれば出来るよね？

「はああ、私が海に着いてから教えようと思っていたのに、まあ良いわ。ライ、魔力の減りはどの程度分かる？」

「ん〜と、減る分は外から取り入れてるから減るけど減つてないよ。そんなの当たり前じゃないですか」

テラは頭を抱えぶつぶつ呟いています。

「そうだったわ。ライは魔力を辺りから集め取り入れてるんだった。そこに関してもう考えるのは止めましょう」

「よしよし、実験その二です。プシケちよつとこつちに来てくれる？」

「な、何をするのかな？ さつきは私の横にいたのにいきなり私の前に現れたし。」

ちよつとビクビクしながらも近付いてきてくれます。

「あはは♪ ごめんね。転移つて魔法があつてその練習。自分一人とテラ、ムルムルで転移出来たから、次は普通の人と一緒に飛べないかなつて」

「て、転移魔法！ ハイエルフの村では父さん母さんは出来ましたね。後何人かいましたけれどそんなに便利な魔法ではないですよ？ 魔力を沢山使いますから何度も出来ませんでしたし、数人と一緒に転移するだけで気絶しそうになるつて言っていましたよ」

「そうなんだ。じゃあプシケも使えるようになるはずだよね♪ 魔力のぐるぐると合わせて一緒に練習しようよ♪」

「ん〜と、このぐるぐる続けると良いのですよね？ でも私が転移出来ても魔力欠乏でコテつて気絶しちゃうよ？」

「そうそう。それに魔力は心配ないですよ。ぐるぐるして魔力を集め補充していますから足りなくなる事は無いよ。プシケもたぶん一年くらいかな？ そこそこ出来るよ

うになるはずですし心配しないで大丈夫です。それではくプシユケも一緒にく転移！」

パッ

「どうかな？ 一応行った事がある場所なのでクルミの林に飛んでみましたが、成功ですぬ♪」

「ほええ！ 一瞬で景色が変わりましたよ！ 室内からお外ですよ！ ライ凄いですよ！」

「ぬふふふ。でしよ。よしよしでは今度は戻りましょ♪ 転移」

パッ

「到着つと。プシユケありがとうね」

「良いよ。でもこんなに簡単に転移しちやうなんて、父さん母さんはもう少し魔力を込めて『転移！』ってやっていたのにライって凄いよ！」

「ぬふふふ。ありがとう♪ じゃあ今の転移はテラとムルムル、そしてプシユケだけにしか魔力を広げていないからその範囲広げるだけでたぶん良いよね？」

そこでテラが提案をしてくれました。

「別に練習は人でなくても良いのよ。ゴブリンやオークが沢山いるじゃない」

「おお！ それは良い作戦ですよ！ 採用ですね。じゃあ少し魔物さんで練習しましよ。町長さん」

「ひゃい！」

「ん？ 町長さんどうしたのでしょうか？ まあ先に話をしてしましましょう。」

「今日から何日か泊めて貰ってもいいですか？ 駄目ならテントで良いですけど」

「はあ、泊めるのは構いませんが」

「ありがとうございます。あのですね、サーバル男爵の領地まで皆さんを送る事が出来
そうなので、もう少し練習をしたいのですよ。駄目ですか？」

「え？ 今のを全員で出来るのですか？」

「はい♪ 範囲を広げれば出来ると思います。それとですね。町をそのまま持つていく
ことも出来ますよ。井戸なんかは無理ですが、井戸を掘るのも僕何度もやって来ました
から任せて貰ったら穴を掘ってしまいますし、掘って水が綺麗になるまで数日待てば飲
み水も確保出来ますし、川の近くか湖の近くならもつと簡単ですし」

町長さんがダダダつと詰め寄るように近付いてきました。

「そ、それは町ごと引越してしまえると言うことですか？」

「はい。僕の収納の中身を整理すればいけるかなって思います」

「わ、分かりました！ それなら早い方が！ 秋に備そなえた作付けもまだほとんどがこれ
からです。植えた物も木箱か何かに戻せば向こうでたちまち植え直しが可能です！

これは出来るなら早い方が良いです！ こうしてはいられません皆に引越しを伝え

てきますー！」

そう言うのと町長さんは朝食の場から走り部屋を出て行きました。

その日、その時間から町の皆さんは畑に繰り出し、作付けをしたばかりの苗を回収に回る人達、収穫出来るものを収穫する人達と保存するために加工する人達が動き回っている間、僕はプシケを背負子乗せて森に転移で入り、ゴブリンやオークを探して転移の練習です。

「ライ、もうたぶん千匹超えましたよ？ この魔物さん達はどうするのですか？」

プシケは背負子に乗りながら僕と一緒に枝の上から眼下の魔物達を眺めています。

「えつとね、これだけの数がいけたなら町のみんなを運ぶには三回行き来すると全員でお引っ越し出来るけれど後もう少し。えつとね、この先にだいぶ大量にいるところがあつて、そこにいる魔物を合わせてから後二回くらい転移練習やっちゃって終わろうと思います。その後でお手伝いして貰ったのですがこの子達はやつつけちやいますけどね。それにそこに集まっているのは数が多いんですよ。たぶん一万くらいいいそうだよね？」

「そうね、ライの言う通り種類がバラバラで一万は完全に超えて集まっているわ。高い確率でスタンピードの前兆かもしれないわね」

「万を超えるスタンピード！ 一大事じゃないですか！ 皆さんに教えないと！」

「ライに任せておけば解決するわよ。そうでしょライ？」
なぜかどや顔のテラ。

「うん。もう少しで気絶しちゃうしね。数匹はまだただけどね。じゃあ転移するね♪ 転移！」

パツ

お気付きでしょうか。

行ったこともない場所にまで転移出来る事に気が付いたのですよ。

僕が魔力を広げられる範囲内ですけどね。

後、行った事がある場所にも当然行く事が出来ましたよ。門番のカヤッツが転移してきた僕を見て驚いていましたけれど。くふふふ。

「まだ立っているのはオークキングとあの大きいのはトルルね。」

「トルルは初めて見ました。でも立ったまま気絶してますね。」

オークの身長が三メートルくらいですからトルルは五メートルくらいはあります。

そのトルル達は立ってはいるのでありますが手に持っていたと思う太いこん棒が足元に落ちていました。

「その様ね。オークキングもそろそろ気絶するわよ」

テラがそう言ってすぐにふらふらしだしてズズンと前に倒れていきました。

「ほらね。さあライ！ ムルムルのごはんを補充よ！ やつちやえ！」

ムルムル 頑張っていっぱい食べてあげてね。

「いっくよー！ ウインドニードル！」

第51話 お引越しのために転移の練習しましょう

「あらっ。トロルはウインドニードルでは倒せないみたいですね。じゃあウインドアロー！」

トロルは防御力が高いみたいでニードルでは少し刺さるだけで突き抜けません。

なのでウインドアローに変えて撃ったのですが。

「あれ？ これでも駄目みたいですね？」

ウインドアローもニードルよりは刺さりましたがトロルの体を少し揺らすだけで終わりました。

「ライ。トロルは風属性の耐性を持っているのよ。風属性以外なら何でも効くはずよ」

「そうなんだ。じゃあウォーターニードル！」

プシュン

ズズン

「おお！ 簡単に突き抜きましたよ！ ありがとうテラ」

「任せなさい！ ほらほら倒しながら収納していきなさい。ムルムルは辺りの血を綺麗にしてきてね」

ぐるぐる

「ちよつと待って！ 先に転移の練習しなきゃ駄目だから。とりあえず倒したのは収納
！」

「そうだったわね。二回くらいやってみて良ければそれで練習は完了ね」

「本当にこんなに沢山できるのでしようか？」

「ぬふふふ。やってやるのですよ。じゃあまずはぐるぐる、一回目、ほいつと！」
パッ

見つけてあった場所に少し全体を集めるイメージで転移。

一度目は成功です。

「うんうん。特に問題は無さそうですね♪ 重ならないようにももちろんできています
し」

「へえ。やるじゃない。じゃあ二回目ね」

「いっくよー！ 転移！」

パッ

「とくうちやくく！ 成功です♪」

「うんうん。見事だわライ」

「ライすっごいですよ！ 完璧ですな♪」

ぷるぷる

「ありがとう♪　じゃあ倒していくね、ほいっと！」

「そうしましょう。ムルムル、あなたの力を見せ付けてあげなさい！」

僕がウインドニードルを大量に作り飛ばして倒していくと、ムルムルはテラを肩に残して僕達の足元にみよくと降りてどんどん広がって行きます。

広がった状態でゴブリン達に覆い被さり吸収しながら周りをぐるぐる渦巻き状に移動してどんどん吸収していつてるようです。

僕も負けていられませぬね。ムルムルに当たらないように全ての魔物を倒し収納してから気づいたのでありますが、あれ？　収納の限界が見えてきませぬね？

「ねえテラ。僕の収納って後どれくらい余裕があるか分かったりしない？」

「ん？　そうね。今収納した分だけでも相当容量を使ってるはずだしね。良いわ見てあげる。んん神眼！　へっ？　嘘っ！」

「どうしたの？　もしかして満タンになっちゃった？」

テラは僕の顔をまじまじと見つめてきます。

見つめ返してあげましょう♪

うんうん。テラって本当に可愛いよね。寝る時に着てくれる腹巻きに髪の毛が入っているのも可愛いし、朝起きてすぐは髪の毛に腹巻きで付いた寝癖ができていたりしま

すし。くふふ。

「無限収納よ」

「無限収納？」

無限収納！

異世界スキルの定番無限収納ですか！ ひやつほい

♪

「きやあ！」

「あ、ごめんごめん」

僕が飛び上がった拍子に落ちそうになったテラを優しく支え、驚いて頭にしがみついたプシケの頭を手を伸ばしてなでなでしながら謝りました。

「ビックリするじゃない！ 私が肩にいる事を忘れないでよね！」

「もうライったら私も背負子に乗っているのを忘れないで下さい！」

「あはは。本当にごめんね。ところでテラ、無限収納って本当に？」

「ええ。王都にいた時はまだ普通の収納だったわ。でも今はスキル名が無限収納よ。スキルのランクアップは本来中々できる事ではないわ。だからライ、おめでとう♪」

「ほへえ！ よく分かりませんがおめでとう♪」

「ありがとう二人とも♪ じゃあ一度収納の中を空からにして町を収納するつもりでしたがそのまま収納しちゃえますね！」

「え？」

二人ともこいつなりに言ってるんだ？　って顔で、テラは耳たぶを掴んだまま。プシユケは後ろから態々わざわざ僕の顔を覗き込みながらです。

「ライ。あなたそんな事考えていたの？　私は転移でこっそり移動させるんだと思っていたわ」

「私もです」

「だって、個別に収納しておけばサーバル男爵領に行った時に家を置く時色々調整できるでしょ？」

僕の言葉を聴いて二人は、え？　って顔で見えます。

「もしかしたら今のままでは置けなくて、最悪壊れちゃうかも知れないじゃないですか」

「ライ。あなたそれ一人でやるつもり？　全て三人家族としても千もの家を一つひとつ

現場を見ながら調整するの？」

「うん。二日くらいでできるかなって思ってるよ？　ダメ？　地均じならしは得意だよ？　土

いじりで沢山やったし」

「それもそうね。全く同じ地形なはずはないものね」

「はい。言われて初めて気付きましたがその通りですね」

「でしよ。だから初めは王都で王様に魔物を買って貰もらうつもりでしたが手間が省はぶけましたね」

その後もまだまだ沢山倒さなくてはいけなかったので思ったより時間はかかりましたが全てを倒し終わり、ムルムルのお掃除が終わるまで待つて町に戻りました。

町に戻るとぞろぞろと畑から苗や収穫した作物を荷台に乗せたエルフさん達がどんな門をくぐり入っていきますし、空の荷台を引きまだ外に向かう人達もいました。

町に入ると皆さんここに来た時より笑顔が多く雰囲気も活気があるように思います。

屋台で美味しそうな串焼きがあり買おうとしたのですが。

「ごめんね。ここでそのお金は使えないのよ。物々交換になっちゃうの」

「あつ、そうなのですね。じゃあオークで良いですか？」

「うんうん♪ それなら大丈夫ね。どれくらいの大きさあるかな？ 五十センチ」

ドスン

お話の途中でしたが、先にオークを出しておきましょう。

あれ？ お話が止まりましたね？

見ると串焼き屋台のお姉さんはオークを見ながら呆けていました。

「あの、これでは駄目ですか？」

「い、いえいえ駄目なんてものじゃありません。オーク皮が出てくると思っていたのですが、丸々一匹出てくるなんて。」

丸々一匹を出した事で驚かせてしまったようです。

「どうしましょう。こんなに沢山引き取っても」

「では串焼き四本いただければ良いので魔狼の毛皮でも良いですか？」

「うふふ。ごめんなさいね。魔狼なら全然大丈夫よ」

交換で沢山の串焼きと交換して町長さんの家に戻り、いつでも引越してできる事を伝えました。

「ほんとうですか！ でしたらこうしてはいただけません！ すぐに皆に知らせなければ！ 失礼します！」

僕達の話の間聞き、そう言つて夕ごはんも途中なのに席を立ち部屋から走り出て行きました。

「あはは。これは明日からとかあり得ますね」

「町長さんのあの慌てよう。フオークを持ったまま行つちやいましたよ。うふふ」

「じゃあ私達は早く食べて明日に備えて寝ないといけないわね」

そうして僕達は夕ごはんもそこそこ出ていった町長を見送つた後夕ごはんを食べ終え、少し早いですが寝ることにしました。

「ん？ なんだか騒がしいですね？」

「ライ。たぶん待ちきれなくて集まりだしてるんじゃない？」

まだ寝てからそれほど経っていないと思うのですが、外の方からざわざわとした気配を感じとる事ができ目が覚めました。

「うん。範囲を広げてみたけど特に変わった気配は無いように思うけど。」

「一応私が見て見るわ。神眼んんん。ん？ ライ。この方向歩いて二日か三日くらいのところにはハイエルフがいるわね。んんと六人ね」

テラが指差す方向にぐるぐると魔力を広げていくと、いますね。

「移動はしてはいないようですから夜営でしょうかね？ 六人だとプシケの父さん母さんではないでしょうかぎぜつさせちやおうか？」

「そうね。朝起きた時にしましょう。夜はどうせ動かないでしょ放つといて寝て朝気絶させれば良いわよ」

「そだね。じゃあ寝直しましょう。おやすみテラ」

「おやすみライ」

そして隣のプシケのシーツをかけ直して、もう一度寝ることにしました。

翌朝。

「あふああ。あつそうだ。夜のハイエルフはくえ？もうそこまで来てるじゃん！」

第52話 お引越しです ①

「なんで！ もう森の境に来てるじゃないですか！ こうなったらもうやつちやいます！ んくとぐるぐる〜！」

ハイエルフの六人が森から出たか出てないかわからないのところを、速度は歩いているようですがこちらに向かつて進んできています。

そこを一気にぐるぐるさせて魔力を枯^こ渴^{かつ}させていきます。

六人の内の一人はすぐに魔力が無くなり気絶したようです。

そのため移動していた気配が止まりました。

「ん・魔力切れが早いですね？ あつ！ 転移してきたのですね！ だから残りの魔力が少ないのですぐに気絶したんだ。よし！ 後五人・ん。全員気絶ですね」

僕が独り言でぶつぶつ言ってたのでテラが起きちゃったみたいです。

「おはよう。昨日の奴ら転移してきたみたいね。完璧にその事考えていなかったわ。昨日プシユケに聞いて転移の魔法を使える奴がいるって分かっていたのに。まあ仕方ないわね。そいつらのところに行くわよライ！」

悔しそうな顔で上半身を起こすテラ。

「うん！ プシユケはもう少し寝かせておこうね」

「そうね。ムルムル！ 行くわよ！」

テラは腹巻き姿のままムルムルよじ登り、ムルムルの上に乗りました。

それをベッドから掬い上げ肩に乗せます。

「行きますよ、転移！」

パツ

六人のハイエルフを気絶させた場所に転移して周囲を確認すると、まだ森を抜ける手前でまだ町は見えないようです。

「良かった。森から出て町が見えていたらどうしようかと思いましたが」

「ん？ どうしてなの？」

テラが首を傾げながら聞いてきました。

「だって森を抜け畑や町を見てしまっていたら町が突然無くなった事がバレちゃうでしょ？ 見る前なら大きな草原は無理がありますね。そう開けた土地があるように

見えて、町とは違うところに来ちゃったって思い違いくれるかもでしょ？」

「なるほどね。それ採用よ♪ 引っ越しの後、この地には少し頑張ってもらって一面に草を生やして畑って分からないようにしてしましましょう♪」

「えっと、木魔法？」

「んくと、どちらかと言うと地魔法ね。土に魔力を飽和させるようにすると草木が元気になるのよ」

「へえ、テラの頭みたいだね♪」

「ぬふふ。私の得意分野よ！ ムルムルにばかり活躍させていたらどちらが主人か分からなくなつちやうし、ここらで超々凄い私を見せてあげるわね♪ 期待してて！」

「うん。じゃあこの場所は覚えておいて、一旦町に連れていこうか。テラこの人達の魔道具は大丈夫かな？ 魔力回復の物とか持つてない？」

「どれどれ。んん神眼。無いわ。でも収納のスキル持ちが四人いるわね。もしかして食料を取りに来た奴らなのかも知れないわね」

「じゃあ、町長さんに見て貰おうよ。どこが良いかな？ 裏庭で良いかな？」

「そうね。あの裏庭は結構広かつたし適当な壁際にでも放つておけばそんなに邪魔にならないでしょ。さっさと帰りましょう」

「うん。じゃあ行くよ。転移！」

パツ

町長さんの家の中庭に転移した僕達は壁際に六人を並べて寝かせ、プシユケが寝ている部屋に向けてもう一度転移しました。

「きやー！」

「あつ、プシユケおはよう。ごめんね、ハイエルフの六人がこの町の近くまで来ていたから捕まえに行ってきたんだ」

プシユケは起きてベッドから降り、立って伸びをしていた目の前に転移してしまったのでたぶん相当驚いたと思います。

「び、びつくりですよ！ あゝ寿命が百年は縮まったかも」

「心配しなくても大丈夫よ。エンシエントエルフは百年寿命が縮まったとしても微々たる物よ。それより早く町長さんのところに行きましょう」

エンシエントエルフですごいですよね。僕が百年寿命が縮まったら絶対死んでますよ。あはは。

みんなで部屋を出て町長さんの部屋に向かいます。

向かっている途中のいつもの食堂から町長さんの声がきこえてきました。

『なに！ ハイエルフの連中が裏庭にいるだど！』

『はいあなた。井戸に水を汲みに行ったら壁際に。私達に奴隷の魔道具を付け、いつも食料を取りに来る奴らよ、見間違えるはず無いわ』

『よし！ すぐに拘束してしまわないと！ 行きましよう！』

ダダダダ

バタン

勢いよく開かれた扉から、町長さんと先日町の人が集まってると呼びに来た人が、きこえた話の感じですと奥さんのようですね。その二人が食堂から出て僕達がいる事に気が付きました。

「皆さん！ おはようございます！ 一大事です！ ハイエルフの連中が中庭にいるのです！」

それはもう早く中庭に行きたいって感じに早口で挨拶と共に僕達へ向かってきます。

「おはようございます。それならば早くは起きませんよ」

「え？」

昨晚と今朝あった事、魔力欠乏で気絶させたこと、町ではないところに来たと誤解させる作戦の事を、中庭に向かいながら説明しました。

「なるほど、分かりました。では今日中に移動してしまつた方が良さそうですね。しかし来るのが早すぎる気もしますね。いつもなら後十日ほど時間があるはずなのですが」「そうですね。遅くとも明日の朝この時間くらいまでには移動してしまつて、偽装をしてしまいたいですね」

「あつ、早く来たのはたぶん村長の孫が生まれたか、生まれそうだから誕生を祝う祭りのためかなつて思います。私が村から出た時、いつ生まれてもおかしくないつて話がありましたから」

プシユケがそう言うのと

「なるほど！ それなら分かります！ 御神樹様の祭りの時も早めに取りに来ています。まあそれは祭り前月食料を取りに来た時に何日後にこれだけ用意しろと命令されていましたが」

町長さんは予想ではありませんが納得した顔になりました。

そして中庭に到着し、ハイエルフ達の顔を一人ひとり確認すると大きく頷きました。「どうですか？」

「間違いありません。いつも食料を取りに来る奴らです。よし。急がないとですね」

「はい。すぐにでも始めたいですね」

「分かりました。皆さんは朝ごはんを食べてからにして貰いたいです。私は今から皆に知らせて参ります。皆さんの朝ごはんの用意を頼んだ」

「はいあなた。任せて下さい、あなたは早く皆に伝えてきて下さい。」

町長さんは頷くと僕達に「では行ってきます」と言い残し裏庭の勝手口から外に出ていきました。

そして朝ごはんが終わり、まだ町長さんは戻って来ていないので一度家に転移で戻り、父さんにご報告。

「そんな人達がいるのか！ ライでかした！ 願ってもない、もちろん大歓迎だぞ！ そうすると場所だな。三千人、農耕が得意分野で魔法が得意とされるエルフ。」

「あなたそれなら次の開拓予定って言っていた場所はどなの？」

「あの草原か。しかし水は賄えるのか？ あそこは川が遠いため農耕には向かないのじゃないか？ 牧草には良いとは思っていたが」

「おお！ あの場所ですね♪ あそこは馬の遠乗りで連れて行って貰った事があります。」

「だってエルフでしょ？ 水魔法なんてお得意でしょう？ それに土地も低いですから、水も川から引き入れる工事をして行けばいずれ沢山の作物がとれるとれる思いますわ。その工事のため人員を募集する事もできますから工事後残ってくれる人達もいるかもしれませんし」

「ふむ。エルフ達を引き入れ、さらにこの工事で新たな人材を引き入れるか。ならば街道の整備も必要になる。更なる工事でぬふふふ。男爵とは名ばかりの民じかないサーバル男爵領に人が集まるではないか！ よし。ライ場所は分かるな？」

「はい。もちろんです♪ 遠乗りでよく連れていってくれた場所ですよね？」

「そうだ。あそこなら三千人と畑、十分過ぎる広さがある。そこにするから頼むぞ」
「任せて下さい♪ では引越しが終わったらまた顔を出しますね♪」

「うむ」

「気を付けてね♪」

「じゃあ行つてきます！ 転移！」

パッ

「なあ。あの子はまたライのお嫁さんか？」

「うふふ♪ あなたに似ずお嫁さんだらけになるのでしょうかね♪」

そして町長さんの家に戻つてすぐに戻つてきた町長さんの指示通りに町を収納して
いきました。

第53話 お引越しです ②

「これで最後つと！ 終わりましたよ♪」

一部始終一緒に行動していたプシユケに町長さんと奥さん。後は何人かずつ入れ替わり立ち替わりで物珍しそうに見学をしては畑に戻り痕跡を少しでも無くすように工夫してくれています。

後で草なんかを生やすのと言った事から動き出した皆さんは、草木の根っこ付きを森にまで取りに行き、畑のあちらこちらに植樹していつてくれました。

そして僕の肩の上で耳たぶを掴みながらテラはよく通る声でみんなの方に話しかけます。

「ぬふふふ！ みんな集まってる！」

「おお〜！」

「もつと元気よく！ みんな聞いている！」

「うおおおおお〜！」

「うんうん♪ その調子よ！ 今から私の力を見せ付けてあげるわ！」

「頑張れよおおお〜！」

声援を受け手をふり答えるテラを地面に下ろしてしまおうとほとんどの人は見えてないでしようね。

ほんとくに近くにいる人達しか見え無いでしょうがテラは満足そうな顔でニヨニヨしています。

そして僕の手に乗る肩から下ろして地面に。そしてニヨニヨから急に真剣な顔つきに変わってしゃがみこみ、テラはそつと地面に手をついて一言。

「さあ！ 頑張んなさい！」

そう言った途端開墾されたこの広い土地の茶色の部分が無くなり、僕達の足元からも新たな草が芽吹き、辺り一面を緑に変えていきます。

「おおおおお！ おおおおお！」

そして木もずんずん太く高くなり見上げるほどに。それを見て皆さんの驚く声が辺りを包みしばらくの間止むことはありませんでした。

「テラ凄いよ！ 神様みたい！」

「そうでしょそうでしょ♪ もっと褒め称えても良いのよ♪ おーほほほほ♪」

「ほんとに凄いです！」

満足そうな笑顔のテラを手のひらに乗せ肩に乗せてあげます。

「うんうん♪ 上から見ても良い具合に木も育ったみたいだし良いわね」

肩の上からなら遠くを見えるし、畑だった場所に十メートルくらいある木がそこかしこに見えていますもんね。

「うん♪ 良い感じだよね〜元が畑だなんて分からないよ♪ そうだ町長さん、もうすぐお昼ですがお昼ごはんは向こうで食べますか？」

みんなと同じで、畑だった場所を眺めている町長さんに尋ねてみました。

「あ、ああ。すいません。見とれていました。素晴らしいお力ですね。う〜むお昼ごはんですか。そうですねそうしましょうか。あちらは草原だとお聞きしたので気持ちよくお昼にできそうですね」

「はいもちろんです。じゃあ僕がお引越しのお祝いにオークを提供しますので焼いてみんなで食べましょう♪」

町長さんと、周りで聞いていた人達もうんうんと頷いてくれます。

「ところであの者達はどうしますか？」

そうでした。ハイエルフの人達の事をすっかり忘れていましたね。

「ん〜と、思ったより早く町の全てを収納してしまえたので、もうあの人達は森に戻しておこうかと思っています。戻して少し魔力を戻せば気が付きますので後は町を探して歩き回って貰います」

「くふふふ。ライったら意地悪ね」

「うんうん。でも賛成ですよ♪」

テラとプシケはそんな事を言いました。その後が続くように周りの町長さんや、見える範囲の人達も

「賛成！」^{賛成}

声を上げ、聞こえてなかった人達には聞こえていた人達に伝言ゲームさながら伝わってゆき、「賛成!」「いいぞー!」など賛同の声が沸き起こりました。

あはは。奴隷にされて、食べる物を取られ、食べれずに死んじやつた人達もいたので、すからハイエルフ達の自業自得ですよね。

「じゃあ先に皆さんをサーバル男爵領に送っちゃいますね♪ すう、行きますよ!

せくの! 転移!」

パツ

「到着うー! ここがサーバル男爵領の皆さんの町になる場所です♪ どうでしょうか?」

「おっ! 角ウサギが子連れでいるぞ!」「手がつけられていない証拠だわ♪」「おおく! 早く農具を出してくれないか!」「屋台も出して!」「それよりお昼ごはんだろ♪」「土が柔らかいぞ!」「この土地なら沢山の作物が採れる!」

それはもう興奮のつぼです♪

そして父さんに聞いてあつた比較的平らなところをさくつと土地の表面を収納してまつ平らにしました。

いきなり現れた茶色の部分を見て皆さん喋るのを忘れたように静かになりました。

「ぬふふふ。それじゃあ行きますよ！　せうの！　ほいつと！」

一番最初に土を押し固めるイメージで土魔法を。さらに収納した石畳を一気に敷き詰めていきます。その際この間やつたように土魔法で滑り止め加工もしておきます。

いきなり現れた新品みたいな綺麗な石畳の通りにができて、それに合わせて家々を設置して行きましよう♪

おつとその前に。

「町長さんオークを二百匹分、ここは豪勢に三百匹出すので調理をやりかけて貰つて下さい。それから僕は家々を出していくので、間違つていたら教えて下さいね」

「う、うむ。そうですね。ではおまえ、解体できる者と調理できる者を集め準備を進めてくれるか」

「うふふ。三千人分のお料理なんて。任せておいて下さい。あなたは町をよろしくお願ひします」

話は纏まったようなので屋台とオークを出して、僕は村長さんと町をくまなく回ります。

そして一時間ほどした時良い匂いが漂ってきました。

「ライ君。そろそろお昼が出来そうですね」

「そのようですね。では僕はハイエルフの六人を元の場所に戻しに行つてきますね」

「はい。ではお待ちしています」

僕はテラとムクムクとプシユケを連れてエルフの町の跡地に転移して戻り、ハイエルフ達六人を拾つて六人を気絶させた場所にもう一度転移しました。

「ん〜と、ちよつとだけ様子も見たいよね。プシユケはまた背負子に乗つてくれるかな？」

「はい♪。どんな動きをするのか見ておきたいですしね」

「くふふふ。本当に意地悪なライね♪。ほらさつさと準備して木の上にも上がりましょうよ♪。ちようど良い枝もあるしね♪」

「うん♪」

背負子を出してプシユケを乗せて頭上の木の枝に飛び上がります。

「この枝なら下から見られてもすぐには気づかれないよね。じゃあ起こすよ♪」

辺りから魔力を集めてきて、六人に補充していきます。

ほんの少しの時間で回復したのか一人また一人と目を覚まし飛び起き辺りを警戒しながら様子をうかがっています。

「ふう。狩り用の眠り罾か何かに掛かったのか？」

「それしか考えられん。この辺りにはリスくらいしか動物はいないだろうからオーク辺りを狙ったのかもしれないな」

そんな事を話していますが、違うんですよね〜♪

「すると何か？ 奴らオークを持つている可能性があるな。好都合ではないか。あははははは♪ 今回は村長の孫の誕生祭。豪勢な肉をいただけるのだからな」

「そうだな。しかし寝ている間に襲われなくて助かったな。クソツ、奴らからいつもの倍いただくぞー！」

「それは良い考えだ。よし行くぞ！ 目印の岩を越えたから後少しだ」

そして進む六人をそ〜つと枝から枝に飛び移り見付からないように追いかけていきます。

そして、そこそこ進んで既に町が見えていた所まで来ました。

「おかしいな。もう見えてきても良い場所なんだが」

「そうだよな。あの目印の木があるんだからもう見えてなければおかしい」

「ふむ。見間違いかもしれん。もう少し進むぞ」

進んでも無理なんですよね。町はないから見付けることは出来ないのです。

『くふふふ。ライほらもう畑の場所に到達したわよ♪』

「そうだね♪ 念話僕も覚えなきやこういう時不便だよ」

気付かれないように小声で返事をします。

『今晚教えてあげるわ。まだ進むようね』

その後もずんずん進み、町の中心地辺りまで到達しています。

「なんだよ、迷っちゃったか？」

「うむ。寝ている間に方向を見誤ったようだな。仕方がない。寝てしまったところに戻るか、昨晚の夜営地に戻るかだが」

「夜営地なら転移で帰れるぞ。寝ていた場所は明確には覚えていないから無理だな」

「では夜営地に戻り明日に取り立てを行うか。では頼む」

「はああ、一日予定が延びちまったが仕方がないな」

「行っちゃうよ。帰ろうか」

「えくと、夜営の邪魔はしちゃいませんか？ 転移を村近くに変えて飛ばしておいてあげるとか？ ライならできそうですし。くふふふ。」

「あはは♪ うんうん♪ 出来ちゃいそうですよ、あの人の転移の魔力とイメージを僕の魔力とイメージに置き換えちゃえば！ プシユケそれ採用！」

小声でプシユケが良いことを言ってくれました。

転移を出来る人が魔力を込め始めましたのでそれに便乗して同調させていきます。

そして転移先のイメージは僕達が入った村の門前にしちやいましょう。

これはもう僕があの人達を転移させているみたいなものですね♪

おっと、詠唱が始まりましたね。な、長いですね。もう一分近いですよ？　こんなに
長くと戦闘中には使えないんじゃないですか？

「時と空間を司る精霊よ我の思う場所へと誘うがよい！」

おっ、結局魔力を込め出してから五分くらい掛かってますよね。さああなたの発動の
言葉と同時に飛ばしてあげますからね♪

「転移！」

パッ

第54話 お引越しです ③

「よし成功だ。なっ！ こ、ここは！」

僕達も一緒に転移して、村の近くの木の枝に僕達。そして村の入り口前の六人。

「おい！ なぜ村に戻ってるのだ！」

「まさか転移先を間違えたのか？」

「そんな俺は確かに昨日の夜営地をイメージして目標にしたんだ。」

「なにをやってるんだ！ 手ぶらで帰ってきてどうする！ さっさと夜営地に戻るぞ！」

「無理だ！ 魔力が足りない！ あの町の近くからここまで飛んで気絶してないのは不思議だが今は良い。だが今からもう一度戻るのには魔力が足りない！ 絶対無理だ！」

ぐるぐるで魔力を補充すれば出来るのにね♪ あっ、一人木が変わっている事に気がついたようです。

僕が育てた木を指差しながら少しぶるぶる震えています。

「なあ、おまえ達、俺には御神樹様が違う木になつてるように見えるんだが。」

「何を馬鹿な事を言ってる！ 今はそれどころ、嘘だろ！」

「くふくふ。驚いていますね。この六人はあの騒動の前に村を出発したようですね」
ある程度離れていますので大きな声を出さなければ大丈夫です。

「そうね。それでどうする中の様子も見ておくなら、御神樹様に転移すれば村全体を見る事ができそうよ」

「僕は別に良いかな。プシユケは？」

「私も特別見たいとは。あつ！ 私の家も持っていけますよね？ それを頼めますか？」

「そうだね、プシユケの父さん母さんもサーバル男爵領に向かっていますもんね♪ よしそれなら御神樹さんの枝にお邪魔して、収納しちやいましょう♪ 転移！」

パツ

僕は目視で確認。そして一番下の枝に転移しました。

「みんな集まつてるね？ あの日からずっとここに居るわけ無いはずだけどなにをしてるのかな？ ひとつの家族つぼいのをを取り囲んでるみたいだけど」

「あら、赤ちゃんがいるわ」

大人の男女が二人ずつと赤ちゃんを抱っこされて舞台の上で取り囲まれています。

「囲まれているのは村長ですね。それから村長の奥さんと、息子夫婦ですから、あの子が産まれそうだった赤ちゃんみたいですね」

「ふくん。でもあの赤ちゃんって周りの大人より魔力が凄く多いよね？ まあプシケよりは全然少ないけれど。ねえテラはどう思う？」

「^{神眼}んんん。くふつ、あはははははは♪ 追い出した家族と同じ運命をたどりそうよ」

テラは耳たぶを掴んで身を乗り出しながら下を覗き見て笑っています。

「^{どう}どう^{いう}いう^事事？」

「あの赤ちゃんもエンシエントエルフよ。こんな短い期間でエンシエントエルフが産まれるなんて、何か起ころうとしてるの？」

おお。プシケと同じエンシエントエルフちゃんなんだね。

「産まれたばかりなのに可哀想ね。周りの雰囲気には怯えているわよあの子」

その様ですね。少し具合が悪そうな気がします。

「ライ。プシケの家を収納して、気に食わないけどあの子の家族ごと連れて行きましょう。ついでにプシケのご両親の居場所は探れる？ まだ森からは出てないと

思うんだけど」

「ちよつと待ってね。家はあれだったよね、収納！ そうだ、じゃあ連れてくなら村長の

家は？」

「そうですね。赤ちゃんは可哀想ですよ。じゃあ家族はいた方が良いでしょう。

よし、赤ちゃんのためだよ。ライ、家はあの一番大きな家です」

「ごめんね。色々気持ちは複雑だけど、赤ちゃんのためにここは我慢してあげて。収納！」

悔しそうな顔をしたプシケをなでなでしながら村長の家を収納し、次はプシケのご両親を探します。

下では村長の家がいきなり無くなったため騒ぎだしていますが、今はプシケの両親が向かった方に魔力を広げ、気配を探します。

すると沢山の魔物に取り囲まれた中にいて、今にも魔力が無くなりそうな二人を見付けました。

「あわわ！ これはいけません！ まとめて行きますよ！ 転移！」

パッ

僕達と村長家族をまとめて、二人の元に転移しました。

「あわわ！ 怪我してます！ 血だらけですよ！ 大丈夫ですか！ 全開でいきます！」

回復！」

「私を庇ったの！ お願ひ助けてあげて！」

アレスさんが奥さんのディオネさんを庇って腕に深い傷を負ったようです。

それを治すため、取り囲む魔狼達からぐるぐる魔力を集め回復させていきます。

「魔狼がこんなに。ライ、大物がいるかもしれないわよ！ 神んんく！ いた！ ガルム

ね。フェンリルじゃなくて良かったわ。フェンリルなら神殺しをなした奴が遙か昔に居たそうだし」

「ガラムか。なら大丈夫です沢山やつつけたことありますからね。それよりアレスさん怪我は大丈夫ですか？」

「あ、ああありがとう。もう大丈夫だ」

「おい！ こころはどこだ！ なぜアレス達がいるのだ！」

あ、そうでした。慌てていてサーバル男爵領に行く時に連れて行く予定が、今一緒に連れてきてしまったのでしたね。

「あ、あのですね、少し待ってもらっても良いですよ？ 先に魔狼達をやっつけちゃいますから。ウインドニードル！」

取り囲む五十匹ほどの魔狼に向けてウインドニードルを浮かべます。

「いきますよ。ほいっと！」

シュツ

魔力切れ寸前の魔狼達には避けることもできず、その眉間を貫いていきます。

「それとガラムさんは、数キロ先に集まっていますね。と言うよりガラムの方が多いですよ？ 倍近く？ まあぐるぐるでやつつけちゃいますから関係無いですが」

取り囲んでいた魔狼を倒し収納。

アレスさんの怪我也治りましたが少し血が出すぎたのでしようね、まだ立ち上がる事はできませんさそうです。

魔力の方は魔狼にいただいたものがあつたので補充はしておきましたが、体力的に無理ですね。

「おい、ガルムの群れと聞こえたが」

村長が聞いてきた時にはもうガルム達は魔力がなくなり次々と気絶していつてます。

「はい。ここにいた魔狼より沢山いますよ。よしよし全部気絶しましたね。じゃあ放っておくのもなんですから倒しちやいましょう。転移！」

パッ

転移した先は崖があり、周りは木々も無く開けた場所でした。

「へえ。こんな場所もあるんだ。住みかにするには良さそうです。おつと見とれている場合ではないですね。よしやつつけちやいますよ！ ウインドニードル！」

シュッ

動く事もないガルムは抵抗などできないまま眉間にウインドニードルが刺さり、次の瞬間収納して消えていきます。

数は沢山でしたが、すぐに最後の一匹を倒し収納しました。

「よしよし。討伐完了ですね♪」

「まさか……長年我が村を襲いに来て倒しきれなかったガルムの群れをこうも簡単に倒すなんて。」

「村を襲つてたのですかこのガルム達は。そうですね、距離的にはそこそこ遠い気もしますが、ガルムが走れば半日もかからないでしょうね、この距離だと」

「君は何者だ？ 転移を時間を置くこと無く何度も使え、風魔法も尋常でない数を撃てる。それにどちらの魔法も詠唱すらせぬまま。少なくとも私達ハイエルフにもできない事だぞ」

僕は旅に出るまで詠唱すらどんなものか知りませんでしたよ。

「あら。その昔、一番最後まで使えていたエルフの一族がそんな事も忘れてしまうほど時は流れた証拠ね。ライが使っているのは古代魔法よ」

テラは前にチラツと教えてくれた事を村長さん達に教えてあげるようです。

「古代魔法？ くだらん。古い言い伝えにある発現させるまで早くて数ヶ月、駄目な奴は数年発動しない時間がかかるだけの使えん魔法の事ではないか」

「くふふふ。そうね、時間はかかるわね。そのせいで廃れちやつただけだ。エンシエントエルフのあの子でさえ使えないままだしね」

「ぬ？ エンシエントエルフ！ そうだ孫とそのプシケもそのエンシエントエルフなのだ！ ハイエルフが至高のエルフ族にとってそれ以外が、それも私の子孫で生まれ

るとは」

村長さんは女の方が抱く赤ちゃんを悔しそうな、辛そうな顔で見えています。

「あはははははは♪ ハイエルフの上よ。上位の存在よエンシエントエルフは。ハイエルフが王様だとすると、エンシエントエルフはそれを束ねる皇帝たはでしょうね♪」

「何だなと！」

皆同時に声をあげ驚いていますね。

「まあ。今はそれより村長さん達の事だけど村に残るの？ 今の事を話したとして信じるとは思えないんだけど」

「ぐぬ。魔力の多さで信じる者は少ないが、いや信じる者はいないか。はああ、確かにその通りだ。転移の時にはすでに長老達の一声で村長を下ろされたからな。戻つてもこの子には穏やかに過ごさせさせてやる事はできんだろうな。そうか、プシケ、それにアレス、ディオネ。すまなかつた。私はプシケの魔力の多さに嫉妬していたのかもしれないな」

そうして三人の方を一人ずつ見てから深く頭を下げ謝りました。

「すまなかつた」

「村長」

「ライ、こんな感じで良いんじゃないの？」

第55話 お引越し完了

「父さん！ それに母さんも！」

「ライ！」

転移でサーバル男爵領に戻ってきたのですが、なんとそこには父さんと母さんが数人のお供と一緒に来ていて、手にはオーク肉と野菜を焼いた物に乗せたお皿を持っていました。

「町長さんとは話をしたぞ。このままこの町の管理監として働いてもらうつもりだ。まあ財務などは新たに赴任してもらうがな」

「そうなのですね♪ あつそれから八人増えましたのでよろしくお願いしたいのと、こつちの人も村長やっていた人だから補佐とかで雇える？ お孫さんが産まれたばかりなので働き口がないとね」

そう言つて村長を紹介する。

「ほう。三千人の町だからな、その辺りも補充は考えていたんだよ。サーバル男爵です。この度は私の領地に来ていただきありがとう。息子の話通り人手が欲しいところなのだ、受けてもらえるだろうか？」

村長は男爵と聞き驚き父さんと僕の事を何度か見て、僕が貴族の子供だと知っての驚いているようですね。

「は、はい。私はラグナールと申します。村長を辞めたところですのでそのお話は助かります。息子も、息子の嫁も狩りの腕は中々の物だと思えます。なのでどちら方面でも役に立てるよう私の家族もよろしくお願いいたします」

ラグナールさんですね。

「うむ、最初の数年は厳しい物となるだろうが、最大限補助もしよう。管理監のシグルドを支えてやってくれると嬉しい。ラグナール殿を副管理監として雇おう」

「はい。よろしくお願いいたします」

ラグナールさんも、テラの言っていたエルフ、ハイエルフ、エンシエントエルフなんかにこだわらずこれからは仲良くやって欲しいですね。

おっと、そうです！

「父さん、まだ紹介しないといけない人がいます。こちらは冒険者仲間になったプシユケのご両親のアレスさんとデイオネさん。この二人は母さんと同じで転移もできる魔法使いだよ」

それに反応したのは母さんが先でした。

「まあ♪ それは良い人材が来てくれましたね♪」

「うむ、いつもは妻にやってもらっていた各村や町への手紙などのやり取りを分担してもらえると助かる。領地外へは妻が行く事になるだろうが普段は領地のみ。どうか？ 手伝ってもらえると助かるのだが」

母さんは朝から良く出掛けるって言っていたのはこの仕事だったのですね。

「はい。この魔法でお役に立てる仕事でしたら喜んで」

ディオネさんの肩を借りて立っているアレスさんはそう言いながら頷いてくれました。

「じゃあお話もまとまったみたいですから僕達もお昼ごはんにしましょう」

そしてお昼ごはんの後、町を設置してしまい、アレスさんのお家と、ラグナルさんのお家もうまく町長さんの家の横に設置して、町は完成しました。

そして夕方から町の完成を祝いお祭りが開催されることになりました。

まだ明るい時間から町の人達は食材を持ちより料理を始めます。

僕はその場を離れテラ達を連れて町の外にやって来ました。

「どうしたのライ。お祭り始まつちやうよ？」

「うん。でも明日から物凄く忙しくなると思うから今の内に畑を耕しちゃおうかなって

」

「本当は早く海に行きたいからさっさと終わらせようって考えてるんじゃないの？」
うっ、テラ。鋭いじゃないですか。

「当たりのようですね♪ 私泳いでみたいですし、やっちゃって下さい！」

「あはは、テラに手伝ってもらいたいんだけど、良い畑の作り方分かる？」

「はああ、そうね町にあつた畑より大きくするんでしょ？ ならそうね、広さ的には五倍くらいは余裕そうだし、いつかは分からないけれど川が氾濫してここに栄養のある土砂が流れ込んで平らな土地になっているのね」

テラは目の前の広い草原を見ながらぶつぶつ呟いています。

氾濫って聞こえたので後で川に堤防を作ってしまったでしょう。

「うん！ 決まったわよ、まずは川まで行って堤防を作るわよ！」

「おお！ それは僕も考えました。じゃあ川に行くよ、何度も行ったことがあるからね。プシユケも行くでしょ？」

「もちろん♪ 背負子に乗った方が良いの？ このままでも良いの？」

「とりあえずこのままで。じゃあ転移！」

パツ

「川に到着♪」

「じゃあ氾濫する箇所はだいたい川が曲がっているところが多かったはずだから、あそ

こ当たりかな？ んん神眼〜！」

テラは川が大きく曲がっているところをいつもみたい調べています。

「そうね三メートルから五メートルつてところね。ライこの川の曲がつている箇所箇所に五メートルの堤防を土魔法で作ってくれる？ ちよつと距離はあるけれど」

「うん。任せて、曲がつているところが無くなるまでだよね？」

「う〜んとね。まつすぐなところは少し、そうね半分もあれば良いかな。ついでに灌漑かんがいもあそこから町に向けて作ればって灌漑かんがいつて少し難しい言葉ね、えつと、そうそう水路！ 水路を作るの。それを畑のところに繋げれば水やりも楽になるでしょ♪」

「なるほど。流石テラは物知りだね♪」

「はい。そんな難しい言葉知りませんよ」

「ぬふふふ。おくらそうなの♪ 知性が溢れ出ってしまったようね♪ おくほっほっほっ♪」

「くふふふ。じゃあやっていくからテラが指示していつてね」

そして堤防をささつと作り、水路を入口はまだ塞いだままですが町の方へ向けて帰りながら作って行きます。

そして畑の中心になるところに大きな池、湖くらいあるかな？ ため池を作りました。

その頃には日も遠くの山にかかりだし、綺麗な夕焼けになりました。

「こんな感じで良いの?」

「上出来よ。今日は次で最後よ畑にするとところの土を柔らかくするの。そうね空気を混ぜ込むイメージよ」

んくとまずは五十センチくらい? それだけあれば十分だよ。それだけ収納してしまつて石は取り除き少し上からパラパラ降らせれば良いかな。

「じゃあお腹もすいてきたし、やつちやいますね。収納! からのパラパラ降らせますよ、ほいっと!」

見えるところは畦道^{あぜみち}、馬車がすれ違えるくらいの道を残し土を収納してしまいます。

「え? ライ何やつてるの!」

何か言ってますが今は集中です。

「降らせます! ほいっと!」

石なんかは収納に残したまま雪をイメージしながら降らせていきます。

「ぬぬ。中々難しいですね。ですが負けませんよ!」

徐々にふかふかになった土が積み重なり、元の高さまで来てもまだ降り続け、元より体積が多くなったようにこんもりした地面になりました。

「ふい、どうかなテラ、良さそうじゃない?」

「ライあなたね。本当はやり方違うけれど元々耕さなきや駄目だったのだから。エルフ達には手間が省けたのだからよいの？ んく良しとしましょう。そうそうここにあつた草達は収納の中よね？ ここの草は牧草に最適だから残しておいて酪農する場所に植え替えるつて手もあるから」

「おお！ それは良い事を聞きました♪ サーバル男爵領は酪農の方が盛んだからこそで植えちゃえば良いのですよね？」

「その通りよ。でもまあこれで後はみんなに任せて海に向かえるわね」

「うん♪」

そしてお祭りに加わり、いつもより少しだけ夜更かしました。流石に眠くなり町長さんの家でまたお泊まりさせてもらい、寝ることにしました。

第56話 邪神

翌朝僕達は目標の海に行くため、預かっていた物を全て引き渡そうと思い、町長さんに朝からどこに出すのか聞きに行きました。

ちようど食堂に入るタイミングで町長さんに合うことができたので、朝ごはんをいただきながら聞くことにしました。

「町長さんおはようございます。ご一緒して良いですか？」

「ああライ殿おはようございます。どうぞ。なにかありましたか？」

食堂に入りながら聞いてきましたので、ちようど良いですね。

「お預かりしている物をどこに出せば良いのか聞きたかったです」

「そうでしたね。食事の後ご案内します」

「はい、よろしくお願いいたします」

朝ごはんは昨日のお祭りの残りが出てきましたので、オークの炒めた物をパンに挟みサンドイッチにしてください、飲み物は以前作ったものがまだ残っているのでよく冷えたジュースを選択しました。

僕達も町長さんもそれほど時間はかからず食べ終わり、町長さんの先導で食堂を出ま

した。

予想では倉庫かどこかに行くと思っていたのですが、向かった先は町の門でした。

「預かって貰っているのが畑から回収した物ですので今日からあの素晴らしい畑に植え替えをして行きます。ですのでこの門前の広場が一番良いと思ひましてね」

「なるほどです♪ では門の外に出て壁際に出しましょうか。その方が良いですよね？」

出入りするのもバカらしいですから」

「はいお願いします」

連れだって門を出て、ドカドカドカと壁際に大量の木箱や革袋、その他畑から回収して預かっていた物を全て出し終わり、見ていた人達にも「行ってきます♪」と挨拶をしてエルフの町跡に戻ってきました。

「じゃあプシケは背負子ね♪」

「は〜い♪ 私こんなに楽ばかりしていて良いの？ まあぐるぐるしやすく良いけれど」

背負子を担いでしゃがんだ僕に乗りながらプシケはそんな事を言いますが。

「その方が早く海に行けますからね。よいしょっと。体もロープで固定してっと！」

「じゃあ行くよ♪」

「は〜い♪」

新しい木々の間をそこその速度で走ります。

馬車より少し速いくらいですかね？ 綺麗に等間隔で植えられたので、同じ景色ばかりに見えて同じところを走っている気分です。

ものの数分でそれも無くなり下草が邪魔で走れなくなったので枝に飛び上がり、枝から枝に飛び移りながら進みます。

半日ほど進んだところでさらに進んだところに反応がありました。

「ん〜？ 人の集まっているところがありますね」

「そうなのですか？ この森にはエルフ族しかいないと聞いていたのですが。違う村か町でしょうか？」

「ん〜そこまで人数はいないかな。まあ一度覗いてみましょう」

反応した気配に近付くと、崖にある裂け目の奥にいるようです。

「洞窟？ それともダンジョンかな？ 魔力がああ裂け目から出てきてますし」

「まずいわよ！ 邪神の気配があるわ、こんなに近くまで来てからしか分からないなんて！ ライその魔力を吸い取っちゃって！ 中のやつから全部よ！」

良く分かりませんがぐるぐる集めてしましましょう！

「うん！ 行くよー！」

どんどん集まる魔力をまとめて丸くしていきます。

するとクシヨンの呪いのような真つ黒い玉が出来上がってきます。

んくと、じゃあ魔力だけ抜いて、悪いのだけにすれば良いよね。

そう思い、その玉からも純粋な魔力だけを抜いて別に集めていきます。

崖の裂け目からもその時点で分けながら二つの玉を浮かべ、どんどん大きくなる黒い玉と魔力の玉。

「ねえテラ。この黒いの呪いによく似てる気がするけれどどうなの？」

「その通りよ。邪神は呪いを撒き散らす神なのよ。ここのはそんなに上位の邪神ではなさそうだけど、油断しないでね。下位とは言っても神には違いないから」

「か、神様がいらっひやるのですか！」

プシユケはかむほど驚いているようですが、中の人達は気絶していますし、そろそろ中から出てくる魔力も少なくなり後少少で吸い取りきれそうです。

そして、全ての魔力を抜き取ったのですけど、この魔力はどうしましょう。黒い方は収納しておきます。

「ねえテラもう中の魔力はなくなつたし黒いのは収納しちやつたけど良かったんだよね？」

「それで良いわ、ありがとうライ。早速中を見に行くわよどんなやつが邪神に近付いたか知っておきたいわ」

木から飛び下り、崖の裂け目に入りますが浮かべたままの魔力は……とりあえずそこで浮かんで貰いましょう。

中に入ると真つ暗なので光を浮かべる魔法でランプ代わりです。

五十メートルほど進んだところがドーム状に広がっています。

そこに七人のローブを着た魔法使いっぽい人達が倒れ、その奥には石の祭壇みたいなものがありました。

「テラ、これってなんなの？」

「嘘！ 思ったより大物が封印されてるじゃない！ 不和と争いの女神エリス。遙か昔に消滅したと言われているのに……」

「なんだかおっかなそうだね、でも魔力も何もかも無くなったから大丈夫だよね？」

「いえ。神はそんな事では消え去らないわ。封印も駄目ね、こいつらがほとんど壊してしまってるから（こんなのパパとママでも封印しきれるかどうかよ。どうすれば）」

「ふくん。でも悪い物は全く無くなったって事だからこのままで放っておくのは？」

「え？ ああ駄目よ。既に魔力を吸い込もうとしているわ。あれ？ 吸い込んでるのは物凄く純粋な魔力だけ？」

「それは僕がさっきの駄目なやつを分けて収納のしちやつてるからだよ。そうだ！ テラさっきの、外に置いてきた魔力は駄目なの無いんだからそれを補充させれば良い神様

にならないかな？」

「それよ！　良いのだけで飽和させれば良いのよ！　ライさっきの魔力をここに！」

「うん！　任せて。こっちおいで〜ほいっと！」

外から魔力の塊を引き寄せ、ドームに引き入れます。

ドーム内は純粋な魔力で充満し、どこか神聖な空間になりました。

その魔力を祭壇に吸い込ませるようにしていきます。

「その調子よ。これは面白いことになるかも。邪な要素が皆無の邪神よこしま。それは在り方

が根本的にひっくり返ってしまうわよね。」

テラは祭壇に吸い込まれていくのを見ながら色々考えているようです。

「反応が変わったわ！　一旦止めて！」

「ほいっと！　止めたよ。大丈夫？」

「んん〜！　嘘つ、邪神の称号が消えた。と言うことは、ライ！　この祭壇をどけて！」

早く〜！」

「し、収納！」

テラの慌てた様子に引つ張られ僕は焦りながらも祭壇を収納しました。

「近くにお願ひ！　気をつけて近付くのよ！　まだ内部の封印は生きてるから！」

「うん！　その魔力は受け流して近付くから大丈夫！　行くよ！」

ぐるぐるを全開にして動かすのは封印の魔力、少し動かし難いですが頑張ります！

テラがここまで焦りを見せているのですから、しくじったりできませんよ！

「嘘っ！ ライあなた、いえ、今は良いわ。そのまま隠してあった階段を下りるのよ！」

「うん。プシユケもなるべく僕に引っ付いていてね。結構ギリギリだから」

「はい。ムルムルくらい引っ付いておきます」

そう言うときゆつと少し強めに抱きついてくれました。

階段は長く、数分下りているのですがまだ終わりは見えてきません。相当深いようです。

「近いわよ。終わりが見えたわ」

魔法の光りに照らされ階段の終わりが見えました。

最後の段を下りきるとそこには上の数倍はあるドームの中に淡く光る水晶。
物凄く大きな水晶が複数立ち並び、その真ん中の水晶の中に

第57話 ぷにぷにとパパ

「こんなことって！ ライこの水晶だけ取り除ける！」

「やってみるね！ んくと、ほいっと！」

送り込んだ魔力ではなくて魔力を内封している水晶の、たぶんこれが封印の魔力だと思おうのでぐるぐる回してそそくつと外に出しましょうか

ぬぐぐ、抵抗しますね。

負けませんよ！

「あなたそれは創造神様が創った」

え？ 何か言った？ 今はそれどころじゃありませんので後にして下さいね！

「行けそうです！ ほくらおとなしく収納されちゃいなさい！ ほいっと！」

その瞬間水晶は砕け散りましたが収納して、落下しそうな赤ちゃんの元に駆け寄りギリギリ滑り込みながらも抱き止める事ができました。

「はふう。もう少しで落とすところでしたね。もう大丈夫ですよ♪」

あなたは誰？
「だうう」

「あはは。なんだか難しそうなお顔をしていますね♪ くふふふ、ほっぺがぷにぷにです

（お尻もぶにぶにみたいね。うぶぶ。ごめんごめん。じゃあ今の私にできるかどうかだけど頑張ってみるわ。そうだ、あなたの封印を解こうとした奴らの事は知っているの？）

（いや。あん♡。ここ数年たまに封印を傷付け壊そうとしているのは分かったけれどそれ以上は何も分からないわ。あん♡）

（ありがとう。はああ、ライ達少しは遠慮して上げなさいよ。本当ごめんね。よし！じゃあ門を開くね）

テラとぶにぶに赤ちゃんはしばらく念話だろう方法でお話ししていたみたいですが、急にテラの魔力が上昇し始めました。

「おお！ テラの魔力凄いよ！ 何をやるのか分かりませんがお手伝いしますね♪」
さっきの残りど辺りから魔力を集めます。

砕けていない残りの水晶からもいたでいてしましましょう！

「よしよし♪ テラ行くよ〜テラの魔力に同調させるからね〜、ほいっと！」

「嘘っ！ なんであなたがこの力を！ でもこれなら行けるわ！ くふふふ！ ライ！
どんどん私に流し込みなさい！」

小さなテラの体が眩しく光り輝き、少し大きくなった気もしますが、どんどんって言うなら！

「任せて！ 範囲を広げて貰ってくるから！ ぐるぐるうー、ほいっと！」

「うっひょく！ 来た来た来た来た！ いつくわよく！ 私の名はテラ！ 門よ現れその門を開けるのよ！ えい！」

ドームの天井付近の空間が歪み始めました。

ピシッ！

耳が痛いほどの大きな音が鳴ったと思つたら空間が裂け、どんどんその隙間が大きくなつていきます。

「誰がきたのかな？」

何か喋っているようですが、さっきの音で耳がキーンと鳴っているので全然聞こえませんが、割けた隙間から大きな手が出てきてぐいぐい広げていきます

「テラ。お前がこの門を？」

「あら。パパじゃない。珍しくお仕事しているの？」

「くはははっ！ まあそんなところだ。ふむふむ。分かった邪神エリスが善神になつているから連れていけと言ふことだな」

「そうよ。お願いね♪」

「しかしテラ、小さくとも可愛いのう。早う^{はや}本体を見付けて帰つてくるのだぞ」

「ぼちぼちやつていくわ。今はこの子達、ライとムルムルと旅するのが楽しいからも

う少しゆつくり待つてて」

「ほう。中々の美少年ではないか。婿に」

「パパ！ 無駄口叩かないで早くエリスを連れて帰りなさい！ 全くもう！ ママに言い付けるわよ！」

「なんだよ。ちよつと、それも良いかなって思つて口に出ただけなのにテラが苛める」

「はああ、ほらほらいじげないでエリスが崩壊しかかつてるから」

「うむ。ではなテラ」

「じゃあねパパ。またねエリス」

ピシッ！

さらに空間が大きく裂け、エリスが僕の手から浮き上がり空中の裂け目に吸い込まれていきます。

「じゃあね〜」

テラが耳元で何か言っているようですがまだ聞こえません。手が振っているのだから僕達も一緒に手を振りました。

そして徐々に裂け目が小さくなり空間の歪みが無くなりました。

「あゝあゝ、まだ耳が聞こえないね。回復、ほいつと！」

僕とプシケの耳に回復をかけ治します。

「あー、よしよし聞こえるようになりました。プシユケも大丈夫?」

「はい♪ ところでぶにぶに赤ちやんはどこに行つたの?」

「天界よ。邪神から善神になつちやつたからね」

「良い神様になつたんだね♪ そう言えば僕が転生する時の神様美人でしたよ!」

「くふふ♪ まあ良いわ♪ じゃあこも用済みだし戻りましょう」

そして俺達は階段を上り、祭壇があつた場所に戻りました。

「この人達どうしようか? 祭壇を戻しておく?」

「そうね。一応調べるわね。んん〜! 神囁 色々魔道具を持つているわね、それもあまりよ

ろしくないものが。ライ、持ち物を貰つちやいなさい。収納を持つている者がいないか

ら身に着けている物だけよ」

「うん。収納!」

あつという間にすぽぼんさんが七人完成です。

「はああ、パンツは履かせてあげなさい。コイツら殺人、強姦、恐喝、他にも色々称号が

ある悪者だけれどあまりにも可哀想よ」

「あつ、そうだよね。この前みたいいに町に入れてもらえないかもしれないですからね、ほ

いっとう!」

「まあ、それで良いわ。どこに運ぶの? コイツら魔力はそこそこあつたからサーバル

に連れて行って奴隷として働かせるのもありよ」

「そうなんだ！　じゃあ父さんに任せれば良いよね♪　ん〜と、書齋で良いかな？　行くよ、転移！」

パツ

そうして僕達は七人を連れて、父さんの書齋に転移しました。

「到着です♪」

「とわっ！　な、なんだライか、ビックリさせるな。ん？　その裸の奴らは誰なんだ？」

「東の森で邪神を解き放とうとしていたから捕まえたんだ。それと悪者の称号があるんだけど魔法が使えるし、奴隷としてサーバル男爵領で働かせようと思って。どうかない？」

「ライ。持っていた魔道具を見せれば分かるわよ」

「そうなの？　じゃあ全部出すね♪　ほいっと！」

父さんの大きな執務机の上に魔道具や服も全部出しました。

「ふむ。確かに王国では所持すら禁止されている物がいくつかあるな。これは結界破りか。宝物庫すら開けられる代物だぞ」

父さんは一つずつ手に取り調べています。

服まで広げたり裏返して何か仕込みはないかと丁寧に。

「分かった。これだけの物を東の森とは言えこの国に持ち込んだと言うだけで犯罪奴隷は確実。私では分からない物もあるから処刑もありうるかもな」

父さんは少し七人を見ながら考え、答えを出してようです。

「一旦奴隷にして明日王城に出向くとしよう」

「じゃあ。任せちゃいますね。それでは僕は旅に戻りますね♪」

「ああ。行つてらっしゃい」

「は〜い♪ 行つてきます。転移！」

パッ

洞窟の入口のところに戻り、海へと向かいます。

第58話 海に到着？

森の木々を跳び移りながら海を目指していると、ほのかに塩の香りがしてきました。

「塩の匂いですよね？ 僕は初めてなのでよく分かりませんが」

「私も初めてです。これが海の匂いですか？」

「そのようね♪ さあもうすぐよ泳ぎ方は任せて！ しっかり基本から叩き込んであげるから覚悟しなさいね！」

「ぬふふふ。僕はこの間お風呂で教えてもらって五メートルは泳げましたよ♪」

「凄いです！ 村の近くの池は入っちゃダメだって言われてたから水に入るのも初めてです♪」

「くふふふ、ライ。お風呂と海では全然違うわよ。まあそこも併せて教えるから」

そして森の途切れる場所が見え、その向こうはキラキラ輝いています。

「海だよね！ よっしやあー！」

そして勢いよく森から飛び出したのです

.....

が!

「あああああああー! 崖になってましたあああああー!」

「なにやつてるのおおおー!」

「いやあああああー! おちてるううううー!」

ザパン!

意図せず命がけのスイミングスクールが始まりました。

「テラ、ムルムル大丈夫! 流されてない! プシユケも大丈夫だよね!」

僕は収納から大きな丸太を出して掴まり、みんなの安否を確認します。

「あなたねー! ちゃんと確かめてから飛び出しなさい! ムルムルがライに引っ付い

て私を包んでくれたから流されなかつたけれど!」

「そうですよ! 物凄くビックリしましたよ! ちよつと漏らじゃなくて! もうー

!」

「ごめんなさい! 良かったみんなが無事で。だけど戻れないよね? 見た感じずっと

崖になっているし」

「そのようね。右に行けば帝国側だし、左は王国が続いているはずだけど」

「ん、物凄く先まで森が続くんだよね、だとすると帝国側に行くしかないですね」
ぶかぶか浮かびながらそんな事を呟きます。

あまり行きたくはなかったのですが仕方がないですね。

「このまま丸太を抱えていても駄目ですし、これで筏いかだを造るしかないですね。ほいっと！」

今掴まっている丸太にロープを出してくりつけ、二本目の丸太を出して引っ付けて結んでいきます。

それを数本繋げたところで筏の上へ。

上がってプシユケの拘束をほどき、背負子を収納そして辺りを見渡すとさつきより落ちてきた崖が遠くなっていました。

「ふう。だいぶ流されて沖に落ちやいました」

「流れが沖に出る引き潮みたいね。とりあえずこれ以上陸から離されないようにしないと駄目よ」

「そうだよね。でもどうしようかな？　そうですここは帆を立ててみましょう♪　こう言うのもあつたら良いくらいには想像はしていましたからん、ありがとうございました！　じゃじゃ〜ん！」

木を組み合わせて作った四角い木枠を出して筏の前にくくりつけ固定します。足

下は三脚にしてガツチリ固定します。

次はそこにシートです。木枠にそって張り付けてく完成です♪

「どうでしょうか! 中々の出来映えですよね。そしてそのシートに風魔法を当てると

〜

木枠に張られたシートが風を受けピンつとはらむと筏が前に進み出すのが分かりました。

「すごいです! 動いてますよ!」

「ひゃっほ〜い♪ ライやるじゃない! 崖に近づいているのが分かるくらい早いわよ!」

ふるふる

「ところでライ、舵取りはどうするの?」

「え?」

「え?」

「ライ、もしかして真っ直ぐしか進まないの?」

「う、うん。方向転換は全然考えてなかったです」

進む速度を少し落としました。

このまま進めば崖にぶつかるだけだしね。

「はああ、まあ進む事ができたのだからよしとしましょうか。ライ板は持つてないの？」
 「ん〜と沢山あるよ。そうですついでに床を貼っちゃいましょう。ほいっと！」

ドサドサと板を筏の上に出して並べて行きます。

釘（町の鍛冶士のおつちゃんに大小沢山作ってもらいました）も出して打ち付けていこうとしたのにてらが。

「ライ、気持ちに分かるけれど今は先に舵取りをしなきゃね。それが終わったら床でも何でもやって良いから」

「そ、そうだよね、分かっていましたよ。あは、あは、あはは」

ジト目のテラに舵がどんなものか聞いて作ってしまいましたよ！

長さは三メートルくらいで僕の腕くらいの太さ、細めの丸太の片側に板をくっ付けて海の中に入れると舵になるそうです。

最初に作った舵は口[・]↑[・]プ[・]でくくりつけただけだったので、あつという間に板のところが流されて壊れました[・]。

今度はガツチリ釘と口[・]↑[・]プ[・]も使って頑丈に固定します。

すると外れることもなく舵として使える物ができました。たぶん大丈夫。

「よし完成です♪」

「まあまあね。ほらほらまた流されてるから風魔法よ」

「ライ頑張つて下さい!」

「うん。じゃあいつくよ、ほいっと!」

風魔法で帆に風を当ててどんどん進みます。

走らせながら筏の床を張つていきましよう♪ まずは全面ですよね♪ それから操舵をする時用のベンチに♪ 壁と屋根はどうしましようか?

駄目ですね。囲つてしまうと景色が見えませんが、止めておきましょう。それから時々舵を操作しながら進んでいると砂浜があるのを見えました。

「砂浜がありますよ! でも島でしようか?」

「本当です♪ 島っぽいですね♪ よつてみますか?」

「そうですね。ずっと波に揺られていると疲れるから今日はあそこで夜営にするのが良いわね」

遠くに見える少しだけ緑のある島に向けて舵を操作します。

三十分ほど走つてその島に到着しました。

「よ〜っし上陸だ! ロープをくくりつけて♪ じゃあプシユケはそのまま待つててくれたら筏を引つ張るからね」

「はい。私では、ドボンと落ちちゃいますからね♪」

「あはは♪ んじゃ〜せ〜の!」

ダツ

筏からひとつ飛びで浜辺まで。綺麗に着地してロープを手繰り寄せます。

「よしつと。先にこの岩で良いかな。くくりつけましょう」

浜辺に引き上げた筏を一応岩にロープでくくりつけておきます。

「ねえライ。収納しちやえぼ？」

耳たぶをクイクイツと引つ張りながら教えてくれた事は

「ああつ！」

「くふふふ。忘れてましたね」

「うん。完全に、よし収納！」

筏を収納して、一応島全体を確認してみる事に。

「魔物もいませんね、小さな動物でしょうか、ネズミ？」

「私が見てあげるわ。んん神眼！ おおつと、これはこれは、ぬふふふ」

テラは何か見付けたようですが。

「何かあったの？」

「海賊のお宝かしら。島の真ん中に小規模、目隠し結界の魔道具があるわよ」

「ほお、どれどれく本当だ、あまり大きくないですが魔力がありますね。確か海賊のお宝は見付けた人の物になるのですよ♪ くふふふ♪ じゃあ島の探検にいきましょう！」

探検と言いましたが、直径百メートルほどの島なのであつという間に目隠し結界がある場所に到着しました。

第59話 王様になった

「ねえライ、なにもありませんよ？ 見てるそこに何かあるのよね？」

「うん。プシユケこれ凄いですね。本当に何かあるようには見えませんし、ただの草原くさはらにみえますよね！」

「ほらほら早くぐるぐるしちゃって見えるようにしなさいよ。プシユケがうずうずしてるわよ」

プシユケを見ると期待してます！ って顔に書いてありそうなぐらい目が爛々らんらんとして僕を見ています。

あまり待たせるのも悪い気がしてきましたので、早速ぐるぐるしちゃいましょう♪
「じゃあやっちゃうね♪ ぐるぐる、ほいっと！」

ぐるぐる魔道具の魔力を回して鍵を開ける要領です。

回し始めてすぐにその効果が現れ、ただの草原にポツンと僕の身長より高い、手を伸ばしても上まで届かない高さの箱が現れました。

「出た出た出た出た♪」

「ぬふふふ♪ 成功です♪ 宝箱発見ですよ！」

宝箱にはやっぱり鍵が付き物、ですが、僕には通用しませんよ♪

「じゃあ鍵を開けましょうか！ぐるぐる、ほいっと！」

ガチャ

「開いたようね、一応罨がないか見てあげるわ。んん♪^{神眼} 良いみたいね、開けて開けて」

テラは物凄く楽しんでるようですし、僕も楽しいので開けちゃいましょう♪

「プシユケも一緒に開ける？」

「はい♪ もちろんやりたいです！こんなの中々体験できませんからね♪」

高さ二メートルくらい、横幅二メートルくらいの宝箱。

ちようど高さの真ん中あたりから開けられるようなので、僕とプシユケは左右に分かれて宝箱の角に。

「じゃあせくので開けるよ♪」

「はい！」

「「せくのー！」」

キシ、キシと音を立て、開いていきます。

箱の中に日の光が入り反射する物が入っているみたいでキラキラと光っています。

そして一気に持ち上げます。

ズンと宝箱の蓋は蝶番を支点にして全開になりその中を覗くと色とりどりの宝石や金貨、宝飾されたナイフ、壺などがぎゅうぎゅう詰めに入っていました！

「うっひょ〜！ キンキンピカピカよ！」

「うはあ♪ 綺麗な物がいっぱいですよ〜♪」

「テラ、プシユケ、ムルムル！ 凄いよ大金持ちになっちゃったよ！」

ぶるぶる

そしてお宝の山に手を伸ばそうとしたのですがテラが止めます。

「ちよつとだけまってね。変な物が混ざっているかもしれないから。んんん。うんうん^{神眼}。

♪ 良いわよ好きなかだけ触りなさい！ 私もその緑色の宝石を取ってちようだい♪」

テラの頭ほどある大きな緑色をした宝石を拾いあげ渡してあげました。

「ムルムルはこの小さい腕輪を乗せてあげるね♪」

「くふふふ♪ ムルムルが王様のようにね、似合ってるわよ」

ぷるぷる

「これから揺れすぎよ、落つこととしてしまうわよ。あら、少しだけ体に沈み込んで掴んで

るの〜」

腕輪の端を少しだけ沈めるようにしてピツチリと金の腕輪をくっ付けています。

「本当です♪ ちゃんと掴んでるところがムルムル賢い！」

「はわわっ！ ムルムル王ですよ！」

「くふふふ。プシユケつてば指輪付けすぎだよ、あははははは♪」

十本指に指輪を十個その手のひらにはまだ数個の指輪が握られています。

「ライだつてネックレスじゃらじやらない♪ あっ！ この指輪もキラキラだよ！」

「ライ！ 私にも指輪をちょうだい！ ムルムルみたいに王冠にするから！」

テラは男性用の大きな指輪を王冠にするそうなので、頭の上の木の実を一旦外してもらい、緑色の宝石が前に来るように指輪をテラに乗せてあげました。

「ありがとうライ♪ どう、似合ってる？」

「うん♪ 本当に綺麗なお姫様みたいです♪ テラにびったりだよ」

「あ、ありがとう。何かテレるわね」

■ 褐色の肌なのに赤くなるのですね♪ テラも僕のお嫁さんになってくれないかな？

■ ずっと楽しく旅したり、ダンジョンも行ってみたいですし、良く考えたらムルムルとテラが僕が旅立ってからできた初めての仲間ですからね。

その後もキラキラのアクセサリーを身に付けたり、金貨を積んで高さを競ったり、そんな事をしばらく続けていると、あつという間に夕方になりました。

あわててお宝を宝箱ごと収納して、浜辺に戻りました。

薄暗い中火をおこし、大きめのテント、兄さんとフィアの四人で庭で寝た時のテントを張り、夕ごはんの準備をします。

「はああ、ずいぶんお宝で遊んでしまったわね」

「そうだね、明日は海の様子を見て泳げそうなら練習だね♪」

「楽しみです！ 私も泳いじゃいますよ！」

「うふふ。任せておいて。二人ともしつかり泳げるようにしてあげるから。さあさあ明日は早いわよ、早く食べて寝ちゃいましょう」

「うん♪」

焚き火を大きくしてお湯を沸かします。

その待ち時間に腕輪が気に入って、王冠のように乗せたままのムルムル。さらに宝飾されたペーパーナイフも腕輪と同じように挿んでるのでこれはもうムルムルの剣ですね。

王冠を乗せ、剣を装備した王様のムルムル。夕ごはんのオークとゴブリンを出して上に乗せてあげます。

お湯が沸いてきたのでベーコンとニンニク、根野菜も入れちゃって、そうだとマトもありません、それも入れちゃいましょう♪

ワインもとぼとぼく、お塩く、コシヨウく、後は少し煮込まれるまで待ちましょう。中々美味しくできたスープと、オークも少し焼いて、パンはいつもの魔物パンです。みんなが食べ終わり、朝まで火が消えないように大きな薪を加えておきます。そしてみんなで着替える前にムルムルに塩っ気を綺麗にしてもらい。パジャマに着替え並んで寝ることにしました。

そして

「ん？ まだ遠いけれど反応がありますね」

目を開けると少し明るくなり始めているようです。胸の上のムルムルごとテラをプシユケの胸の上に乗せ変えて起き上がりテントを出ます。

「んく、まだまだ遠そうですが魔物ではなさそうですね。船でしようか？」

薪を火に加え、少し早いですが朝ごはんの用意をしましょう。

お湯を沸かし、昨日のスープとお湯が沸くまで時間があつたので岩場から巻き貝とカニを採取。

カニは綺麗に洗ってスープに入れてもらい、貝はお湯に入れて茹でて殻を外しながらスープに合流させました。

茹でたお湯はお出汁が美味しかったので、砂が入らないようにうわだけを掬いスー

プに追加。味見すると結構薄くなったので醤油を少しだけ入れて味を整えました。

「ん、肉眼でも見えるようになりましたね。方向的にこの島に来そうな感じですが」
そんな時、プシユケがテラとムルムルを連れて出てきました。

「おはよう。良く寝れた？」

「はい。おはようございます。朝ごはんも作ってくれたのですね♪」

二人はまだ寝間着のまま、プシユケは魔狼の腹巻きです。

「うん。早めに食べちゃおうか。なんだか船が近付いているみたいですからね」

「まあ！ もしかして、海賊？」

「かもしれないからね。なので早めに食べちゃいましょう」

ザパン！ ザパン！

「え？ 何今の、攻撃魔法だよね？」

「そうみたいね。ほらまた飛んでくるわよ」

船から次々に僕達の方に魔法が飛んできて、海に落ちていきます。

第60話 海賊がやって来ましたよ

「船は近付いてきているのに届かないわね？」

テラが言う通り船はどんどん近付いてきているのですが魔法はだいたい同じところに落ちています。

「なんだらうね？ もしかして僕達があのお宝を持つてるかも知れないから当てられない？ でも逃げられても困るから威嚇しているだけ？」

「私は難しい事は分かりませんが、どうせライがぐるぐるしちゃうんだから、当たらなければ良いかなって思っています」

プシユケは僕の事を信用してくれているようです。

「あら。魔法はもうおしまいかしら？ ライはまだぐるぐるしてないのにね」

「止まりましたね？ まあ後五十メートルくらいですし、逃げられないと思ったのかも知れませんがね。じゃあそろそろぐるぐるしてギリギリ気絶しないところで止めておきましょう。ほいっ！」

そうこうしている内に船は停泊して、いかり錨を下ろして小舟も下ろし始めました。

小舟に乗り込む人達を見ると、うん。これは海賊だらうね。

「はわわつ、既に剣を手に持つてますよ！ やる気満々です！」
 中には頭上で振り回している人もいますし。

「くふふふ。すぐに気絶させられるのにあんなにニヤニヤした顔をしているわ♪ 今やれば小舟なのに立っているし、海に落ちるんじゃない？ くふふふ」

「あはは♪ それは可哀想だよ流石に。せめて小舟で底が付いて止まってからにします。それか先に小舟だけ収納しましょうか？」

「くふふふ。それならおつきい方をすればもつと面白い事になるわよ♪」

テラがそんな事を言うのでやっちやおうかなって思ったのですが。

「んん神眼。あらあく駄目ね。海賊じゃない人達が船底の方に沢山いるわね。たぶんオールを出して漕こぐ時に働く人達ね。人攫いでもしてきたのかしら？」

「犯罪奴隷の人達じゃないの？」

「違うわね。ライにも分かるでしょ、奴隷の魔道具がああ船には無いって事がんん、確かにありませんね。」

ならその人達はちゃんと解放してあげないのですね。

「ライ、もう波打ち際につきますよ！ ほらほら！」

プシユケの声で小舟の方に目を戻すと、まさに船底が海底に乗り上げたところでした。

「オラ！ 俺達の魔法でひびつちまったガキどもを捕まえた奴には銀貨三枚だ！ 稼ぎやがれ！」

「クソ！ 俺の獲物だ！ どけよ！」

我先にと太ももまである深さの海に飛び降りる海賊達。

「じゃあ、ぐるぐる、ほいっと！」

浅瀬に飛び降り、こちらに向かつてきましたが、脛の辺りまでしか深さがなく、ここから来た海賊達から次々と気絶させていきます。

「なっ！ お前ら何転けてんだよ！ 邪魔だ邪魔！」

「おいおい。踏んでしまったじゃねえかおい。くははは！」

十五人ほどいた一隻目の人達は波打ち際に重なりあいながら気絶しました。

「なんだありゃ！ お頭達が全員ぶつ倒れてッぞ！ 下の奴ら海の中じゃねえか！ 助けろお前達！」

「へい！ 副船長！ 野郎共ガキは後回しだ！ 行け！」

「お頭が下任にせいるぞ！」

二隻目の海賊達は、一隻目の人達を助けるようです。

「じゃあ、後で海から引き上げるの面倒だから浜に上がったところをやっちゃうね」

僕は浜から三十メートルくらいの浜辺と森の間にある草が生えて波が来ないだろ

うって所にいますからまだまだ距離があります。

そして一人ひとり引きずりながら浜辺に上がったので、ぐるぐるつとしちやいました。

「よし！　ここなら良いだろう。ガキどもを」

ドサツ

「何やつてるんすか副船長、コイツらの真似で」

ドサツドサツ

次々とまた折り重なるように全員が気絶して倒れてしまいました。

「よし。小舟の人達は全員倒せたね♪　プシユケはここで待つてね。僕はあの船に残ってる人をやっつけてくるから」

「はい♪　頑張つてきて下さいね」

「うん。じゃあテラは向こうに着いたら誰が海賊か教えてね♪」

「任せて！　さあ、行つちやえー！」

「おー！　転移！」

パツ

海賊船に到着した僕達は、甲板で魔力切れで座り込んでる海賊達を少しぐるぐるして気絶させ、それを見て駆けつけてくる海賊達も同じ様に気絶させていきます。

「ん、打ち止めかな？」

「まだね。中にあと五人いるわよ。甲板より上の者達はこの十五人で終わりね。ライ邪魔だから浜辺に飛ばしておいたら？」

「それは良い考えです♪ じゃ、転移！」

甲板で倒れていた海賊達を浜辺に転移させました。

「うんうん。それで良いわ！ さあ船内に行くわよ！」

「おー！」

船内に入るといきなり三人いました！

「なっ！ 誰だお前！」

お酒の瓶を片手に持った赤いお顔のヒゲモジャさんが三人。

「んん？ お頭達が捕まえに行つたガキ達じゃねえのか？」

「ケケケ。なんだよ可哀想になあ。お頭のヤツが好きそうながキだぜまったくよ」

ん、好きそうならお友達になつて下さいって言ってくれば少しは考えたかも知れませんが。

まあ、海賊さんとは友達にはなりませんけれどね。

「あ、たぶんライの考えている「好き」とはちがうと思うの。まあ良いわ、さつさと終わらせましょう」

「なんだかもやもやする言い方ですが、まあ良いでしょう。」

「うん。じゃあ皆さんはおねんねして下さいね、ぐるぐる」

「げふう。なくに言ってるんだガキい」

トサツ

テーブルに手をついて立ち上がりかけていたので、テーブルに突っ伏して寝てしまったようになっちゃいました。

「おいおい、飲みすぎたか？　じゃあねえなあ〜おれが」

トサツ

「お前もかよ。はああ」

トサツ

「うんうん。順調ね♪　ライ、そこにあるの宝箱よね！　くふふふ。んんん♪　違うじゃない！　なんで腐った食べ物を宝箱みたいな物に入れてるのよ！　ばかじゃないの！」

テラ、残念だったね。

「テラ、まだ船の中に入ったばかりでしょ。あと二人やつつけてから探したら絶対あるよ♪」

「そ、そうね。私としたことが、取り乱してしまったわ。ありがどうライ、次はその梯子

から降りるみたいね。待ち伏せはいなさそうだからさっさとやつつけて、おたからさがしよー！」

「うん♪」

♪ その前に、船倉の中の人達を助けてからですけど、今は言わないでおきましょうかね

「じゃあ行くよ。ほいっとー！」

僕は梯子を使わずに下に飛び降り、さらに下に下りる梯子へ向かいました。

「一応気を付けてね」

「うん。この下に皆さんいるみたいですから」

そうして気配では梯子の近くには誰もいませんので、思いきって飛び下りる事にしました。

そこには、鎖に繋がれた五十人くらいの人がボロボロの服を着て座り込んでいる姿と、小さなテーブルでお酒を飲んでいる最後の二人がこちらを見て驚いた顔をしています。

んー、近いですしぐるぐるしながら倒しましょうか。

「チツッ！ カキがどうやって入ってきやがった！ おい！ 挟み撃ちだ！」

「何がキ一人にそんなにあせってんだ？」

「このガキの魔力がヤバいんだよ！俺それだけは分かるんだ！上の魔法使える奴らなんか足元にも及ばねえくらいの魔力を持ってんだよ！」

「マジか！ なら上の奴らは」

ドサツ

「おい！ てめえガキ！ なにしやがった！」

「あのですね、実は」

「ライ。説明なんかしなくて良いわよ。ほらほら早くやつつけてお宝探しよ！」

「そうだね♪ じゃあおじさん覚悟してね。おじさん中々魔力が多そうだからちよつと痛いですよっ！」

収納から朝の貝殻を取り出し眉間、鼻、目を閉じたので目を。

貝殻を礫つぶに見立ててぶつけてあげます。

「が！ 痛っ！ ぐおっ！ 目があつ！」

そして顔を押さえている間に近付いて刀を出して振りかぶり、お腹に！

ドスツ

「ぐえっ！」

二メートル近い背の高さの海賊は、お腹の痛みからくの字になって頭が下がってきました。

「じゃあおねんねしていて下さいね♪ ほいっと！」

ガッ

ドサッ

頭に一撃を加え、倒しました。

「良くやったわライ！ さあ！」

「その前にこの人達を助けようね♪」

「あ！」

やっぱり忘れていたようです。

第61話 お助けしちやいましょう

「そ、それを言おうとしたのよ！ ほ、本当だからね！ お宝探しの事なんて。。。考えてたけれどもちよつとよ！ ほくんのちよつぴりなんだからね！」

僕の耳たぶを、クイクイクイクイと引つ張りながらそんな事を言ってますが、くふふ。分かつてますよ♪

「うんうん。じゃあみんなを助けてからね♪」

そんな事を話しているのが聞こえたのか、鎖に繋がれた人達がざわざわしだしました。

でも最後に倒した海賊さんってなぜすぐに気絶しなかったのかな？ おっとそんな事は後で考えましょう。

海賊さんの腰にぶら下げてあつた鍵束を回収してみんなを繋ぐ鎖を外そうと思いません。

「お、おい少年、俺達を助けてくれるのか？」

鍵束に手を伸ばした時に鎖で繋がれた人達の一人に声をかけられました。

「はい。皆さんは無理やり捕まったか、人攫いに合った方ですよね？」

「ああ、ここに繋がれている者全員な。後、この海賊達の島にも無理やり働く事を強要されている者も五十人ほどいる」

「え？ まだそんなにいるのですか！ 大変じゃないですか！ その海賊達の島はどこに！ 助けなきや！」

「場所は分からない。俺達は島から出る時は船に乗ってすぐにここだからな」

おじさんは床を指差し答えてくれました。

「王国の東の森沖つて言うのは聞いたことがあるぞ」

違う人が島のある場所の情報を持っていたようです。

「あつ、俺もそれ聞いたぞ！」「東に三日進んだところにあるつて」「五日だろ？」「船に乗っているのもつと長い気がしますが」「一日くらいしか航海しない時もあるぞ」「他にも海賊の島が」

んんん、まださらに別の島もありそうな雰囲気ですね、ちゃんと調べて助けないと
いけませんよね。

皆の話を聞きながら鍵束を取り、これつて、魔力回復の魔道具？

その男が嵌めている中々カッコいい腕輪、銀と革を使った細かい物ですが。

「ねえテラ、これつて」

「んんん、魔力回復の、そこそこ強力な物ね。だからライが直接倒す羽目になったのね」

「やっぱり。んん〜じゃあ魔道具を持つている人がいるなら全部回収しておかないやだよね〜」

浜にいる海賊達と、この船の人達が持つている魔道具は回収しちやいましょう♪ん〜と、収納！

魔道具を回収し終わり、お待ちかねの皆さんの鎖。魔道具じゃない鍵を開けるのは面倒ですが、一人に対して少しだけ時間がかかりますので一人ひとり色々教えてくれます。

塩作りの海水を桶で一人二つずつ朝から夜まで運ぶ仕事を休み無くやらされていたと聞き、これから暑さもどんどん上がっていきますので、早く助けに行かないといけません。思って思いました。

みんな鎖を外して、途中からは鍵を分けて先に解放した皆が手伝ってくれて解放し、浜辺に転移します。

テラが楽しみにしていた船は後で探検することになり収納しておきました。

「では皆さんは同じ町の人では無いのですか？」

「ああ、中には同じ町の者もいるが数人ずつだろうな。聞いたこと無いかな。人攫いが横行していて、ラビリンス王国のダンジョン街に連れていかれるって話し。あれの闘えない者達、まあ冒険者じゃなかった大人は途中で分けられ海に来たんだよ」

あれ？ それって。。。。

「それに子供達だけ違う馬車に乗せられていたわ。大丈夫かしら知り合の子もいたのよ」

「それって僕が人攫いにあつたのと似ている気がします！ そうだよねテラー！」

「うん。そうね、酷似しているわね。ねえ、お父さんに相談する方が良くないかな？ この人達を一旦サーバル男爵領に連れていって、それから海賊の島の攻略、それに聞いていたけれど他にも海賊の島がありそうじゃない？」

「うん。そうみたいだよね。じゃあみんなをまずはうちに連れて行こう！」

僕は海賊と、海賊に捕まっていた人達、併せて百人を連れてお屋敷の裏庭に轉移しました。

そこにはたまたま外に出て、花壇からハーブを摘んでいるマシユーがいました。

「マシユーただいま♪ 腸詰め用のハーブ？」

「お帰りなさいませライ坊ちゃん。そうですね。くくく、やはり分かるのですね、作り置きも少しありますがまたお持ちになりますか？」

「そうなの！ でもまだまだ付くつて貰った物が沢山あるから今度にするね♪ 父さんいるかな？ ちょっと相談しなきゃならないことがあつて帰つてきたのですよ」

「はい。旦那様はおられますので、そうですね。お呼びいたしましょうか？」

マシユールは僕の後ろにいる人達を見てそう言いました。

「うん♪ お願いでできるかな、流石にこの人数は連れていけないしねくくふふふ」

「くくく、そうでございますね。ではすぐに行つて参ります」

そう言つてマシユールはハーブ摘み用の籠を手に屋敷の中に入つていきました。

すると後ろの方から

「おい、貴族様のご息様だぞ」「どうしよう、私さつき可愛いから頭撫でちゃったわよ」

「オラなんかバンバン肩を叩いちまったぞ」「うわつ、ヤベー坊主つて言つちまったよ」

「じゃあ隣の女の子もー」

くふふふ。ビツクリしていますね♪ 大丈夫ですよ、そんな事では怒りませんし、安

心して下さいね。

父さんを待つている間、プシユケにぐるぐるを指導します。

両手を握り、右手から魔力を流して身体中に巡らせて左手から吸い取ります。

「どうかな？ 少しは魔力の動きが感じられるかな？」

「ん、何かもぞもぞしている気はしますね。これが魔力、早くしたり遅くしたりはでき

ますか？」

おお、それだと変化が分かりやすいですね。

「じゃあやってみるね〜♪ ぐるぐる〜♪ ぐるぐる〜♪ ぐるぐる〜♪ ぐるぐる〜♪」

ございます。では豪勢にライ坊ちゃん提案のバーベキューにしましょうか。それでしたら五匹いただければ皆さんお腹いっぱいになりますでしょう」

「うん♪ そうしましょう。じゃあ五匹ね、ほいっと！」

マシユーの横に五匹並べて出しました。

「ありがとうございます。ではお昼に間に合うようご用意致します」

そう言うマシユーはオーク五匹を収納し、屋敷に入っていききました。

「ねえライ。さっきの人もぐるぐるやつてるんだけど、それにさっき屋敷の中に見えたメイドもぐるぐるやつてるんだけど！ ねえ！ あなたの家は古代魔法使い何人いるのよー！」

「ま、前にも言ったよね？ 一応教えはしたって」

テラは僕の耳たぶをクイクイではなくグイグイグイと引つ張りながら聞いてきます。

「言つてたけれど！ 言つてたけれど、そんなにかんたんなことじゃないのよ！ はあ、ハンカチと腹巻きちようだい。少し寝て頭の中を整理するわ」

「う、うん。なんだかごめんね、はい腹巻きとハンカチ」

「ありがとう」

テラはいつも通り頭から腹巻きをかぶつて手を通しお腹に持つていきます。

ムルムルの上で横になりハンカチの布団で寝てしまいました。

「テラ怒っていましたね？ 大丈夫？」

「大丈夫だよプシユケ。テラは絶対許してくれるから」

そして父さんの方を見ると、あの後からずっと捕まっていた人達の話聞いています。

そこにカヤッツさんが奴隷の魔道具を一つ手に持ちやって来ました。

これはお頭つて呼ばれていた人を教えた方が良いみたいです。

「カヤッツその魔道具付けるなら、えつとね、あつ、この人がお頭つて言われてましたよ」

「坊っちゃんありがとうございます。それが分かれば大助かりですよ、いちいち付けて詰問。外して次へってやらずに済みますからね」

「お願いしますね♪ ちなみにこの人も偉いさんだったはずですよ。命令してましたからね」

それを聞きカヤッツも収納が使えるようで、奴隷の魔道具をもう一つ出しました。

うん。テラが寝ていて良かったですね。あはは

.....

第62話 海賊退治に向けて

「坊っちゃんコイツらはいっつききますか?」

カヤッツが奴隷の魔道具を海賊達の偉いさん二人に付けながら聞いてきました。

「今からでも起こせますよ。魔力切れにしてあるだけです。起こします?」

「よいしょつと、はい。それなら付け終わりましたから起こして貰えますか? すぐに私が詰問して情報を搾り取りますから」

「は〜い、ほいっ!」

魔道具を付けられた二人に魔力を流し込んで気絶から起こしてあげます。

「ありがとうございます。どうせ坊っちゃんの事だからコイツらのアジトを潰していくのでしょ?」 ゴブリン村長を倒した時みたいに」

「な、なぜそれを! 旅立つた後にしか誰にも言つてませんのに!」

「ぶぶつ、私は知っていましたよ。門を出てすぐに『今日はゴブリン村長をやっつけて村を無くしちゃいましょう♪』って旅立つ少し前に言つてましたから」

「なんですとー! フィーアとのあれを聞かれていたのですね」

「あはは。その通りです。海賊の島の位置とか、人攫いの事件とも繋がりがありません」

ので」

「人攫いの？ あの世間を騒がせている事件ですね。分かりましたその事についてもしっかりと聞いておきます。では後程お知らせに参りますので」

「はい♪ お願いますね」

「はい。ではふんっ！」

パチンパチン！

パチンパチン！

と良い音をたてるように海賊二人の頬を往復で叩きました。とても痛そうです。

「痛っ！ 何しやがる！」

「くっ！ 痛っ、なんだ！ 誰だてめえ！」

やっぱり痛かったようで起きたようです♪

「よし命令だ、立って私に付いてきなさい」

そう言うとかヤッツさんは屋敷の正面にある詰め所の方へ歩き出しました。

「何言つてやがる！ んな命令なんぞ聞くかボケ！」

「てめえ死にたいらしいな。分かった望み通りに。なんだこれは体が勝手に！ か、お

頭までだと！」

「無駄口叩くな！ 大人しくして黙って付いてこい！ あっ、坊っちゃん残りの奴らも

人を集めて引き取りに来ますから、起きないようにしておいて下さいね♪」
 「うん。大丈夫だよ♪ 後半日くらいは寝たままだから」

「ぶぶつ、分かりました部下には荷台を用意させますね♪ ではでは後程」
 そう言つて笑いながらカヤッツさんは立ち去つていきました。

「ライ、カヤッツの用事は済んだようだな。済まないが王都まで転移で連れていけないか？ ああ、帰りは良いぞ今日は向こうの屋敷にあいつが行つてるのでな」

「じゃあ、王都のお屋敷に転移させれば良いのですね♪ すぐにですか？」

「ああ、この者達から聞いた話を少しでも早く王様に伝えなければならん。カヤッツの調べた事は分かり次第伝えて貰いたいが、そうだな。王城の門番に渡しておいてくれるか？」

「分かりました。では行きますね、転移！」

パツ

父さんを王都の屋敷、その庭に転移させて、僕はカヤッツさんの戻つてくるのを待つだけです。捕らわれていた人達にお昼までの長い待ち時間を楽にして待つて貰うようにしました。

メイドさんに軽食を頼み、椅子とテーブルを用意して飲み物も用意。

「あの、ライ様。こんな事をしていただいてよろしいのですか？」

一人父さんとお話ししていた人がおずおずと話しかけてきました。

「良いですよ♪ 皆さんは被害者なのでですから。それに父さんが皆さんを元の場所に戻してくれまますので少しでも疲れを癒して下さい」

そう言うのと、皆さん遠慮して手を出さなかったお茶に手を伸ばし始めました。

場の緊張がゆるんだ頃軽食のサンドイッチが届くとそれはもう中々の勢いで食べ始め、メイドさん達がおかわりを持ってきてくれたほどです。

相当お腹もすいていたことでしょう。

そうして寝てるテラをよそに、プシユケのぐるぐるを補助しているとカヤツツさんがそこそこ分厚い資料を持って帰ってきました。

「坊っちゃんお待ちせしました。だいたいの島の位置や数、海賊の人数に捕らわれているものの達の人数です」

「早かったですね♪ これを父さんにですね。ふくん、三つも島があるのでですね。でも思ったより捕まっている人はいないのでですね♪ 百人ちよつとならここに連れてきてからでも良さそうですし。ありがとうございます」

「いえいえ。坊っちゃんも怪我の無いように楽しんできて下さいね、ゴブリンよりは賢いですから、ぶぶぶっ」

「くふふふ。もちろん♪ 沢山奴隷が増えれば、この領地の開拓をして貰えますからね

♪

「まったく。坊っちゃんは無事なら危険きわまりない事も遊び半分です。どお強くなりましたから、私共も安心して待つていられます」

「ぬふふ。頑張つて修行しましたからね。じゃあカヤツツやみんなの期待にも答えられるように玉城に行つてこの資料を持って行つて海賊達をやっつけてきますね♪」

「はい。行つてらっしゃいませ」

その言葉を聴いて、プシユケも連れて玉城前に転移しました。

お城の入口前に転移したものですから門番さんは凄く驚き、少し怒られちゃいましたが、そこにテイを学校に送つた帰りのステファニーさんが騎士さんとの訓練のため偶々たまたまお城に来たところに出くわし、僕の身分を証明してもらいました。

ですが、いつの間にか資料を渡すだけで良かったはずなのに、中にまで入ることになりました。

「ライ殿も一緒に訓練はいかがですか？」

「ん〜とですね、この後海賊をやっつけて、そこに捕まっている人達を助けなきゃならぬのでまた次の機会にお願いしますね」

「ぬ？ それは本当の事なのですか？ それが本当だとすれば、国の兵を動かす事態なのですが」

「あはは。大丈夫ですよ♪ 朝から五十人捕まえて、五十人救いだしてきましたから」
ステファニーさんは、「へ？」って顔で僕を見てその場に止まってしまいました。
「あのステファニーさん？ 早く父さんにこの海賊が証言した物を持って行きたいので止まらず行きましょう」

ギギギときしむ音が聞こえてきそうな動きで首を傾げ僕を見て来ますが、ステファニーさんの手を取り歩き出しました。

「ねえライ、そのお姉さん歩いてるけど気を失ってない？」

「ん、そうみたいだけど一応意識はあるみたいだね。混乱中って感じですね。まあ早く終わらせないとバーベキューに間に合いませんし、このまま行っちゃいましょう♪ たぶん前にお話しした部屋にいると思います。だって父さんの魔力がそこにありますから」

「へえ、そんなことも分かるんだ！ よし、私もぐるぐる頑張るから手を握ってさっきのやつてよ」

「良いよ。ついでにステファニーさんのもぐるぐる回復しながら回してあげましょう♪」

そして僕が真ん中で三人手を繋ぎ廊下を歩いていると前からドレスを着た女の人が侍女さん達を連れて歩いてきました。

たぶんティアラを付けていますので王妃様だと思えます。すぐに二人の手を引き廊下の端によりステファニーさんも無理やり跪かせ三人頭を垂れました。

プシケはわたわたしながら僕の真似をして、ステファニーさんは頭を上げたままでしたので頭を押さえてなんとか間に合いました。

そして僕たちの前を通りすぎるのかと思つたのに立ち止まりました。

「あら♪ あなた噂のサーバル男爵家三男、ライリール君♪ うふふ♪ お顔は見せてはくれませんか?」

「はっ! サーバル男爵家三男ライリール・ドライ・サーバルです。ライとお呼び下さい」

顔を上げ挨拶をしました。

「うんうん♪ きちんと挨拶も出来るのね♪ 今日はどうしたのかしら?」

「はっ! 東の森の向こうにある海に出没している海賊についてと、世間を騒がせている人攫いの件で、父が先だつてご報告に来ており、その追加の資料をお持ちした次第でございます」

「まあ。そうでしたのね。一人このライ君を早急にあの人の元に案内して差し上げて」

王妃様がそう言うと、一人の侍女さんがその言葉に呼応して一歩前に出てきました。

「かしこまりました。ライ様私のご案内致します」

「はい。どうかよろしくお願いいたします」

「では、私達は参りますので良しなに頼みましたよ」

「はっ！」

僕と案内してくれる侍女さんが返事をした後、スルスルと優雅に立ち去って行きました。

「では、ご案内致します」

「はい。よろしくお願いいたします」

僕達でステファニーさんをなんとか立ち上げさせ、手を引き侍女さんの後をついて父さんと王様の待つ部屋に向かい歩き出しました。

第63話 海賊退治です 一島目

コンコンコン

『誰だ』

ん？ 王様でしょうか、部屋の中から返事がありました。

「サーバル男爵家三男ライール様がお越しです」

『おお！ 早く入ってくれ！』

「失礼いたします」

カチャ

侍女さんは目の前の扉を開け、前回王様と会った部屋に一緒に入りました。

「ご苦労。ふむ、

君が案内をしてくれたのだね。ありがとう、妻の元に戻ってやってくれるか」

「はっ、失礼いたします」

侍女さんが出ていった後、海賊と人攫いの資料を待つていた父さん母さん、王様に宰相さんが座るソファアのところまで進み父さんへ渡しました。

「ライありがとう。この後はどうせお前の事だ海賊をやっつけに行くつもりなのだろう

「？」

「はい♪。そして捕まえてサーバル男爵領の開拓をしてもらえば♪」

「くつくつく。なあサーバル男爵。この国、私にはこんな頼もしい未来の親戚がいる。早く息子に当主の座を渡して私の近衛騎士団長にならぬか？」

「おお！ 父さんが近衛騎士団長ですか！」

「あはは。まだまだ息子達は幼いです。それに領地を王よりいただいてまだまだ開拓も進まずこれからのですから、もうしばしお待ちを」

「ふむ。仕方がないな。どれ資料をテーブルへ」

「はい。パッと見ただけでも島が三島ですね。捕らわれている者は百と少しです」

「海賊どももそこそこいるようだな。ライ、やれるのか？」

「はい。お任せ下さいませ。この後すぐに行つて終わらせてきますのでご心配無く」

「くつくつく。王子にも見習わせたいものだな宰相」

「私からはなんともし」

「くふふふ。本物の王子様も兄さん達には勝てないでしょうね。この前チラツと見ても数段は魔力も少なかったですし、僕だつて負ける気はありませんよ」

「でも、勉強の方は分かりませぬね、もしかして物凄く賢いのかも知れませぬし。」

「では皆様、僕は海賊退治行つてきますね♪ 早くしないとお昼ごはんはパーベキュー」

ですから間に合わなくなっちゃいますので」

「うふふ♪ ライったら。でもバーベキュー良いですわね、あなた。王様をお誘いはしませんの？」

「なにやら、ライがそんなに楽しみにするような昼食なのか？」

「はい、バーベキューと言うのはですね。」

ん、長くなりそうなのでこっさり行っちゃいませうか。

一応父さんにだけ伝え、お宝をいただいた島に転移しました。

「さて、貰ってきた地図だと、このお宝島がこれで、東の森があつちだから、一つ目の島は東の、ちよい右方向ですね、どれどれ」

だいたいの方向が分かりましたので、そちらに範囲を絞って広げていきます。

ほどなくして五十人いるかいないかの集まりが見つかりました。

「テラ、くふふふ。まだ寝てますね。ムルムル少し戦闘になるかもしれないからテラを落つことさないようお願いいね♪」

するとムルムルは、ぷるぷるする代わりに手を伸ばすように体から突起を出して手を振るようにゆらゆら。

「おお♪ ムルムル凄い！ そんな事できるようになったんだね♪」

ゆらゆら

「ムルムルって普通のスライムなのに賢いわね♪」

「うんうん。僕もそう思うよ。じゃあプシユケ転移するからね。いくよ、転移！」
パツ

到着すると、そこには突然現れた僕達を見つけた海賊達、ほんの少し『え?』って顔をしました。僕達が子供二人と見てニヤニヤしながら武器を手に近づいてこようとしています。

「プシユケは僕の後ろにいてね♪ じゃあぐるぐるです！ ほいっと！」

プシユケの前に出て海賊達がゆつくり歩いて近付いてくるのを見ながらぐるぐるを加速させていきます。

残り十五メートルほどでしょうか？ 直接やつけないとダメみたいですね。

「プシユケ、テラとムルムルを預かっていてくれる？」

「は、はい。流石にこう武器を持たれて近付いてくると、こ、怖いですね。さあムルムルこつちに来て下さいね」

僕の肩からムルムルが離れたのを感じ、弓などを持っている者はいないようです。これなら大丈夫そうですね。

「じゃあオーク村を攻めた時の肉弾戦をやってみましょうか。シッ！」

僕は一気に加速して、歩いてくる先頭の海賊に近付き、僕が手に持っている木の棒を

プシユケはテラを乗せたムルムルを胸に抱えて走り寄ってきます。

「あの船に五人だよね？」

「ええ。それで海賊は終わりよ。残りは、神眼んんん。そうね、後は人攫いにあつた人達だけね」

なら船の中は海賊の五人だけですし。

「ぬふふふ。収納！」

「ぬあつ！」「なに！」「なあ！」「どわっ！」「げっ！」

バシャンバシャンと高さ数メートルのところから海に落ちる海賊達。

「はああ、遊んでる場合じゃないでしょ！ さっさとやつつけちやいなさい！」

怒られちやいました。

船を繫留けいりゅうしてあつた棧橋から上がろうとしている海賊達を僕の前に転移させます。

「転移！」

パツ

「いらつしやいませ！ 少し痛いですよ！」

ドスドス

今度はお腹を棒で突きお腹を抱え跪いて、ちようど良い高さに顔が来ましたので顎を狙い回し蹴りを一発！

ガツガツガツガツガツ！

一発の回し蹴りで五人の顎を蹴り抜き、五人を脳震盪のうしんどうで動けなくし、その間に魔力を欠乏させ気絶させました。

「はわあくライってぐるぐるだけじゃなくて、普通の攻撃力もあるんだね♪ 今のクルンって回りながら蹴るのカッコ良かったから教えて欲しいな♪」

目をキラキラさせながらプシユケ。

「そうね。その前の動きも良かったわよ。あの早さで動かれたら普通の人は避けられないわね♪ じゃあ次はお宝を」

やっぱりお宝が気になっていたテラ。

「テラそれはまた後でね♪ まずは鍵を探して捕らわれてる人達を助けなきゃ」

「そ、それよ、それを言おうとしたのよ！ あ、当たり前じゃない！ さあライ！ さつさと屋敷に連れていくわよ！」

みんなを連れていく前に、この島にある鍵を探すために魔道具を探し、魔道具はもちろん海賊達が装備している物も収納していきます。

その時見つけた宝箱を見て、テラはもちろんプシユケも凄く嬉しそうな顔をしていたのを僕は見ていましたよ♪

そしてやっと見つけた鍵で三十人の拘束用の腕輪を外していきます。

「はい。あなたで最後ですわね♪」

「ああ。本当に助かったよ」

「いえいえ。それと今から王国のサーバル領に一度向かい、その後元の町や村に戻れるように手配してくれますので安心して下さいね♪」

そして残りの船や武器を防具も収納してしまい、一島目が終わりましたので屋敷にみんなを連れて転移しました。

第64話 海賊退治です 二島目

「皆さん到着です♪ 楽にしていして下さいね♪ あっ！ マリーアお願いがまたあるのですよー！」

「うふふ。分かっております。三十名でございますね♪」

「うん♪ みんなには急で悪いんだけどお願いしますね♪」

「かしこまりました」

一気に三十人増えましたので、またまたメイドさん達に軽食をお願いして、またまたカヤッツ達に海賊を引き取って貰いお宝の島に戻りました。

「次の島は、真東より少し左だね♪ ん？ 動いてるね？ あっ、船で移動してるのか。その近くは、二十人ほどいるのが島だね♪ よし、船から行くよ」

「そうね。そうなら最初から戦闘があると思うから油断しないでねライ」

「はわわわ！ 頑張ってください！」

「うん。そのつもりで行くよ。プシユケはそのままテラとムルムルをよろしくね。それでは行きますよ、転移！」

パッ

小さな船ですが甲板上と見張り台に併せて十五人ほど、その人達にぐるぐるをすぐさま開始します。

「な、なんだこのガキどもは！ 急に現れやがったぞ！」

「敵襲か！」

「なに！ 敵襲つてガキが二人だけじゃないか！ おいお前らどこから来やがった！」

おっと、お話ししてくれるのですか、それは時間稼ぎに良いですね。

ぐるぐるしながらなるべくお話しを引き伸ばしましょうかね。

「こんにちは。突然おじやましてごめんなさい。少しお聞きしても良いですか？」

「なんだコイツ。俺達が怖くねえのか？」

うんうん話に乗ってくれそうです。

「おじさん達つて海賊さんですよね？」

「ん？ なんだガキは海賊にでもなりたいたつてののか？ そんな甘かねえぞ海賊つてのは

よ」

なりたくないですよ。でもそんな事を教えてくれるなんてちよつと良い人？

「何てつたつて捕まれば極刑か一生奴隷だぜ？ まあ捕まらねえがな。ギャハハハハ

ハ」

ですよ。でも僕が来たのですから捕まつて貰いますよ。

「んな事よりこのガキで楽しまねえか？」

え？ 楽しい事？ 海賊の遊びなのでしょうか？ どのようなのですかね。

「おお。そりゃー良いな。男は俺は要らんが奥の女は俺が貰うぜ」

「ゲヘヘヘ。じゃあ男の子は俺がいただくぜ」

「ライ。あなたが考えてるような遊びじゃないわよ。でもまあそろそろね」

テラがそう言いましたが少し気になりますので、後でどんな遊びか教えて貰いましょう。

海賊達は何か順番を決めているようで、紐ひもを使つてくじ引きをやるみたいです。

当たりが先を結んだヤツのようです。

少しくじ引きをやつてみたい気もありますが僕は入れてもらえませんが、まあもうそろそろですね。

「よし！ じゃあみんな紐を握つたな。せーので引け、先が結んであるのが当たりで一番だ！ 見張りが一番なら誰か見張り台にあがれ、残りはこの後決めんぞ！ 行くぞ！」

せー

ドサツ

「おいおいどうした！ って、うひょく当たりだぜ」

ドサツドサツと次々に倒れて、甲板には僕達だけが立っている状態になりました。

「上は終わりだね。下にもいそうなの？」

「ちよつと見てみるわね。んん神眼く。海賊は二人ね。船も小さいからこんなものでしょ。捕まっている人達も二十人よ」

「了解。じゃあ下りるところどこかな？」

「ライ、あの穴じゃない？」

テラが指差す方向には四角く床に穴が開いていて、蓋のような物がはね上げられています。

近付き覗いてみると梯子が取り付けられていて下りられそうです。

「うん。ここみたいだね、早速僕が先に下りるからプシユケは後から付いてきてね」

「はい♪ 梯子上り下りは家で毎日屋根裏に上がるためやってみましたからね♪ 得意中の得意です♪」

「おお。それなら安心です。ではお先に」

僕はびよくんと穴から下に飛び下りました。

「ライに梯子は必要ないみたいね」

「あはは。ですね。じゃあ私達も行きましょうか」

飛び下りたところは木箱が積み込まれているだけで他には特になにもありません。

蓋の空いた木箱を覗くと隙間に草が詰められた瓶がぎつしり入っていました。

「お酒かな？」

「一本取り出してみるとワインのようですね。料理用に何本か貰っておくのも良いかもしれませんね♪ この前作ったシチューはとても美味しかったですし。」

「何か良いのあったの？」

「テラ達には残念だけどワインですね、料理用に少し貰おうと思って」

「な、何の事か分からないけど良かったわね。それよりもう一つ下よ。早く助けちゃいましょう」

「うん。じゃあ次は階段ですから僕の後についてきて下さいね」

階段の先は扉もなく僕達の声も聞こえていたはずですが誰も出てきませんし、どうしたのでしょうか？

気配はみんな中にありますし、居眠りでもしているのかな？

そして階段を下りきりそくつと中を覗くとテーブルでお酒を飲んで本当に居眠りしてる二人の海賊がいました。

「テラ、あの寝てる二人で良いんだよね？」

「そうね。そうなんだけどこの緊張感が霧散してしまつて、沸き上がる怒りはどうすれば良いのかしら。まあ良いわ。ぐるぐるやっちゃいなさい！」

テラのお怒りも分かる気がします。僕だって木の棒ですが構えながらいつ飛び出し

てきても良いようにしていたのに。

「こうなんだかやりどころのない怒りなんですかね？ グツグツ沸いてきますよね？
「よし、起こそう！ こんにちはー！ 皆さん助けに来ましたよー！」

入ってきた僕達に気付いても口に手をやり黙っていてくれた皆さんには申し訳ないですが、『え？ 起きちゃうよ！』って顔してますがやつちやいました！

「んがっ、なんだってんだ！ クソデカイ声出しやがって！ 船長の俺が寝てんだ！
静かにしねえか！」

「てめえもやかましいんだよ副船長！ いつから俺の上になったんだ？ ああん？」
くふふふ。二人とも起きましたね。

そこそこ魔力もありそうですから五分くらいはお話しできると良いのですが。

「けっ、その内俺が頭の地位をぶんどってやるからよ、覚悟しておけ、こき使ってやるからよ。で、ガキがなんでこんなところいるんだ？」

「てめえ！ ぜってえぶつ殺してやるからな！」

ほうほう。喧嘩しちや駄目なのですが、この場合はどんどんやって下さいですね。
ん〜！ そうです、ここで質問なんかしちやええば少し考える時間が取れるかもしれませんね。

「あの！ そちらの方もの凄く怒っていますが大丈夫ですか？ もしかして僕達何か邪

魔しちゃいました？」

「あ？　頭。そんなに怒んなよ、ハゲるぜ？　ああ！　すまねえなもうてつぺんがハゲてたな。くはははは！」

「よし、てめえ死にたいらしいな。表にでやがれ！　勝負だ！」

「ああん！　良い度胸じゃねえか！　今までは勝ちを譲ってただけって所を見せてやらあ！」

二人はドカドカと足音を立て階段を登っていきました。

「ねえライ。たぶん梯子の辺りで魔力切れよ」

ドサツ

「何落ちてやがる！　さつさと登っ」

ドサツ

「ほら。落ちたじゃない」

「ここで気絶してもらおうつもりだったのですが、なんだか悪いことしちゃいましたね」
サーバル男爵領で働いてもらわなければいけませんし、怪我してないと良いのです
が。

「まあまあ。それより皆さんを解放しないとですよ！　ライ鍵は？」

その後、プシユケが言ってくれたので思い出した鍵を探して船の中を探し回り、最後

の方で見つけたのですが、実は頭さんが持っていました。

僕は謝りながら鍵で皆さんを解放し、屋敷に戻って折り返し次の島の方に転移しました。

よし、次は遊ばないでしつかりやりましょう。

第65話 海賊退治です 二島目の残り

「到着です。気を付けてね、近くにいますから」

島の中心地点に転移してきた僕達は身をかがめ辺りを警戒します。

「大丈夫見付かってないわね。それにしても上手い具合に塀の外なんて幸運ね」

え？ 僕だって考えてますよ？

「はい。海賊達の前に出ちやうと思つてました」

プシケまで！

「いやいやちゃんと考えてますよ。地図があつたでしょ？ そこよりちよつと島の中心方向に転移したのですから。でも塀の外とは本当に幸運でした」

「まあそう言うことしておくわ。で様子はどんな感じなの？」

「あのですね、二十人くらい集まつてるところとそれより少なくて十五人かな。所々二名ずつ高いところ、見張り台でしようそこにいるのが海賊でしょうね」

「なるほど。三十五人ね。見てみるわ。神眼。逆ね。二十一人が海賊よ捕まつているのは十五人。だから多い方そつちをぐるぐるしちやつて」

「了解です♪ 見張りを捕まえた人達にやらせてるんだね。僕だけなら間違つちやうと

「ころでした。テラがいてくれて本当に助かるよ。ありがとうテラ♪」

「べ、別に大したことじゃないわ。ほらほら私を見てないで！」

（何かしら？ パパが変なこと言うから意識しちゃうじゃない。私は大地の神なのよ。今は分け身だけど、でもこのままライが。）

テラは少し顔を赤くして、ぷいっとそっぽを向いてしまいました。

くふふふ。ムルムルを摘まんで引つ張つてます。痛くないかもしれませんがほどほどにしてあげてね。

「は〜い♪ やっちゃいますよ〜、ぐるぐる〜」

五分ほどしてその二十一人の魔力がなくなり気絶したようなのでプシユケを抱えて二メートルほどの塀を飛び越えます。

「なっ！ 何者ですか！」

見張り台の上にいる人達に見付かりました。

「こんにちは♪ 皆さんを助けに来ました。もう海賊達は気絶させたので皆さんどこかに集まってくれますか？」

見張り台にいた二人の男性は顔を見合わせ大きく頷くと。

「本当に大丈夫なのか？ 鐘を鳴らして良いならすぐに奴らの家の前に集まれるが」

「おお！ それはありがたいです♪ ぜひお願いします」

もう一度見張り台二人は顔を見合わせ頷くと片方の人がハンマーを持って半鐘を撃ち鳴らしました。

カンカンカンカン

その後梯子を使い下に下りてきましたので一緒に海賊達の家に向かいます。海に面した一番大きな家で、パラパラと集まり出しているようです。

「集合の半鐘が鳴ったが何事だ？」

「どこかがこの島に攻めてきたのか？」

「いやいやこの島は見付かってないと言っていたぞ、どこかの島は見付かったから島を変えらって」

「それ俺も聞いた！」

おお！ 皆さん一気に喋ると誰が何を言ったのかさっぱりですよ。

「みんな！ 静かにしてくれ！ 今ここにいる少年が海賊達を気絶させたそうさ。現に今奴らは家から出てきていないだろう。そうさ。少年何か一言もらえるかな」

うんうん。

「はい。初めまして皆さん。こんにちは。この後ですが、一度サーバル男爵領に行つてから皆さんの元の町や村に帰つてもらうことになると思います。えっと、皆さんは拘束はされてないのですね？」

良く見ると誰一人ここまで外してきた鉄の腕輪をしていません。

「ああ。こここの島にいるものはもう何年も攫われてから海賊達といて、一度も脱走などをしなかった者達だから腕輪は免除されているだけだ」

えっと何故逃げないのでしょうか？

「いや、恥ずかしいのだが、ここに居る者達はだ、泳げない者達ばかりなんだ」

「えっと、それは、し、仕方がないですよ、あは、あは、あははは」

僕もこの前テラに教わるまで泳いだ事無かったですし、泳げる場所が近くに無ければ泳げない人も沢山いてもおかしくありませんね。

じゃあまずは送ってしまつてからこの島を綺麗にしましましょう。

そして海賊達と併せてサーバル男爵領に転移したのですが、三島を終わらせてからにしようと思つていたバーベキューの時間になり、バーベキューが終わつてから二島目を終わらせて、三島目に行くことにしました。

パツ

「なんとまあ、この者達が捕らわれていたと？ いったいこれは何人いるのだ？」

その声を発したのは、母さんの転移でやつて来た王様。

「あつ、王様いらつしやいませ♪ 来てくれたのですね。えっと今何人でしたっけ？」

「百十五人よ二島でね。三島目は五十人いるみたいだし。それと今のところ海賊は百八

人ね」

テラがちゃんと数えていてくれたようです。

「ふむ。三島目は五十近くいると聞いたが、それほどの者が
 ・ ・ ・ ・ ・
 それからラビリンズ王国に連れていかれた者も併せれば二百を超えそうな勢いだな、よしこの者達の滞在費、故郷への旅費も含めて私が出す。宰相記録しておけ。サーバル男爵、手配は任せても良
 いか？」

王様は一緒に来ていた宰相さんにそう言うと、懐から出した紙束に記録しています。

「はい。カヤッツ、皆さんの向かう町や村を聞いてまとめておいてくれるか？」

「はい。すでに今到着した十五人以外はすでにまとめてあります」

おお。流石カヤッツです。しっかりと跪き頭を垂れたまま答えます。

もちろん他のみんなも、僕とプシユケもちゃんと跪いていますからね。

「なんだサーバル男爵。良い部下に恵まれているな」

「ええ。いつも助けになってくれていますよ」

「ねえあなた。マシユーが用意をやりたそうですよ。うふふ」

あつ、マシユーやメイドさん達も手に持つものを地面に落とさないようちよつとやりにくそうに跪いています。

「王様。食事の用意がととのいそうですので立たせてもよろしいか？」

「うむ、この皆の分だ、早速準備してくれ」

「ありがとうございます。マシユー、バーベキューを開始してくれ」

「はい。もう火も良い感じですからすぐに食べられますよ♪ おいみんな、各自始めてくれ」

「はい！」

そうして始まったバーベキューは、途中で三匹のオークを追加、それもあつという間にみんなのお腹に消えていきました。

途中で僕が作った醤油を持って出すとみんなが殺到して一樽の醤油が無くなるほどでした。

もちろん王様も、気に入ったよう途中でからメイドさんの手を借りず、自ら肉を焼き出し、醤油を付けて二度焼きするほどでした。

では満足しましたから二島目をお掃除して最後の島に向かいましょう♪

第66話 海賊退治です 二島目〜三島目

「なんだお前達は！ どこから現れやがった！」

「そんな事よりガキ！ お前知らねえか、ここみんなはどこ行つたのか！」

あれ、残りの船から回収するため棧橋がある場所に転移してきたのですが、船から魚の入った網や、野菜かな？ が入った木箱を船から下ろしているところに出くわしてしまいました。

「週に一度の食料を届けに本島から来たつてのに誰もいやがらねえ！」

なるほどです。最後の三島目から食料を運んでくるのですね。

ん〜と全員で五十人ですね。

(そうね、みてみるわ。んん神眼。船に乗ってる海賊五人、荷物を運んでるのはみんな捕らわれてる人達ね。その人達が十五人。下りている海賊が五人ね)

おお！ ありがとう♪ 流石テラ♪ 良く気がつくし可愛いし♪ じゃあぐるぐるやっちゃうね♪

(なっ！ か、可愛い。ま、ただだわ。胸がドキドキしてる。これってやつぱり) ン？ またムルムルを摘みだしましたね？ おお、のびるのびる！ くふふふ。そ

のくらいでやめてあげてね。おっとそう言えば話しかけられてましたね。

「あのですね、ここにいた人達はお昼前に皆さんいなくなりましたよ」

「何！ どういう事だ！」

「おい、アイツら逃げたんじゃねえか？ もうすぐアレが始まるからよ」

アレってなんでしょうか？ 言われたおじさんも少し考えている風ですが。

「ああ、あれな。だが時期はまだ一月ひとつきほど先じゃねえか？」

「だよなあ」

よし、聞いてみましょう。

「あの、アレってなんの事ですか？」

僕に喋りかけられ、『面白いやガキがいたな』って顔でこちらを振り向きました。

「ああん？ なんだそんな事も知らずに海にいるのかお前は」

なんだか海の常識みたいです、まだ来たばかりですし。

「はい。先日始めて海に来たばかりですから」

「つたくしやあねえな。もう一月経てば海流に乗って魚の群れと共にシーサーペントがこの海域にやって来るんだよ！ 魚ってのはな、海流にのつてこのでかい海をぐるぐる回ってるんだ。それにくつついてやって来る。その時ばかりは海賊といえど海から上がるんだ、覚えておけ！」

「おおー！ シーサーペントですか！ 一度見てみたい気がしますね。」

「何ごちやごちや言つてやがる！ シーサーペントなんざ出会つたら終わりよ！ クソ

！ お前ら荷物を船に戻せ！ すぐに帰るぞ！」

「ライもう良いんじゃないですか？」

「うん。聞きたい事も聞けましたし。ぐるぐる、ほいっと！」

荷物を運んでいる人達以外、十五人いる海賊が次々に倒れて行くのを見て荷物を運んでいた人達は歩みを止めてその場で立ち止まっています。

まだ気絶していない海賊も同様にその光景を見て止まっています。

「なっ！ 何がどうなった！ なんで倒れてんだおい何があつ」

ドサツ

「なんなんだこれは！ おい！ どうした」

ドサツドサツ

「おい！ 海賊達が全員倒れたぞ！」

よし、全員無事に気絶しましたね。

船の方も今、気絶しましたし、皆さんを集めましょう。

「は〜い皆さ〜ん♪ 助けに来ましたよ〜！」

そう言うときみんな僕の事を見て、手に持っていた荷物を地面に下ろし、僕のところ

集まってきたくれました。

「助けとは本当か少年」

「はい。まずはその鉄の腕輪を外さないとですね」

「ああ、助かる。鍵はいた、こいつが確か持っていたはず」

そう言うのと、海賊の一人を足で蹴り転がすと、仰向けになつたおじさんの腰には鍵束がくくりつけられてありました。

「それのようですね♪ 外した後ですが、一度サーバル男爵領に行つてもらつてから皆さんの町や村に帰つてもらふ事になります。それについての滞在費や旅費も心配ないので安心して下さいね♪ なんと王様が出てくれることになっていきます！」

「王様だと！王様が！」

皆さん驚いていますね。くふふふ。

「はい、皆さんの事をとて心配されていましたがね。早く無事と報告しないとですね♪ さあ腕輪を外してしましましょう」

そこからは早かつたです。あつという間に二十人の鉄の腕輪は外され、お屋敷に転移。

するとまだ残つていた王様を見てみんな一斉に跪き、「苦勞をかけたな。今はゆるりと体を休めよ」と王様が言う、「はっ！」と、まるで兵士さんになつたような返事を

みんなそろって口にしました。

それを見ながらカヤツツに海賊を任せて島に戻り、島中の使えそうな物は全て収納し、最後の島に転移しました。

「良いじゃない。また上手い具合に扉の外のようね。流石にさっきの小島に比べると大きそうね」

「うん。気配がバラけてますから手間がかかりそうですね。テラ、プシユケ、端から順にやっつけていこうと思うので、また背負子で行きましょうか」

「そうですね、今までみたいに固まっついてくれれば良いのにね。まったく」

プシユケ、海賊さんにもお仕事があるはずだからバラけるのも仕方がないと思いますよ。

それから背負子を出してプシユケをを装備！

「さあ、端から順にやっちやいましょう！ シッ！」

ここは三メートルほどの高さがある扉を、助走をつけて飛び越えます。

ダッ

壁を飛び越え着地したところに腰に剣を持った人がいますが狙い通り、木の棒でお腹を突き、屈んだところ顎を蹴り抜き気絶させます。

「ライ！ この人の魔力をぐるぐるさせて魔力欠乏に！ 魔道具も収納しちやいなさい

「！」

「うん！ 収納！ 次行くよ、海賊かどうか分からない人がいたらテラ、教えてね！」

「任せなさい！ ほらほら私の方を見てないで早くやつちやうわよ！」

「もう！ 落ち着きなさい私！ 今海賊をやつつけることだけ考えるの！ ミスなんかしたらライになんて思われるか。じゃなくて！ うう、パパのせいね！ 今度ママにパパの事言い付けてやるんだから！」

「テ、テラがムルムルを無茶苦茶引つ張ってますが、大丈夫？」

「ん、つと、ムルムル痛くないの？」

ゆらゆら

ムルムルは突起をのぼし、ゆらゆらとゆらし答えてくれました。

「大丈夫そうだね」

「な、何よ！ ほらほら前を向いて！ あの二人は海賊よ！ やっておしまい！」

「は、はい。ぐるぐるから行くよつと」

走る僕達に気付きましたが、もう剣を抜く時間はありませんよ！

「シッ！ シッ！ はっ！」

おへその辺りに棒を突き入れ、低くなった顎を蹴り抜きました。

ドサツドサツ

「魔道具も取っておくのよ！」

「うん。収納！ ほいっと！」

そのの繰り返しで、道を進むと広場が見えてきました。

「よし、今まで倒した海賊達はここに集めてしましましょう！ せくのっ！ 転移！」

ドサツドサツ

ドサツドサツドサツ

「考えたわね。次行くわよ！」

「はいー！」

そしてまだ沢山いる海賊をやつつけるため、人の気配がある方に走り出しました。

第67話 海賊退治です 三島目完了

「テラあの人達は！」

「ハゲの人以外海賊よ！」

うん。確かにハゲてますがそんなに大きな声で言うから聞こえてますよ。ほら、うづくまっっちゃいましたよ！

そんな事を思いながら、三人の海賊を武器に手をつけさせる前にお腹に一発ずつ。

「今の三人爆発する魔道具持つてるわ！ 収納しちやいなさい！」

おっとそれは危ないです。

「分かりました！ 収納！」

「ライ！ また裸じゃない！ 服は戻しておきなさい！」

「あつ、勢いが付きすぎましたね、ほいっと！」

お腹を抱えた海賊達は着せようとした瞬間に動いてしまったので上手く着せる事はできませんでしたが、顎を蹴り抜き気絶をして倒れた体の上に服が乗ったのでよしとしましょう。

「転移！」

パツ

「だから服がここに残ってるじゃない！」

「あはは、ライつてちよつと抜けてますね〜」

うつ、そんなに言わなくても。

「転移！ ほ、ほらあの海賊達の上に転移させたからね」

「はああ、まあ良いわ。そつちの呆けてるおじさんにも広場に行ってもらいなさいね」

薪を担いでいたおじさんに事情を話し、気絶していない海賊達に気を付けて広場に向かつてもらうことにしました。

カンカンカンカンカンカン

「気付かれちゃいましたかね？」

二つ目の島と同じ様な半鐘が鳴り響いたと思つたら海の方から爆発音が聞こえてきました。

ドゴーンドゴーン

「違うようね、魔物よ」

「魔物？ あつちの方が」

ぐるぐるを爆発音が聞こえた方に広げていくと大きな魔力がこちらに近づいてくるのが分かりました。

「凄く大きな魔力ですよ！ あのナインテールくらいの大きさです
さな魔力も、テラ？」

.....あれ？ 一緒に小

「見てみるからライはそっちに急いで！」

「分かった。プシユケもすっかり掴まっててね！」

「はい！」

ダンッ

一気に屋根にまで飛び上がり音のする方向に屋根を走り、飛び、また走り。

「見えました！ 亀、大きな亀ですよ！」

「アクーパラね。大人しい魔物よ、うふふ。卵を産みに来たようね。ライ、あの攻撃して
る大砲を収納しちやいなさい！ 全然無傷だけど怒らせてしまいわ」

「あの小さな魔力は卵なんだね♪ よしじゃああの辺りの物は全部収納しちやいませう！
う！ せくの！」

「待ちなさい！ また裸ん」

「収納！ え？ 何か言った？」

浜で塩を作っていたようですが、煙の上がついていた建物も、置いてあつた馬車も全て
収納して更地になりました。

「いえ。もう良いわ、元々パンツしかあそこの人達着てなかったから、それは収納して無

「いみたいだし」

そこはさつきやつたばかりですからね、意識しましたとも！

「あはは。大丈夫ですよ。あの辺りの物と魔道具だけにしましたから。あつ、こつちに逃げてきますね、ここは少し高台になってますから」

「そうですね、亀さんアクーパーラさん動くたびに波が押し寄せていますよ。それで皆さん避難してますし、こつちにちょうど一本道ですから一網打尽つてヤツです」

うん。それ行けそうですね。

高台にある家の屋根から見ていると、パラパラですが走つて坂道を上がってきます。

そして、海を見下ろせる場所に集まつてきて、アクーパーラさんが徐々に海から上がってくるのを見えています。

「くそつたれ！　なんだよあの亀は！」

「売り物の塩が全滅しちまつたぞ！」

「帝国から買った大砲も見えねえぞ！　一基いくらすると思つてんだよ！」

「大砲はその前に消えただろ！　見てなかつたのか！　周りの塩小屋物まできれいなサツパリ消えちまつただろうが！」

指差したり頭を抱えたり少しガラの悪そうな人達はそうだよね？

「ねえテラ。あの集まつて騒いでる方が海賊だよね？」

「ええ。まずはあの五人ね、それと今登って来た奴ら帝国の貴族よ。船も大きな物があつたでしょ」

「え？ 豪華な海賊船だなんて思っていたけど、じゃあ帝国と海賊が仲間？」

「詳しくは分からないけれど、話からすると大砲は帝国の物を買ったようだし、その可能性は高いわよ」

「そうなのですか、じゃあ。」

「それならもしかして人攫いは帝国が絡んでるってことかな？ 僕はラビリンス王国だと思つてましたが」

「私もそう思つてたけれど、この感じだと帝国の方が怪しいわね」

「テラはムルムルの上で腕組しながら難しそうな顔をしています。」

「じゃあ捕まえて父さんに相談だね。気絶させてしましましょう」

「広大な砂浜に上がってきたアクーパーさんに皆さん目を奪われている内にテラに聞いた海賊と貴族、それに貴族についてきた兵士さん達をぐるぐるさせ気絶させていきます。」

「気絶させた海賊達から広場に転移させ、海側にいた全員をやつつける事ができました。」

「消える海賊達に驚き騒ぎだしていた帝国の人達は沢山の魔道具を持っていて、魔力回

復が結構早かったのですがもちろん全て収納して気絶させましたよ。

そして残りの人達は山側にいました。

途中広場によつて、捕まっていた人達に集まってもらい簡単に説明。

そして山側の畑作業をしている人達の元に向かいました。

「海賊は五人つて言つてたわね。いるのは五十八人ね、ライ五人はこの林間道を抜けてすぐのところにいるわよ。あとの人達はバラけているからすぐ分かるでしょ？」

「はい。やつちやいますね、ぐるぐるしながら、魔道具を、収納！」

「ライ、獣避けの魔道具があるからそれももらつちやいなさい。町長さんにあげたら喜ぶわよ」

「うんそうだね、んくとあつ、これだね。収納！ 全部で八個ありましたよ。畑にしたところだと少し足りないかもしれませんが良いお土産ができました」

そして林間道を走り抜ける頃には海賊達も気絶していましたから、その横に置かれていた半鐘がありましたので鳴らして皆さんを集めました。

ここでも簡単に説明して、広場まで戻り、捕らわれていた人九十人、海賊六十三人、帝國貴族達五十人を連れてお屋敷に戻りました。

そしてまだいましたね王様。

王様は、なぜか先ほど連れて帰つた二島目の人達にオークを焼いているところでした

が、僕が三島目を攻略して連れて帰って来た人達を見て

「海賊どもは数も数えられんのか！ 百人ちよつとの筈がなぜその倍近くいるのだ！ 海賊自体も五十人近く多いではないか！ それに、それに、その帝国の紋章が入った鎧を着ている者達はなんなんだ！ 一人は貴族服ではないか！」

うんうん。王様、それは僕も思いました。

僕はオークの追加をマシユに預け、カヤツツに海賊達をお任せして、アクーパーラの産卵を観に行くことにしました。

だって、滅多に見れるものじゃないって言われたので余計に見たくなつたから仕方ありませんよね。

それには父さんと母さん、王様と宰相さんが一緒についてきました。王様？ 海賊の事は良いのですか？。

ふむふむ、カヤツツに詰問させている間にアクーパーラの産卵をですか。

やつぱりみんな中々見ることでできないことなのでぜひとも見たいようです。

「それでは、転移！」

パッ

第68話 海賊退治です 交戦相手

「おお！ 穴を掘ってますね！」

みんなで高台に転移して浜を見下ろすとアクーパーは完全に砂浜に上がっていて全身が見え、ヒレを使って一生懸命卵を産み落とす穴を掘っていました。

「ううむ、デカいな。あれほどの大きさのアクーパーは見たことがないぞ、私が見たものはあれの半分もない個体だ」

おお。この子は物凄く大きいようですね、あつ、穴が掘り終わったようです。もぞもぞ方向転換してお尻をこれから穴に合わせるのかな。

「ええ王様の言う通り私もその程度の大きさまでしか見た事がございません」
「そうね。本当に大きいわ五十メートルほどあるでしょうか」

アクーパーの動きを見ながら聞いていると、王様、父さんと母さんも前にアクーパーラを見たことがあるみたいです。

「皆様、文献によりまして百メートルを超える個体があったとされていますゆえ、この個体が大きい事にはかわりませんがさらに大きなアクーパーもおりましょう」

そうなのですね！ 百メートルなんて滅茶苦茶大きいじゃないですか！

「おつと今は観察です。ふむふむ、お尻を掘った穴に向けましたよ！ 近くで見たいです。」

「ライ。やめてあげなさい。私達がここで見ている事にも気付いているし、近付いてしまふと産むのをやめちゃうかもしれないから」

「うん。そうだね、安心して産んで欲しい。いん？ テラ！ あつちの方向に気配が！

「何者かがあります！ 多分沢山、船だと思う」

「何！^{ライ} 帝^国 船だど！」

「僕の声にみんなが反応しました。」

「ちよつと待つてね！ テラどう？」

「任せて！^{神眼} んん！ 海賊よ！ 船の数は十！ 大型ばかりね、一隻^{いっせき}に百人以上乗っているわ！」

「テラが言った言葉をみんなが集中しています。」

「んく帝国の船は無いわね、全て海賊よ。だから捕まっている人達が沢山いるつて事ね」

「では千人近くがその方向にいると言うのか！ ライ！」

「はい。僕にはテラほど詳しくは分からないですが、それくらいいると思います」

「ライ。あなたのぐるぐるでやつつけられそう？」

「はい！ でもこの島はアクーパーラさんがいるので、二つ目の島にしましょうか、あそ

「ここに船ごと転移させればあそこも砂浜でしたから乗り上げて止まりますよね？」

「止まるわね。でもそんな事できるの？ 千人と船を十隻よ？」

「ん〜と、一度だと倒すのも面倒だから、一隻ずつにしましょうか、それとももう全員気絶させてからにしましょうか、そうすれば」

「駄目よライ、海賊が気絶する前に捕らわれてる人達が気絶しちゃうたら、何されるか分からぬわよ、」

遮られちゃったけど、それもありそうですね、鞭や何かで叩かれちゃうかも。

それにあれも止めた方が良いでしょうね船だけ収納。海に落としてしまつたらテラにまた怒られちゃいますから。

「うむ。ライよ、アクーパーラの産卵も見た事だしこの島は兵を置き、保護しようと思う。だからそっちの二島目にて一網打尽にしてもらえるか？ 情報では他の海賊の筈だ。時折交戦をしていたと資料にあつたからな」

「他の海賊、そうなのですね。それもそうか、海賊がこの広い海に一つつてことはありませんから他にも海賊達がおおしくありませんからね分かりました」

少し考えながら、アクーパーラが産み落とす白色の真ん丸卵がポコン、ポコンと連続で見えました。

「分かりました。ではみんなで二島目に転移しますね。それとアクーパーラさん沢山産

んで下さいね。転移」

パツ

「到着です。この浜に突つ込むように一隻ずつこちらに転移させて行きますね」

この浜は直径百メートルくらいある湾状の浜なので波も穏やかですが、走っている船を持つてきちやうとどうなりますか。

よしまず船を探しましょう。

「ん」と、船は見つけました！ いきますよ！ せくの、転移！」

パツ

サバン！

ズガガガ！

湾内で、ちやうど真ん中より僕達に近い場所、浅瀬に突如現れ、波しぶきを上げながら船底が海底をこすり船の喫水線きつすいせんが下がり、急激に速度が落ちたので甲板の先端にいた人数人が船縁ふなべりにぶつかっているのが見えました。

「ライ、もう少し沖からにしないと駄目みたいね、捕らわれていた人達が怪我してなきや良いけれど」

「う、うん。まさかこんな事になるなんておもっていませんでした。次からはあの湾の入口に転移させることにします」

ズザザとやつと止まった大きな海賊船は、半分近く浜に上がっていて少し斜めになっっています。

「くははは！ 見事だが船は修理せねば使えないな。宰相どうだ私の将来親戚になる子は」

「これ程のものを疲れたようすも見せず転移させる能力。伯爵とおっしゃっておいましたが、これは辺境をお任せしても良いのではと考えます」

「辺境伯か、侯爵にするには実績と歴史が無いからな。うむ、それを検討するべきだな」
何かまた出世しそうな事を言っていますが、まあ先の話ですので今は放って置きましょう。

「テラ、上の方にいるのが海賊だよね？」

「そうね、この船も捕らわれている人達の近くには十人いるだけ。その塊より上を。そうね、魔道具と、服以外を収納してぐるぐるしちやいなさい！」

「そうか！ そうすれば腕輪の鍵なんかも探す前に手に入れてしまえます！ うん！
んくと、収納！ それからぐるぐるいきますよ！ ほいっと！」

しばらくして海賊達が船縁に来てこちらを見ましたが一人倒れ、また一人とバタバタ視界から消えていきます。

「ライ、気絶した奴らを浜に一旦転移させておいた方が良いわよ。どうせ一度は船に乗

るのだから」

「それならお屋敷に飛ばしてしましましょうか。父さん達も一緒に帰って貰えれば向こうで先に牢屋にいられて貰えますし」

「ライ、そうだな。ここはお前に任せておいても良さそうだ。王様それでよろしいか？」
「うむ。まあ船は次から痛まないように頼む。中々良い船を使っているようだからな」
「分かりました。では行きますね。転移！」

パッ

父さん達を今気絶している海賊達と共に送ってから数分、上にいた海賊達は全員気絶したのでお屋敷に送りました。

そして僕達は船に乗り込んだのですが、ちょうど甲板に来てすぐに見えた階段から上がってきた五人の海賊と出くわしてしまいました。

「なんでだれもいねえ！ おいガキ！ 俺様の手下はどこに行つた！」

「あつ、船長さんですか？」

「なに言つてやがるあたりまえだろうが！ 俺様を知らねえのか俺様は」

「いえ、船長つて分かつただけで良いですよ。後でカヤッツがあなた聞く事になりますからではちよつと痛いですが行きますよ」

「ライ、少しくらいお話を聞いてあげても良かったのですよ？ ほら、話を止められて

ビックリしたのか皆さん止まってしまってますよ」

だって、面倒くさそうでしたし。

「あはは。次からはそうしますから」

ドサツドサツ

そんなことをしてる間に海賊達は魔力欠乏で倒れてしまいました。

「あら、この五人は魔力が少なかったようね。この分なら後一言二言喋った時点で気絶していたでしょうね。まあ良いわ、さっさと済ませちゃいましょう」

「うん。それと気になる魔力もありましたし」

「あはは。あれね。あれは本当に珍しいわね」

「え？ なんなのですか！ わ、私にも教えてくださいよー！」

プシユケが背負子の上で騒いでますが、さっさと一隻目を終わらせましょう♪

第69話 海賊退治が終わりました

階段の先から声が聞こえてきます。

「つたどこに乗り上げたんだよ、今走ってる辺りに暗礁なんかあったか？」

「聞いたことねえなあ。しかし揺れもねえからあったんだろうさ、ほれ俺の勝ちだ」

「げっ、またかよ。このゲームはヤメだなおめえしか勝ってねえじゃねえか、何かコツはあんのか？」

何かゲームのような事をしているみたいですが、船がこの状態でも続けるなんて危機感も何もないですね。

（ライ！ 後九隻の船があるのよ！ それにお楽しみもあるんだからね！ その部屋にいるんだからさっさとやっちゃいなさい！）

ですね。テラが念話で急かしてきた事もあります、変わった魔力を持った存在がこの先にいるのですからやっちゃいませう♪

「次はカードで勝負だ！ 早く出せ！」

「そんなに熱くなるとまた俺の勝ちだぜ」

ドサツ

「おいおいどうした、なに寝てんだ？」

ドサツ

「何だよお前ま、で」

ドサツドサツ

「うん。全員倒れたわね♪ ほらほら行くわよ」

「うん。何がいるのかなあ〜」

「もう二人とも先に捕まってる人を助けなさいね！ 私も気になってるけれど」

そして喋りながら船倉に入ると捕らわれた人達が一斉に僕達の事を見てきました。

「皆さん助けに来ましたよ」

その後、ゲームをしていた海賊さんが持っていた鍵でみんなの腕輪を外し、お屋敷に残りの海賊達と共に転移させ、ついにお待ちかねといきたいところですが、目を閉じぐったりとして動かない猫さん。

テラが言うには猫の妖精だそうです。もふもふです。そう言えばニンテールももふつもふでしたね。

「ケット・シーね。魔力は問題ないみたいだけどどうしたのかしら？」

「ん〜、心配ですがとりあえず寝させておいて様子見しようか。プシユケが抱っこしておいてくれるかな？ 僕も抱っこしたいけどまだ海賊船が九隻残っているからね」

「くふふふ。猫さんの事は任せておいて下さい。おお！ ふわっふわのさらっさらですよ。」

背負子のプシユケにケット・シーを渡して浜に戻り船を収納。

次の船を転移させ、海賊達を全員倒し、みんなを解放して屋敷に送る。同じことを繰り返し、その日の夕方には全ての海賊達を捕まえお屋敷に。

そしてケット・シーの後は特に楽しそうな事も、宝箱も少なかったですしテラもプシユケ少し不満を言っていました。ふと僕が言った『この海賊達もどこの島にお宝隠してるのかな？』って言った後、絶対探そうって事になり機嫌が戻りました。

そして最後の転移の時には僕達も一緒にお屋敷へ戻りました。

そこには本当に沢山の方が。僕達は一隻ずつ、その都度転移でこちらに送ってしましたから多いなあくらいしか思っていないんですけどまとまったところを見ると。

「うわあ、こんなにいたのですね、流石にこれだけの人がいるとお屋敷の庭も狭く感じますし、人攫いって僕が捕まえた奴らだけじゃないよね？」

「坊っちゃんこれで最後ですか？」

「あつ、カヤッツ。そうだよこれで海賊船十隻のみんなを助けたし、捕まえたよ」

カヤッツは喋りかけてきましたが、部下の人達は奴隷の魔道具をどこから調達してきたのか分かりませんが、大量に抱え、一人ひとり海賊達に嵌めていっています。

「坊っちゃん嵌めた後で起こして貰えますか？ 流石に海賊共が多くて運べないですからね。自ら歩いてもらえれば水と少しの食料を持たせて庭の隅にでもいてもらおうと思ひまして」

「あはは。それ初めからやれば良かったね。うん、すぐでも大丈夫だよ。あつその前にマシユーにオーク肉渡さないと駄目だよな？」

「王様が大量に奴隷のを提供してくれましたからね、最初からは無理でしたが、くくつ、確かにそうですね。ええオークは沢山出してもらいませんとね。それに解体屋も手配して先ほど到着していますから」

「くふふ。マシユー達だけでは無理がありますからね、じゃあそっちから行ってくるから嵌め終わったら呼んでねカヤッツ」

「はい。よろしくお願いいたしますね。そうだ坊っちゃん。人攫いの件ですが帝国は薄いですね。出て来る話はラビリンス王国に送られる冒険者達と、ダンジョン攻略には役に立たなかった者達の行方だけでした」

「じゃあ子供達の事は？」

「それが誰もその事を知りませんでした。帝国の貴族でさえ。奴らは双方の海賊相手に武器を卸していただけのようです」

「ふくん。どっちの海賊にも武器を売っていたのですか。そうだとするとじゃあどこな

のかな？ やっぱリラビリンス王国が怪しさが一番？」

「ええ。その可能性は高いですね」

「ん〜まあ王様達が解決してくれますよね♪」

「くくつ、そうしてもらわないとですね。坊っちゃんは今からはどちらに向かうのですか？」

「しばらくは海で泳ぎをマスターして、あつ、ファイアとティも誘ってあげた方がいいかな」

「そうですね。ファイア嬢もお元気で何よりです。さて嵌め終わったようですね」

「あつ、マシユーのところへ行く前に済んじやったね。うん。それじゃあ魔力を回復させておくね〜、ぐるぐる〜、ほいっと！」

元々海賊達の魔力だった物をお返りする形で回復させた後、カヤッツ達は一人ずつ海賊達のお尻を蹴りあげ起こしては庭の端に誘導しています。

それを見てからマシユーを探し、解体屋さん達と一緒にいたので驚く顔を見なかったのでオークをたっぷり出しておきました。皆さん目が点になっていましたよ。くふふふ。

そしてメニューですが夜もバーベキューにするしか間に合わないそうで、お昼に続き連続ですが捕まっていた人達には良いかも知れませんか。

そんなこんなで人攫いはまだ解決していませんが、海賊騒ぎは終わったのかな。

「参った。人攫いの被害に合っているのはこの国だけでは無いようだ」

父さんがそんなことを言いながらこちらに歩いてきました。

。 。 。

第70話 ダンジョンへ向けて出発ですよ

「ひゃっほ〜い♪」

バツシャーン

「私も行きますよ〜そおくれえ〜♪」

バツシャーン

海賊退治から一週間が過ぎ、僕達は新たに見つけたお宝の島にいます。

アクーパーラの産卵場所を見に行き、そこからの海賊達が来た方向を探るとやっぱり最初のお宝島と同じ魔道具の反応があり、そこに転移すると砂浜から少し高台に上がった場所に隠されていた宝箱。もちろんお宝はいただきました。

半日ほどみんなで色々着飾ったり、装備して遊んだ後、この島を調べて回り島周りには本当に何もなかったのですが、なんと崖に囲まれた内海があったのです。

外海からは小舟がギリギリ通れるかどうかの穴があつて内海に繋がっています。その内海は外敵もおらず安全に泳ぐ事ができる環境でした。そこで海賊船の一番小さな船をその内海に浮かべテント代わりと、今やっていたように飛び込み台代わりになっています。

それからケット・シーですが、あれからも一度として起きる事はなく船の中で寝ている状態です。

テラに聞くと、『良く寝る種族とは聞いていたけど、』体には外傷もなく、変な称号も無いので、『まあ起きるまではお楽しみはお預けね』と言ってましたので、一週間経った今は特に心配はしていません。

「ほらあなた達そろそろ休憩の時間よ。上に上がりましょう」

「はい♪」

そんなテラもムルムルに乗ってプカプカ浮かんだり、ムルムルから飛び込んだりして楽しんでました。

「じゃあ行くよ、転移！」

パツ

そんな日々をさらに二週間続け、そろそろ王国のダンジョンに行こうと夕ごはんに決めた時でした。

「なにや？　　()はど()にや？」

ケット・シーが起きたようです。

事前にテラからケット・シーは喋ると聞いていたので驚きはしませんでした。がやっぱ初めてなので少しだけ僕とプシユケはビックツとなりました。

でも最初が肝心です。

「こんばんは。僕はライ。ここは海に浮かぶ小さな島だよ」

早速自己紹介からだよね。

ケット・シーはもともと起きてお座りをしています。正座。可愛いですよ！

「私はプシケ。猫さんよろしくね」

「私はテラよ！　そして私の騎獣ムルムルよ！」

二人も、そしてムルムルも突起をのぼしてゆらゆらさせています。

「なんだか分からないうけど、リントのにやまえはリントにや。ここはどこにや？　確か磯にあった大岩の上で日向ぼっこしてたはずにやんだけどにや」

「たぶんその時に捕まって海賊の船にいたんだよ。そうだ、どこか調子悪いところとか無い？」

「にゆにゆ？　にや、大丈夫にや。じゃあ助けてくれたのにやね」

立ち上がったリント（後ろ足で）、なぜか脇の下とか肉球とかしつぽとかを見ている姿がまた可愛いのですよ。

「良かった。リントって寝たまま起きないから」

「うんうん。撫でてでもふもふしても起きませんでしたよ」

「そうね、私がたまに寝台代わりに使っても起きなかつたわね」

「ああ、ケット・シー仲間の中でもリントは寝起きが悪いつて評判にや」

そう言うのと、後ろ足で立ち上がったまま腰に前足？　もう手で良いかな。手を腰にあて、胸を張りながらドヤ顔です。

いや、猫さんつてドヤ顔できるのですね。

「ところでにや、ここから森に帰れるにや？　塩の香りしか辺りからはしにやいんだけ

ど？」

「ここは海の真ん中の島だから森には繋がっていないよ」

「にや！　にやんですとー！　ダメにや、困ったにや、どうしたらイイにや、泳ぐかにや、リント泳げなかったのにやー！」

リントは甲板を二足で走り船縁に行くと飛び上がって船縁に着地。

「本当にや、こんなところ知らにやいにやよ。どうすれば良いにや」

もう少し可愛い動きを見ていたい気持ちもありますが、可哀想なので転移で送つて上げましょうかね。

「まあ良いかにや。帰つても寝るだけだしにや、寝るだけにやらどこでも一緒かにや、

そうと決めれば寝るにや！」

「おい嘘っ！！　心配それで良いの！したのに！」

「どうしたにや？　みんなにやんで怒つてるにや？　リント悪い猫子にや？」

今度はしよぼくんとしてしまつて、項垂うなだれています。

あはは。仕方ないですね。

「リント、ちゃんと森には帰れますよ。王国の東の森で良いのかな?」

「にや?」

船縁の上で項垂れてたリントは飛び降りるやいなや中々の早さで僕の胸に飛び込んできて鼻と鼻がピトツとくつつきました。

「ライといったにや? 帰れるにや?」

「うん。大丈夫だよ。でも今日はもう夜だから明日の朝に僕達と一緒に森に行こうか」

「あ、あ、あ、ありがとにやあああー!」

「あははは。ほらほら落ち着いてね」

「うんうん。ライ達良いやつにや、ケツト・シーの加護をやるにや! 滅多に与えるもの

ではないにやよ! そくれっ!」

リントは僕の胸から飛び退き甲板に着地。それから二本足のままくねくねちよつとへんだけど踊り始めました。

「うんうん♪ 昔一度だけ見たことあるけれどケツト・シーならではの体の柔らかさを使わないとできない踊り。ライ、プシユケ、中々見れないのよ? しつかり目に焼き付けておくのよ♪」

「この者達に夜を見通すケツト・シーの加護を与えるにや！」

リントがキメポーズでしようか、くるくるとか回転し出したと思つたらピタリと僕達
に肉球を向け、肉球から淡く輝く光が放たれ僕達が包まれました。

「これで決まったにやよ」

そう言つて光が収まつたと思つた瞬間。

篝火かがりびが届く範囲以外は夜の闇だつたはずなのに、ぱあつと視界がひらけ、見えていな
かつた夜の景色が鮮明に、いえ、暗いままなのにスゴく良く見えるようになったのです。

「凄いいい！ 凄いいいよリント！ 真つ暗だつたのに凄く良く見えるようになったよ」

「はわわわ！ 本当です！ なんて事ですか！」

「ぬふふふ。良い加護を貰つたようね、これから向かうダンジョンで役に立つ能力よ」

「にゅふふふ。踊りはなくても加護は付けられたんにやけどおまけにや！」

「おまけなの！」

僕達三人の声は、『にゅふふふ』笑うリントの声と合わさり、良く見えるようになった
夜の景色に広がつていきました。

そして翌朝東の森に転移してリントとのお別れの時間になりました。

「リントまた遊びに来るからその時もよろしくね」

「私の故郷でもあるし、また来ますね」

「リント、まあ短い付き合いだっただけどあなたの踊りは忘れないわ」

ぷるぷる

「にゆく、ここどこにや？ 知らない森にやよ。森違いにや、もつと北の方にやよ、生えてる木が全然見た事無い物ばかりなにやし」

「え？ 北ってそんな大きな森ってあつたかなあ？」

「私はこの森しか知りませんし」

「ん、北ならラビリンス王国方面へ行くしかないわね。あの国と帝国にまたがつてある森は大陸一の大きさだから。ちょうど良いじゃないダンジョン行くんでしょ？」

「うん。そうだね、リント、僕達としばらく一緒に旅してリントがいた森に送るよ」

「はいにや。よろしくにや♪」

僕とテラ、ムルムルの三人から、プシユケが加わり、リントが加わりました。

僕達は、僕が東の森に入つて来た場所に転移、しばらく帝国方面の道を進み、途中からラビリンス王国への分かれ道に進むと決め、歩き出しました。

第71話 キングとクイーン

「馬車が街道の端ですけど停まっていますね」

街道を歩く僕達の目線の先には馬車が一台停まっていました。でも人の気配がしませんし、何なのでしょいか。

「誰も近くには居ませんが、馬さんは居ますね、何かトラブルでもあったのでしょうか」
馬車に近付くと、馬さん達が嘶いななき暴れました。

「え？ どうしたの馬さん！」

馬さんは、街道脇の木に手綱をくくりつけられ、馬車から外してももらえず、足元の糞が長時間この状態が続いていたことを表しています。

「嘘っ！ いつからこんな事になってるの！ すぐに外してあげるから暴れないで！」
「任せるにや！ みにやあぎにやあぐるぐるにやあ〜」

リントがとととと馬の前に走り寄り、猫語かなにかで馬さんに向かって喋ると馬さんは暴れるのを止め大人しくなってくれました。

「リント凄いですありがとう！ まずはお水とお塩ですよ！ 馬具外しますから少しだけ待ってくださいいね！」

「神眼！ んー、あった！ ライ三百メートルくらい行つたところに泉があるわ！ 方向はあつちよ！ プシユケも馬銜はみ外してあげて！」

「はい！ 踏み台は、あった！ よいしょつと」

プシユケは馬車の後ろから踏み台を探して持つてきました。僕は馬さんのお腹の下でベルトを外し、プシユケは馬達の間で踏み台を置いて馬銜はみを外しています。体が自由になつたので木にくくりつけられていた二頭の手綱をほどきました。

「馬車をこのまま置いておけないから収納しちゃうよ！ 収納！ プシユケは馬さんに乗れる!？」

「うん！ 任せて、でも収納された踏み台が無いと」

「任せて、転移！」

パツ

「わおっ！ あわわわ、いきなり乗つてごめんね、大丈夫だからね」

転移で馬さんに乗せ、驚いた馬さんをなだめています。

驚かせてごめんなさい、でもなるべく急いであげないとね。僕もポンポンと叩いて合図してから飛び乗り手綱を操ります。

「リントはプシユケと一緒にお願いね、転移」

パツ

「任せるにや！ プシユケ行くにやよ！ あつちにや！ ちゃんと水の匂いがするにやよー！」

馬さん達も水の匂いがあるのを分かっているのかテラが教えてくれた方向に走り出しました。

見えてきたそこは岩がゴロゴロある場所で、くぼんだ大きな一枚岩の割れ目からこんこんと湧き出す水によつて直径十五メートルほどの泉がありました。

「ふう、凄い勢いで飲んでるね。よし、次はお塩に飼い葉ですよね、馬車に乗ってるかな、ほいっとー！」

馬さん達から降りて、ズンツ、と馬車を出し箱形の荷台を調べましょう。飼い葉は馬車の後ろに縛り付けてありましたので荷台の中を調べます。

「んく、鍵はかかつてませんね、お邪魔しまゝす」

「うつ、酷い匂いね、でも仕方ないわね急ぎましよう。んんく^{神眼}。あつたわ、ライその棚に岩塩が入った箱、そうそれ」

「よいしよ。じゃあまだお水を飲んでるはずだから飼い葉を用意するね」

「んく、ライここ見て、このロープ誰かを縛っていたようね」

耳たぶをクイクイ引つ張るテラが指差す方を見ると、壁に繋がれたロープが五組、床に散らばったロープも五組、それと食料を食い漁ったと思われる蓋を開けられた木箱の

中に残っている食べ物にはどれも齧った跡があります。

「ん、誰かを捕まえて、運んでいる最中に逃げられ追いかけてるのかな？ 近くには誰も気配はありませんでしたけれど」

「まだ追いかけてる可能性はあるわね。まあ次の町まで歩くとまる一日くらいよね、そこに馬車を運んで衛兵に任せるのが良いかも。馬達は残しておけないもの」

「うん。そうするよ、このまま街道脇で待たせるのはあまりにも可哀想だからね」

飼い葉を一抱えとたぶん馬用の大きな木でできたお皿がありましたので、それを持って馬さんの近くに置いておきます。もちろん岩塩も一緒にです。

喉の渇きはおさまったようで、飼い葉の方にやって来て食べ始めましたのでブラシを取り出しブラッシングをしてあげるととても気持ち良さそうです。

「そうだリント、馬さんに何があったのか聞く事ってできる？」

「そんなの簡単によよ、もう聞いてあるにや。前の馬車から甘い匂いがしてみんな寝ちゃったそうにや。だからよく分からんにやいよ」

「それって！ テラ、人攫いの手口に似てるよね！」

「そうね、ライ早めに次の街に行きましょう。確か人攫いを続けながらラビリンス王国に向かっていたわよね、それならなるべく止まらず走れば追い付くかも」

「言ってた人攫いですね。私も賛成です！」

「よく分からにやいけど悪者を追いかけて、やつつけるのにや?」

リントの言葉に僕、テラ、プシユケは頷き、ムルムルは突起をのぼしゆらゆら。

「じゃあリントも手伝うにやよ! キングとクイーンもご主人が心配って言ってるしにや」

「キングとクイーン? もしかして馬さんの名前?」

「そうにやよ。真つ黒がキング、茶色がクイーンにや両方雌にやよ」

「女の子にキングって付けたの?ご主人様! 男の子の名前だよ!」

「私もそう思います、あつた時は文句を言つてやります!」

その日はこの泉の横でテントを張り、夜営としました。

翌朝街道に戻り、キングに僕とテラ、ムルムル。クイーンにプシユケとリントが乗り込み街を早足で進みます。

お昼前には街に到着しましたので、馬車と馬さんを預けるかどうか話し合い、預ける事にしたのですが。

「キングとクイーンは一緒に追いかけていそうにやよ。一緒にやダメかにや?」

「良いのかな? でもそうか、人攫いから助け出せたとしても、この街に帰ってくるまでキングとクイーンは寂しいもんね」

「そうね、連れていきなさいよ。それからねえライ、鞍くらとか籠あぶみ、鞍下くらなんかの馬具は無

の？ キング達もあつた方が私達を乗せやすいしあなた達も乗りやすいと思うわよ」

「あつ、たぶんあると思う。えくつとこれかな違いますね。あ、ありました！ どこかで見たような記憶があつたので、よし付けてしましましょう♪」

「はああ。待つにや、まずは休憩させてあげるにや、朝から一回休憩しただけにやよ」

リントはやれやれつてため息をつきながらそう言つてきてそうだと思ひ出しました。

「そうだね、よし少し早いですがお昼ごはんを兼ねて休憩にしましょう」

僕達は門から街には入らないで街を回り込むような街道を、ほんの少しだけ進み、お昼休憩にすることにしました。

早く追い付きたい気持ちで無理をさせてしまうとこでしね。キングとクイーンに泉で汲んできた水と、岩塩、飼葉を用意して、僕達用に火をおこし、お湯を湧かしながらお昼ごはんを食べ始めようとしたところに街の門から武器を持った人達がこちらに向かって走ってくるのが見えました。

「何かあつたのでしょうか？」

第72話 ご主人様の行方

「何でしょうね？ あつ、後ろから馬さんに乗った方も出てきましたよ」

ムルムルにオーク二匹とゴブリンを一匹あげるといつも通り包み込んで消化して、キングとクイーンは飼葉をあげるとムシヤムシヤ食べ、僕達はシチューを口にしながらその様子を眺めていました。

「そうね。みんな険しい顔をしてるしこの先に魔物でも出たのかしら？ ところでライ、明日か明後日なんだけどこの実がそろそろ良さそうなの、どこか良い場所を探そうと思っていたけど、サーバル男爵領でどこか良い場所知らない？」

僕はそれを聞いてテラの頭の上に乗ってる物。ハイエルフの村で見つけた果実を見ながら考えます。

「ん〜、また大きくなるよね？」

「なるわね。あの子よりも大きくなりそうよ、だからできれば広い土地が良いわ」

あの御神樹様より大きくなるのか、だとすれば、サーバル男爵領の真ん中、お屋敷の近くが良いかな。

「僕がゴブリン村と、オーク村を潰した森はどうかな？ 東の森の半分以下くらいかな

？ それでもそこそこ大きな森だよ。そこならお屋敷からも近いし町からも見える。ならそこまでの道なんか作ってピクニックとか」

「やはりそうだ！ この馬達は『闘う商人』様のキングとクイーンだ！」

ん？ 闘う商人さん？ あっ！ キングとクイーンのご主人さんでしょうか！

「あの、この馬の持ち主、ご主人さんを知っているのですか？」

「おう、坊主はどこでこの馬を手に入れたんだ？ 二十日前くらいに到着予定だったのだが全然到着しなくてな」

なんと、そんな前だったのですか。

東の森から出てプシユケを背負子に乗せて僕が走ったのは帝国とラピリンス王国への分かれ道、十日以上かかるのを半日で走りましたからね。それからキング達がいたあそこまではプシユケを降ろして一日半、そして今日。

「あのですね、キングとクイーンのご主人さんはたぶん人攫いにあっています。昨日、一昨日くらいに複数台の馬車を連ねた団体は通りませんでしたか？」

「何だと！ まさかAランク冒険者なんだぞ！ そう簡単にはやられるはずはない！」
なんですと！ Aランク冒険者だったのですかキングとクイーンのご主人って！
でもそれならおじさん達が信じられないのも仕方ありませんね。

「あのですね、今回の人攫い達は眠り薬を使いますからね、寝ている間に捕まってしまう

ますよ。それで団体は？」

これを聞いておけばいつ通ったか分かります。

「眠り薬！ 最近噂が絶えない人攫いが使っているとされる手口か！ そ、それなら捕まるのも無理はないのか。おっと団体の馬車か。そうだな、七台の団体は一昨日、二日前に通ったぞ。街の中には数人だけは入り、酒と食料を買って、昨日の早朝に出発していったぞ」

「それです！ テラ、プシユケ、差は一日半です、走れば夕方までには追い付けるはず！」
「そうね、プシユケはここでキング達をお世話しながら待っていないさい、ちやっちやとやっつけて戻ってくるわ！」

「おじさん達にお願いが、ここに帰ってきますので、街道脇にテントを張っても良いですか？」

「それは良いが、一日半なら明日の朝にはラビリンス王国の国境までもうすぐだ、昼には越えてしまおうぞ」

ん、そうなのですか。まあラビリンス王国に入っちゃっても助けに行きますが、面倒ではあるもんね。んと、方向は、気配を街道の先へひろげていきます。するとそこには沢山人がいますね、それが国境だとすればもう少し手前のいた。

「ライ、見つけたようね。それなら走ることもないでしょうね。プシユケ達も連れていけ

ば良いじゃない。ほらキング達がそわそわしてるわよ」

うん。僕達の話を理解しているようで、啜えた飼い葉を食べるのも忘れこちらを見ている。

「じゃあ一緒に行つちやいますか。おじさん、僕達はその闘う商人さんを助けに行つてきますね、プシユケ、ご飯はまた後でね」

「はい。後で美味しく食べましょう」

「待て待て待て待て！ 子供達がそんな事を出きるはずがないし追い付くだと、そのキングとクイーンは騎馬ではないから長くは走れるが早くはないのだぞ！」

「大丈夫です。夕方には戻つてきますので。よしじゃあ行くよ、転移！」

パツ

また何かおじさん達に言われるより、早くキング達のご主人さんを助けたかったので、転移しちやいました。

「ライ、この前方にはいないわよ？」

「ぬふふ。少し先に出ました。ほんの二百メートルほど先ですが」

「なんだ、そうなの？ 後ろね。んんん^{神眼}。うんうん正解よ、闘う商人の称号を持った人がいるわね。それから子供が三人と冒険者が後二人あわせて六人よ」

「んん、その五人が馬車に縛られていた人達でしょうね。何をしたのでしょうか」

「それは後、人攫いは十六人よ、ほらほら見えてきたわ」

街道が曲がりくねっているので、街道脇の林に隠れていた馬車が姿を見せました。

一、二、七台。台数もおじさん達が言つたのと同じです。ではまとめて魔力を発散させて気絶ギリギリで止めておきましょうかね。

「よし、ぐるぐる。じゃあ僕達はここで休憩しているふりをしましょう。そうすれば僕達は馬さん二頭と子供が二人に見えるはずです」

「はああ、ライ、まあそうすれば止まってくれるかも知れないね。じゃあそうね、火でも起こしてお湯を沸かすくらいの演技は必要ね、ほらほらライ、プシユケも焚き火の準備をなさい」

「うん！」

そして馬車が僕達まで後百五十メートル先くらいになったところで、薪を数本出して火をつけ、鍋に水を張りました。

ついでですが、キング達のご飯も再開です。

「くふふふ。キング達も分かってくれてますね、僕の作戦を」

「リントが教えてあげたにやよ。だいたい作戦は分かっていたけどにや」

「やるじゃないリント。ほらほらプシユケも腰を下ろして休憩よ」

馬車は百メートルほど手前から徐々に速度を落とし、近付いてきます。

「もう少しで魔力も無くなりますね、魔力回復の魔道具は持ってないようだし」

「そのようね。一応言っておくけど油断はしないでね」

「うん。ありがとうテラ」

「うわっ、も、もう少しで！」

（もう少しで口づけしちゃうところだったじゃない！ 落ち着け落ち着け落ち着くのよ私！ もうライったら急にこつちを振り向かないでよ！ ああ〜ダメダメ今は救出の事を考えるのよ私！）

テラはなぜかまた真つ赤になって、ムルムルを摘まんで引つ張り出しました。

可愛いですね♪ ちゅ

「なっ\$@? ラ&! %?!!!」

さて、もう馬車も止まります。みんなが怪我なんてしないように集中しましょう。

第73話 救出

十五メートルほど先で止まった七台の馬車から、一、二、
こちらに向かつてくるのはその内の五人。
.....十六名が降りて来ました。

残りの十一人はだらだらと馬さんのお世話をするわけでもなくニヤニヤ笑いながらこちらを見えています。近付いてくる五人もニヤニヤしながらどンドン近付いてきて口を布で覆いました。

その中の一人がやっぱりピン入りの睡眠薬でしょう。懐から取り出し僕達に向かつて中身をぶちまけ、風魔法を同時に放ちました。

「風よ渦巻け！ そしてかの者を覆い尽くせ！」

うんうん。前の人攫い達と同じやり方ですね。

「ではその風魔法はいただきますよ！ ぐるぐる、ほいっと！」

風魔法を放ったおじさんは、魔力欠乏をしてその場で崩れ落ちましたので放たれた魔法をぐるぐる操作し、操り残りの四人の方に移動させます。

「なにやっつてんだ！ おい！ 薬はまだあるんだ、さっさとやっちなえ！ おいおい！

こっちに薬が戻ってきてるじゃないか！ 押し返せ！」

撒き散らされた睡眠薬を放たれた風魔法を操り巻き上げながら、人攫い達に向かつてお返しします！

「おらっ！ おい起きろ！ 魔法がこつちに戻ってきてるじゃねえか！」

先ほど魔力欠乏して倒れたおじさんをガシガシ蹴りながらそんな事を言ってますが、起きませんよ。

すると後の人が前に一步踏み出してきました。

「俺に任せろ！ 風よ渦巻け！ そしてかの者を覆い尽くせ！ おらっ！ 追い返して

や・る・」

ドサツ

「おいテメエまでなにやってやがる！ もう構わねえ！ 瓶の中身を直接」

「やべえ！ 頭まで吸い込み込んだぞ！ お前も魔法で押し返せ！ 絶対吸い込むな

！」

「風よ渦巻け！ そしてかの者を覆い尽くせ！」

そう言い放った後、近付いてきていた五人は魔力欠乏による気絶と睡眠薬で寝てしまいました。

「じゃあ残りの人攫い達をやっつけますよ！ ぐるぐるです！ ほいっど！」

ニヤニヤした顔が、次々と倒れていくにつれ『は？ 睡眠薬吸い込んでしまったのか

？』『何でこっちに!』『なにやってんだよ!』など声があがっていましたが、ギリギリまで魔力を少なくしてあったので、魔力を発散させるだけで一気に十一人が崩れ落ち、退治は完了しました。

「中々やるにや、これで全員やつけたにや?」

「うん。これで全員だよ。よし捕まってる人達は後ろの二台だから早速助け出しに行こう」

走り出した僕達の中で一番に馬車に到着したのはやっぱりキングとクイーン。後から二番目のぼし馬車で嘶き、ご主人さんと呼んでいるようです。

僕が捕まった時と同じで、冒険者はやっぱり後ろから二台目でしたね。じゃあ後ろは子供かな。

先に子供と行きたいところですが、ここは捕まえていた人達の事は先に解放できませんし、先にご主人さんからですね。

よし、この馬車の鍵も魔法の鍵だから、ぐるぐるさせて解錠できます。「鍵を開けますね。ぐるぐる、ほいっと!」

ガチャ

「開きました。キングもクイーンも戸を開けるから少し下がってね」

言う事を聞いてくれたので戸を開けるとキングとクイーンはまあ前進してきますよ

ね。あはは♪ そうなると分かっていたので、さつと横に避けました。キングですクイーンは勢いよく馬車内に首を突っ込み入口を塞いでいますので中に入れません。

「くふふ。仕方がないですね、転移！」

パツ

「助けに来ましたよ。えっと、戦う商人さんは？」

やっぱり凄く汚なくて、臭い馬車内ですが、確かに三人。ご主人さんはキング達がその人の事を見ているので分かるのですが一応聞いてみました。

「わ、私ですが、急に現れましたよ！ た、助けに？ 気配だと十人ほどいたと思ったのですが倒したのですか？」

中にいた三人とも転移でいきなり僕が現れたので驚いたようですね。でもご主人さんの目は僕とキング達との間を行ったり来たりです♪

「君は中々の強さのようですね。いや冒険者が強さに関して詮索はいけませんね。助けに来てくれて本当にありがとう」

「いいいえ。十一人いましたが、睡眠薬を対処すればあまり強くなかったのです。では拘束を外しますね」

壁に固定されているロープを切り手を自由にさせます。続いて足も。

「あの、それで私の馬車は？ キングとクイーンがいますから無事だとは思いますが荷

台に盗賊を捕まえていたのです。そろそろ食事を与えませんと」

「え？ 確かに拘束した跡がありましたか、一緒に捕まっているものだと。馬車は僕が預かってますのでご心配なく」

「いえ、この方達は私の後に捕まったから違います。そうですね、君の倍くらいの年齢でしようか、五人いたのですが」

「では逃げてしまってますね。ほどかれたロープが落ちてましたし」

「そうですか。また悪さをしないと良いのですが。そうだ、子供の声でしたのですがそちらは？」

「はい。すぐに向かいます。こちらは任せても良いですか？」

「ああ。出来ればナイフを貸してもらえないでしょうか」

「はい。ナイフはこちらをどうぞ。それとキングとクイーンも心配してましたよ」

「その様ですね。良かった、あの辺りはたまにですがゴブリンも出る場所なので、もう会えないかと。重ねがさねありがとう」

キング達は首をのぼし、手が届くところまで顔を突き出しています。

それを優しく撫でた後まだ拘束されたままの二人のロープを切りだし始めました。

「では子供達を助けてきます。転移！」

パッ

馬車の外に出て、すぐ後ろの馬車に向かいます。

ガチャ

鍵を開け、戸を開けると、隅の方で三人かたまってこちらを見えています。

「もう大丈夫ですよ。助けに来ました」

「ほ、本当に？ 本当に助かるの？」

みんな僕と同じくらいかな。その中の一人の男の子が喋りかけてくれました。

「うん。もう人攫い達はやつつけちゃったから安心してね、今踏み台を取ってくるから待っていてね」

「はい」

「ライ、踏み台は私が持ってきたよ。早くその中から出てきもらおうよ。みんな出ておいで出たらご飯にしましょうよ」

「良いですね！ そうしましょう！」

そして六人を助け出すことに成功した僕達は、みんなにマシユーのスープを配り、魔物パンと子供にはジュース、大人の人はお茶を。

皆さん数日食事らしい食事をもらっていなかったようで、子供達は涙を流しながら食べていました。

大人達も初めは遠慮しがちでしたが、徐々に我慢ができず凄いい勢いで食べ始め、三杯ずつスープ、魔物パンは五個くらい食べたでしょうね。

「では、そつちのお二人は夫婦で同じパーティーなのですね」

「ああ。それにそつちの子供達は俺達と一緒に夜の夜営地にいたな」

「ええ。二家族で隣街に行商のため行くとか言っていましたね。そう言えば護衛がいませんでしたね」

「うん、そうだよ。行商をしているんだ。今回は魔物がほとんど出ない場所だったから護衛は頼んでなかったよ」

「そこに人攫いが来ちゃったんだね」

「まあ助かって良かったにや、盗賊にやら殺されちゃつてるにやよ」

「本当ですよ。ほらほら皆さんお腹いっぱい食べて下さいね。ライ、オークも少し焼きませんか？」

プシケ提案でオークを出し焼いている最中。

テラがさつきからずつと喋ってないので心配です。

どうしたのかな、ちゅつてしたの嫌だったのかな、嫌われちゃったのかな。

「そ、そんなことないわよ！ 私も！ じゃなくて！ ム、ムルムルの分はまだなの！ ほらほら早くしなさい！」

「うん♪ はいムルムル。お待たせしちゃったね」
ほっ。テラに嫌われてなくて良かったです。

第74話 街への帰還

「良かった、装備は丸々残ってました」

「俺のもだ。町で売られたかと思っていたが助かった」

冒険者夫婦の装備は一式残っていたようです。たぶんラピルス王国に行った後にうるつもりだったのかもしれませんがね。

でも、戦う商人さんの方と言うと、人攫い達と商人さんの馬車を出して見てもらっています。装備は人攫い達の馬車に全てあったようですが自身の馬車を見て、難しい顔をしています。

「何か無くなっていますか？ 僕達飼葉は使いましたよ？」

戦う商人さんは振り向き、御者台の座席のしたにある収納の中を指差して言いました。

「捕まえた五人がまた私の魔法の革袋を盗んで行ったようです。はああ、盗賊は何度も罪を繰り返すですからね、困ったものです」

「それはお気の毒でしたね」

「しかも帝国に行くとか言っていました。私は違いましたが適当に誤魔化して捕まえた

のですが、奴隷の腕輪もたぶん外されているでしょうね、ここに入れてあった物が全て無くなっていますから」

「解除する魔道具は国からの許可が無いと持てませんよね？ 商人さんはつて、自己紹介まだでしたな。僕はライです」

「くくつ、そう言えばそうでしたな、プシケちゃん達がそう呼んでいましたし、私も戦う商人と呼ばれ慣れていきますので全然違和感がありませんでした。んんつ、私は戦う商人ことギル・ガ・メツシユと申します」

「え？ メツシユ子爵様！ こ、これは大変なご無礼を！」
僕はその場から少し下がりが跪き、もう一度挨拶をやり直します。

「サーバル男爵家三男、ライリール・ドライ・サーバルです。メツシユ子爵様、不敬の数々どうかお許し下さい」

「何と！ サーバル男爵家の！ 剣聖である師匠の息子さんですか！ 確か赤ちゃんが二人でしたので、私がお家を継ぐための修行から戻った後に産まれたのがあなたなのですね。ライリール君大丈夫ですよ。シーリール君とアースリール君には可愛いお手で何度もお叩かれましたから」

何と！ ここにも父さんのお弟子さんが！ それに兄さん達と会ったことまであるなんて！

「いやはや世間は狭いですね」

「はい。しかしその盗賊は行方が心配ですね、帝国ですか。でも」

馬車を見つけた場所と、帝国への分かれ道までにそんな五人組は見なかつたのですが、もしかすると

皆は自身の持ち物を確認後装備をして、いつでも移動可能な状態になりました。

まずは街に戻ってからですかね。

「皆さん用意ができたようなので街に移動しますね」

皆さん頷いてくれたので戻りましょう。

戦う商人ギルさんの馬車以外を收容し、たぶんおまちかねの街に転移で戻ることになりました。

「到着です、皆さんはこの街で大丈夫ですよね？」

到着すると、門から『帰ってきたぞ！』と声が聞こえた。聞こえたと思つたら今度はぞろぞろと転移で助けに向かう時以上の方が門から出てきます。

「あはは。ギルさん大人気ですね♪」

「いやはや。ここの鍛冶屋と契約をして、二か月に一度、こちらに滞在しているだけなのです」

「そうこう言っている内にもう馬に乗った方は到着しました。」

「ギル！ 心配かけおつて！ ここと十日ほど炉の火は消え、鎚つちが握れんかったぞ！」

「おお！ 炉と鎚がつて事は！ 馬から飛び降りたその姿はずんぐりむっくりだし、ドワーフさんですし、今話していた鍛冶屋さんですね。」

「あはは。親方、ご心配をおかけしました。こうして無事戻つてきましたよ。このライリール君のお陰で助かりました」

「おじさんは、僕の頭の中から足の先までジイーつと見てうんうんとうなずいています。」

「ライリールと言つたな。よくこいつを助けてくれた。礼を言うぞ、ありがとう」

「深く僕に向かつて頭を下げました。」

「いえ。偶々たまたまですよ、キングとクイーンに会つてなければ知らずに通りすぎてラビリンス王国へ行つてましたから、褒めるのはキングとクイーンですよ」

「くははは！ そうだなよしうまい飼葉を手配してやる。ほれギルよ皆が心配してくれたのだ、挨拶に回つてこい」

「くふふ。その様ですね。また今回も一月ほど厄介になりますからね。ライ君は人攫い達はどうするのかな？」

「ん、王都に直接だと連絡入れなきや駄目だし、父さんに任せましょう。」

「父さんに任せようかと思ひます。父さんなら母さんに頼んで転移で移動も出来ますか

「僕が直接行くより確実ですからね」

「違う。では私は皆に挨拶をしてくるよ」

「はい」

皆さんの輪の中に取り込まれたギルさんは揉みくちやにされながらも物凄く笑顔です。

「ライリール、ワシから防具を貰ってくれ」

「え？ 防具を僕にですか？」

「ああ。身体の重心や動かし方からすると剣の類たぐいを使っているようだが、手の豆の付き方が違う。刀を使っている者に付く豆だ。そうするとダンジョンで出た物であろうからな、良いものを使っているのだろう。ならばその鎧ならワシが今のお前に一番合った物に生まれ変わらせてやれる」

「そんなことが！ 凄いですね、流石は鍛冶屋さんですね♪」

「ああ。やらせて貰えるか？」

「はい♪ それならもう一人女の子の鎧も頼めませんか？」

リントをもふもふしているプシユケを僕の横へ呼びました。

「ふむ、身体の動かし方はどちらかと言えば狩人に近いが、エルフとなると弓と魔法だな、胸当てが良いか、杖は持っているのか？」

「いいえ、使ったこと無いですね、無いと不味いですか？」

「ふむ。いや無くとも良いが、ではそうだな、短剣を使うと良いだろう。弓はその手の感じだと使った事が無さそうだな」

「はい。苦手で、でも短剣ならゴブリンをやっつけた事あります！」

プシケもやるもんですね。そう思えばファイアも短剣は中々の腕前でしたね。

「よし、ワシの店はギルに聞くまでもないか。まあ門をくぐってすぐだ、看板にハンマーが書いてある」

「はい！ 分かりました、よろしくお願いします！」

「よろしくお願ひします。おじさんもギルさんのところに行きたそうですから行ってあげて下さい」

「ああ。必ず来いよ」

ドスドスと音が聞こえそうなくらいですね。革の腰紐には大きなハンマーが二つ差してありますのであれだけでも僕と同じ体重くらいありそうです。

ああは。ギルさん背中を叩かれむせてますね。

「今日はここで泊まるのにかにや？」

「ん、装備を手直しと作ってもらうなら宿で泊まろうか。お兄さん達はどうか？」

「私達も宿を取るわよ。こここの街は温泉も出るから楽しみだったのよ♪」
「おお！ 温泉ですか！ それは楽しみです♪ みんな、行こう！」
揉みくちやにされてるギルさんを置いて僕達は街に向かいました。

第75話 温泉がある街ですよ

「お風呂付きの部屋をお願いします♪」

「は〜い。あらあら可愛い冒険者さんね、どうしましょうか、今日のお部屋が一番大きなお部屋しか残ってないのよね、一部屋銀貨四枚になっちゃうのよ」

「おお、高いですが大丈夫です。父さんに人攫い達を十六人渡して大銀貨三枚と銀貨二枚貰いましたから、十分泊まる事が出来ます。」

「大きなお風呂はついていますか？ ついているならお金は大丈夫です」
「あらあら。それなら大丈夫ですよ、この宿自慢の温泉ですからね♪ きつとご満足してもらえますよ。では料金は先払いですから」

「僕は収納から大銀貨を出してお姉さんに渡しました。」

「夕食などは部屋にお持ちしますか？ それともこの一階の食堂でも食べられますよ」

「どうしようか、たぶん数日泊まることになるし、今日は部屋でお願いします」

「はい。では後程料理をお持ちしますね。鍵はこれですね。連泊するならお昼までに私か、そのカウンターに誰かいる筈だから伝えて下さいね」

「お姉さんは壁に掛かっている鍵を取り渡してくれました。」

「はい♪ 分かりました」

部屋は一階の一番奥です。やっぱり大きなお風呂だと上には作れないのかもしれないかもしれませんね。

部屋に行く途中に男性と女性に別れて入るお風呂もあるようですし、部屋も僕達で埋まったようですからこのお宿は中々の人気のようですね。

そしてやってきました今晚の部屋は――。

「これは広いです♪ 寝台が無いので寝室は別にあるみたいですわね♪」

「はわわわ。この部屋だけで私の家くらいのは広さがありますよ！ ソファーも何人座れるのですかこれ！ リント爪研ぎは駄目ですからね！」

「そんなのしないにゃ！ 勝手に体が動く時だけにゃ！ あれ？ やっっちゃうかもにあああー！ 助けてにゃ！」

んくと、手袋でも作ろうかな。

それより他の部屋も見てみましょう♪

トイレに洗面所にこの先が――！

「大きいですよ！ テラこれならまた泳げるし滑り台も出来るよ！」

「う、うん。あれは良いものよね！ ムルムルもあれ好き――」

（あー好きって言葉に反応しちゃうじゃない）

テラがまた赤くなって下を向いてしまいました。

「どうしたのテラ、やっぱりちゆってしたの怒ってるの？」

「ち、違うわよ、あ、あれは急だったし心の準備が出来てなかったし、初めてだし、ちよつと前からドキドキしてたし——って私何言ってるのよ！ もーパパのせいだからね——！」

「じゃあ嫌われてない？」

「ま、まあね、嫌いじゃないわ！」

（好きになりかけてる？ でもでも——）

「良かった、僕、テラにもお嫁さんになって欲しかったから、嫌われていたらどうしようかと思って」

「にやにやにやんでお、おやお嫁しやんにやのよ！」

（お嫁さんて私は——）

「呼んだかにや？ テラがにやんで『にや』って言ってるにや？」

「あのね」

「そ、そうよ、今からお風呂なの！ さあプシケも来なさい！ お風呂で遊ぶわよ！
ほらライも進みなさい！」

なんだか慌ててますが、嫌われてなくて良かったです。

それにしてもお風呂は中々の大きさです。

ティのお屋敷のお風呂よりは小さいですが、十分遊べる大きさです。

早速服を脱いで突撃です。

「お湯の温度はどうかなあ、うんうん。よくしみんなで準備運動開始！」

「ん、にやあテラ、ライにプシユケつて雄と雌にやよね？ 人族とエルフ族によ雌雄は

裸を見せっこするもんなのかにや？」

「そうね、私も最近慣れてきてしまっただけで、普通はしないわよね、まあ子供つてのは多少あるのかもしれないけれど。駄目よプシユケそれは引つ張っちゃ！ って言うより触るのはまだはやいから！」

「だってお風呂は裸で入るものだよ、まあ海も裸ん坊で泳いでましたけれど」

「私はこうして湯船に入るのは初めてだけど、からだ洗う時はすぼぼんですよ？ それ

にライつてお父さんのより」

「だから引つ張らないの！ ほらほら掛け湯をしてさっさとお風呂に入っちゃいませう！」

「だいたい分かったにや、ライもプシユケもちよつと常識を知らなすぎるにや」

「ええ、でもあと二人ほど同じような子が二人いるわ」

「まだいるのかにや、少しずつでも教えていくにやよテラ」

「ええ。」

「なんだかテラとリントがブツブツと言っていましたがお風呂に入って少し泳いでいたのですか。」

「あれ？ やっぱり浮きにくい気がするね？」

「ライもそう思ったの、私ももう少し楽に泳げた気がしてます」

「海の水はしょっぱいでしょ？ あれはお塩が入ってるからなのは分かるわよね？ 本当はもう少し難しい事なんだけど、普通の水より塩水の方が身体が浮きやすいって覚えているだけで良いわよ。それよりライ、またあれやってよ」

「うん♪ 行くよ♪ 魔法ウオータースライダー♪」

「ひゃっほ〜い♪」

「あにやにやにやにや〜！ リントは猫かきしかできにやいからそれやめるにや〜！」

「ムルムルに乗ったテラと一緒にリントも滑らせてあげてるのですが、不評のようですよ。」

「三十分ほど泳いだり、洗いっこしたり、最後は全員でウオータースライダーをして遊んでからお風呂から出ました。」

「少し湯冷ましして、ホコホコ湯気が上がっていたのも冷めころに少し早めですが夕食が届きました。」

夕食後は、僕とプシユケ、ムルムルとリントも一緒になつてぐるぐるを少し。
ムルムルも魔石をその場で回せるようになってきました。

その後は個人でぐるぐるしながら僕はリントの分の腹巻きを作つて、もちろんアクー
パーラ柄にしました。

「おおー、おにやかがぬくぬくにや。ライありがとうにや」

リントやつぱり頭から被つていました。

そしてベッドを二つくつ付けてみんなで眠りました。

（はああ、見てるだけでドキドキに。これつてやつぱり私ライの事が。今は考えない
でおきましょう。元に戻つてから。）

ん？ テラがじつと見てきますね。真剣な顔のテラも可愛いです。あつ、目を閉じ
ちやいましたね、僕ももうだめです。

翌朝、すつきり目覚めて朝ごはんの後は鍛冶屋へ向かいます。

言つてたハンマーの看板と場所も覚えていましたから迷わず到着。

「おはようございます、お邪魔します」

「お邪魔します、おはようございます」

開け放たれた鍛冶屋の入り口をくぐると中は沢山の剣や槍が壁際に並べられていて、

見ただけでワクワクしてきます。

でも店内は誰もいませんね？

「誰もいないわね、ライもつと大きな声で呼びなさいよ」

「そうだね、おはようーございまーす」

『聞こえとるわい！ ちよつと待っててくれ！』

「いたにや」

「いましたね、こんなの盗まれたりしないのでしょうか？」

「そんな悪い奴らばかりじゃ無いとは思いますが不用心ですよね？」

「まったく少しぐらい待つとれ！ ん？ なんだお前達だったか、すまんすまん。てつきり新人冒険者でも来たのかと思つたからな。よし、早速寸法を調べるライリールはその革鎧を脱いでくれるか？」

「あはは。でも買いに来てくれるのですから。それとライと呼んで下さいね」

「ライが分かつた。まあ、そうなんだが、今一人で切り盛りしているからな」

お話をしながら寸法を目盛りのついた紐で計測していきます。

二人分を調べ終わり二日で完成するそうですので楽しみができました。

第76話 冒険者登録です

「ねえライ、私の冒険者登録は？」

「あー！ そうでした！ ここのとこ町や村も全部素通りしてきましたから忘れてましたね、じゃあプシユケの登録と、リントも一緒に登録しよう」

「リントも冒険者になれるのかにや？」

「もちろんよ！ 私だって冒険者なのよ！ ムルムルは従魔になっちゃったけど、ケツト・シーだってちゃんとした種族なもの！ そうと決まったら冒険者ギルドよ！」

「そうなのかにや、にやらリントは冒険者にや！ さっさと行くにやよ！」

あはは、大丈夫かなあ、まあテラだって半分無理矢理だった気がしますが。

大通りで門の方を見るとそこには冒険者ギルドが見えますからさらつと行つて登録しとやいましょう。

鍛冶屋の前から離れ、すぐにあるギルドに入ります。そうです、冒険者ギルドでのテンプレ回収のチャンスです。

さてさて少し楽しみが増えましたね♪

「にやんだか昼間からお酒の匂いがするにや、仕事はおわつたのかにや？」

「たぶん夜に採れる品物を納入した後なんじゃないかな。僕はやったこと無いですけど確か麻痺に効く薬草が夜中にしか花が咲かなくて、材料の花の採取の依頼がありましたからね」

「にやらお酒も朝から飲んでも大丈夫にや、夜の採取お疲れ様にや」

「おう坊主達よく知ってるじゃねえか俺達は夜専属でやってるから朝から飲んでその後寝るって形だ。まあ中には長期間の依頼を終えて休んでる奴らも多いがな。」

「ぎやははは！ 中にはただのサボりもいるがなあ俺みたいな」

おおっと、お仕事サボりの方までいるのですか、うん。格好から見ても冒険者の格好ではないですからね。

(ライ、声は出さないでね。そのサボりの男は人攫いの仲間よ、ぐるぐるしちやいなさい)

なんと！

(そうなのかにや！)

(リントもそう言えば念話かに出来たわね、そうよ、だから気付かれないようにね)
リントも念話かあ、僕も頑張って覚えなきやだよね。

よし、まずは気絶させちゃいましょう。

「あはは。お金持ちなのですね、僕達はやつぱり依頼を請けないとご飯も食べられませ

んから」

「おお、そうだよな、兄さん羨ましいぜまったく」

「ぎやははは！ だろう？ 気分が良いぜおい！ 酒をこいつらに樽で出してやってくれ！ まあ俺も飲むがな、ぎやははは」

ドン

「なんだあ？ 騒ぎすぎて酒が回ったか？ おい兄さん。駄目だな、完全に酔い潰れてるぜ」

お酒の入ったカップを握った状態でテーブルつて突っ伏して気絶しました。

魔力回復の魔道具も持っている感じはしないのでこれではばらくは逃げる事もできませんね。

そこに注文した小さな樽が届きました。

「なあにコイツ、注文しておいてまた寝ちやつてるの？ これで何回目よ、仕方ないなあ」と、コイツ財布はこれだから、ひい、ふう、みい、んじや、お支払ありがとうございまして」

給仕のお姉さんは、気絶した人攫いの人の財布から銀貨を三枚取り出してお酒の樽を置いていきました。

「あはは。届く前にコイツ酔い潰れたってか？ あはは♪」

「でも僕はまだお酒は飲めませんからお兄さん達がいただいて下さいね。僕達は仲間の登録と、パーティー登録をしてきますから」

「おう、中々良い酒だし楽しませてもらうさ」

そして夜中専属のパーティーの皆さんは樽からお酒を注ぎ飲み始めました。

「じゃあ登録しちゃおう」

受け付けのカウンターに向かい、登録用紙を無理矢理二枚もらい。

やっぱり初めは駄目だと言われましたが、ムルムルに乗ったテラとリントはカウンターの上へ乗り、立ち上がって熱弁に次ぐ熱弁の末、やっぱり登録できる事になりました。

「ライ！ お願いにや！ 書いて欲しいにや！ ペンがちゃんど持てにやいにや！」

リントは羽ペンを抱え、奮闘していましたが無理だったようです。

「あはは。うん、変わりに書いて上げるね」

「私は書けました！ お姉さんこれで良いですよね？」

プシケは書けたようです。カウンターが高いので顎を乗せた状態で用紙を渡します。

「はい。見てみますね、んくと、はい大丈夫ですよでは登録しますね。それからリントさんの物は」

「はい、これでお願ひします」

「はい。ん、はい、大丈夫ですよね？」

物凄く複雑そうな顔で二枚の登録用紙の内容を魔道具に打ち込んでいます。

その手元を近くによって見ているリント。

カウンターに顎を乗せて見ている僕とプシユケ。

一枚目のカードが完成、そして二枚目も。

「ではお二人？ の登録が完了、ギルドカードができました。ではプシユケさんどうぞ」

「あはあ！ これで私も冒険者！」

「それとリントさんどうぞ」

「にやは！ やったにや！ ケット・シーでリントが最初の冒険者にやよ！」

二人は大喜びですがまだ木のカードですからこれからですよ。

「では二日ありますから葉草採取の依頼でも請けましようか」

「その前にパーティー登録でしょ、そろそろパーティー名も決めなさい！ なんなら私

が決めて上げるわ！ そうね、『ぐるぐる』にしましよう！」

「おお！ テラ良い名前です、『ぐるぐる』、うんうんそれは最高に良いですね！ お姉さ

ん僕達全員パーティー『ぐるぐる』でお願ひします」

「では皆さんのギルドカードを書いてもう一度出して下さいね」

「はくしいー！」

「では四人？ のパーティー申請を受諾します。パーティー名『ぐるぐる』はい、登録完了です。ライリール君がリーダーですから討伐依頼も請けることができますね」

「え！ じゃあ私がゴブリン討伐の依頼書を取ってきますね！」

「うふふ。ゴブリン討伐は常時受け付けていますので、魔石を向こうのカウンターに出せば五個で依頼が一回成功したことになります」

なるほどそれならこの後ゴブリン討伐しに行つて今日明日で銅色のカードへ変えてもらえるように頑張りますよう。

第77話 ゴブリン村長ふたたび？

「それじゃああの気絶した人をお屋敷に連れて行ってからゴブリン討伐へ向かいましょう。」

「そうねライ。奴らは放っておけないしそうしましょう。プシユケもゴブリン討伐頑張るのよ。」

「はい！」

リントのギルドカードはやっぱり持つてられないので僕が収納に預かり、先ほど気絶させた人攫いを確保しに向かいました。

「おつ、登録は終わったかい？」

「はい。無事に終わりましたよ。あの、その方を家に連れていった方が良いですよね？」

「だよなあ。さつきからも何度か揺すったりはしているんだが目冷まさねえからなあ。」

「では僕が連れていってきますね。転移を使えばあつという間ですから。」

「おおー！ 良いじゃねえか！ かの賢者様がお得意としていた魔法。羨ましいねえ。じゃあ頼めるか？ 俺達ももうすぐ引き上げようと思っていたからな。」

樽から注いでいますが、もうチヨロチヨロしか出ないようですから、お酒も無くなりそうですね。

「ですよね。では連れていきます。今夜もお仕事頑張ってくださいね。転移！」

パツ

「おおすげえ！ 本当に消えたぜ！」

お屋敷の門近くに転移した僕はカヤツツに人攫いを任せギルドに戻りました。

パツ

「うおっ！ な、なんだもう戻ってきたのか！ ふいふ、転移つてのは心臓に悪いな。くははは」

くふふふ。目を真ん丸にして驚いていますね。でも流石なのはお酒は一滴もこぼしていないところですね。

「はい。ちゃんと別の方に任せてきましたのでもう大丈夫です。では僕達はゴブリンをやっつけてきますね」

「ああ。気を付けてな、門を出て北にある森が一番狩り易いだろうな、だがあそこはそこそこデカイ村ができてた筈だからあまり奥には行くなよ」

おお。それはゴブリン村長がいるのですね、分かりました。

飲むのを再開しましたが、僕達の事を心配もしてくれるよいパーティーのようです。

「はい。では行つてきます」

ギルドから出て街の門をくぐり北の森でしたので街道を北に向かいます。

「ライ、何匹倒せば良いのですかね？ 五匹で一回の依頼達成と言つてたけれど」

「そうですね、結構沢山だと思えますね、僕とフィーアは薬草採取を一日一回の達成で結構な回数をこなしましたからね」

でも、薬草採取の依頼より、討伐ですからもしかして少ない回数でランクが上がるかもしれませんし、ゴブリン村とオーク村もあれば良いのですが。

「でもライつてばさつき聞いたゴブリン村をやつちやうんでしょ？ ならすぐに上がるんじゃない？」

「え？ そうなの？ 私にもできるかな？」

「プシユケは攻撃魔法できれば風かな、火魔法だと森を焼いてしまうかも知れないからね」

「分かりました。村の時も火は物凄く注意して使っていましたから任せて下さい！ バンバン倒して二日で私もEランクに上がるのですよ！」

「リントはどうするにや？ 風魔法にやら撃てるにやよ？」

「そうなんだ！ なら結構余裕かもしれないね、魔力は僕が補充しますから魔力切れの心配ありませんし、今日の内にゴブリン村をやっちゃいましょうそうしましょう」

「頑張りますよー！」

「やっつけるにやー！」

街道を一時間も進まない内に森が見えてきました。

でも、左右にありますね。

森を分けるように街道があり、どちらも北の森なのですが、まあ僕には関係ありませんね。ぐるぐるつと気配を探るために索敵範囲を広げていきます。

「んとありました！ ありました！ これは、両方にありますね、ゴブリンだと思っ集まりが左右にありますよ」

「ちようど良いじゃない、両方に行つて倒しちゃえば、ほらほら場所が分かつたなら早く行つて倒せば良いのよ」

「うん。そうだね、おっと、オーク村も発見。じゃあ今日は、ゴブリン村とオーク村を潰して、明日はまた別の魔物を探しましょう！」

「おー！」

そして転移で最初に向かったのはオーク村です。何故なら一番数が多かったので、お

昼の休憩までに終わらせる予定です。

森の中に転移して村を覗くとやっぱりオークは崖の裂け目を使い、村を作っていましたので、その崖の上に僕達はさらに移動して崖の端まで行き地面にツノガエルのシートを敷いて下を覗き込むように寝転がります。

「ん、あつ、プシユケにリント、あのみんなより少し大きくて、黒っぽいオークがこの村のたぶん村長だから倒すのは最後にするからね。最初に倒しちゃうとバラバラに逃げちゃうから」

「うんうん。あの黒オーク以外を倒せば良いのですね」

「任せるにや、バンバンそれじゃにやいやつを倒すにやー!」

僕はこの村一帯のオークと魔力をぐるぐるさせて魔力をいただき、プシユケとリントにも補充していく準備を進めます。

「よし、準備は良いかな、狙うのは頭でなるべく細い魔法でやるんだよ。お腹は絶対駄目だからね、お肉が不味くなっちゃうから」

「はいはいにや」

じゃあいきますか。そろそろ気絶するオークも出てきますから。

「うん。せーの! ウィンドニードル!」

「ウィンドアローにや!」
「ウィンドアロー!」

シユパパ

空気を切り裂く小さな音が連続して起こり、見えない風魔法が次々とオークの頭に命中していきます。

フラフラとその場に倒れたり、崩れ落ちていくオークを次々と収納に入れていきます。

ですが流石は村長、仲間が倒れて消えていく事に気付いたようです。

「あはは。気付かれちゃいましたね、二人とも村の端の方から倒して下さい。そうすれば森の方を警戒して上を警戒することが無くなる筈ですから」

二人はウインドアローを撃ちながら頷いてくれて、狙いを外側に移してくれました。

するとオーク村長は『フゴ^敵オ^敵グガ^森』と指差し叫びました。

うんうん。フィーアならもう少しちゃんどオークの言葉も理解できるのですが、僕にはこれが限界かな。でも、よしよし作戦成功ですね、その後も倒れていく仲間を自分の近くに呼び寄せ、守りを固めようとはしますが上から狙っていますから関係ありません。

「おつ、気絶するオークも出始めましたね。そいつらは僕が魔法を増やしてやつちやいますからプシケとリントは立っているヤツをやっちゃって下さい」

二人とも頷き魔法も増やして撃ち始めました。

そこからはあつという間に終わりが見え、最後にオーク村長はプシケとリントのウ

インドアローがほぼ同時に頭を貫き、ビクンと大きく痙攣した後ゆっくりと前に倒れていきました。

「お疲れ様です。狩りに出掛けている集団もぐるぐるで気絶しましたからこつちに転させますね」

村から出ていたオークを転移させてきたのですが、一匹また黒っぽいオークがいます。

「黒オークがこれで二匹だね」

「おかしいわね、別にまだ村があるのかしら？」

テラがそんな事を呟いた事には僕も同意です。

「少し範囲を広げてみますね、ぐるぐるー」

どんどん範囲を広げてゴブリン村はもちろん、反対側の森にまで広がっていくと、こちら側の森で強い気配が見つかりました。

「テラ、この方向に強い気配があるから何か見てくれない？」

「任せて、あつちね」

肩の上でムルムルに乗り立ち上がって右手で僕の耳たぶを掴みながら僕が手をのばしている先を見ました。

「^{神眼}んん、嘘、オークキングがいるじゃない。滅多に発生しないのに、ライゴブリンなん

て後回しでも良いわ！ アレは危険よ！」

「うん。オークキングは始めてです。もうぐるぐるは始めてるから大丈夫、他のオークからここに転移させるからね、プシユケ、リント、今やっつけたより多いから頑張ろう！」

「ひよええ。や、やってやりますよ！」

「どーんとこいにゃ！ 魔力はたのむにゃよ！」

「うん、じゃあ行くよ。転移！」

第78話 怒られて驚かれました

「いっばいにや！ ワラワラいるにや！ 物凄く多いにやー！ にやースタンピードでも起こるのかにや？」

うん、これでまだ四分の一ほどだから本当に起こるかもしれない。

「その可能性はあるわね。キングがいるって言うことはその内エサ場を求めて移動していた可能性は高いわ。ライ、残さずやつつけるわよ」

テラもそう言っていますからやつちやいね。

「うん。プシユケにリント、どんどん転移で連れてくるから片っ端からやつつけていく

よー！」

はいにやー

「うん！」

二回目の転移で気絶していないのはオークキングだけになりました。

「ん？ オークキングが動き出しましたね。逃げてる？」

「ライ、逃がすのは不味いわ、先にやつちやいなさい！」

「うん、プシユケにリント、オークキングをこっちに連れてくるから一斉に頭狙いだよ

！」

「任せてー！」
はいにや!

「転移!」

そして、見下ろす村の中央に現れた普通のオークの三倍は言い過ぎかも知れませんがそれくらいありそうな巨体の真っ黒に近いオークキングが姿を現しました。

その頭に三人がほぼ同時に魔法を撃ち、後少して届くと言うところで持っていた太丸太で僕達の魔法を受け止め崖の上、僕達の方を見上げてきました。

「流石ね、あの攻撃を防ぐなんて」

「父さん以外で初めて魔法を止められました。よし! 最近やってませんでしたから接近戦を久しぶりにやりますか! みんなは気絶したオークを倒していつてね、僕は一騎討ちをしてきます。ほいっと!」

勢い良く立ち上がり、崖から飛び降りながら刀を収納から出し鞘から抜き放ちます。

「何でええー! 気絶させてからで良いじゃないのおおー!」

あつ、テラとムルムルを連れてきてしまいました。

「ムルムル! テラを落とさないようお願い。着地は少し衝撃があるから!」

崖の上から飛び降りた僕に気付いたオークキングは丸太を振りかざし、僕の着地点を狙い走り込んできます。

『ガアアアアー!』
敵殺潰!

後五メートルで地面！

そこに向けて振り抜こうと丸太を体の捻りまで加えて振るってきました——こ
こです！ 転移！

パツ

ブオン！

タツ。オークキングの真後ろに転移した後振り向き様に膝裏に一撃！

ザザシユ！

返す刀でしやがみながら足首、アキレス腱の位置を二撃目！

ザザシユ！

『グギヤアア——！』

その場に膝をつき背が低くなったところへ切り上げで丸太を待っていた左手！

ザシユ！

少し右に移動して頭蓋骨と首の間に突き！

ドシユ！

「よ——」

素早くオークキングから離れるためバックステップ。

ブオン！

オークキングが後ろ向きのまま右手に持ち変えた丸太を振り抜き、一瞬前まで僕がいた場所を通りすぎていく。

「ここです！ シツ！」

振り切り伸びきった腕を下から切り上げ肘から切り落とす気持ちで振り上げます。
ザシュ！

『ガアアアア！』

振り抜いた勢いそのまま痛みからか歪んだ顔で僕を見ながら体勢を崩し、背中から倒れ、丸太は手を離れ地面を滑り転がり遠くの気絶しているオークへ当たり数匹撥ね飛ばしたところで止まりました。

「ライとどめよー！」

「はい！ ウインドニードル！」

パシユツ！

『ガツ！』

こちらを見上げていたオークキングの眉間に突き刺さり、ビクビクツと痙攣後動かなくなりしました。

「もう少し、まだ息があるわ」

見るとまだ仰向けの胸が上下しています。

「でも本当にしぶとかったね、首を刺したのにまだ動けるんだもん」

それから五分ほど経って、オークキングは収納できるようになりました。

崖の上に戻り、オークを集め、倒していきます。

「次で最後だよ。それが終わったらお昼ごはんにしましょう」

「そうですね、お腹がきゅくってなりそうです」

「僕もペコペコです。残りを片付けてしましましょう」

オーク村と、オークキング達を倒し終わり、お昼ごはんを食べながら、ついでにゴ布林村の二つをぐるぐるしておきます。

食べ終わる頃にはあちこちにバラけていたゴ布林達を崖下に転移で集め、村の集まりも全て集め終わりました。

「じゃあムルムルどうする、また食べちゃう？」

ふるふるしながら突起を伸ばしてやる気のようにです。

「食べたそうね。なら端の方をやっつけておいてくれる？」

「うん。じゃあ左端からやっていくからね。プシユケ、リントはムルムルに当てないよ

うにお願いなね」

「うん、分任せて!た」

そしてムルムルはゴブリンの三分の一を吸収し、でも大きさは変わらない。やっぱり

ムルムルは凄いですね♪

そして全てを倒しきり、残りの三分の二を収納して街に戻りました。

冒険者ギルドに入り、カウンターにゴブリン村二つと、オーク村一つにオークキングを倒したと報告したのですが。

「何を馬鹿なことを言っているのですか？ あなた方四人？ のパーティーでそんなに倒せるわけありません！ それにオークキングですって？ Aランクの冒険者パーティーが複数集まって倒せるか倒せないかの魔物ですよ！ 虚偽の報告で報酬を貰おうなんて、冒険者ギルドを追放されますよ！」

プシユケとリントを登録してくれたお姉さんはカウンターの途中で立ち上がり凄いい剣幕で怒ってきました。

「あのですね。んくとじゃあオークキングを出せば信じてくれますか？」

「まだそんな事を！」

んく、そうするのが一番だと思ったのですが、大きいですからね。こんなところに出すと迷惑がかかるかもしれません。

「何を騒いでおる。オークキングと聞こえたのだが、発見報告ではなさそうだな説明したまえ」

「ギルドマスター。呼ぼうと思っていたところでした。実はこの子達が北の森、街道を

挟んだ左右の森にできていたゴブリン村を二つ、オークリーダーが中心のオーク村を一つ潰し、さらにオークキング率いる万近いオークを倒したと報告してきたので」

「ふむ。虚偽の報告で報酬を貰う。そう考えたのだな」

「はい。それからオークキングを出すとまで」

「分かった。ではオークキングを出して貰えば話が早い。少年」

「ライです。では結構大きいですがここに出しても良いですか？」

「うむ。ライその床の上に出してくれるか？ みんな！ 場所を開けてくれ！」

ギルドマスターさんの一声で、カウンター前はオークキング出すのに十分な場所が空きました。

「では出しますね、ほいっと！」

ズン

カウンター前の何も無い床の上に四メートルを超える黒いオークキングが横たわっています。

ギルドの中は、ざわつきまで止まり、視線はギルドの中央に横たわる黒いオーク。

最初に声を出したのはお姉さんでした。

「か、鑑定！ 嘘っ！ オークキング！」

「なんと！ 鑑定の結果がオークキングだと！ 間違いはないのか！」

第79話 護衛依頼を受けましょう

「サ、サーバル男爵家の！ 劍聖の〴〵子息様！」

「あ、僕は三男なので家は十歳でこの通り冒険者になりましたからライで良いですよ。それよりオークキングは本物でしょ？」

「そううだったあああああー！」

くふふふ。皆さん叫ぶの好きですね♪

「そ、そうだったな。ふむ、攻撃跡は膝裏にアキレス腱、左腕は浅いが筋を断ち切っているな。右腕も肘のところをこれまた筋を。それとこれが致命傷か。首への突き。ふむ。ん？ うつ伏せで見えないが。」

そう言うのとギルドマスターさんはオークキングの顔をよいしよと横向きに。するとウインドニードルの跡が眉間にあるのが見えました。

「これは魔法か！ それも一撃、焼けた跡も無い、土でもないな水？ いや、これは魔法だと！ 風魔法に耐性があるんだぞオークキングは！ ラ、ライ君この魔法はお母様、賢者様から伝授されたものですか？」

「この魔法は違いますね。教えて貰ったのは転移魔法です。これはウインドニードルで

すよ？ 皆さんも使うじゃないですか、これは最後に動けなくなつたところを撃ちましたから耐性が無くなつてたのかな？」

「ふむ。とどめだけだと言うならそうなのかもしれないな」

「それでこの討伐でプシユケ達はランクアップできますか？」

ギルドの中はまた静かになつて、僕達に注目しているのは良いのですが、なぜか哀れみの顔を向けてきます。

やっぱりオークキングですが一匹では駄目なようですね、じゃあ。

「では、残りのオークリーダーとかもだしますよ。これは本当にプシユケとリントが倒したやつですし、ここで良いですよね？」

僕達を見るだけで何も言つてくれませんので、出していけば分かつてくれますよね。

「じゃあいきますね、ほいっとー！」

ドサツドサツドサツ。

「待て待て待て待て！ でも何体あるんだ！ じゃなくてだな！ オークキングを倒してランクが上がらないわけ無いだろ！ それにこのオークも黒いじゃないか！」

「ギ、ギルドマスター。オークジェネラルが五匹にオークソーサラ二匹、他のもリーダー。普通のオークはこの中には一匹もいません」

「ライ君、君達のランクは上がる。それは間違いない。だが、あまりにも功績が飛び抜

けている」

えっと。それはどう言った意味ですかね？

「まずはDランクまで上げるのはこの場でできるがCランク以上は話すことはできないが色々と規定があるんだ」

そうでしたね、確か護衛依頼。でも広めちや駄目でしたよね。

「では、Dランクには上がれるのでしたら問題ありません。だよね♪」

「やりましたよ！ Eランクを飛ばしてDランク！」

「やったにや！ これが無敵にやよ！」

くふふふ。リント、残念だけどまだ上があるから頑張ろうね。

その後は、一旦オークを収納して、ギルドカードの更新、もちろんプシケはカウナーに顎を乗せ、リントはカウナーの上でお姉さんがギルドカードに情報を打ち込む姿をじい〜と見つめ、一枚目、二枚目が出てきて今度はそわそわしだすリントはシユポがぼわつて広がり太くなっています。

「くふふふ。はいお待たせしました。まずはプシケちゃんどうぞDランクのギルドカードです。次はリントちゃんどうぞどうぞ」

「ありがとうございます！」

ものすごく嬉しそうで何よりですね。

そしてオークキングを売って欲しいと言われたのですがこれはムルムル用に残してあげたいのでお断りし、普通のオークとリーダーを納品してギルドを後にして、昨日と同じ宿に泊まりました。

翌朝、次のランクアップのためまたギルドに行き、依頼の貼られた掲示板を見に行こうとしたのですが、朝はやっぱりここも混むのですね。

「よし。プシユケ達はちよつと待つててくれる？ 今朝の食堂で聞いた隣村までの往復護衛依頼が残っていないか見に行つてくるからね」

「ライ頑張つてね」

「リントも待つてるにゃ」

僕は頷くところそこそとお兄さん達がひしめき合っている隙間を抜けて一番前に出ていききました。

「ん、ここからは見えませんね、よし横に移動です」

少しずつ移動しながら掲示板を確認していき、やっと見つけたのですが僕の背では伸びをしても届きません。

ですが問題ありません。

依頼書に狙いをつけて

転移！

パッ

手元に転移させた依頼書の内容に目を通します。

「よしよし。えっと、隣町までの往復護衛。報酬が銀貨三枚、間違ひありませんし、人数も四人パーティーなのでちょうど良いですね」

「うんうん。中々良い依頼ね、一日で往復して銀貨三枚。十分よね」

「よしテラ、プシユケ達のところに戻ろう、転」

「待ちなさい、これくらいで転移を後に使わないの、将来お腹がぶよぶよになるわよ」
「くふふふ。そうだね。潜り抜けるからムルムルも気を付けてね」

そして転移は止めて、プシユケ達のところに戻るため、お兄さん達の間を潜り抜けていきました。

「ふう。お待たせ、受付しに行こう」

「あつ！ 私が依頼書持ちたいです」

プシユケつたら目をキラキラさせて、手を僕に向けて伸ばしています。

「うん。はい、じゃあ次受ける時はテラかリントだね。僕は沢山やった事があるから」
「あら。良いの？ じゃあ私も次にやらせてもらおうわ」

「リントはその次にゃ！ プシユケ行くにゃ！ 今なら一番手前が空いてるにゃよ！」
二人はカウンターに向けて走って行きました。で、肩ではムルムルが。

ぶるぶるゆるゆる

「ムルムルもだね、よしみんなで順番に依頼を受けていこう！」

そう言えば、このギルドでも絡まれませんね？ 僕のギルドで絡まれるテンプレはここではないようです。

依頼を受けて向かうのは昨日と同じ門。

そこに待っていたのは屋根無しの馬車で衣類や雑貨。雑貨はお鍋とかフライパンなどの鉄製の調理器具や畑仕事用の道具が木箱に入れられハリネズミみたいになっている馬車でした。

「おはようございます。護衛を請けたパーティーぐるぐるです。こちらが依頼書の写しです」

馬車で荷崩れがおきない用に縛ったロープを確認しているおじさんに声をかけました。

「ん？ おはよう。今依頼を請けたって聞こえたが、遊びじゃないんだ見習いのパーティーでは話にならない。キャンセルだ」

えっと、せつかくの護衛依頼なのですが、前途多難ようです。

第80話 ランクアップに向けて ①

僕達の姿を見ていきなり言い放たれたキャンセルの言葉に驚いているとさらに追い討ちがきました。

「それに、最低Dランク以上がいる四人パーティーでギルドに依頼したはずだ！ 村までの往復、たった一日で銀貨三枚も出すのになぜ見習いが！ くそっ！ ギルドに文句を言ってきたやる！」

「あの、その条件なら——」

「あつ、昨日のオークキングの、確かライ君！」

その時、僕達が請けた依頼ではない馬車の護衛に来ていた一組のパーティーが、商人さんの声に反応して声をかけてきました。

「どうしたの？ 何か揉めてたみたいだけれど」

「おお。あなた方は以前依頼を何度も請けてくれた方達ではないですか。そうなんですよ聞いてください、ギルドにまたいつもの依頼を出したのですが、来たのはこの見習いが二人でしたのでね。ギルドに文句を言わねば」

「ああくあははは♪ 銀貨三枚で請けてくれたなら破格の安さですよ商人さん。この子

達は単独パーティーでオークキングの討伐をやつてのけたのですから」

おお。僕が言おうとしてのですが、中堅っぽい使い込まれた装備を身につけた格好いいお姉さんが僕達の事を説明してくれました。

「それに、一応ですが、ライ君の肩に乗つてる小さな子と、こっちの女の子はプシユケしやんでしたね、その子が抱えている猫さんのリントちゃんも立派な冒険者ですからしつかり条件は満たしていますよ」

「あの、オークキングと聞こえたのですが？　もしや昨日の夕方から話題のパーティーぐるぐるが、この子達？」

ぬふふふ。話題ですかあ。嬉しいですね、父さん達に負けなくらい凄い凄いパーティーにしたいですね。

「ええ。そのパーティーですよ。だよね♪」

「はい。ゴブリンを倒しにいったのですが、そこにいたのでやつつけましたそれにほら」
僕は、自分の物とテラとリントのDランクのギルドカードを三枚を広げて商人さんに見せました。もちろんプシユケは自分で出しています。

「うんうん。ライ君とテラちゃんもDランクになつてるし」

「な、なるほどです。それならば依頼した通りですからお断りする事も、ギルドに文句を言う事も無いですね。あは、あは、あはは」

商人さんは、僕達が出したギルドカードを見て、少しひきつった顔でそう答えました。「くふふ。確かに見た目はお子様だからねえ。気持ちは分かります。でもどうせ車列を作り村に向かうのですから近くには私達もいますしね」

確か、五台の馬車で同じ村に行くのですし、協力しあつて護衛をすれば良いのですね。「ふむ。それもそうですね。分かりました。ぐるぐるの皆さん、今日はよろしくお願ひします」

「はい。よろしくお願ひします」

積み荷の状態を確かめた後、僕達は車列の一番前で御者台に乗せてもらいました。車列の一番前は、どの馬車よりも先に魔物や盗賊達と接近する位置です。

この前の護衛依頼を受けた時に教わった様になり、見張りをやっていけないといけません。

ですから僕はぐるぐると魔力の範囲を大きく広げ、魔物や隠れている盗賊達を警戒していく事にしました。

村までの道は昨日の街道からそれて行き、次第に左右が森になって来ました。

「あつ、昨日の森からは離れていますからそこそこゴブリンがいますね」

「本当に！ 近いのですか？ 後ろの皆に知らせないといけませんから」

「大丈夫ですね。まだ数キロ先ですし、まあ道に出ていますから見えたところで倒してし

まうので心配ありませんよ」

「ほぼ真つ直ぐで数百メートル先まで見えますから見えてからでも五十匹くらいですし、問題ありません。」

「感じからいくと一匹はリーダーさんですからもしかして村を作るのに移動中でしょうか？ オークキングも移動してましたからね。」

「後は魔狼が近くにいますが数頭のグループです。放つて置いてもこれだけの人数で移動してはいますから近付いてくる事ありませんね。でも念のためぐるぐるだけしておきます。」

「その間も馬車は順調に進み、魔狼が気絶してすぐ、遠くにゴブリンが見えてきました。では商人さんこのまま進んでもらって大丈夫ですからね」

「え？ あの、物凄く沢山いるのですが！」

「大丈夫大丈夫。いきますよー、プシユケとリントも頭狙いでね」

「ははいにやい」

「商人さんは、僕達のやり取りを聞いて『え？』って顔をしています、やつつけちやいますから心配ありませんよ。」

「せーの！ ウィンドニードル！」

「ウィンドアローにや！ウィンドアロー！」

シユパパパッ!

御者台の上から放たれた魔法は二百メートルほど離れたゴブリンに次々と命中し、倒れていきます。

そして倒れたならすぐさま収納して道を開けていきます。

「ななっ! これは凄いですぞ! このようすばらしい魔法使いは初めて目にしました!」

商人さんは先ほどまでの心配顔は綺麗さっぱり消え去り満面の笑みと、興奮のため少し赤くなつてくるくらいです。

「おお! もう半分消えましたよ! あっ! あそここの二匹が逃げそうです! おお!

! 倒れました!」

くふふ。大興奮ですよ! 最後にゴ布林リーダーを倒した時には。

「うほー! こんなに興奮する事は今まででなかつたです! ぐるぐる皆さん、依頼を請けていただきありがとうございます!」

「あはは。これくらいはやれないと僕達は『サーバル騎士団』を追い越すのですから!」

「今や解散してしまつたかの伝説パーティーですね。うんうん。私も応援する事にします。そして将来私は伝説を塗り替えたパーティー『ぐるぐる』に護衛をしてもらつたと自慢することにしますよ!」

おお。それは頑張らないとですね♪

その後はやはり気絶させていない他の魔狼も近付いてくる事もなく、馬車の車列は滞りなく予定の時間より少し早く村に到着することが出来ました。

村の広場に馬車が止まるとあちこちから村人が近付いて来て荷降ろしを今か今かと待っています。

商売の間は僕達護衛も休憩のため、馬車を離れる事になっていきますから、少し村を見ることにしたのですがそこでまた、あれが起こってしまいました。

第81話　またまた忘れていました

「にああ。畑だらけにや」

入ってきた門とは違う門から出て、お昼ごはんを作ろうとしていたのですが、リントの言う通り見渡す限り畑畑。

「サーバル男爵領でもエルフの町がこんな感じで一面畑だから野菜が育ったらこんな感じになるのかもですね」

「そっか、ライが大きな畑を作っていましたからね。うんうんたぶん負けてませんよ♪
秋の実りの季節が楽しみです」

「そうだね。よし、ここでバーベキューにしよう！　この前マシユにオーク肉を切つておいてもらったんだ。リントにはお魚もあるよ」

「肉にするにや！　さかにやはまた今度にや」

「ライ。ムルムルのはオークキングを出してね。くふふふ。さあムルムル、美味しいオークキングよ！」

ぷるっ。ぷるっ

「おお。嬉しそうですね、よし出すね〜ほいっ！」

ズンと畦道あぜみちにオークキングを出してムルムルを
 うな？

気のせいですかね。

ムルムルをオークキングの胸の上に下ろすと、みによくんと伸びて包み込んでしま
 ます。

その後はいつも通りシユルシユルと縮まり元の大きさに。

「うんうん順調ね♪ どんどん食べて大きくなるのよ」

テラはムルムルをぽんぽんと叩いてそんな事を言いますが、ムルムルは普通のスライ
 ムですからね。でも魔石を高速で回してぐるぐるを頑張っているようですが、あれ？

少し魔力も魔石に引つ張られ微かに動いていますよね？

でもそんな時でしたテラが叫びだしたのは。

「——ああああ—— 不味いわライ！ 来ちゃった！ 来ちゃったのよ！」

「どうしたのテラ？ そんなに慌てて何が来たの？」

テラはムルムルの上で立ち上がりせわしなく足踏みをしていますますがムルムル大丈夫？

「い——」

「い——」

「あの子の—— 御神樹様の——」

御神樹様のっ！

「あー！ あああああー！ ま、不味いですよ！ あああああー！ どうしよう！ と、とりあえずサーバル男爵領に行かなきゃ！ 転移！」

パツ

「ありがとうライつて嘘！ 嘘嘘嘘嘘っ！ ライここお屋敷の中じゃない！ は、早く！ そこからで窓からで良い！ もう大きくなっちゃう！ お願いだから庭で良いから外へ！」

「うん！ もう開けてられません！ 僕の最大魔法！ アルティメット・ウインドー！」
バゴォー

激しく回転する風の刃が二階にある僕の部屋の壁を綺麗に丸く切り取り、破片も小さな石ころくらいにまで切り刻まれ、大人の人が立って通れる大きさに穴が空きました。

そこから外へ出るため勢い良く走り出し、肩にいたムルムルとテラを手に抱え、勢いをつけたまま飛び出しました。

「お願いもう少しだけ待って！ ライ庭の真ん中へ！ あの大きな池の真ん中ならたぶん！」

「うん！ 全速力でいきます！ はああー！」

ドンツ

着地と同時に前へ地面を蹴りつけ方向を縦から横に変えます。

ドゴツ

たぶん穴が空きましたがそんな事は言つてられません！

「間に合わない！ ライー！」

「任せて！」

僕は慎重に大きくなり始めた果実をテラの頭から手に取り、屋敷の庭の中央にある大きな池へ、池の中央にある島に目掛けて投げました——しっ！

「間に合え！」

「お願い届いて！」

手を離れた果実は少し大きくなって今したが、まだ十センチくらいでした。ですが池の方に近づくとつれムクムクと大きくなり、池に後少しで届く！ と言うところでもう大きさは十メートルを超え沢山の根っこがみるみる内に伸び、その一本が地面についた瞬間！

ズズズズズズ

「嘘っ！ 手前で根付いちやうよ！ テラ！」

「不味いわ！ たぶんまだまだ近い！ ギリギリお屋敷に届くかも！ どうしよう！

未来のお義父様お義母様のお家なのに！ ライ何とかしてえー！」

え？ テラ、僕のお嫁さんになってくれるの。

「やったあー！ もう任せて下さい！ ちよつと根つこの先が切れちやうかも知れませんが許して下さいね！ ぐるぐるー！ー！ 転移!!」

パツ

転移させた場所は家の自慢の一つ、湖と言つてしまえるくらい大きな池、たぶん対岸までは二百メートルくらいある池の中央。

そこに浮かぶのは、半径二十メートルほどのそこそこ大きい島。その島の上空です。

「うん！ あそこならまずお屋敷には届かないわ！ 池の範囲でおさまるはず！」

根つこが相当伸びてましたのでたぶん百メートルくらい上空に現れた根つこのお化け。

その一番したの根つこが島についた瞬間でした。

「うにやー！ どんどん根つこが伸びてるにや！ ずによによによーつてのびてるにやよー！」

「はわわわつ！ 鳥かごみたいに根つこがなつてますよ！ あー！ 島が囲われちゃいましたあー！」

リントとプシケが言った通り、本来なら土の中にあるはずの根つこで島を包むように鳥かご、檻おとりのようになっていきます。

「良いわ、そのまま大きくなりなさい！ ライ、根っこに魔力を補充すれば丈夫に太くなるからお願い！ あのままの根の細さでは倒れちゃうの！」

「よし！ 街中どころか、広げられる最大で魔力を補充してあげる！」

僕はおもいつきり魔力をぐるぐるさせ、あつ、エルフの町までも届きました！

みんなからも少しずつお借りしますね——！

「ほいっ！」

根っこが囲っている島の中央に魔力をどんどん集めていきます。

それはもう景色が蜃気楼のようにゆらゆらと歪んで見えるくらいの魔力が集まってきたいます。

すると、細い根が隣の根っこと絡まり合いながら太く、たくましい根に生まれ変わっていきます。

無数の、数えきれないほどあつた根っこは数を減らしましたがその一本一本がたくましく太くなり、しっかりと大地を掴んだように。

「神眼！ やったわ！ この子も賢い！ まとめた根っこでしつかり立つちやったわ！ 七十二本の根っこで支え、今度は上に行くわよ！」

それは、テラの団栗の木より、僕の団栗の木より、元々あつた御神樹よりも幹の太さも高さも遙かに上回る巨大な木が

「坊っちゃんこれは！」

カヤツツ

「ライ坊っちゃんなんて物を」

マシユー

「まあまあ。大きな木ねえ」

「いやお前、大きい木だがそれよりなんだこれは」

父さん母さんまでお屋敷から僕達の元へ駆け寄り、木を見上げながら各々そんな事を
呟いています。

これは怒られちゃいますかね

第82話 ランクアップに向けて ②

「止まったかにや？」

「止まったみたいね〜」

「うん。魔力も安定したみたいですし島もほぼそのまま。また釣りもできそうですが上は完全に屋根になりましたね」

「うんうん流石私が育てただけあるわね♪ あの子より立派に育てて何よりだわ！ それにライありがとうね、あの魔力がなければたぶん倒れ、そのまま成長してしまうところだったし」

僕の手の中のムルムルの上で仁王立ちのテラが僕の服を掴みながらクイクイ引っ張りそんな事を言ってます。

「なあライ。この大きな木はなんなのだ？ テラが育てたと聞こえたが」

「そうでした！ 父さん達もこの場に来ていた事を忘れていました！ それにカヤッツの部下の方と、メイドさんが走ってきました。」

「カヤッツ隊長！ 住民達が正門前に集まりだしています！ どう対処すれば！」

「旦那様、お隣の領主様よりご連絡が。『サーバル男爵！ とてつもない木が見えるのだ

「大丈夫か！ 特大トレントか？ 兵なら出すぞ！」との事ですがお返事はいかように？」

「ふむ。心配なしと。後でこちらから連絡を入れ詳しく説明すると返しておいてもらえるかな」

「はっ」

「カヤッツ。住民の皆さんはこの池に来てもらってくれ。マシユー、バーベキユーの準備だ急げ」

「はっ、では早速。ライ坊っちゃん、オークをお願いできますか？ 百匹ほどまずは解体してしましましょう」

「うん。みんなお騒がせしてしまつたのでごめんなさい。マシユーそこに出しちゃうから収納できる？」

「わ、私も大変ご迷惑をかけてしまい本当にごめんなさい！ 本当はライに教えてもらったゴブリン村があつた場所にするはずだつたの！ それを私が忘れていたから！ 本当に、本当にごめんなさい！」

テラも頭を下げて謝りました。それを見たみんなは、苦笑いではありますが、コクリと頷いてくれました。

「テラ、ライと共に旅をしてくれるのだ。ライもしっかりしているようで抜けたとこ

ろも多々ある。お互いが助け合って行くことをお願いするよ」

「はいー！」

みんなは笑顔になってくれました。ですのでバーベキューの準備に取り掛からないとですね。

「マシユーじゃあ、オークを出しちゃうね、大丈夫？」

「もちろんでございませす。坊っちゃん言われた通り日々ぐるぐるしておりますから」

オークを出し、マシユーが収納。なんだか凄くあわただしくなってきました。

テラはマシユーの言葉を聞き『やっぱりこのお屋敷から古代魔法が復活し始めてるじゃない』とか呟いていますが、この前は寝てましたから知らないままでしたね、あはは。

オトクを取り出し、マシユーに渡したのですが、足りないかと駄目なので追加も百匹出して、護衛依頼の途中と伝えたと、父さんに『それならば早く戻りなさい』と言われ、みんなとバーベキューは食べたかったのですが、仕方なく僕達は村に戻りました。

「お昼ごはんを食べ損ねちゃったね、魔物パンに、えつと燻製肉と、野菜を挟んで、完成です♪ はいプシケのと、リントはパン無しで野菜無しの燻製肉だけで良いの？」

「ありがたい。うんうん美味しそうです♪ あくん。ふん、ほひひひいへふほ♪」

「パンは食べれるけどにや。野菜は苦手にや、ケット・シーはほとんど野菜は食べにやい

からリントはまだ食べてる方にやよ。あつ、もう村からの荷物を積み始めてるにや！早く食べちやうにや！」

「あつ、本当だ急がないとです！」

自分の分も作り、急いで食べます。僕達が食べ終わる頃には荷積みも終わったようで、蓋が開いている木箱の中を覗くと野菜が満載に。

「あつ、ぐるぐるの皆さん帰りは一番後ろを走りますので、後方の見張りをよろしくお願いいたしますね、帰りには現金も手にしていますから、盗賊に狙われるとすればこの帰り道ですのぞ」

「はい。では僕達は荷台の木箱の上に失礼しますね」

「はい。後少して他の馬車も積み終わりますのでそれから出発しますね」

僕達は荷台に上がり、木箱の上にツノガエルのシートを広げていると。

「ふむ。このツノガエルは相当な大きさだったのでは？ 長く商売していますがここまでの大きな一枚皮は見たことありません」

「はい、この馬車より大きかったですよ。それが沢山いたので、お肉も美味しいですし、皮もまだありますから譲りましょうか？」

「このツノガエルは産卵のため森の湖に来ていたところをやっつけたのでたぶん百枚は持つてると思います。残りはお屋敷に隠してありますので追加もできますね。」

「ふむ。この大きさなら一枚大銀貨でも売れますね、いえもう少し高くなるでしょう。一枚を大銀貨であるだけ譲ってもらえませんか？」

「おおー！ 僕の分を少し残しておけば良いですし、売っちゃいましょう♪」

「今は手元に百枚はありますからそれをお譲りしますね」

「へ？ 百枚？ その大きさの物が？」

「ん？ 足りないのかな、じゃあお屋敷の分は五百枚はあつたはずですし、半分も僕には必要ないと思いますから。」

「後で三百枚追加もできますよ。自分の分を二百枚は残しておこうと思いますので」

「え？ さらに三百？ 残すのも二百あるのですか？ あは、あは、あははははは！ それは凄い！ 加工場に流して色々作りそれを、ふむふむ買い取りましょう！ 合わせて四百枚！ 大金貨四枚！ 街に戻り次第お支払いいたします！」

商人さんはそれはもう満面の笑顔でそう言いました。

走りだし、中間地点の水場で馬を休めるのですが、そこに反応がありますね。テラに称号を見てもらいましょうかね。

「ねえテラ、行きにも寄った水場に三十人ほどがいるんだけど、もしかして盗賊かもしれなから見てもらえない？」

「ん？ 任せて、えっと、んん神眼。半分正解ね」

「半分？」

そう言つてテラの方を向いた時。ちゆ。

ちようど唇のところ^二にテラの顔^四がありました。

「にやああー！ にきやいめ！」

（お、落ち着きなさい私！ 偶々よ！ 偶然よ！ あれ私さつきサーバル男爵のお屋

敷で変な事言つたよう^な確かお義父さんお義母さん^{つて}）

「ねえテラ？ 半分^{つて}どう^{いう}事？」

（だ、大丈夫よね！ 聞かれてないわよね！ そ、そうよ、ライが最近お嫁さんとか言うからその気になつて、じゃなくて今は！）

またムルムルの上でしゃがみこみ、ムニムニと引つ張つていますがいつもの事です
ね。それより結果を聞きたいのですが。

「ねえテラ？」

「はっ！ そうよ、今はそれどころじゃないは！ 盗賊だけど、今回の盗賊の称号にはも
う一つ！」

テラがそこまで言つた時、先頭の馬車が休憩予定の水場が見えるようになる最後の直
線に入りました。

第83話 ランクアップしました

「盗賊ギルドつてあるわ！ ライ、いままでの盗賊より称号が凶悪よ！ それに色んな魔道具も持つてるから急ぎなさい！」

「分かりました！ もう全開です行きますよ！ ぐるぐるーほいつとー！」

盗賊ギルドですか！ 強奪したりしていたのかこれは魔力回復の魔道具をみんなが持っています、それも中々回復量が良い物のようです。

「魔道具、いえ、こうなったら装備も服も持つてる物全てをいただいちやいます！」

「その方が良いわ！ 奴隷の魔道具も持つているし、全部ひっぺがえしちゃえ！」

僕達が乗る馬車も最後の直線に入ると後二百メートル、僕は荷台の上で立ち上がり進行方向の先を見ると、既に武器を手にして隠れもせず道を塞ぐように広がりこちらを見ている盗賊ギルド達。

「もう襲う気満々だよ！ 丸裸にさせて貰います！ セーの！ 収納！」

道の先には、裸ん坊になった盗賊達、慌てているようですが、もう盗賊達と先頭の馬車まで百メートルほど、速度を落とし始めていたのでもう少し時間は残されています。

「ライ奴らの七台ある馬車も収納しちやいなさい！ たぶん燃やす用だと思っけど油が大量に乗っているわよ！」

「了解！ 収納！」

先頭にいた冒険者達はもちろん、僕達の前にいた冒険者達も武器を装備し、警戒を始めていました。が、いきなり裸になった者達と、すぐ前まで道を塞ぐように置かれていた馬車が綺麗に消えたのを見て驚いています。

「商人さん、僕は先行してやつつけてきます。皆さんに速度をもっと落とすように知らせてください」

「はい！」

カランカラン

カランカラン

ベルを鳴らす商人さん。前の馬車からも同じようにベルが鳴らされています。

「プシユケ、盗賊達の気絶まではこのまま行けば間に合いませんから、直接やつつけてきます。ムルムル、テラ、しっかり捕まらせて下さいね！ ほいっと！」

「頑張つてね！」

そして馬車から飛び降り、盗賊達に向けて一気に加速します。

ダン！

ベルを鳴らす馬車達を瞬く間に追い抜き、鞘付きのままの刀を取り出しているともう盗賊は目の前です。

手前にいる者達からお腹に一撃ずつ打ちこんで行く。

ドドド

「チツ！ なんだよこのガキは！ いきなり裸になったかとガアツ」

「くそ！ 捕まえろ！ チツ！ 早すグオツ」

喋らせるつもりありません！ 後半分！

突きを入れられ前のめりに倒れてくる盗賊の横を半身だけ躲し、後ろにいた奴にも一撃。

手前の奴で死角になったところからの一撃は躲しにくいからこれも綺麗に決まりました。

ドサツ。今度は倒れた奴の背中を足場に、盗賊達のちようど真ん中辺りに飛び込みました。

「うおっ！ このガキ飛び込んできやがった！ 剣は抜いてねえ！ 一斉に潰しちまえ！」

「おらあ！ ゲフォツ」

「何なんだこいつ！ 捕まえられねえぞ！ そりや！ ブフォツ」

一人ひとりですが確実に倒していきます。

四方から一気にきても転移で囲いから抜け別の奴の前に。

「はっ！ シッ！」

目の前の背の高い二人は覆い被さるようにして襲ってきました。挟み込むようにして腕を広げ僕を捕まえようとしていましたが、目の前にあるモジャモジャが目についてしまつて思わずつついてしまいました。

「ほぎゃん！」「はぎゅ！」

「あー！ ごめんなさい、シッ！ この技は封印していたのですが、はっ！ 目の前にあつたので、ほいっと！ 思わずつついてしまいました！ よっ！」

二人は他の方とは違い泡を吹いて倒れてしまいましたが、その後は順調に倒しきり、馬車が本当にゆつくりと近付つき、こっちの様子はしっかり見えているはず。はあ、被害を出す事無く全員を倒しきましたね。

「ライ、パンツは履かせておきなさい。どうせお屋敷に連れていくんでしょ？ メイドさん達もいるんだから気を遣いなさいよね、ほら冒険者達の中にも女性がいるんだから早くしなさい！」

「あつ、そうだったよね。忘れていました。では、ほいっと！」

うんうん、前にもやりましたから、上手く履かせることが出来ました。

そして馬車が到着し、ゆっくりと倒れている盗賊達の手前で停車すると、出発前に門前でちよつとだけ揉めていた商人さんとの間に入り、話をしてくれたお姉さん冒険者達が、一番前の馬車に乗っていたように声をかけてきてくれました。

「はああ、ライ君見ていたけど本当に強いね、君くらいの歳でここまで戦えるなんて私、自信無くしちゃうわ、くふふ」

「おいおい、俺達の方も残しておいてくれよ。あははは！ しっかし盗賊はなんでみんな裸なんだ？」

御者台にお姉さんと一緒に乗ってる方はあの時も一緒にいた人なので、同じパーティーなのでしようね。おつと返事をしないとすね。

「この盗賊達は、武器や色んな魔道具を持っていましたからそのままだと倒すのに時間が掛かりそうでしたからね、先に収納してあげました」

「あんなに遠距離で収納を使えるなんて聞いたこともないぞ？」

「それに装備品は取れなかったわよね？」

え？ 普通に取れますよね？ もしかしたらと言うかお姉さん達が見たこと無いだけなのでしようね。

「ふむ、数えたところ五十人といったところですね。何人かと後は首を落として行くしかないですか」

「え？ 殺しちゃうのですか？ 犯罪奴隷にすれば開拓などに使えますよね？」

「いや、この人数を馬車に乗せられないだろう、馬車一台に数人が精一杯だろうね」

「ああ！ そう言う事ですね、それなら心配ありません。転移の魔法が使えますからすぐですよ」

集まってきたいてそれを聞いた皆さんは『え？』つて顔で僕を見ってきました。

そして一人の商人さんが『そんなに一度に？』と。僕は馬車ごとでも大丈夫と言うと、『では街まで行けるんですか？』となり、街に転移することになりました。

パツ

「はい到着です」

「ほおー！ これはスゴい！ 街のまん前！ いやはやこんな経験はもう一生味わえないでしょうね。ライ君ありがとうございます」

「いえいえ。では僕はこの盗賊達を連れて行ってから戻ってきますね」

「はい。では冒険者ギルドでお待ちしておきますね」

「お願いします。では、転移！」

盗賊ギルドの五十人をカヤツツに引き渡し、街に引き返しました。

ちゃんと門前に戻り、入門をした僕達は、そのまま冒険者ギルドへ向かい商人さんと

合流。

そこで依頼完了報告をして、ついに！

「ライ、テラ、プシユケ、リントの四名はふむ、盗賊も倒しているわけだ、ランクアップで問題ない新しいギルドカードになるぞ」

やりました！ ついにと言うか、僕とテラは元々上がっているはずでしたが、海に行くため冒険者ギルドによらず出発したので上がっていないだけでしたが、今回みんな揃ってランクアップができて良かったです。

さあ新しい銀色のギルドカードになりますよー！

そしてついにその時が来たようですが

■■■■。

第84話 ヒュドラの討伐

「あのギルドマスター、これを見ていただきたいのですが」

あれ？ 何かまだランクアップには違う決まりがあるのでしょうか？

テラはムルムルをむにむにしていますが、プシケとリントは少し困惑した顔で心配そうです。

「何か不具合でもあるのか？ どれだ？」

「ここです、数日前に」

「ん、はっ？ いや待って、だが名前は合っているがこれは 本部に確認してみる。もし本当ならCランクなんて」

う、んやっぱりまだ何か足りなかったようです。地道に上げていくしかないという事ですね。

カウンターに顎を乗せたまま僕達は少し嬉しかった気持ち下がっていくのを体験してしまいました。

「何だと！ サブマス、これは本部からの定期報告だな？」

「はい、そうですが、先ほど届きましたのでギルドマスターの机にも同じ物を流しました

背負子を背負い、プシユケが乗ってリントを抱えます。ムルムルもテラを落とさないように体を伸ばしテラの体を固定し、僕にピタリと引っ付きました。

「じゃあ行きますよ！ 転」

「おい待て！ ヒュドラは——」

「——移！」

パツ

門の外にまずは転移して、ラピリンス王国方面の気配を探ります。

広げて行くと、いきました！ 近くには誰もいませんし、魔物もどんどん離れて行つて
るようです。

「よし見つけましたよ、転移！」

パツ

たぶん街まで馬車で止まらず走って半日ほどの場所にヒュドラはいました。

直径二十メートルを超える太さの胴体から九本の首、一本一本が、直径二メートルはある首が伸びているヒュドラです。

その大きな胴体をくねらせ街の方へ向かっています。移動速度は速くはありませんから少し安心しました。早速ぐるぐるを始めたのですが、流石に魔力は膨大です。

「あつ！ 防具を聞きに行つてません！ んー仕方ありませんね、このまま足止めをし

ますよ！ 後ろから攻撃すれば街の方へは行かずに僕達の方へ来てくれるはず！ 転移！」

パッ

ヒュドラの真後ろに転移した時テラが助言をしてくれました。

「^{神眼}んんー！ 真ん中の首は不死身よ！ 他の首を全部落とせばそれも無くなるはず！

後、火と毒を吐くわよ！ 気をつけて頑張りなさいみんな！」

「はい！」

「カッターで行くよみんな！ ウインドカッター！」

「行きますよ！ ウインドカッター」

「スパッとやるにや！ ウインドカッターにや！」

シユンシユンシユンと約五十センチ幅のウインドカッターが飛び、各々別の首それぞれに飛んで行き、ヒュドラの首に吸い込まれ、痛みに首をひねるヒュドラから、紫色の血が吹き出しました。

「聞いてるわよ！ その調子で！ ってそうだったわ！ 再生があつのだわ！ もう！

再生しちゃってるじゃない！」

「うわっ、本当です！ でも再生に魔力が使われてますから減るのは同じです！ どんどん撃ってどんどん再生させましょう！」

ヒュドラは蛇の体をうねうねとくねらせ、再生しながら僕達の方へ向き直りました。

「よし！ 次は横へ転移！」

パッ

「撃て！ ウインドカッター！」

シユンシユンシユン

「転移！」

パッ

ヒュドラに火や毒を吐かせないように、数撃ずつ。そしてこつちを向いたら後ろへ、転移。流石に何度か繰り返すと後ろに行くとは分かったのか、攻撃を受けると首を半分は後ろ向きで構えるようになりました。

「よし！ 次は右回りにきり変えますよ！ 転移！」

今度は横へ同じ方向に回り始め、二周したら今度は左回り。ヒュドラに予測させないように、たまにまた後ろへと、目標を定めさせないように転移でほんろう翻弄します。

魔力がどんどん減り、もう半分に切りました。

「残り半分だよ！ そうだ！ 二人はそのままいまままで通りに首を狙ってね！ 僕は同時に目を狙うよ！ いくよ！ ウインドカッター！ ウインドカッター！ ウインドカッター！」

「はい！ このままですね！ ウインドカッター！」

「分かったにや！ ウインドカッターにや！」

作戦が上手くハマったようで、目が見えなくなつて首は、僕達が見えないようで、再生が終わるまでキョロキョロするだけで避けることもしなくなりました。

ですが。

『キシヤアアア』

ゴオオオオオ

見えない代わりに、あてずっぽうで火を吐き出しました。

「キヤー！」

「うにやー！」

「大丈夫です！ 絶対避けて見せますから！ そうだ、草原の方におびきだしましょう！ 続けますよ！ ウインドカッター！ ウインドニードル！」

そして戦い始めてから一時間ほど過ぎた頃、急にヒュドラは力無くその巨体を少しずつ移動していた草原に、ズズンと倒れ、最後まで鎌首を僕達に向けていた真ん中の首も、地面に横たえ、動かなくなりました。

「さあ急ぐのよ！ ヒュドラぐらいになると魔力の回復も早いから！」

「後は任せて！ ぐるぐるはやり続けておくから！ 端から首を落としていくよ！ アルティメット・ウインドカッター！」

壁に穴を空けた竜巻ではなく、大きな幅三メートルウインドカツターを使い、直径二メートルほどの首を根元から切り離していきました。左右四本ずつ、八本の首を切り落とし、最後の九本目を切り落としたところですが、まだ収納できないため、胴体から十メートルほど離れたところに転移させ、確実に死ぬまで待つことに。

焚き火のよういをして火を起こし、お茶を飲みながら待っているのですが、日が暮れだしてもまだ生きているようで収納ができません。

「まだまだね、明日の朝までにはかからないと思うけど、今夜はここでお泊まりね」

「そっか、じゃあテントを張って準備をしよう」

「その後夕ごはんも済ませ、みんなには寝てもらうためテントに入ろうとしたのですが

「ライ、どうしたの？ ゴプリンでも来た？」

「ん、人みたいです、街の方から沢山の人が向かってきてますね。でももうヒュドラも動かなくなりましたし、収納できるまでぐるぐるしておきますから、テラもみんなと寝てて良いですよ」

「ん、そのようね、向かってきてるのは冒険者達ね、五十人ほどだけど、まあもうライに任せておけば大丈夫だし私達は寝ちゃうわね、テントに連れて行ってくれる？」

「うん。プシユケもリントもおやすみなさい」

「おやすみくお腹がいっぱい、もうねむねむですよ、ふああ」

「リントはいつでも寝れるから寝ちやうにや、また明日にや」

そう言うと二人は先にテントへ。僕も方からムルムルとテラを手に移し、テントへ。

「じゃあおやすみテラ。ちゆ」

「なっ！ * 》》RSSまた！」

そしてそつと、テントに入り、ムルムルの座布団ベッドに下ろし、僕はテントを出て寝ずの番のため焚き火のところにに向かいました。

「くふふふ。テラったら照れてましたね♪」

それからしばらくして、遠くに松明の火の光が見えてきました。

第85話 話が通じないです

遠くの山が白み始めた頃、冒険者達の集団が馬車を連ねてやって来たようです。

ヒュドラはつい先程やつと死にましたので収納し、跡形もありませんが草原は、無惨にもえぐれ、そこかしこに紫色だったヒュドラの血が、どす黒いドロドロ口になって広がっていました。

街道から二百メートルほど入った場所までヒュドラが傷つき、血を流しながら通ったところもドロドロが繋がっていますし、本当に迷惑な魔物だったと思います。

「おいガキ！ ヒュドラはどっちへ行つた！ 奴は俺が倒してやるから隠すんじゃないぞぞ！ どわだ！ なんだよこのヌルヌルは！」

街道に止まった馬車から降りてきた方の一人が先行し、短剣二本を抜いたままこちらに向かつて来ているのですが、僕の方をそんな事を言いながらまっすぐ来ちゃうものです。すから足元を見てませんし、ヒュドラの血で滑り、後ちよつとで転げちゃうところでした。

「くそ汚ねえ場所だなかったく！ おいガキ！ 聞いてんのか！」

「えつとヒュドラは倒しましたよ？」

「はあ？ 嘘つくんじやねえ！ どっちへ行つたかさつさと言わねえか！ ヒュドラはこの俺が仕留めるんだからよ！」

「あの、ですから倒しちゃいましたよ？」

えっと、お話が通じないのかな？ んんどうしましょうか。

そうこうしている内に他の方達は、話の通じない目の前の人とは違い、ドロドロの中は通らず、遠回りをしてこちらに到着しました。

「おい、ヒュドラの行方は分かったのか？」

「んあ！ ガキが倒しただの嘘をつくもんでまだ分かんねえよ！ てめえらも俺の獲物を横取りすんじやねえぞ！」

「んん、ですからヒュドラは倒しましたよ。そう二度も三度も行つてるのですが、この方が分かつてくれなくて」

後から来た一番最年長だと思つて言う方にそう言つてみてのですが。

「ふむ。確かにバカ。『鉄使い』の言う通りだな。少年、ヒュドラは子供に倒せる魔物じやない嘘は行かんぞ、傷付ける事が出来ようが、倒すことなど。この『鉄使い』のよいうなSランクに今もつとも近いと言われる者がいなければ無理だ」

バカつて言つてましたけど、強いのは強いのですね。確かにお馬鹿な言動ですが持っている短剣は良さそうな剣ですしね。

ん、でも困りましたね。どうしましょうか。

(ライ、人が寝てるのに喧しいわよ、そんなのヒュドラの胴体でも見せればおとなしくなるわよまったく)

あ、そうだよね♪ ありがとテラ。大好きだよ♪

(にやー！ にやにをいちえりゆによよ！ はにやくしにやしやい！)

くふふふ。真つ赤になって慌てるテラが目には浮かんできます。

きつと、ムルムルが引つ張られてますね。

「では証拠を出しましょうか？」

「だあーかあーらあー！ 早く行き先を吐け！ ガキの遊びに付き合ってる暇はねえんだよ！ ヒュドラのクビ一つ持ち帰りやあー俺様もSランク間違い無しだ！」

駄目ですね、話になりません。勝手に出しちゃいましょう♪

「じゃあ出しますよ♪ ほいっと！」

ズン、と地面を揺るがすと僕の後ろ、テントのさらに後ろに首無しのヒュドラを出てあげました。

「ね。頑張つてちゃんと倒したのですからどこにも行つてませんよヒュドラは」

出したヒュドラ。見た冒険者達は皆さんは太さが直径二十メートルを超える巨体を見上げて動きません。

「し、少年くん、君の他にSランクの方がいらつしやるんだね。あは、あはは。やだなあー。それならそうと言つていただければ、疑う事も無かつたのになあー」

さつきの最年長のおじさんは、まだそんな事を。

「あのですね、Sランクの人なんかいませんよ。いるのは僕とテラ、プシユケ、リント、ムルムルだけです。パーティーぐるぐるで倒したんです。分かつてくれましたか？」

「ふ、ふ、ふざけてんじやねえぞ！ ガキの所属するSランクのパーティーなんざ聞いた事もねえ！ それにどこから出しやがった！」

「もう！ 僕達はSランクパーティーじゃありませんし！ 見て下さい！ Dランクです！ ムルムルは従魔でそれ以外は全員Dランク！ ヒュドラは僕達が倒して僕の収納に入れてあつてのです！ もう！ せっかく出したのに！ もうしまえますね、収納！ じゃあ僕は寝ずの番だったので寝ますから静かにしてくださいね！」

そう言つてヒュドラをしまい、テントに潜り込んだところ、みんな心配そうな顔で起きていました。

「ごめんね喧しくして。起きてるならもう街に帰ろうか」

「そうね。聞いていて、見なくても話にならない連中つてのが分かつたわ」

「なんなんでしょうね、まったく。私やリントもあれだけ頑張つたのにねー」

「本当にや、見た目で判断するにやんてダメダメにやよ」

じゃあそうと決まればプシケは寝巻きから普段着に着替え、僕は布団などを収納して外に出ました。

そして出てきた僕達をまだその場に残っていた人たちが見ていましたが、テントを収納しました。

まあ、ここまでヒュドラを倒すために来たのですし、一応挨拶だけでもしておきましょうかね。

「では僕達は帰りますので、せっかく来ていただいたみたいですがヒュドラは僕達が倒しました。そうだ、皆さんも街に帰られますよね。ついですが、一緒に帰りますか？」

「おいガキ、本当にお前達だけなのか、従魔のスライムは良いとして、ガキが二人に猫とそれにそのちびっこのだけ？」

「少年、『鉄使』のシユベルトの言う通りだ、ふざけるのもいい加減にきなさい！ 君達だけで倒せるような魔物ではない！」

「そうだぞ！ さつき見た大きさのヒュドラなら俺達でも倒せない！ ふざけんな！」

「そうだ！」「嘘つくくんじゃねえ！」「さつきとヒュドラを置いてママのおっぱいでも吸つてろ！」「良いこと言うじゃないか」

「「そうだ置いて行け！」」

みんなが口々にそんな事を
すると耳たぶを掴んで立ち上がっていたテラがぶるぶる震えだし、ついに声を出しました。

「失礼な奴等ね！ 私はテラ！ そしてムルムルは私の騎獣よ！」

「私もガキじゃ、小さいけどもう十歳です！ 名前もプシケって名前があります！」

魔法だって使えるんですよ！」

「リントもリントにゃ！ 猫みたいにゃけど、ケット・シーにゃ！ 大魔法使いにゃよ！」

僕ももう我慢の限界が来たので、ぐるぐるをし始めます。もちろん魔道具は取ってしまいう事にしました。

「態々来てくれたみたいでしたので、街までは送ろうかと思いましたがやめておきます。それから僕達から獲物を奪う盗賊と見なします。あなた達は僕が捕まえて差し上げます。収納！」

パンツだけ残して街道にあつた馬車も一度に収納。

この方達は本当に魔力が少ないですね、海賊と同じ程度しかありません。

そうですね、鉄使いくらいでしょうかそこそこ魔力があるのは。

「なんだよこれは！ 俺の装備は！」「裸！」「武器どころか何も無いぞ」「おい！ 馬車

もねえぞー！」

「では盗賊の皆さん。次に起きた時は犯罪奴隸ですからおやすみなさい」

そこからすぐにパタパタとその場に崩れ落ちていく盗賊達。それを啞然として見つめる鋏使い。

「おい、これはお前がやったのか、手も足も使わず倒してしまえるのか」

「ええ。魔力欠乏での気絶ですね。ヒュドラもそうやって倒しました。何度も僕達が倒したと言っていましたよ」

「そうね。話も聞かず、ヒュドラを見せても駄目。最後は私達から手柄を取るなんて言い出すんだもん笑っちゃうわね」

「そんな俺のSランクは」

「盗賊ですから無理に決まっていますね。じゃあ鋏使いのシユベルトさん、おやすみなさい」

「え？ そ、ん、な」

ドサツ

そして起きているものはいなくなりました。

第86話 見学会

「どうするの？ またサーバル男爵領に連れてく？」

「ん、一応冒険者ギルドに思つてますよ。やつぱり話は通さないとですよ。仮にもSランク間近つて言つてましたから、奴隷になつてもその道でギルドが買い取つて働かせるかも知れませんか。だとすると一番大きな馬車に乗せて行きましようか。プシユケは馬さんを馬車に繋いでくれる？」

「はい任せて下さい」

僕達は街道に戻つて、収納した馬車の中で一番大きな屋根無し馬車を取り出し、荷台に乗つていた物を収納して空にしました。

「重ねてしまつて潰してしまわないようにしなきゃね、ほいっと！」

「駄目にや、乗りきらにやいにやよ」

確かに半分以上は乗りそうですが、一台では無理のようですね。

「じゃあもう一台出しちゃおう。ほいっと！」

同じような屋根無し馬車を出し積み込んでいきます。全員で五十人、最後の三人ほどは乗りそうもなかったのですが、仕方がないので、皆さんの上に乗せておきました。

「ん、パンツ履かせれば良いとおもってない？ 言いたい事もあるけどまあ良いわさつさと帰りましょう」

そして、残りの馬さん達も馬車の後ろに繋いで一緒に、転移！

パツ

街から少し離れたところに転移。今の時間は門から出る人が多いはずなので、もしかして人のいるところに出ちゃうと駄目ですからね。

そして街の門前に到着して入門の列に並びましたが、朝ですから出ていく方達が大半で、すぐに僕達の番に回ってきました。

後ろも同じですと、プシユケが手綱を持つ馬車の事も言いながらギルドカードを見せます。

「ふむ。Dランク冒険者ライ君か、お疲れさま。荷台の者達はなんだ？ 裸のようだが」

「この方達は僕達が倒した獲物を奪おうとした盗賊ですよ。冒険者ギルドのカードを持つていましたからギルドに寄つてから後は犯罪奴隷になると思いますよ」

「何！ けしからん奴らだな！ ふむ。ライ君お手柄だな」

「はい。悪者はやつつけないとですよね♪」

「そうだ。よし通つて良いぞ、後ろの馬車もギルドカードを見せてくれるか」

ゆつくり前進しながらプシユケの馬車が動くのを待ちます。まあすぐに許可が出て

動き出したので門前広場から大通りに入つてすぐの冒険者ギルドへ馬車を横付けしました。

門を抜け、ギルドに到着するまでのほんの少しの時間でしたが、僕達の馬車を行き交う人達が足を止め、指を指し、こそこそと隣の人と何かを話しているようでした。

その時テラはため息をつく横顔が可愛くて、またちゆつてしちやいました。

なので今はムルムルを引つ張り中です。くふふ。

馬車を降り、ギルドに入ると受付のお姉さんが僕達に気付き、カウンターの奥にいたギルドマスターを呼んでいますね。

まっすぐカウンターに向かうのですが、まだ沢山の方が依頼の登録のため並んでいます。

お姉さんに呼ばれたギルドマスターはお姉さんと一緒にカウンターから出てきて僕達の方にやって来ました。

「無事だったか。心配をかけさせるな、あの魔法は転移だな」

「はい」

凄く安心した顔のギルドマスターとお姉さん、悪いことをしちやいましたね。

「でも街道を進んでたヒュドラは倒しましたし、もう大丈夫ですよ」

「は？？」

「それから倒したヒュドラを取られそうになったので、盗賊ですから五十人を捕まえてきました。外の馬車に乗せてありますから」

「ヒュドラを倒した？ それを奪おうとしたやうが五十人いてそれを捕まえたと？」

「ぎ、ギルドマスター、表に見える馬車にバカ『鋏使い』のシュベルトが見えるのですが、裸ですが」

お姉さんもバカつて言うくらいですからそうなのでしょうね。

「そ、そのようだな。バカ『鋏使い』の奴ならそれくらいやつても自分は悪い事をしたとも分かってないだろう。だが、なあライ君。『鋏使い』や他の皆もヒュドラ討伐に昨晩向かったのだが、皆がヒュドラを奪おうとしたのかな？」

「はい。そうですよ。あつギルドカードをお渡ししますね。ほいっと！」

ギルドカードを五十人分をギルドマスターに渡しました。

ギルドマスターはそれを受け取り名前を一枚一枚確かめ、徐々に青ざめていきます。います。

「こいつも、全員か。この街のBランクは全滅だ」

「以外とBランク以上は少ないのですね。それで今回の強奪未遂でいなくなるのですから。」

「でも心配ありませんね、この後奴隷商に行きますから冒険者ギルドで購入してこれま

「で通り使えば良いんじゃないですか？」

「そうか。そうすればこちらから依頼を選び好みさせずに請けさせることができるのか。よし、その方法でしか無理のようだな」

「はい。今ここで購入して貰えれば冒険者ギルドとして奴隷商に連れていき奴隷化をすれば少し安くすみませよね。あつ、それから馬車もあの方達が乗ってきていた物がありますのでお売りしますよ」

「そうと決まれば行くか！」

「行くかじゃありません！ 待つて下さいギルドマスター！ ランクアップの話もですし、今回のヒュドラの事を忘れてますよ！ まずはヒュドラの事実確認からですよね！」

お姉さんがそうギルドマスターへ叫んだのを聞き、いままで静かに僕達の話聞いていた冒険者やギルドの職員さん達は、皆さんうんうんと首を縦にふり、僕達を見ていました。

「も、もちろん忘れてはいないさ。あは、あは、あははははは」

「あはは。僕は完全に忘れてました。そうですね、では門の外にしましょうか？ それとも門前の広場に首だけでも出しましょうか？」

その後、門の外に出て胴体と、首を九本出し、あつもちろんあの場にいた冒険者さん

達は急ぎの方以外は付いてきて見学しています。

そして街の人達まで出てきては、あまりの大きさに子供は泣いちやう子もいたくらいです。

なんだかんだお昼近くまでその見学会は続き、ギルドに戻った後ランクは暫定Cランクになりました。

本来ならSランクでもおかしくないのですが、言えないランクアップの規定があるので、冒険者ギルドの本部、ラビリンス王国のダンジョン街に行つて、一度審査するらしいです。

ちようど行く方向は同じですので問題ありません。

それからヒュドラですがこの街で首を一本だけ売ることには。革にして防具に、あんな紫の血を流すヒュドラですがお肉も美味しいそうで、高く買い取つて貰い、お金はギルドに預ける事にしました。

そして、夕方宿を取つてから防具を引き取りに行つたのですが

.....

第87話 鍛冶屋さんにて

『その革鎧は俺達にくれよ！』

『駄目だと言ってるだろう。これは装備する者に合わせて作ってある。だからお前達の体型には合わん。違う物を見繕ってやる』

鍛冶屋さんの入口からそんな声が聞こえてきました。

『そんなの知るか！ 俺様はそれが気に入ったんだ！ ちと小さいせえがなんとかなるだろう！ さもねえと——』

こつそり覗くと二人のぼつちやり体型した男の子、僕と同じくらいの年齢かな？ が顔を真っ赤にして、おじさんに詰め寄っているところでした。

「何度言われても駄目だ。いくら街の領主の子供だとは言え、そんな我が儘が通る筋は無い」

「よし良い度胸だ。父さんに言い付けてこの店を潰して貰う！ 覚悟しておけ！」

そうまくし立て、お店の床につばを吐き、こつちに向かってきました。

まあ、出入口はここしかなないので当たり前ですが、そのぼつちやり君達は僕を見て、突っかかってきました。

「なに見てやがる！ 俺様はこの街の領主の子供だぞ！ 跪け！ ん？ 中々可愛い女を連れてるな、よしその女は俺様付きの侍女にしてやる」

「なんですって！ プシユケは僕の大切な娘ですよ！ 確かこの領主は確か同じ男爵でしたね。でしたら父さんに迷惑がかかるかもしれません。落ち着け、ここは挨拶からです。」

「ごんには。初めまして、サーバル男爵家三男。ライリール・ドライ・サーバルと言います。こちらの領主と言え、ノルマーラー男爵様、我が家と同じ男爵家ですね」

「僕がそう言うのと、『サーバル男爵家だと、あそこには父さんが滅茶苦茶世話になってるって』『そうだよ兄ちゃん、剣聖様のだよ』とかぼそぼそ兄弟だったのですね、確かによく似てます。」

「それに、この領主様の長男次男さんは兄さん達と同じ学院にいますから、この子達は三男以降って事ですよね。」

「こ、これはサーバル男爵家の方だとは気付きませず暴言を。どうかお許し願いたく。ノルマーラー男爵家のロカ・クワトロ・ノルマーラーと言います」

「は、初めまして、ティミド・シンコ・ノルマーラーです」

「んと、四男、五男なのです。この領主様もうちと同じで三男の方も僕と同じ今年

に入つて家名を捨てていたはずですし、と言うことはこの二人は僕より歳下つて事になります。

「うん。では僕の大切なプシユケに謝つていただけますね」

「——ライ。私の事を大切なんて」

横でプシユケが息をのみ僕を見詰めています。今は目の前のロカです。

そのロカの顔が怒りに歪みましたが、直ぐに戻し、頭こそ下げませんが、渋々と言つた感じで。

「すまなかつた、先程の事は取り消す。では。ティミド行くぞー」

「待つてよ兄ちゃん！」

そう言うときつさと僕達の横を通りすぎ、出ていってしまいました。

ですが、通りすぎる際、『チツ』と舌打ちしながらでしたので、やはり口だけの謝罪だったようです。貴族絡みのテンプレはできればやめてほしいのですが、父さんに迷惑か
もだし。

「すまないな変な所を見せてしまった。ライ君は貴族の坊っちゃんだったか、喋り方が丁寧だからそうかもしれんとは思つていたがそれも剣聖の息子とは驚いた」

おつとまたまた僕の悪いクセですね。おじさんは椅子から立ち上がりそんな事を言つてきました。でも流石父さん。

「えへへ。父さんが有名だと僕も自分が褒められてるみたいで嬉しいです」

「ふはは。劍聖がライ君くらいの時はもつと滅茶苦茶だったが息子は良い子だ。ふははははは」

そう言うのと、僕の鎧と真新しい革の胸当てを奥の棚から手に取り、お店の真ん中にあるテーブルに乗せました。

「こちらはライ君のだな、古くなって傷んでいたところや縫い糸が切れた所などは交換して縫い直した。くくく。私の造った物だ、よく残っていたもんだ」

「えー！ 父さんが昔使ってた物だと言ってましたよ！ おじさんが造ったのですか！」

「ああ。もう二十年以上前だな、丁寧に手入れして使われていたのが分かる。鍛冶士としてはこれほど嬉しいことは無い」

おじさんの目は、本当に自分の子供ができたなら僕もあんな顔になるのかな。でも、テラと僕の子供だと、やっぱり小さいのかな？

(「！・・・(こ)りよも！」
子供！)

またテラがムルムルを。くふふ。聞いてたんだね♪ 絶対その子供は可愛いよ。もちろんテラもね。

(——！)

「よし装備して、違和感がないか確認してくれるか？」

「はいー！」

「よし次は嬢ちゃんのだな、こっちは簡単だ頭から被って、横で締め込むだけで良い。ゴプリン程度なら傷もつかん。それと、お腹を守る革の服も用意した」

僕のはお腹までくる鎧、ベストのような感じですが、プシユケの物は厚手の服と、胸当てです。大事なところをちゃんと守りながら一番大事な心臓を胸当てで守るのですね。

よし、僕も最後の留め具をはめて体を動かしてみます。

おお！ お屋敷から旅立った時より断然動きやすいですし、引つ掛かるところもありません。

「おじさん物凄くピツタリだし軽くも感じます。あつらえたみたいですよ♪」

「うむ。それは良かった、だが体は常に育つものだ、その都度手入れをしていけば、しばらくはそれで間に合うだろう」

「ありがとうございます」

「おじさん装備はこれで良いですか？」

プシユケも装備ができたようですね。

紺色に染めた革の鎧下と、茶色い胸当てがきちんと装備できてるみたいです。

「うむ。良いだろう簡単な補習用の革の歯切れと、糸と針をつけてやろう。代金は全部ギルに払わせるから心配するな」

「良いのですか？ ギルさん色々取られちゃったみたいですし」

「構わん。やつも貴族だそれくらいはなんとでもやるだろう。それに冒険者なんだ勝手に稼ぐだろう。くははは」

ん、そう言ってますが、そうですね！

「おじさんはヒュドラで装備を造れますよね？」

「ヒュドラか。うむ。造れるが今は革の在庫も、牙なんかも品薄で手に入らんぞ」

「ライ、私たちが倒したヒュドラでギルさんの装備を贈り物にするつもりなら大賛成です。このおじさんに造って貰おうよ」

プシケも同じ意見のようですね。

「おじさん。ヒュドラの皮を預けますからお願ひできますか？」

「ふむ。本当に持っているようだな。昼間のあの騒ぎの物か、あるなら造るぞ？ それはどこに持つてるんだ？」

「では今から解体に行きましょう」

僕は薄暗くなった店の外におじさんを引つ張り転移で町の外に飛びました。

「おお！これがギルの言ってた転移か！」

おじさんが驚いている内にさっさと解体してしまいましたよ。

まあ、出した途端おじさんは大きなヒユドラの首を見て一瞬だけ驚き止まっていたが。

「なんだこれはー！」

第88話 ラビリンス王国への道中

「ヒュドラの首か、牙も揃っておるな。それもこの切り口、ライ、これは真ん中の首なのか？」

おじさんはヒュドラの唇を持ち上げ、牙の状態を見たり、皮を撫でながら切り口まで行くとその事を言いました。

「はい、他の首より少し大きいので使うならこの首かなって」

「ふむ。不死の首は激戦の末持ち帰る事がたまにあるが、ここまでの美品は見た事も聞いた事もない。不死の首で造った鎧は多少の傷などは何もなかったかのごとく消え去ると言う。どこぞの国の国宝になっているレベルだぞ」

ほへえ。勝手に直つちやうなんて凄いですね。僕達の分も造って貰おうかな。

「ふむ。これはギルには勿体ない、王に献上するか？ 私でも叙爵して貰えるかもしれないけどだな、よしライ達の鎧はもう少し体が大きくなつた時に造つてやろう武器もだこのヒュドラの牙は鉄と混ぜて打てば良い物が出るぞ」

「おおー！ ではこの国を一周した後くらいですかね。楽しみにしておきます」

その後は、皮をある程度剥いだり大きな牙を抜いたり刃りが真つ暗になるまで作業

して終わりました。

もちろんお肉もお裾分けしておきました。

ヒュドラの解体中にテラは胡桃くるみの種のような物を拾い頭に乗せました。『これは美味しいわよ♪ 大きく沢山実るようになって貰わないと』と。沢山実ると良いね。

鍛冶屋に転移で戻りおじさんと別れて宿に戻りました。今晚の夕ごはんは食堂で食べる事に、もちろんヒュドラのお肉を提供してステーキにして貰いました。

そして、料理が届き、食べようとしたのですが。

「おい！ その給仕！ この宿はヒュドラの肉は出してないのか！ 昼間に話題になつたあのヒュドラのだ！」

「お客様、今出てる物で全てでございます。偶々たまたま手に入っただけですから」

「何！ どこで手に入れた！ ノルマーラー男爵様がご所望なのだ、ただちにその者を連れてこい！」

フォークとナイフで一口大に切り、口に運びながらその様子を眺めてみると、助けを求めるような目で僕を見てくるのですが、ヒュドラのステーキ。物凄く美味しいです！

「ライ、美味しいのは分かったから助けて上げたら？」

「そうですよ。まだまだあるのですから少しくらいあげても大丈夫じゃないかな？」

「リントはあげたくないにや。あげるにやらリントが食べるにや」

二対二の引き分けですがムルムルが突起を出してヒユドラのステーキを差し、入ってきたたぶん執事さんを差しました。

二対三ですか、仕方ありませんね。

「あの、少しならお分けできますよ。」

執事さんは給仕さんの横で座っている僕達を見てます。上から下までじろじろですね、あはは。

「ぬ？ ふむ、少年冒険者か？ よし全て差し出すのだ」

「全部は嫌ですよ。ノルマーラー男爵様がお食べになる分くらいならと言う意味です」

「貴様言う事を聞きさっさと出さぬか！ ノルマーラー男爵様が是非食したともうしておるのだぞ！ 逆らうなら——」

僕は席を立ち、言葉を遮るように自己紹介です。

「初めまして、サーバル男爵家のライリール・ドライ・サーバルと申します。ノルマーラー男爵様は父さんとも仲が良いと聞きましたので、男爵様が食べる分だけをお分けしても良いですよ」

「なっ！ サササ、サーバル男爵家ののの！ こ、これは大変失礼をいたしましたあ！
どうか、どうかお許し下さいませ！」

先程まで立って見下していましたが、今は跪き、頭を下げています。

「はい。大丈夫ですよ。家名は持ったままですが、今は冒険者をしていますので。それより一人分をお渡ししますが入れ物か何かありますか？」

「はっ！ 馬車に魔法の革袋がございます。すぐにお待ちいたしますので少々お待ち下さいませ」

そう言うのと物凄い早さで宿を出て、あつという間に戻ってきました。

「ここに入れて持ち帰ります」

「じゃあ切り分けたこの塊を一つ、ノルマーラー男爵様に」

ちようど分厚いステーキくらいの塊に沢山切りましたからその内の一つを革袋に入れました。

「ありがとうございます。この事は主のノルマーラー男爵様にお伝えしておきます。では、お待ちになっておりますので失礼を致します」

「よろしくお伝え下さいませ」

「はっ！」

僕が席に座ると立ち上がり、宿を出ていきました。

「よし食べよう♪」

「あ、あの、ライリール様、この度は助けていただきありがとうございます」
給仕をしていたこの宿の奥さんです。

「いえいえ、僕が出してしまったこの肉で起きた事です。逆に申し訳ありませんでした」

「そうにや。気にする事ないにやよ」

それはもう沢山ペコペコ頭を下げ、他のお客さんにも『皆さんお食事中申し訳ありませんでした』と、テーブルごとに周り頭を下げ、厨房に戻っていききました。

僕達はステーキを食べ終え部屋に戻り明日の出発のため早めに寝ることにしました。

翌朝。

早目に宿を出て、ヒュドラを倒した場所まで転移で飛び、ラビリンス王国へと向かいます。

しばらく歩くと前からは騎馬と馬車の集団が現れました。

馬車は豪奢ごうしゃで、貴族の方、それも高位方の集団だと分かりましたので僕達は街道の端により、跪ひざまき頭を垂れておきます。

そして、僕達の前に差し掛かる前に三騎の兵士さんが早駆けで僕達のもとへやって来て、話しかけてきました。

「少年達は冒険者のようだな」

「はい。その通りです」

「この街道に出たヒュドラは見たか？」

「はい。先日この先で見ました。ですが既にヒュドラはもういませんので道中はご安心ください」

「ふむ。ノルマーラー男爵の町から来たようだな、ならばヒュドラのお陰で魔物が居なくなつた隙に進むとしよう。少年、情報をありがとう。君達の旅も安全であるよう祈つておく」

「はい、騎士様達もご安全に」

「うむ、ではな」

お話をしている内に、馬車の集団も近付き前衛の騎馬が僕達の前を通りすぎていきま

す。そして馬車が通りすぎ、後衛の騎馬が通りすぎた後、僕達はやっと頭をあげ立ち上がりました。

「なんにや？ さっきの人がまた来るにやよ？」

「そうみたいだね？ 何かききそびれたのかな？」

「少年！ バラマンディ侯爵様から君達にこれを」

「バラマンディ侯爵様だったのですか！ 一度お見かけしたことがあります。申し遅れました、サーバル男爵家、ライリール・ドライ・サーバルです。我が家においてになった時お菓子をいただいたのを思い出します」

「なんと！ 劍聖様の、どおりで受け答えが教育されてると思っていたのです。では今回もお菓子ですがお受け取り下さい」

可愛いく包まれたお菓子入りの籠を受け取り、代わりにとヒュドラのお肉を提供して起きました。

バラマンデイ侯爵様は食べるのも作るのも大好きでしたからね♪

そしてその場は別れ、別々の方向に進み出したのですが、バラマンデイ侯爵様達が来た方向から何やらまた集団が来そうです。

第89話 ラピリンス王国に出発ですよ

「また集団が来ますね？ でも今度は兵士さん達だけみたい？ でも鎧はお揃いじゃないから何だろう、もしかしてヒュドラ退治かな？」

「でもそれならおかしいわよ。この先には国境砦があるだけでしょ？」

「うん。バラマンデイ侯爵様も国境砦を慰問に行つた帰りだと僕は思っていたんだけど、分かれ道があつてその先に街でもあるなら分かるんだけど、そんなのなかった気がしますし」

国境砦は川を挟んでいます。川の向こうはラピリンス王国。もしかして。

「テラ、神眼で鑑定してくれないかな？ もしかしたらラピリンス王国から来たのかも知れません」

「え？ 何で神眼つて知ってるの！ 内緒にしてるのに！」

「テラちゃん内緒にしたの？ この前『神眼！』つて言つてたじゃない」

「言つてたにやよ。ライの家で叫んでたにや」

内緒にしてたんだ、そっか普段は『んんん』つて言つてましたね、悪いこと言っちゃつたかな。

「ま、まあ良いわ。この先の集団ね、神眼んん〜！ 帝国の兵士だわ、盗賊に偽装中ね全部で七十六人よ、もしかしたらさっきの侯爵が狙いかもしれないわね」

嫌われないかな。

「だ、大丈夫よ、そんな事で嫌ったりしないから！ でもこれからも他の人には内緒なんだからね！ みんなもお願いな！」

「良かったあ。ありがとうテラ、大好き！ ちゅ」

「———！ にゃあ——！」

「ライは本当にテラの事が大好きね、私も大好きよ♪ ちゅ。ライにもちゅ。リントちゃんもムルムルちゃんも、ちゅちゅ♪」

「仕方にやいにゃあ。ちゅくにゃ」

みんなでちゅってした後、ぐるぐるをやり始め、魔力回復の魔道具が沢山ある気配を感じましたのでそれをこっそり収納。間違っていたら後で返さないといけません、今はとりあえず預かっておきましょう。

後、百メートルほどでぶつかりますが気絶するものが出始めるのはちようどぶつかる頃ですかね。

そして。

「おい貴様。この道を貴族の馬車は通ったか？」

「隊ち——頭、そんなの痛め付けければすぐに吐きますぜ」

隊長つて言いかけたよね。

（ラ、ライ、あのね、さっき言おうとしてただけど、ちゆつてするのはね、こ、恋人とか、ふ、夫婦でするものなの）

だったら良いよね♪ テラは僕のお嫁さんになってくれるんでしょ？ だったら問題ないですね。あつ倒れましたよ。

「おい！ どうしたんだ何倒れて」

「なっ！ お前もか！ おい気付けを持ってきて」

「おじさん、何だか人が倒れてるようですが？」

よし、残りの人は一度ギリギリで止めて、話を聞いてみましょう。

「なっ！ 行軍が早すぎたか！ あの辺り入隊間もない——何でもない！ 何があったか調べろ！」

「朝に何か悪い物でも食べてしまったのでしょうか？」

隊長さんの横にいたおじさんが、倒れた者の方に駆けて行きました。

「そんな事は貴様には関係無い。貴族が通ったか通ってないかだけを喋れ！」

「通りましたね」

「くくくつ。ならば奴らは卵を追ったヒュドラの向かう街と我々との間にいるな。よ

し、貴様は持つている物を全て我々に差し出しどこえなりとも去れ！」
 「ん〜。僕達の物を奪うと言うことですか？」

ぐるぐる再開と、収納です！

「命があるだけありがたいと思え！ さっさと——何！ これは」

ドサツ

「盗賊で間違いないようですし、もう良いですね、ぐるぐる再開！ 全部収納！ 盗賊は捕まえるものなのです。サーバル男爵領の開拓を頑張ってくださいね♪」

ドサツドサツ、次々と気絶するパンツだけのおじさん達、最後の人も倒れましたからカヤツツにお願いしに行きましようか。

「ライ、女の人がいるから、その人は上着も着せてあげて、流石に可哀想よ」

「ん？ テラがそう言うならみんなに着せちゃおうか？」

「雌だけで良いにやよ。雄は放っておけば良いにや」

とりあえず女の人には上着を着せて、お屋敷に転移しました。

「ライ坊つちゃんまたですか？ ライ坊つちゃんを通った道からは盗賊がいなくなりま
すね、くふふ」

「本当はいない方が良いんだから。それにこの帝国の人達は、バラマンデイ侯爵様を
狙ってたみたいだから父さんとも相談してね」

「ほう。今度は帝国のですか、分かりました、詰問もその辺りを入れておきますね」

「じゃあ冒険の旅に戻りますね。転移！」

パツ

「ふむ。帝国がバラマンデイ侯爵様をねえ、確か侯爵様は近隣国の輸出入の担当でしたか、つと私が悩むべき事ではありません私は私の仕事をしなくては。よし、奴隷の魔道具を嵌めとりあえず起きるまで放置で良い！ 作業にかかれ！」

「はっ！」

街道に戻った僕達は、その日の夕方には国境の砦前にある小さな町に到着しました。

明日はついにラピリンス王国です。早速明日の手続きをさせていただきます。

朝一番に橋を渡れるようにしておかないと、物凄く沢山の方が行き来しますので、手続きの順番待ちが朝からだとお昼を回るかもしれないと言いますからね。

「はい、大丈夫ですね、明日の朝も夜明けと共に門が開きますので。早めに並ぶ事をおすすめします」

「はい。分かりました、ありがとうございます」

通行許可証をもらい、橋を見ると門はまだ開いています。ですが向こうには宿が少ないようで、既に満室との連絡があったそうなので今夜は渡りません。

門前の手続き所を離れ宿を探しますが、すぐに見つかりません。何てつたつて宿だらけで、呼び込みが沢山いますからね。

「中々良い宿みたいだね、門から目と鼻の先ですし」

「神眼んんん。そうね、悪い称号持ちはこの宿にはいないわね」

テラが小さな声で僕の耳元でささやいてくれました。

ありがとうテラ。でも一応気配は探っておくね。

（そうね、あの時みたいになることもあるだろうから用心はしておくべきね）

そして夜も更け、国境の小さな町が眠りにつきました。

翌朝、心配したような事は起こらず静かな夜でした。

まだ外は暗いのですが、階下では動き出す気配がしていますので僕達も着替えを済ませて朝ごはんをいただききました。

朝ごはんを済ませ外に出るとパラパラと門に向かう人達がいまますので僕達ももうすぐ開く門に向かいました。

そして日が登り始め、ギギギギと音を立て門が開き橋を渡るため動き出しました。

さあ、ラビリンス王国に乗り込みましょう。

第90話 入国早々良いの見つけました

二百メートルほど向こうに川があつて、そこを目指して歩いていきます。

「ねえライ、何でこんなに端まで遠いの？ もしかして昔はここも川だった？」

「たぶん違ふよ、国境だからかな。ここは川があつて分かりやすい国境だけれど、陸続きの所はこうして間に緩衝地帯を作つておくのが普通なんだ。後は、国境が一つの街になつていて、その中ではお互い戦いをしないと国と国とで約束されてるんだよ」

「ふくん。あつ、川つて思つたより大きくないね？ 向こうまで十メートルくらい？」

橋までたどり着いた時僕もそう思いました。

「すぐにや、あつという間にや」

「そうだね。でもお魚が結構沢山泳いでいますよ！ ほら、キラキラ光ってます」

よく見ると、川上や川下で、魚を取つてる人達がいました。

橋を渡りきり、少し先に見える門に向けて人の流れに乗つていきますと門近くに屋台が出て、冒険者風の方達や、歩きの商人風の方達が立ち寄り何か片手に食べているみたいです。

屋台を横目に門をくぐるのですが、昨日の通行証を見せると簡単に通り抜ける事がで

きちやいました。

そして二十メートルほどのトンネルを抜けると――。

「ラビリンス王国に到着！ 北に向かうんだからダンジョンで有名な場所を通るし少し寄っていいようよ。リント、少し寄り道だけど良いかな？」

「良いにや。別にしばらくみんなどいても問題無いにやよ。ダンジョンにやらリントが大暴れしてやるにや！ 魔物なんか余裕でやっつけるにや！」

良かった、みんなで少しでも長くいられると楽しいしね♪

そのまま歩き続け、ラビリンス王国側の小さい国境の街を出て、ダンジョンの街方面に進みます。

お昼になると人の波も無くなり、僕達が進む方角はほとんど馬車だったので、今は周りに魔物くらいしかいません。

「ねえライ。どうして周りの魔物はやっつけないの？」

「ん？ この子達は襲ってくる気配じゃないからね♪ なんだか歩いて通る人が珍しいのかな？」

「そうなの？ 私は魔物がいる事も分かりませんでしたよ」

「毛玉達にやね、ほぼ無害の魔物にやよ。魔石があるだけの。夏に寄ってこられると暑くて仕方ないだけにや。冬はどんどん来いにや」

「だから——ん！」

毛玉達のずつと奥に物凄く沢山の反応があります。

「テラ、この方向に沢山の反応があるんだけど何かかな？」

森を指差しテラに神眼で見てもらうようお願いします。

「任せて。んん神眼。あら珍しいわね、鉱石でも取れるのかしらドワーフ、それに一人エル

ダードワーフがいるわね五千歳よ」

「おお！ それは会ってみたいですね、少し道草良いかな？」

みんなはうんうんと頷いてくれましたので背負子を出して高速移動を開始します。

転移をしないのは手玉達を見ながら行こうと思ったからです。

森に入るとわらわらといいますね♪ 本当に毛玉に目が付いて、短い二本足でちよこちよこ歩いてます。

「か、可愛いですー！ 沢山いますよー！」

「来るにや！ 夏は暑いから寄るにやよ！ 来るにやら冬に來ると良いにや！」

プシユケは手を伸ばし、リントは尻尾で追い払うように振り回しています。

「プシユケ、手玉は熱いお風呂くらいの体温だからリントが正解ね。夏には近くにいて欲しくないわ」

「ほへへ。リントが来るなって言うのが分かります」

「もう夏の毛玉は十分にや」

「あはは。よし、一応進行方向の魔物は倒しながら行くから頭を狙ってね。よし、行ってみよー！」

足元に近寄ってきていた毛玉さん達を踏まないように飛び上がり枝の上に。そこからは枝から枝に飛び移りながらドワーフさん達の元へまっすぐ進みます。

途中ゴブリンさんや、魔狼さん達の小さな集団をやっつけながら進み、一時間ほど行くくと一気に森が開拓され鍛冶をやっているのか金槌を打ち下ろす音がそこかしこから響き渡り、いくつもの建物から煙が上がっていました。

「おい。またダンジョンから魔物が出たぞー」

「なんだー。また出やがったか、今度はなんだー」

「オークだー。また肉だー」

んと、ダンジョンがあるのが分かりましたが、魔物がダンジョンから出てくるなんて、スタンピードの前触れですけど。あつ、拳骨で一撃ですか。

「中々やるわね、さすがドワーフ。肉弾戦なら一番の力持ちなだけあるわ」

「うんうん。オークですが素手で殴り倒す人なんて初めて見ました、でもダンジョンが心配ですね。みんな、様子を見に行きましょうか」

「ライ、その前にちゃんとダンジョンに入って良いか聞くのよ」

「うん」

僕は木の枝から飛び下り、簡単な柵しかない村へ向かいます。所々に畑もあって、お野菜も少しはあるみたいです。

「ん？ なんじやお主ら森を迷ってここに抜けてきたのか？ 街道なら残念じゃが逆だぞ」

「いえ。こちらに人の気配がしましたから、覗きにきました。おじさん達はここで鉄を造ってるのですか？」

門のところ立っていたおじさんは、もじやもじやの髭を撫で付けながら僕達の事を見定めているようです。

「ああ。ここのダンジョンは鉄が出るからな、だが森の奥過ぎて誰も来ん。だが儂わしらには良い場所なんじやが、最近はちよこちよこと魔物が出て来おる。初めはゴブリンじゃったが昨日ありからオークが混じり出したな」

（ライ。この人がエルダードワーフよ）

うん。一番魔力が多いですからね。倍以上ありますよ。

「あの、僕達は冒険者なので、少しダンジョンの調査をしても良いですか？」

「ん？ 構わんで、できれば鉄があれば取ってきて欲しいくらいだが無理には言わん。じゃが、気を付けるんじやぞ、五階層くらいまでならオークくらいしかおらんが、それ

を超えるるとソルジャーやリーダーが出だす。儂らでも十八階層より下には行ったことがないのでな」

「分かりました。では少し覗いて来ますね」

そして僕達は、ダンジョン街に行く前にダンジョンを経験できるみたいです。

第91話 壊れた魔道具

「そうです！ 初めまして、Cランク冒険者のライです。パーティーぐるぐるのリーダーをしています」

自己紹介がまだでしたからね。僕に続いてテラとムルムル、プシュケ、リントが自己紹介。ムルムルは突起を出してユラユラさせてましたよ。

「ほう。Cランクとは見た目では分からなかったぞ。ぐはは。しかし中々の腕前と見た。ふむ。儂はガルだこの鍛冶の村で村長をしておる。少々心配しておったが大丈夫なようじゃ、頑張つて調査をしてくれるが良い。運が良ければ金や銀、宝石もあるかも知れんぞ？ ぐははははは！」

金、銀、宝石もと言った瞬間、テラとプシュケがピクツつてなりましたので、頑張つて見つけましょう。

ガルさんに許可を貰つて案内された、地面にポツカリ開いた入口。覗くと階段がありましたので、せうので、一歩目を合わせてダンジョンに入っていきました。

中は洞窟タイプで、縦横五メートルも無いくらいですかね。所々に光の魔道具が天井から吊り下げられていますし、足元のポコポコも気にせず進める感じですよ。

「ドワーフさん達がつけているみたいですね、これだとリントに貰った猫目の活躍はま
だですね」

「そうにやね、隅々まで見るにやら使った方が見えるにやよ？ 宝石とか転がっている
かにもやしね」

「そうです！ 猫目全開！ できるだけ多く探しますよ！ ライ背負子から下ろして下
さい！」

「ライもしっかり探すのよ！」

「くふふふ。分かりました。よいしょ、よし！ お宝探しにしゅっぱーっ！」
背負子からプシユケが下りて、リントも自分で歩くようです。

シユパッ

みんなは足下や、壁、天井をくまなく探っていますので、僕が出て来るゴブリンとオー
クを倒していきます。

ちなみにテラはムルムルに乗って、みによくんみによくと移動しながらですが中々
の早さで、ゆっくり歩く僕とそう変わらなそうです。ムルムル頑張れ！

「ん？ 誰かいますね、ドワーフさん達でしょうか」

「これは！ 光つてますが、つるつるした表面なだけですな。」

「プシユケ、見せてみなさい。んん神眼んん！ 宝石の一種よ！ 磨けば綺麗な宝石になるわ

！ プシユケおめでとう！」

「本当！ やったー！」

そんな調子でテラの鑑定のお陰で、ただの石にしか見えない物も、割れば中に宝石が詰まっている物があるそうです。

ドワーフさん達ともすれ違ったのですが、みんなは宝石探しに夢中でたぶん気が付いてないでしょうね。もちろん僕は挨拶しましたよ。

それでも十階層に入って、ドワーフさん達が増えてきて、拾うものも無くなってきました。

「やっぱり階段があつて、そこを魔物が行き来してるみたいだし、思ったより魔物も多いですし」

「そうね。ドワーフ達は片手間に倒し、収納するか放置だから、ほらそこ。ダンジョンに吸収されたわね、私達は全部持つてきてるけれど、この量は尋常じゃないわね」

「うん。少し急いで行こうか、プシユケ」

「背負子ね、魔法は私とリントでやれるところまで任せておいてね」

「やるにゃー！」

背負子を出して担ぎ、プシユケとリントが乗り込みます。そしてテラとムルムルを肩に乗せ一気に加速して、魔物が沢山いる方に洞窟を走り出しました。

「ウインドアローにや！
ウインドアローです！」

プシケとリントが倒した魔物を収納しながら走り続けついに十九階層に入り光の魔道具が無くなりましたが僕達には関係ありません。

一階層を二十分ほど通りすぎ、既に二十五階層に入ったのですが、大きな部屋が一つ、途中も普通にゴブリンやオークの上位種じゃないものが出てきていたのでおかしいなど思っていたのですが、この部屋の真ん中に大きな水晶の玉が浮かんでいて、そこからポロポロとこぼれ落ちるように魔物が生まれ落ちていきます。

「まだ奥がありそうですが、原因はあの水晶みたいですね。テラ、あれって魔道具？」

「見てみるわね。んん^{神眼}。ダンジョンが産み出した魔道具ね、壊れてるわ。ダンジョンの魔力を吸い続け魔物を産み出してるのよ。ライ収納しちやいなさい」

「壊れてるから出し続けちゃってるのか。分かったよ。収納！」

水晶玉を収納し終わり、部屋の中の魔物を一掃し終わると、ズンつと真ん中に宝箱が現れました。

「出た！ 宝箱よ！ ライ進みなさい！」

「くふふふ。罨だけ無いか見てくれるかな？」

「ま、任せてよ。わ、忘れてたわけじゃないからね、近付いてからしようと思ってたのよ。本当だからね！」

「良いからさっさとするにや、早く中身が見たいにや」

そうですね。近付いて開けちゃいませうか、でもまっすぐは駄目でしようね、魔力が貯まっているところがあからさまにありますから罨かもしれませんし。

「じゃあ僕についてきてね、たぶん罨が床にあるから」

「えっ？ んん〜！ 転移罨ね、外に戻されちゃうわ。流石に良く見てるわねライお手柄よ」

テラがほつぺを撫でてくれました。

「えへへ。じゃあ行くよ」

魔力溜まりを避けて宝箱に到着。

「^{神罨}んん〜。やったー！ 罨は無いわ！ ライ開けましょう♪」

「ラ、ライ私も開けたいです！」

「にや、リントも一緒ににや。開けたいにやよ」

「くふふふ。じゃあみんなで開けよう♪テラとムルムルも一緒にね♪」

左手の手のひらにムルムルとテラを乗せ宝箱の蓋に近付けます。

そしてみんなで。

「行くよ♪ せ〜の」

ギギと緒とを立て、開いた宝箱の中身は――。

「金よ！ 銀も、宝石もあるわ！」

「綺麗綺麗にや」

「ふほほ。ピカピカですよ♪ 一番大きな金はテラが乗せてるクルミくらいありますよ！」

五十センチくらいの宝箱でしたが、中身の価値は相当なものだと僕でも分かりました。

でも、また同じ水晶が出るかも知れませんので、ガルさん達に伝えておかないとです。僕達は転移の罫を使い、外に出ると夕方になっていました。

歩いてる方にガルさんの家を教えてもらい向かおうとしたのですが、何やら今日の採掘ですごいものが見つかったそうです。

何が見つかったのか少し興味がありましたので、ガルさんの家に行くところだそうで一緒に行く事にしました。

もしかして、あれが見つかったのかも知れませんね。自然に早足になるのを我慢しておじさんと共に村の真ん中にある他の家より少し立派な家が見えてきました。

第92話 ダンジョンで良いものが見つかりました。

「ここがガルの家だ。おいガル！ 可愛い客人が来たぞー！」

ギイと音を立て開けた、僕じゃありませんよ、一緒に来たおじさんです。戸の奥にはガルさんがいて、数人と床に腰を下ろし真ん中に置かれた銀色のたぶんムルムルくらいですかね、十センチくらいの石を嬉しそうな顔で見えています。

「ん？ おお。無事に帰ってきたか」

「驚いたぞ。いきなりダンジョン入口に現れやがったからな。あははは」

「あはは。転移の罠を利用して帰ってきましたからね。驚かせてすいません」

「ん？ そんな罠など十八階層までにあるとは記憶に無いのだが、ライ達は何階層まで行つたのだ？」

中に入り、皆さんが座っているとこへ近付きます。そして数メートル進んで止まりました。

「二十五階層ですね。それでその場所にあつた魔物を生み出す魔道具が壊れていました。そのせいで生み出され続けてダンジョン内が魔物がいっぱい。それで外にまで出てくるようになったと思います」

「聞き間違ったかの、二十五階層と聞こえたのじゃが」

あつ、そうでした。十八階層が最高と言っていましたからね。ガルさん以外の方も、『え？』って顔をしていますね。

「そうですよ。二十五階層まで頑張つて行きました。それから部屋中の魔物を倒した後には宝箱も出ましたからね。これです」

ズンと重量感のある音を立て、宝箱を出しました。

「これがその宝箱ですね」

出した宝箱にみんなの視線が集まり、ぶつぶつと何やら呟いています。

「この形は十階層に出た宝箱とそっくりだぞ」「俺もそれを言おうと思つていた」「このダンジョンの物だとすれば、底に階層の番号があるはずだ」「そうじゃな。よし、持ち上げろ」

ガルさんに言われました一人のおじさんが宝箱を持ち力をくわえました。

「ぬお！ 重いぞ！ 中身はなんだ！」

「中身は金、銀。それから宝石がありましたよ」

「金があつたのか、重いはずだが、入っている物が分かれば話しは別だ、重いと知つたなら持ち上げるのはたやすい。ふんぬ！」

あはは。分かつてもち上がらない物もあると思いますよ。はっ！ もしかして

ドワーフさん達の特殊な

(ライ。残念だけど単に力があるだけ。初めのは重さを軽く見て、力が入ってなかっただけよ。ドワーフ達なら倍以上重くても片手で持ち上げるでしょうね)

そうなんだ。あつ軽々と持ち上げちゃいましたね。

僕達も一緒に持ち上がった宝箱の下から覗き込み、裏面を確認。言われてたように、底には二十五と刻印されていました

「何と！ 僕は夢でも見てるのじやろうか、確かに二十五階層の物じやな、五階層ごとの宝箱と同じじゃ！ ライ。疑って悪かった。二十五階層に行ったのはまことじやな」

「はい。なので次の魔道具が生み出されて、それがまた壊れるとスタンピードになるかもしれない。定期的に見に行けると良いのですが」

僕がそう言うのと、皆さん考え込んでしまいました。

「どなたか転移の魔法は使えませんか？ 使えるならその部屋に下りる階段にお連れする事ができますけど」

「ふむ。僕は使うことができるが、その後はまる一日は魔法が使えんほど魔力が減るからのう。出る魔物は何がおる？」

そうか、ぐるぐるして魔力の補充ができないと厳しいですよね。

あつ、魔物でしたね。

「ゴブリン、オーク、その上位種でリーダー、ソルジャーまでですね。数も五十匹くらいだったと思います」

「ふむ。なら儂一人でも問題なからう。一度連れていつてもらえるか？」

「はい。すぐに行きましようか？」

そう言うと、ガルさんは何故かハンマーや、スコップなどの採掘用の道具を取り出し、魔法の革袋を腰に付け僕のもとにやって来ました。

「うむ。少し採取して何が出るのか見ておきたいからな。では頼めるか」

「はい。残りの皆さん行ってきますね。では転移！」

パツ

二十四階層から二十五階層へ下りる階段。その途中にある横穴に転移をしました。ここなら魔物も普段は来ないはずです。

「ここは二十四階層から下りてくる途中の横穴なんですよ。だから魔物も普段は来ないはずですよ。なので魔力の回復はこの場所ならできると思いますよ」

「ふむ。暗くて何も見えんのじゃがライ達は見えておるのか？」

「そっか！ 待つて下さいね、光を出しますね、ほいっと！」

僕達はリントのおかげで真つ暗闇でも普通に見えるのですが、ガルさんはそうは行きません。僕は急いで三つほどムルムルくらいの光の玉を浮かべました。

「ほう。魔法の使い方が儂の知らんやり方だが上手いな。ふむ見たところ鉄鉱石に混ざり金や銀も含まれているようじゃ、良い場所があるもんだ。ここは時間をかけてもぐる価値はありそうぞぞ」

「おお！ 皆さんで進めば全然余裕で来れると思いますよ。では水晶玉があつた場所も案内しますね」

そこから階段を下り、二十五階層へ到着。

ここでもガルさんは地面や壁を調べ、うんうんと頷きとても満足そうな顔をしています。

「これは驚いたぞ。ここの鉄鉱石は力があるぞ」

ガルさんが指差したところは水晶玉が浮かんでいた所だと思えます。確かにあの一帯は、魔力を含んでいますね。父さんにもらつた刀と同じ感じがします。

「そのようですね、魔力が内封されているみたいですよ。それで装備を造れば良いのが出来そうですね♪」

「ああ。以前に何度も見たことがあるダンジョン製の装備と似ているな。ふむ、少し持つて帰つて試してみるのも良いな。まあ固いだろうから金床とハンマーから造らねばならんが。ライ。少しだけ採取したいんで時間をくれるか？」

「はい。大丈夫ですよ。お手伝いする事はありますか？ 砕かなくても転がっているも

のなら拾い集められますよ」

この部屋の地面にはコロコロと無数に瓦礫や石ころが転がっていますからそこその量が拾えると思いますし。

「じゃあ頼めるか？ ライは収納が使えるんじゃないかな。では僕はこの盛り上がったところを砕いて採取するでしょうか」

「はい」

そして僕達は、テラに見てもらいながらただの石分けながら拾い集めました。

「ライ！ あの天井のトンでもなく良いものよ！ 採取しなさい！」

テラが指差した先にあった物はなんと

.....

第93話 再開の約束

「真つ黒な宝石？ でもテラがそう言うなら良いやつなんだね♪ ん〜。シッ！」
テラとムルムルを肩から手に抱えて、しゃがみ込み一気に真上へ飛び上がる。

「キヤー！ 私達は置いてから行きなさいよー！」

テラが叫んでいますますが飛んじやいましたし、すぐ終わらせませすよ。そして黒い塊の周りにある少し魔力を含んでいる岩から魔力を抜いて、おもいつき蹴りを連発！

ドゴツ！ ドゴゴゴツ！

それによつて砕けた岩は、下にいるプシケやリント、ガルさんに降り注がないように収納して僕は一回着地。しゃがんだところにいたリントの上にムルムルとテラを乗せて——！

「もう一回行きますよー！ シッ！」

ドゴツ！ ドゴゴゴツ！

二回目の蹴りで、ピカピカしている五十センチくらいの黒い岩はポロつと外れました。慌てず騒がず落下中に手を伸ばし、なんとか手に取り、着地。

一緒にパラパラと降り注ぐ破片はしつかり収納してしゃがみこみ、騒ぎに駆けつけた

ガルさんにも見えるように僕達の真ん中にそつと置きました。

「もうライつたらあんな動きするなら先に言つてよね！ ムルムルが掴んでくれなかつたら飛んでつちやうわよ！ まったく。まあこれが綺麗に採れたし許してあげるわ♪」

「なんじやその黒いのは、宝石か何かか？」

「ごめんねテラ。でもピカピカで綺麗だけど、これつてなんなの？」

みんなが見守る中、テラはムルムルに乗つたまま胸を張りこう言い放ちました。

「ブラックダイヤモンド、宝石よ。この世でもつとも固い宝石ダイヤモンドの黒い子ね。物凄く数が少ないから凄く貴重よ。それもこの大きさはまずあり得ないほどの大きさなのよ！」

「なんと！ ダイヤモンドだと透明や少し色の付いた物は見た事はあるが、黒い。だ
が美しい宝石だ。」

ガルさんの目線はテラの言つたブラックダイヤモンドから外れる事なく、そつと触り
感触を確かめています。

「ダイヤモンド？ 初めて見ましたね黒いのは、透明なのは村の村長さんが持つてま
したね」

プシケは指先でつついて硬さを確かめているのかな？

「リントの顔が映つてるにや。にゅふふ。傲慢の髭まで映つてるにや」

磨いてもいないのに、ツルツルですからね。たぶんみんなの顔も映っています。僕の顔も映ってますしね。

「ブラックダイヤモンドですか。固そうですね、うん。それに魔力も凄く内封してるから物凄い価値になるね♪」

テラは真剣な顔をしてそつと手をブラックダイヤモンドに添えました。

「くふふふ。やっぱり綺麗ね♪ うんうん少しだけ返ってきたわ」

何が返ってきたのでしょうか？ 少しテラの魔力が上がってますからムルムルみたいに魔石じゃなくて、宝石から魔力を吸収したのかな？

（違うわよ。バラけた私の力がたまたまここに残ってただけよ）

そうなんだ、バラけちゃったの探さないと駄目なのかな？ それなら僕も協力したいから頑張るね。魔力も覚えたし、次からは気を付けて探しておくね。

（あ、ありがと。そうね、そうよね。大きくならなきゃ。）

ん？ 最後の方は聞こえませんでしたけど、頑張っちゃいますよ！

その後、僕が蹴り碎いた天井の破片をガルさんに見せると、それはヒヒイロカネと言って加工すると物凄く硬くなる金属だそうです。武器の材料では凄く貴重で凄いな気だそうです。

その後も部屋のあちこちを少しずつ採掘しているガルさんの顔がにやけていますか

ら、良いものがあつたのですね。

「すまんな。あらかたこの部屋にある物は把握できた。これは良い場所を見つけてくれたものだ、くはははは。よし帰るか、部屋で待つ奴らに良い土産ができた」

「あつ、帰りも僕が転移しますね、明日の朝からここに来ることになりそうですからねガルさん達は」

「ああ。じゃが魔力は大丈夫か？ 駄目なら一階層から潜るつもりでいたのだが」

「ぬふふふ。大丈夫ですよ、じゃあ戻りましょうか。転移！」

パツ

ガルさんの部屋に戻ってくると、まだ僕が出した宝場の中身を一つひとつ吟味して、テーブルの上に種類別に分けていました。

「帰ったぞ！ 皆、ヒヒイロカネが出る。明日からはしばらくダンジョン暮らしになるから準備は怠るなよ」

ガルさんがちよつと意地悪な顔で皆さんにそう言うのと。

「ヒヒイロカネだと！ 宝箱の蝶番と補強にも使われていたからもしやとは思っていたが」

目の色が変わるとはこの事ですね♪ くふふふ。既に僕達の後ろの出口に行こうとしてる方もいますし。

「ああ。ヒイロカネ鉱石が出る。だが今はその宝箱をきっちり種類別に分けてしまえ！ 良いかそれが終われば明日からの準備だ！ 一月分は用意しておけ！ モタモタしてるヤツは置いていくぞ！」

「おお！」

大きい声です！ ガルさんの家がビリビリと震えた気がしますし、耳がキーンとなりましたよ。

でもガルさんの言葉が効いたのか、あつという間に宝箱の中身は分けられ、宝石も種類別に。そしてそれを種類が混ざらないように個々に小さな革袋へ入れて机の上に並べられました。

「よし！ さっさと帰って準備だ！」

みんな先を急ぎ、玄関の戸に殺到して押し合いながらみんなはいなくなりました。

「ふむ。儂はメシを食べてからだな。ライ達も食べて行くとよい。何かあつたか？」

ガルさんはそう言いながら竈へ向かうと火を着け食材を探し出したので、ヒュドラを出すことにしました。

翌朝。

「なんじゃ、もう行ってしまふのか？」

本当に寂しそうな顔をするガルさん。でも急がないといけないようです。

「はい。とりあえず目的地はダンジョン街ですからね。ガルさん達も採掘頑張ってくださいね」

「うむ。またここに寄ると良い。それまでにライ達の武器をいくつか作っておいてやる。二日ほどだが楽しかった。必ずまた来い」

「やったー！ 分かりました！ 絶対きますね♪ では皆さん、転移先がなにやら騒がしそうですね。ではまた今度です。転移！」

パッ

気配を感じ、あわてて街道脇に転移した僕達は、目の前で繰り広げられている事が奪われました。

第94話 九匹の子達

僕達が転移してきた森の端からでも一目で分かる、大きなナインテール。五十メートルほど先ですが、背中をこちらに向け街道脇に座っていました。

その九つある尻尾の隙間に見え隠れする小さなナインテール。子供が生まれたのですね！ そのナインテールを沢山の冒険者でしようか、街道側から弓型に取り囲み、今から攻撃を仕掛けようとしています。

「テラ！ あの時のお母さんですよ！ 小さい子もいます！」

「不味いわよ、生まれた子供でしょうね、九匹連れているわ」

耳たぶを掴んで凄いい勢いでクイクイ引つ張る慌てたテラ。僕も同じ様に焦っています。遠目ですが子供達はお母さんの尻尾に隠れ震えてるように見えました。

(あら。ここで匂いがまた消えたので待つていましたが、そんなところに)

ナインテールお母さんはこちらを振り向くと僕の頭の中に念話が届きました。

「え？ ナインテールお母さんですか？ つかこつち向いたから冒険者達が動き出しましたよ！ ん〜よし！ お母さんも子供達もみんな、一旦お屋敷に行くよ！」

「念話ね！ ライ、庭によ！ 今度は間違えちゃ駄目だからね！ ナインテールはライ

のお部屋に入りきらないから！」

「うん！ 子供も一緒にいいー！ 転移！」

パツ

「きゃー！」

「あつ！ マリーアごめんなさい！ この子達とお母さんが危なかったので」

慌てて転移した先にはメイド長のマリーアと三人のメイドさん達が、庭でシーツを干しているところでした。

でも流石、誰もシーツは落としていません。 ですが。

「ラ、ライ坊っちゃん！ ま、魔物ですよ！ 生きてますよ！」

「落ち着いてマリーアもみんなも。このお母さん・ナインテールは知り合いだから。大丈夫です」

マリーア達は僕とお母さんを交互に見て、ゴクリと喉をならして、最後に僕を見てこう言いました。

「ライ坊っちゃん。悪戯が過ぎますよ。ナインテールと言えば一匹で大きな街を簡単に攻め落とせ、ドラゴン、猫のツインテール、エンペラーイーグル、海のリヴァイアサンと並び、五大魔物と言われる魔物の中でもとびきりの魔物ですよ！」

「う、うん。そ、そうだね」

みんなが物凄く怖い顔で、昔スカートめくりをして、持っていたティーセットを落とさせてしまった時よりも怖い顔をしています。

「で、でもねマリーア、冒険者達が攻撃しそうで、お母さんは大丈夫でしたが子供達が怪我しちゃうかも知れないから咄嗟にね。本当にごめんなさい」

「はあ。まあ今日は良いとしましょう。洗濯物も無事ですから」

「ありがとう。そうだ、マシユーにヒュドラお肉を多めに渡しておくからみんなも食べてね」

「ヒュドラだと？ ライ。先日連れてきた奴らに喋らせたがお前が倒したヤツだな？」

そこには御屋敷から出てきた父さんがいました。腰には剣を装備しています。

「はい。大きかったですよ。胴体なんてこーんなに大きかったですから」

体全体を使い大きさを教えてあげました。

そしてドヤ顔をしてるとテラが。

「ライ。それじゃあ大きさは伝わらないわよ。ちようどお庭だし、出して見せれば早いわよ」

そうですね。じゃあ胴体を出しちゃいましょう！

「せーの！ ほいっとー！」

みんなに危なくないよう、離れた場所にヒュドラの胴体を出してあげました。

「はい。沢山持つていつて下さい。できればフイーアやティにも」

「うむ。でだ。ナインテールだが、大丈夫なのか？ 触ったり抱き付いても怒っていないようだが」

（うふふ。悪さなんていたしませんよ。その、ライに命を救われましたから、救ってもらった命を、子供達を見てもらいたくて来ただけですよ）

「なんと！ 念話か！ ドラゴンでも上位種は意志疎通ができると聞いたがナインテールまでもか」

父さん達に念話を広げたのですね、マリーア達も驚いた顔をしていますし。

（そうですね。その言われていた五大魔物はできるでしょうね。この子達は生まれたてですからはつきりとはいきませんが、お話はだいたい理解はしていますよ）

「そうなのですね。こんにちは、僕はライ。よろしくね」

父さんとお喋り中なので僕は、この子達にもふもふしながらご挨拶をしましょう。

一匹ずつ、もふもふしながら九匹全部にご挨拶です。

プシユケも一緒にあって挨拶しています。リントはなぜか尻尾に興味津々で今にも飛び付きそうって飛び付きましたね。

「もつふもふにや！ リントも負けてにやいけどこれは良いものにや！」

それもお母さんに。完全に埋まっていますし、でも気持ち良さそうです。

その間も父さんとお話し中で、長引きそうな難しいお話をしています。

そこにマシューとカヤッツもやって来ましたので、マシューにはヒュドラを頼みました。カヤッツは父さんと、お母さんとの話におつかなびつくりですが仲間に入りましたので残されたマリーア達は洗濯干しを再開し、僕達は子供達と遊ぶことにしたのですが。

「カヤッツ。それは本当か？」

「はい。末端の実行部隊ですので真相は分かりかねますが、おそろくは」

（まあ。あの辺りは確かに沢山いますが簡単ではないはずですが）
なんだかトラブルがありそうですね。

第95話 怖いアリがいるそうです

「父さん達は何の話をしてるのですか？」

「ん？ ああ。帝国がヒュドラを卵で操ったと分かり、ライが倒して事なきを得たんだが、もちろんその卵も搜索中だ。しかし、帝国の奴らからファイアーアントとの言葉が多数出てきたんだ」

ファイアーアントですか、確か真つ赤なアリで頭が五十センチくらいある大きさ、それと数が物凄く多くて、盾や鎧の素材に使われているアリだったよね。

「ライ坊っちゃん、そのファイアーアントを帝国は操ろうと画策しているようなのですよ」

「また卵でも使うのでしょうか？ でもアリなら土の中にいると思いますから卵もその中ですし、取りに行けませんよね？」

「二つ可能性があるとすれば、ファイアーアントは身の危険を感じた時に仲間を呼ぶ習性があるので、それをどうにかして利用すればできなくはないのですが」

「ファイアーアントを捕まえ、我が国に警戒させずに運ぶ。そしてそこで身の危険を感じるように痛め続ける事ができるのかどうかと。相当不可能に近いとは思うのだが」

そうですね。それより痛め付ける方が後で大群に襲われてしまうのですから……
！ 奴隸さんを使って無理矢理ならできるのでしようか！

(ライ、ならその前にやってしまえば良いじゃない。ニンテール、場所を教えて、私達
がやつつけてくるから)

(うふふ。そうですね、場所は先ほどの街道からずっと森の奥ですね、海に出る手前の山
が全てアリの巣になっていたはずですよ)

ガルさんの村からさらに奥ですね。

「お母さん達は どうするの？ なんならこのお屋敷で住んでもらってもいいけど」

「こらー！ なんて事を言い出すんだライ。確かに庭はこの国一番の広さだから住んでも
らっても良いが、子供達の事を考えるとそれも良いのか？ ニンテールの子はそ
の、言つては悪いが毛皮の需要は計り知れない。そうだな。ニンテールよ、ここに住
むか？」

(うふふ。 よろしいのですか？ 確かにここなら広さも申し分ありませんから、それに、
魔物の森も近いのですので狩りにも行けますね。お邪魔させてもらいたいと思います)

「なんと！ 魔の森で狩りか、それは助かる。ライ達がこつそり狩りをしていた頃より
増えていたからな。ニンテールよ、よろしく頼む」

(はい)

こうしてお屋敷にニンテール親子が住むことになりました。仲良くしてくれと嬉しいですね。

ヒュドラを渡し、少し僕達用にさばってもらって、ガルさんの村へ戻りました。

既にダンジョンへ向かったようですからほとんどいませぬね、五人ほどの気配があるだけです。

「じゃあ行くのか、プシケはまた背負子でお願いしますね」

背負子を出して、乗ってもらい準備完了です。準備中も魔力を遠くまで広げ気配を探っていきます。

「ねえライ。お義父様にファイアーアント討伐の事は本当に言わなくて良かったの？

普通なら相当危険と言うより無謀な事よ」

「うん。なんだか旅に出たのに帰ってばかりだし、あまり顔を見せるの少し恥ずかしくって。次はダンジョンを楽しんで、何かお土産ができた時に帰るくらいにしないと、旅に出てるって感じじゃないからね」

「はあ。お義父様やお義母様、それにお屋敷の方はライの顔が見れて喜んでると思うわよ。そりやまあ帰りすぎかなとは少し思うけどね。まあ良いわ、早速アリのやつつけに行くわよ！」

「うん」

くふふ。テラがお義父様、お義母様って呼んでくれたし頑張ろう♪

(あつ！ ち、違うのよ！ 違わないけど、そんなのじゃないの！ ほらほらアリは見付かったの！)

またムルムルを掴んでくいくい伸ばしながら顔を赤くしてます。ちゆ。

(な、な、な！ も、もう！ は、早くアリをやっつけるのよ！)

うんうん。凄く可愛いです。よし、気を取り直して、見ているのですが多いです。

「テラ。この方向なんだけど、物凄く多いですね」

「あつちね。んん神眼。ざつと五百万匹くらいかしら、こんなものよ。少ないと数十匹の巣もあるけど一山ヲチ巣にしているなら少ないくらいね。もうぐるぐるしてるんでしょ、見たら途中にもトレントの林があるし、やっつけながら行けば付く頃にはファイアーアントも魔力切らしてるわよ」

「うん。じゃあ途中の魔物もやっつけながら行くから、プシケもリントもお願ひね。いっくよー！」

村の端まで加速しながら走り、そこから枝に飛び上がります。後はいつも通り枝から枝に飛び移りながら移動する事二十分、辺り一面倒れた木、トレントがいました。

「は〜い。トレントの林に到着です。トレントは顔の目と目の間にウインドアローで穴を開けると——」

「ライ。その必要は無いわよ。トレントは魔力が無くなったところで終わりだから収納できるわよ」

「そうなの？　じゃあ収納！」

収納したとたん辺り一面の倒れたトレントが無くなり、大きな空き地が出来ました。

「ね。じゃあ次はオーク、その次がゴ布林だからそれはガツバってね」

「やりますよ〜！　ウインドアローを連発してやりますから〜！」

「にゅふふふ。リントのウインドアローが火を吹くにや〜！」

リント、残念だけどウインドアローじゃあ火は出ないと思うな。

その後オーク、ゴ布林、村こそありませんでしたが沢山のグルーブを倒し、徐々にファイアーアントの巣に近付いてきました。

そして、後百メートルほど進んだ先に、気絶して倒れたオークとファイアーアントが二十対百ほどいるでしょうか、その中の何体かは傷付き倒れていますよね。腕の無いオークや、完全に潰されてるファイアーアントも。たぶんここで戦っていたのですね。

「よし、オークは頭で、ファイアーアントはウインドカッターで体の細くなっているところを切れば大丈夫かな。倒しちゃいましょう！」

「待て！　俺達の獲物の横取りか？」

さあ撃つぞと言うところで声をかけられました。
えっと、何かやらかしてしまいましたか？

第96話 帝国の影

「あの、もしかして、お兄さん達が倒すところだったのですか？ それならごめんなさい。お兄さん達がいたのは知っていましたが、あまりにも数が違いすぎたので、気にしていませんでした」

気配で、三人の人がいるのは分かっていますが、魔力もそんなに多くない方でしたので、気にせずやってしまったのが僕の失敗ですね。

「ん？ なんだ素直じゃねえか。俺達はオークを追っていたんだがファイアーアントとおっ始めやがったからな、オークは諦めて、オークにやられたファイアーアントの素材に切り替え戦闘が終わるのを待ってたんだが、この状態だ、何があつたか分からねえが見付けたのは俺達が先だこの魔物達は俺達に権利がある」

少し呆気に取られていましたが、僕達が自分達に逆らわないと分かったのか笑顔に変わりました。

「はい。その通りだと思います。では僕達はまだ先に用事がありますので失礼しますね」

「ライ、アントはすぐに回復するから放っておくのはおすすめしないわよ。たぶんぐる

ぐるを止めちゃうと五分ほどで起きちゃうわね」

「そうなのですね、うんうん本当だ、今も少しづつ魔力が抜けていますから、回復は早そうです」

「ねえライ、やっつけるところまでは手伝ってあげた方が良くないかな?」

うん。その通りだと思います。

「お兄さん達、ファイアーアントはお兄さん達のもので倒すのはお手伝いしても良いですか?」

「構わんが、俺達はこれを全部収納できる魔法の革袋を持っているからおこぼれはまず出ないが良いのか?」

「はい。大丈夫です。ではアントの首を落とせば良いですよね?」

「ああ。だがコイツらは固いから安物の剣では刃こぼれするから気を付けろよ」

「はい。じゃあプシケもリントもやっちゃいましょう! ウインドカッター!」
「行っちゃいますよー! ウインドカッター!」

「結局やるんにやね。まあ良いけどにや。ウインドカッターにや!」

シユ。パパパツと連続で魔法を飛ばす僕達を見て、啞然として僕達を見るだけになって
いるお兄さん達。

百匹ほどでしたから一分ほどで全ての首を落とし、動かないお兄さん達の変わりに、

オークもウインドニードルを頭に打ち込みました。

「よし。ではお兄さん達、僕達は行きますね」

そして木の枝に飛び上がり、ファイアーアントの巣を目指しました。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「おい。子供のSランクついていたかな？ あの詠唱もしない魔法なんて見たことも聞いた事も無いぞ。」

「いや、俺もそんなもん聞いた事もねえ。だがSランクで間違いないねえだろ？ 人ひとりを担いで木の枝まで飛び上がれるか？ 俺にやあ助走をつけても無理だぞ。」

「ええ。間違いは無いでしょうね、あれだけ魔法を連射して、一つも外していないと思いますし、今の身のこなしも魔力量も化け物レベルですね。」

「怒らなくて良かった。」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それからは、やっぱりファイアーアントが仲間を呼んだみたいで、沢山のアント達が列をなしてさっきの場所に向かいながら気絶して、アントの道ができていました。

「これだけの数が押し寄せていたらあの人達は危なかったですね、間に合つて良かったです。じゃあ倒して回収しながら進みますよこの先にも人がいるみたいですし」

「そのようね。んんん。ライ。気絶させなさい。帝国よ。それに透明化の魔道具に気配

遮断ね。あれではアントの目と触覚をくぐり抜ける事はできないでしょうけど、気絶させておいて、残念だけど、またお屋敷ね」

「あはは。仕方ないですね、新たな情報もあるかもしれませんが、僕が恥ずかしいからとか関係ありませんしね。アント達も気絶し始めましたから、ぐるぐるしちやいましてう♪」

先ほどまでは、避けてぐるぐるしていましたが、その人達の周りのアントも後少しで気絶しますからね踏まれたりはしないでしょう。

そうして進むこと一時間くらいですが、倒して収納を繰り返しながら進み、帝国の方達が倒れている場所に到着しました。

「おほほー。これは本当に見えませぬね♪ ぬふふふ。これで今度フィーアとティに悪戯して驚かせましょうかね〜」

「嫌われちゃうかもしれないからやめておきなさい。ほらさっさと魔道具を収納してお屋敷に連れていくわよ」

ちえつ、喜んでくれると思うんだけどな。

よし。収納！

魔道具を全部収納して、帝国の方達を見ると、こんな森の奥には似つかわしくない貴族服を着たおじさんが一人と、残りの五人は兵士さんですね。じゃあ今気絶しているア

ントを倒してお屋敷に連れていきましよう。

辺りの気絶しているアントを三十分ほどかけて倒してしまい、今回はお屋敷の門前に転移して、六人を引き渡して、さっと元の森に戻りました。

「まあ良いけど、さつさと残りもやつつけちゃいませう！ たぶん女王蟻はとんでもなく大きいからお義父さんにあげれば喜ぶんじゃない？ それでみんなの防具をお揃いで作れるでしやうしね」

「そつか！ うんうんテラありがとう。ファイアーアントの赤つて格好いいしそれを提案してみるよ♪ よくし後半分進めば単にたどり着きますからみんなお願いね」

第97話 巢穴の奥で

「うわあ。足の踏み場も無いですね。地面がファイアーアントで埋まっていますよ。これじゃあ山にも近付くことさえできませんよね」

「うじやうじやですよ。気絶していなかったらこの数ですと逃げ場はありませんね」

「真つ赤つかにやね。ゆつくり見ているにやらさつさとやつつけないかにや?」

ん、でも次から次へと生まれてますからやっぱり女王蟻からやつつけないと中々減らないのも確かなんですよね。

「ライ。女王はどんな感じなの? 気絶はしていないし魔力も生まれた時に減るけどまたすぐに戻ってるわよね?」

「そうなのですよ。地中深くにいる女王さんにぐるぐるを集中すればいけると思うので少しやってみますから、テラ、魔力の減りを見て貰えるかな? プシユケとリントは攻撃してくれてて良いよ」

「やるにや!
任せて!」

「良いわよ。じゃあ始めて! 神眼 んんー!」

「行くよ! 五分で結果が無ければ長期戦になるからね! ぐるぐるー、ほいっと!」

女王以外のぐるぐるを止め、集中攻撃です。

「良い感じに減ってきてるわ。でもこれは時間が足りないわよ。やっぱり回復のようね、厄介だわ」

「それだと間に合いませんし他の子が起きちゃいますし。女王さん回復の魔道具でも持って。」

「それよそうか回復の！」

「何々？ 良い事思い付いたの？」

「なにやなにや？」

「ぬふふ。回復をね、女王さんは魔法を使ってやっているのですよ♪ スキルかなって思っていました、魔力を使いながらです」

「良く気が付いたわライ。あれは古代魔法とまた系列が違うけれど古くからある魔法。魔物に特化した魔法だけど上位種はそこそこ使っているわね」

プシケとリントは思案顔で、でも魔法は止めずに撃ち続けてますから短い時間です
が上達していますね。

「それやそれね！」

「くふふ。その魔法をぐるぐるさせてあげれば、そしてさらに子供を作るのも魔法みたいですから、そちらもぐるぐるさせちゃいます！」

それなら魔力も増えないし、数も増えませんかね。

「じゃあやつつけちゃいましょう！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

さて、今は洞窟の中にいます。表のファイアーアントは昨日と今日の朝からお昼までかかりましたが倒しきり、残りはひと山分の巣を片付けるだけです。

「ああ！ またここにも分かれ道があるじゃない！ まったくもうー、よく崩れないものね！」

「ファイアーアントはもう飽きたにや〜」

「でもさつき宝石がありましたから頑張りましょー！」

「そうだよね、凄く沢山集めていたし、それも今まで二か所もあつたよ」

ファイアーアントは宝石を集める習性が

あるようで、小さな部屋にゴロゴロと宝石が山になっていました。

「そ、それはそうね。そこは褒めて上げるわ、唯一そこだけはファイアーアントの良いところかもね」

そんな感じで、巣の中でお泊まりしながら一週間。ようやく女王の前までやって来ました。

「でかいにやー、それに綺麗にや」

「まあまあ、の大きさをね。くふふふ。それにピカピカよ！」

「うんうん。一週間もかけて来た甲斐がありますよね。」

えっと、おーいみんな女王さんを見てあげようよ。

みんなが見ているのは、途中にあつた宝石とは別格に大きな宝石の山。僕が見ているのは、ヒュドラの胴体ほどある大きなお腹の女王さん。

みんなは宝石にばかり目が行つてますので、見て貰えない女王さんが少し悲しげに見えたのは錯覚でしょうか。

「あはは。まあ喜んでるならそれで良いですよ。よし。お腹が大きいだけで、体は普通の子経ちの倍くらいしかありませんし、ウインドカッター！」

シユンと飛んでいったウインドカッターは、なんの抵抗もなく女王さんの首を落とすて、ファイアーアントの討伐は完了しました。

「収納！ あれ？ 女王さんがいたところに何かな？ テラ、女王さんの居たところだけど祭壇かな？」

「何！ ライ！ 今は宝石の鑑定に忙しいんだからね！ じゃなくて、じよ、女王ね、あはは。何もう倒しちやつたの！ えらいえらい」

あはは。宝石に集中しちやつてたみたいですね。まあ慌てるテラも、手をバタバタさせたりして可愛いので許してあげましょう。

「うん。ちゃんと倒せたよ。それでね、女王を収納したんですがあんなものが女王の下から出てきたので何かなって」

「そ、そうなのね。任せて。んんん。へえ、ライ祭壇よあれは、それも神器があるわ。みんな滅多に見れるものじゃ無いから見ておきなさい」

そこでようやく宝石から目を離れたプシユケと宝石の上で器用にお手玉していたリントがこちらを見ました。

「二人とも、滅多に見れない神器があるみたいなんだ、見に行かない？」

「神器にや？」

「そうよ。かの世界樹イルミンスツールの枝と、世界樹ユグドラシルの枝を絡め合わせて造られた杖よ。使用者がシン

デイとなっているから、あなた達には使えないけどね」

宝石は収納してしまい、みんな祭壇へ向かいます。

祭壇の上には、ポンと置かれただけの杖が一本。女王さんが乗っていたのに、壊れた感じも、汚れも何もない綺麗で新品にしか見えない僕の身長くらいある杖でした。

「うんうん。見事な造りね、あの神が二人がかりで造っただけあるわね。杖の近くにいてだけで力を分け与えられてる感じになるもの」

うんうん。本当に凄い力を持つてあるようです。魔力とは少し違った力ですが、凄いですね、魅入られるようです。

「はわく。なんだか凄いのが分かる杖ですね。魔法の杖かあ、私には少し大きいかな」
そう言つて手を伸ばしたプシユケ。

「うふふ。残念だけど使用者が限定されてるからどんなに力自慢や、それこそ神様でも
簡単には持ち上がりもおおー！ プシユケなんで持てるのー！」

「え？ 触つちや駄目だったとか？」

「持てないはずの杖を、軽く片手で持ちあげたプシユケ、僕も神器持ち上げられるかな
。」

。 。 。

第98話 神器と神様？

「良いなあ。プシユケ、僕にも持たせてくれない？」

「うん。凄く軽くて羽を持つてるみたいなの。はい」

「ほわあ。凄く綺麗ですね、それでは貸してもらいまあー！ ちよつ、ちよつと待つて、重くてプシユケ手は離さないでね！ テラこれなに！」

プシユケが手のひらの上に乗せて前に出してくれましたから、僕は両手で掬うように持とうとしたのですが、ビクともしません。

「やっぱり壊れてる訳じゃないのね、だとすれば、プシユケの先祖にそのシンデイと言う人物がいた証拠ね、私が見た限り、連名の者と、その血を引く者に限定されてるし、それしか考えられないわ」

パツ

「ん？ なんや。シンデイの杖が動いたから見に来たけど、ふうん。プシユケちゃんか、それは君が使うと良いよ、うんうん。そっくりやし。ん？ なんやアイツの娘のテラちゃんやん。どないしたん？」

「はあ、やっぱり来たか。ユタ久しぶりね。まだほつつき歩いてるって聞いたけど？」

「良いやん！ ちょっと前までつてかまあええやん、それより、ほいっとー！」

突然現れたお兄さんはテラと顔見知りのようです。腰には刀を二本カッコ良さげな刀です。おおー！ 神器から感じる力をふむふむ凄く細やかに操作して、杖に何かしていますね。

「こんなもんかな。じゃあテラちゃん俺は帰るよ。せやけど、そっちの子は、あはは。なるほどね、んー、良いのあつたかなナビ？ ありがと。はいこれはライ君が使つてね。よし！ 今度こそ帰るねーんじやー、転移！」

パッ

ユタと呼ばれた方は僕に大小一本ずつの刀を手渡し転移で消えていきました。

「あんの新参神の癖にいつもふらふらと！ まあ良いわ。プシユケが貰った杖はもうあなた専用になつてるわよ。それもこれ以上無いくらいに付与がされてるわね。それにライの貰ったものも同じね、まったくもうーこんな凄いのばかりポンポン造つて配り歩くなんで何考えてるのよ！」

「にやんでリントまでくれたのにや？ ネットレス風の首輪がつけられてるにやよ？」

本当だ。綺麗な首輪、それにも同じ魔力が内封されています。

「アイツは大の猫好きだからね。それにムルムルと私にまでご丁寧に、ライ渡した時目が向いたでしょ、その時につけられたのよムルムルなんて、数段階は階位が上がってる

わよ魔石自体を操るなんて、悔しいけど私には真似できないわね」

本当にあきれ顔でそう説明してくれました。

「まあ良いわ。全員が強くなるんだから悪くはないわね。それにムルムル、スライムの最上位を超えてるわよ。今なら生きたドラゴンだつて一呑みにパクつてできるかも」

「おぉー！　ムルムル凄いよー！」

ぶるつぷる

「ぬふふふ。私の騎獣ですもの！　じゃあこんな地下にはおさらばして、一度お屋敷に戻るんでしょ？」

「慌ただしい神様でしたが、そうだね、父さんにファイアーアントを渡して旅に戻ろう。行つくよー。転移！」

パツ

「到着。父さんはいるみたいだね」

気配で父さんがいるのが分かったのですが、僕の部屋に転移して帰ってきて思い出しました。穴を開けたままで出かけたのでしたね。なんとか穴は板で蓋がされていました。

「ライ、土魔法で直せないの？　これってあの時のライ！　ヤバいわ。胡桃が！」

「え？　あつー！　ど、どのくらい大きくなるの！　この前の！　池の横で間に合うか

！ 転移！」

パツ

「もう持つてられないわ！ お願いライ！」

もう直径が十センチを超えるくらい大きくなった胡桃をぶるぶる震えながら支えているテラの頭の上からそつと取り上げ、池までは三十メートルくらいのところにポイつと落とすと、一気に根が地面に潜つていったかと思えばずんずん大きくなっていきま

す。
「ま、巻き込まれるわよ！」

「これは早いです！ 予想以上に成長が！ 転移！」

パツ

屋敷前まで転移で戻り、二百メートル先の胡桃を見たのですが、既に急成長が止まり、先日の御神樹様の木よりも半分くらい小さいですが、それでも大きな胡桃の木が立っていました。

「ライ坊っちゃん、また。」

後ろから声がかかけられました、カヤッツです。

「また立派な木だな。ライはこの屋敷を森にするつもりか？」

父さんも出て来たようです。

「ごめんなさい、本当ならもっと早くに別の場所へって考えていたのですが」

「ファイアーアントの巣にもぐって日日光がなかったから、それで成長が止まっていたのを忘れていて。外に戻った途端に成長が始まってしまったの。本当にごめんなさい」

テラも肩の上で頭を下げて謝っています。

ですが父さんはなぜか啞然とした顔を、カヤッツは呆れた顔を僕達に向けています。

「へ？ ファイアーアントの巣に？ もぐっていただけと？」

「はああ、坊つちやんまた無茶を。何百万匹いるかも分からないのですよ、お怪我はありませんか？」

「はい。全部倒しちゃったので、大丈夫です。誰も怪我はしてません」

「倒した？ 全部？ おい。出してみろ。それが本当なら国境警備の見直しに待つて貰わねばならない」

そう言うので、テラが耳元で『女王を出しなさい。お土産よ』と言うので、女王を出すことにしました。

「一番大きいの出しますね。ほいっと！」

「ライ大きいって何を出——！」

ズボンと地響きをさせ女王の胴体と、その手前に頭を出して、後、頭が大きくて牙が

立派なやつを数匹出しました。

「カヤッツ。ファイアーアントの女王蟻に見えるのだが」

「ええ。私にもそう見えますね、それも特大。この大きさの半分くらいの個体が今まで発見された最大のはずです。その個体も倒せなかつたはずですが」

「済まないが妻に王城へ飛んで貰わなければならんな」

えつと、喜んでもらえらると思つたのですが。

テラ、起こられそうだね。

（ああ！ どうしましょう！ 嫌われちゃうの！ こんな時はどうすれば良いのか分からないわよ！）

ちゆ。落ち着いて、僕が説明してみるからね。

（またキスされちゃった！ それもお義父さんの前で！）

「父さん、あのね駄目な事したなら謝りますごめんなさい」

父さんとカヤッツはそろって呆れた顔をして僕達を見ながらこう言いました。

「良い知らせだよ」

今度は僕と、テラが驚く番でした。

第99話　これはもしかして！

「実はな。ライが一週間前に門の詰所に置いていった奴らから聞き出したのだが、ファイアーアントを使った作戦は、あの三人以外も期間を少しずらずらしながら行う予定だったみたいだな」

父さんは、女王さんを見たまま口だけを動かし、言葉を続けます。

「あの三人が失敗しても、また次の者が作戦に投入される予定だったのだ。だから今回ライが倒してしまったなら？　そもそもファイアーアントの巣が全滅なら？　帝国がファイアーアントを使うため、何人巣へ送り込もうが、その作戦はやりようがなくなる」
「そうですよ坊っちゃんお手柄です」

ようやく女王さんから視線が外れ、二人とも僕達の方へ向き直りました。

「うむ。その事で王国は国境の砦へ兵を出すために動き出している。それを止めねばな。出兵はサーバル領を一年は賄えるほどの資金が必要だ。今ならまだその出費をかなり押さえられるからな。よし、カヤッツ私は王城へ登城するから屋敷は任せたぞ」

「はっ」

「あつ。そうだ父さん、ファイアーアントでうちの兵士達に鎧を作れないかな？　たく

さんあるからみんなの分を作れると思うんだ」

「ほう。それは名案だな、ライ。ありがたくその提案は受け取る。今の魔狼とオークの素材より何倍も強く、そして軽い鎧ができるな。カヤッツそれも頼む」

「はっ。では行つてらっしゃいませ旦那様、少しでもお早い方がよろしいかと」

「うむ。ではな」

父さんはそう言うのと小走りに屋敷へ戻り中に入った途端『おい王城まで連れて行って欲しいんだけど』『えーまたあ』とすぐに母さんに出会えたようです。

「カヤッツ。どれくらいあれば足りるかな? いっそのこと全部わたそうか? そして

この国中の兵士さんに装備して貰えれば、強くなりますよね? あっ! そうです、お安くで良いから冒険者の方達に売ればサーバル男爵領の儲けにならないかな?」

「ほう。それは良いですな。普通に買うとして大銀貨で数枚はしますからね、その値から少し下げて、いっその事グツと押えて大銀貨一枚で売れば、相当な儲けになりますよ坊っちゃん。しかし私の収納がまだそこまで入るかどうかですな」

「それなら小分けにして渡していこうか? サーバル領のみんなに配つても余るくらいあると思うし」

「そうですね、うちは領兵が旦那様の人気で多い方ですが、今は一人ですからね、素材にその倍あれば十分には賄えますので、それからお預かりできますかね」

「うん。じゃあ渡していくね」

カヤツツは部下を連れてきて、分担しながら収納して、なんとか二万匹を収納し終え、『これで鎧ができるんだと』『マジか！ カッコいいぞ』『皮鎧は汗くさいからなあ。正直嬉しすぎるぜ』なんて呟きながら職務に戻っていききました。

喜んでくれているみたいで嬉しいですね。

カヤツツ達を見送ったその後はニンテールの子供達が飛びかかってきてわちやわちやにされ、髪の毛はぼわつてなってますし、ヨダレでベトベトになりましたがムルムルが僕達を包み込んで一瞬の間に綺麗にしてくれました。そして転移で街道に戻ったのですが、そこにはテントを張った冒険者達が多数。

「何してるのでしょうか？ お昼の休憩にはテントまで張ってますし、もしかしてニンテールを待つてるの？」

「そうかもね。もう戻っては来ないのですが、教えてあげようかな？」

「ライ、それは言うだけ無駄にや。その内諦めるにやよ。放つておいてリント達は旅を続けるのにや」

「そうだね。じゃあ行こうよ」

そして、チラチラ見られましたが、僕達は街道を進む事数日。

二つの村と、一つの町を通り過ぎ、ついにダンジョン街へ到着しました。

「はい。次の方」

「はい。僕達の番が来たよ、プシユケ、リント行くよ」

ダンジョン街の冒険者ギルドで、ダンジョンに入るための登録と、ランクアップができるかどうか聞かないと行けません。

ランクアップは時間がかかるかもと聞いていますので、しばらくダンジョンで楽しまなければいけませんからそんなに急いではいませんし、まだまだ朝ですからこの後すぐにもダンジョンに向かいたいのでこの朝の順番待ちが物凄く長く感じました。

「おはようございます。ダンジョン——」

「オラどきなガキども!」

「ん? 何か急ぎでしょうか? スタンピードでも起きそうとか?」

五人パーティーですね。その方達は何やら先を急いでいるのか僕達の番のところにそう言ってやって来ました。

「バカかお前は! スタンピードなんざ起きてねえよ! 俺達Cランクパーティーだ。駆け出しのガキは黙って順番を明け渡せば良いんだよ! オラどけ!」

そう言って僕と、プシユケを合わせて殴ろうとしたのか拳を横なぎに振り回してくるじゃないですか!

これは僕が避けるのは余裕ですが、プシユケは驚きの余りリントをきゅつて抱き締め

第100話 冒険者ギルドでテンプレ

「くふふふ。ついにこの身でこの展開を経験する事ができちやいました！」

「ライ。嬉しいのは分かったから、この状況をなんとかしなさいよ。周りのみんなが見てるわよ」

テラがまたそう耳元で言ってくれましたから、頑張りましょう。それにまだ僕は怒ってるんですからね。

床に膝をつけて折れた右腕を庇うようにしているお兄さんに文句を言ってあげませんと。

「それでお兄さん達は何を急いでいたのですか？ 何も暴力を振るわなくても話せば分かることなのですよね？」

「ぐああ、て、てめえガキ、何しやがった！」

腕の折れたお兄さんは、そんな事を言ってきましたが。

「殴られそうでしたから、腕を蹴り上げただけですよ」

「なあ少年。あの動きの腕を蹴り上げたと聞こえたが、本当か？」

カウンターにおいて、次僕達が受付するはずだったおじさんが立ち上がり話しかけてき

ました。

「はい。肘のところをトンってこんな風に。シッ！」

今度は見えやすいように、蹴り上げたところで止めてあげました。

周りにいた冒険者達も、注目していますからここはドヤ顔？

「やめておきなさいね。ほらみんながいきなりそんな動きをするからビックリしちゃってるでしょ。謝っておきなさい」

「あつ、そうですね。皆さん驚かせてしまつてごめんなさい」

「い、いや、だが今の動きで、こいつの攻撃を蹴り上げ、軌道を反らしたのは良く分かつた。でだ、そのうずくまつてるお前の事だが、Cランクと言つていたな、ギルド内であからさまな暴力を振るつた訳だが、Eランクに降格だ、それから五年間の昇格停止処分、それが終わった後その間の依頼の受けた数や素行を見極めた後、試験だな、ギルドカードを、これか。ふん！」

ブチツと首から下げていたギルドカードを紐を引きちぎり取り上げました。

「ま、待つてくれ。Eランクじゃあダンジョンの一階層で角ウサギ討伐と薬草採取しか依頼が無いじゃないか」

「残念だがこれは規定だからな、今さら覆らんで。まあ修行のやり直しと思ひ観念するんだな」

「待て、サブギルドマスター。その男はCランク、現状の依頼達成状況を確認するんだ」
また奥から一人出てきましたね、受付していたのはサブマスさんだったのですね。

「はあ。ギルドマスター。分かりました。少々お待ちを」

「それと、そつちの少年の分もだ。いかに振るわれた暴力とは言え、肘を蹴り砕くのはやりすぎだ。どうせEランクに上がったところだろう見習いに落とすくらいはせんと、後のためにならん」

「ん、では、ギルドカードは渡しますが、折れたの治せば良いですよ？ それなら降格も無くなりますし」

ギルドカードをサブマスさんに渡すとCランクだったので驚いていますが、今はそれより治してしましましょう。

僕の足元で座り込んでるお兄さんの手を取ります。

テラ、ナインテールの時みたいにお願いな。

（はあ。仕方ないわね、まず手首を掴んで、肩は足で良いわ、真っ直ぐに引つ張るのよ）
うん。

「お兄さん少し痛いですが我慢して下さいね。んと、うん綺麗に折れてますから簡単です、いきますよ」

持ち上げるだけで痛そうですが、素直にしたがってくれます。

「くうつ、な、治すつてお前、どうやって」

「二気に引つ張りますから暴れないで下さいね。ほいっと！」

ゴキンと鳴りましたが折れてませんよ。真っ直ぐになるように引つ張つた時に手首の間接と、足を添えた肩の間接が鳴つただけですからね。

「ぐあつ！ や、よし、引つ張つて骨の位置を治すのか。やつてくれ！」

（もう少し引つ張つて！ そして少し右に！ そう！ そこで右に捻る！ いやいや、お兄さんから見てよ！ そうそうそこ！）

「回復です！ ぐるぐるー、ほいっと！」

ナインテールの骨が折れていた時に治したイメージで、お兄さんの肘に魔力を流していきまます。

「何をやってるんだ少年。君が折つた腕を添え木でもするなら——」

「ぐうぐ。ん？ なんだ？ 痛くねえ。ガキお前こんな回復魔法は教会の術師でもいねえぞ」

「は？ お前、まさか治つたのか？」

（大丈夫よ。しつかり繋がったわ）

ありがとうテラ。ちゆ。

（ま！ またキスされた！）

「たぶん大丈夫ですね、少し動かしてみて、違和感はありますか？」

お兄さんは折れていた右手を曲げ伸ばし、捻り、指も握って開いて色々試しています。「お、おい。そんなに動かして大丈夫なのか？ 肘が完全に横へ曲がっていたのだぞ？」

「ああ。もう全然なんともねえ。ガキ。いや、少年。すまなかつたな」

お兄さんは座り込んだままですが、頭を下げ謝ってくれました。

「ギルドマスター、こちらの少年の事なのですがこちらを」

「ん？ なんだランクアップの申請。Sランクだと！ 二枚目は速報か。隣国の王の印まであるじゃないか！ これはファイアーアントの巢を単独パーティーで壊滅！」

おお。ちゃんと届いていたのですね、王様はファイアーアント討伐を冒険者ギルドに出したのでしょうか？ そう聞こえましたし。

「なあ。少年はファイアーアントの巢に行つたのか？ ここから数日行つたところから森に入る」

「はい。そこですね。ドワーフさんの村を越えてまだ更に奥でしたよ」

「はは。勝てない訳だ、俺達はその場所にさえ行けなかつたからな」

お兄さんもファイアーアントを倒そうと頑張つたのですかね。

「少年、すまないが奥まで来てもらえるか？ ここでは少し話せないのな」

奥でギルドカードがもらえるのかな？ そう言えば審査がどうか言つてましたね。

でも、せっかくの冒険者ギルドで先輩冒険者に絡まれるテンプレは、なんだか微妙に不発でしたし、ちよつと残念です。あつ。行っちやいますから付いて行きませんかね。

第101話 二つ名

「そつちに座つてくれるか？」

「はい」

僕はギルドマスターさんとサブマスさんに付いてきて、応接室のような部屋に通され、並んで席に着きます。

向かいにはギルドマスターさんとサブマスさんが並んで座りました。

「パーティーぐるぐるの四・四名で今回ランクアップの審査を受けてもらいたい。サブマス」

「はい。まずは隣の王国での討伐。ヒュドラの件ですが九本首で間違いないようですが、後で見せてもらいたいのと、この国のファイアーアントの件も女王蟻は置いてきてあるとの事ですが、他の多数をある程度見せてもらう事はできますか？」

「はい。問題なく見せることができます。ですが、ヒュドラは大きいので、そうですね。今から先に見せましょうか、お屋敷にじやなくて、街の外で良いですかね。転移！」

パッ

「到着。では——」

「のわっ！」

「えはっ！」

「きやつ」

あつ、みんな座っていましたから後ろに転けちゃいましたね。

目の前の二人はそれはもう見事にゴロンと。プシユケもリントを抱えたままコロんと。

「ギルドマスターさんにサブマスさん。それにプシユケもごめんなさい。座っているのを忘れてました！」

「はあ、本当にごめんなさいね。ライ、気を付けなさいよね」

「て、転移だど！ その若さで転移までマスターしていようとは、それにこれから見せると言う事は収納も持っているようだな」

二人は自分で立ち上がりながら汚れを払いおとしますので、僕はプシユケの手を取り起こしてあげて、背中やお尻に着いた土や草を払いおとしてあげました。リントを抱えたままでしたのでリントは無事でしたよ。

「はい。では出しちゃいますね、ほいっと！」

広い草原ですから大丈夫ですね。ズズンと胴体。ズズズンと首を九本を右側に出して、左側にはファイアーアントを、ドドドドドつとヒュドラの胴体と同じくらいの高さ

まで積み上げた状態にして出してしまいました。すると二人は左右をゆっくり首を動かしながら見て、僕の方に向き直りました。

「よ、よし。ヒュドラは九本首、ファイアーアントもこれだけの数があるのを確認した」
ほつ。良かったです。門の方から声が聞こえていますが、大きいですからね、見て驚いているのでしょうか。

そして、二人は『検分』するから少し待つてくれるかとまずはヒュドラを見に行き、切り口や色々、牙の大きさなんかも見ているようです。

「切り口と言うか傷がこの首を切断した傷以外が無い。ファイアーアントもここから見るに首を切つてあるようだな」

「ギルドマスター。二つ名は『首斬り』か『首狩り』『首断ち』この三つ、『斬首』と言うのも」

「なんだか物騒な言葉が出ていますね？ 二つ名と聞こえましたから僕達の二つ名でしようか！ その中でしたら『首斬り』がカッコいいかもですね♪」

「ふむ。だがこの切り口は風魔法だろう。ならば、『風使い』は先代が亡くなられて久しい。その名を継ぐ事にこれほど相応しい者はいないだろう」

「おお！ 『風使い』ですか！ お屋敷にあった冒険者の偉業が書かれた本に載っていましたよ！ 確か百年ほど前に活躍した方の二つ名です。」

「ライ。その『風使い』はあいつよ。だから死んじやあいないわ。バリバリの現役で今は違うところにいるようだけどね」

「ん?」!

「ライは刀をもらったでしょ」

刀を。

「あの方が?」

「まあ。なんにせよ、二つ名ももらえるみたいだし、良かったわね」

うん。それは本当に嬉しいです。そして二人はヒュドラを見終わりに、ファイアーアント見に行きました。

「なんだよ、ギルマスとザブマスがいるじゃねえか。おい! 大丈夫みたいだ! ギルドマスターとザブマスが検分しているだけだ!」

「つたく。どえらいもんがいきなり現れたから、肝を冷やしたぜ。しかしでけえな?」

門から沢山の方が近付いてきているのは知っていましたから驚きませんでした。皆さん武器を手にして警戒してたのですね。

「どこの軍隊が倒したんだこれ。ファイアーアントも腐るほど倒してるじゃねえか」

「そんな遠征話は聞いたこと無いが、これが街に流れれば少しは安くならねえかな?」

そろそろ俺の鎧もヤバイからな」

うんうん。ここでもファイアーアントの鎧は人気のようですね。これは作ってもらった物を持って来れば、この街は冒険者が多いので、大繁盛かも知れませんか。

そんな事を考えている内に、検分が終わったようで、ギルドマスターさんとサブマスターさんが戻ってきました。

「なんだ？ お前ら依頼は良いのか？」

「いきなりデカイのが現れたからな、一応見に来ただけだが、しかしこのヒュドラはデカイな」

「ああ。冒険者ギルドが把握している中で一番デカイやつのはあるな。新記録だ。それに一パーティーで倒したファイアーアントの数もおそらく記録更新しているだろうな」

「「一つのパーティー!?!」」

「ああ。また発表はギルドの掲示板に貼る。ほらほら仕事に戻れ。これで依頼失敗などしては依頼者に顔向けできんぞ」

「だなあ」「よし行くか」「ヤベエ」「走るぞ」など色々な声が聞こえ、各々元来た門へ戻っていききました。

「よし。俺達も戻ろうか」

「はい。では収納！」

ヒュドラとファイアーアントを収納して、転移で応接室に戻りました。

「キヤー！」

バシヤツ、カランカランとお茶が入っていたと思うコップとポットを落としたお姉さん。

ちやうど、部屋に入ってきたところだったみたいです。いきなり現れた僕達に驚いてしまったみたいです。

「お姉さん。ごめんなさい。火傷はしてませんか？」

「ひゃ、ひゃい！　ち、ちよつと驚いただけです。あつ、せつかくの高いお茶が」

「ライ。今度からは転移する時は気を付けなさいよね」

「ムルムル。床を綺麗にしてくれるかな？」

ぶるぶる

ムルムルは肩に乗ったままみによくんと伸びて、床を濡らしたお茶に覆い被さりあつという間に汚れもなくなりました。

「ふむ。中々の物だ。従魔登録されていたな、テイマーでもあるのか。ますます似てるな。よし『風使い』で決まりだ」

二つ名が決まったみたいです。

第102話 Sランク試験

「分かりました『風使い』はライ、パーティーぐるぐるのメンバー、まあ君達が名のれる二つ名だ。個々の二つ名はこれからだな。ふふつ、かの『風使い』は『猫遣い』とも呼ばれていたと言う」

「リントは冒険者で、ケット・シーにや。猫とはほんの少し違うにやよ？ 魔法も使える大魔法使いにや！」

「ぐつ、そ、そうだったな。では『スライム使い』だな。弱そうだが」

ふるつふるつと震えと突起を伸ばしブンブン振っています。五センチほどの長さですが、ムルムルも大切な仲間ですよ。

「んん。では、すまないがお茶をもう一度頼めるか？ まだこれから説明があるからな。おつとその前に君達のギルドカードを一旦Aランクにする。今のCランクのギルドカードを預からせてくれ」

「分かりました。ほいっと！ 僕とテラ、リント分です」

「はい。私のもよろしくお願いします」

ギルドマスターは四枚のカードを落としたコップとポットを拾い上げているお姉さ

んに渡し、『暫定だがAランクに登録だ。頼む』と言つて渡すとお姉さんは受け取りそのまま応接室を出ていきました。

くふふ。金色になるはずですよね♪ 凄く楽しみです。

「よし。まずは座つてくれ」

僕達は話を聞くため、転移前に座つていた場所に座り、ギルドマスターさんが喋るのを待ちます。

「まずは、昇格おめでとう。その若さで暫定とは言えAランクになった者はほんの少しだ。ふう。まったく羨ましいぜ、俺なんか引退寸前にやつと上がったんだぞ？」

「それはギルドマスターの素行が悪かったと聞いていますか？」

「ち、ちよつと酒飲んで暴れていただけじゃないかな。あはは。つとそんな話は置いてだな。試験を受けてもらう」

お酒を飲んでどんな暴れ方をすればAランクに上がるのを止められるのか気になります。試験ですか。

「はい。どのような試験ですか？」

「この街はダンジョンが有名な街だ。だがまだ誰も攻略者はいない。おつと早とちりをするなよ。何も攻略してこいとは言わない。この街最大のダンジョンへ潜つてもらおう」

「おおー！ ダンジョン攻略が試験なのですわね！ ぬふふふ。楽しくなってきましたね、食材は大丈夫ですから、調味料を少し買い足しておきましょうか。」

「ん？ 聞いてるのか？ 一度しか言わないからな。でだ、そのダンジョンの最高攻略階層は四十八階だが、四十階層を攻略してもらう。そしてその四十階層にはとある魔物が出るんだが、そいつを倒すと次の扉が開くんぞ。そこをくぐり、ダンジョンカードの階層表示が四十一階にして戻ってきてもらう。簡単だが、そう簡単には無理だがそれが試験内容だ」

「それからお塩と、胡椒があると嬉しいのですが、後は油や果物も買っておきましょうか。」

「うんうん。楽しくなってきましたね♪ ダンジョンの完全攻略！」

「ギルドマスターお茶をお持ちしました」

「ああ。すまないな。ギルドカードもできたか？」

「はい。一緒にお待ちしました。こちらを」

「はっ！ お姉さんが戻ってきましたね。おお！ キラキラですよー！」

「くくくつ。私もAランクに上がった時はそんな顔をしていたのかな。よし、待たせるのも酷だな。早速渡そうか、まずはライ」

「はいー！」

僕は立ち上がり、ピシッと音が出ていてもおかしくないくらい勢いよく立ち上がりました。

「くくくつ。Aランクおめでどう」

「ありがとうございます！」

「次はテラ」

「私ね♪ はい」

「そうか、ま、まあ良いだろう。Aランクおめでどう」

「ぬふふふ。これは通過点ね♪ 時期にSランクよ！」

テラ、どこの悪役かって顔も可愛いね、あつ、カードは僕が持つておくね。それからムルムルを引つ張り過ぎないでね。

「ははは。ではプシユケ」

「はい！ よ、よろしくお願いたします！」

「うむ。Aランクおめでどう」

「ありがとうございます！ 痛っ！ 舌噛んじやった〜」

くふふ。噛んじやいましたね、回復魔法です、ほいっと！

「くはははつ。気を付けるんだぞ。最後はリント」

「はいにゃ！ 大魔法使いリントにゃ！」

「そ、そうか、だ、大魔法使いリント、Aランクおめでどう」

「ありがとにや！ にやふふふ。キラキラにやー！」

リントはテーブル上で立ち上がり、ちゃんと両手で受け取りました。それを大事に抱えています。僕が預かっておきますからね。

そして僕達は暫定、試験を終えるまでですが、Aランクになりました。

よし、まだ早い時間ですから早速準備してしましましょう。

「これで終わりだが、受付でダンジョンカードをもらってから行くんだぞ、それを忘れるともう一度潜らないと、試験が終わらないからな」

「はい。さっそくこの後もらってきます」

そして受付に行き、ダンジョンカードの申請を済ませ、僕達は街へ買い出しに向かいました。

「ライ、お菓子が売ってますよ！ はわわくクッキーです。買っていいかない？」

「おお！ そう言えばお菓子は考えていませんでした。甘いものは必要ですからね、沢山買っていきましよう」

「ライ、お魚があるにや！」「こつちには卵が売ってますよ！」「ライ！ この時期に冬用の服があるなら、寒い階層があるのね。買っておきなさい！」

屋台や露天を端から順に巡り歩きますとどんどん買い物を続けている時、後ろを通った

馬車からあの人攫いに捕まった時の、臭い匂いがしました。

「あれ、この匂いは、テラ、今の馬車から——」

「任せて。んん神眼！あたりよ、後を付いていくわよ！ そうだ、ライこの前の透明なる

魔道具を二人とも着なさい。急いでその路地にはいるのよ」

「うん。行くよプシユケ、リント！」

僕は手に持っていた商品を露店の絨毯の上に戻し、細い路地に入ると、背負子と透明になる魔道具、それと気配を隠す魔道具を装備して、プシユケがリントをマントの下に抱えて背負子にのり体をロープで縛ると一気に僕は屋根の上に飛び上がり、屋根伝いに、大通りを進む馬車を追いかけてました。

第103話 人攫いの黒幕は

「プシユケ、リント、近くによった時は声を出さないようにね、透明で気配は消していますが声は聞こえるかもですから」

「うん。分かった息も止めるね」

「プシユケそれは死んじやうにやよ。息はするのにや。静かくにするにやよ」

そうだよね、リントの言う通りですよ。でもどこに向かっているのでしょうか、馬車はどんだん街の奥へ向かって、人がゆっくり走るくらいの速度で進んで行きます。そしてその先に見えたのは、白い壁がとても綺麗な大きな建物で、白く高い壁に囲まれ、その門前には、白いロープを着た方達が槍を持って立っています。

「中に入っちゃいそうだよね？ よし。馬車の屋根に飛び移るよ。シッ！」

大通りを挟む家の屋根で加速して飛び降り、音を立てないように着地。

（三人の子供ね。空腹みたいだけど怪我とか病気じゃないから良かったわ）

そうなんだ。少しだけ安心できるね、多分人攫いにあつた子供達が、集められてる所に行くよな？ あれ？ 冒険者達はどこに連れて行かれたのかな？

（また、別かも知れないわね。ほら白い壁の中に入るわよ、頭打たないようにね）

言われて気が付きましたが、馬車の屋根と門との隙間は一メートルほどしかなく、立つてると確実にぶつつけちやいますね。

背負子にプシユケがいますからぐつと身をかがめ、腕立て伏せをするようにしてやり過ごします。

壁を抜けるとそこは教会のようですね、真つ白なローブを着た方がちらほら見えています。

馬車は目の前の建物をぐるりと回り込むように進み、裏に合つたもう一つの大きな建物に馬車ごと入りました。

中の気配を探ると地下に沢山の気配がありました。そして最近感じた気配と同じ、ダンジョンの気配の中にです。

テラ、ダンジョンがあつて、その中に沢山の人がいますよ。

(そうなの。ちよつと待つてね。んん^{神眼}。冒険者もいるわ、もちろん子供達も。もしかしたら人攫いの本拠地はここかもね、みんな奴隷の魔道具を付けられているわ)

これは、父さん達に知らせないといけませんね。一度お屋敷に帰らないと――。

(止まつたわ。ライ。人攫にあつた人達の居場所を見てからちよつとだけお屋敷に戻つて、カヤツツで良いわね、この事を知らせてすぐにここへ戻つてきましょう)

うん。それが良いね。あつ、止まりました。

止まったところは、金属でできた大きな扉です。

「何人だ?」

「冒険者の馬車は今ごろ門で止められているが、いつもの事だ、その内来るだろう。今回は冒険者が五人、子供は三人だ。近頃は検問が多くてやりづらいな、誰かがしくじったのか?」

「まだ分からんが、これだけ大々的にやってるんだ、警戒も厳しくなるのは当然だろう。まあ良い、中で下ろして報酬を受け取って次を攫いに行け」

「へいへい。毎度あり〜」

金属の大扉が、ギギギと音を立て開いた後、馬車のまま進み中に入っていったのですが、目の前に広がったのは、広大な花畑で、そこでは沢山の子供達があちらこちらで畑仕事をしているようです。

馬車は花畑を二つに分けるようにまっすぐ引かれた畦道あぜを進み、奥に見えてる家々へ向かっています。

街の中のダンジョンの中に街を作るなんて凄い事を考えましたね。

(作っているものは、麻薬の素材よ。上手く使えば鎮痛剤としても使えるんだけど、おすすめはしないわね。使い続けると体も心もポロポロになるわ。ライは元々効かなさそうだけど、プシケも今なら効きもしないでしょうね)

そんなの？

(放浪癖の神に色々付与されちゃったからね。あら、ここで引き渡すみたいね)

立ち並ぶ家々の真ん中にある広場で馬車は止まり、御者台にいた二人が降りてきて、一人は向かいの家に、一人は馬車の戸を開けるようです。

ガチャ。と音を立て鍵が開けられ、戸を開きました。

「おら！ ガキども降りてこい！ さっさとしねえか！」

くう。皆さんの場所を確実に把握するまで我慢ですよね！

(ライ。もう——)

カーンカーンカーンとテラが念話で話しかけていたのをさえぎり、半鐘が鳴らされ畑に散らばっていた子供達が一斉に、こちらを見て立ち上がりました。

そしてとぼとぼと力無く歩いて戻ってくるようです。

「なんだよ交代の時間だったか、うるさくて仕方ねえぜ。お前らは次の鐘の音が鳴ってからだが観念して働くんだな。もたもたするんじゃないやねえ！ こっちだ！」

びくびくしながら降りてきた三人の男の子達は、木の棒を持った人攫いに追いたてられ向かいの家に仕方無く歩いて行きます。

(ライ。こうなつたらみんなが集まったところで奴隷の魔道具を無力化して、一気にお屋敷に連れていくわよ。中には犯罪奴隷がいるからその人は除いてよ。さあ付いてい

くわよ！)

付いて中に入るとそこは物凄く広い部屋？ 部屋じゃないですね。広場にぼろ布を被つて寝ていた子供達が起き出すところでした。その数は？

(七百人を少し超えてるわ。これに犯罪奴隷を含む冒険者がダンジョンの奥にいるから、倍はいるわね)

その時です。僕達が入つてきた戸からぞろぞろと畑仕事を終えた子供達が、この広場に入つてきました。

テラ。やつちやうよ！

(ええ。ここには犯罪奴隷はいないわ！ やつちやえ！)

(やれにや！ こんにやの許せないにや！)

プシユケも僕の肩をポンポン叩き、急かしているようです。

いきますよ！ 奴隷の魔道具を！ ぐるぐるー！ ほいっと！

魔道具はすぐに、機能を失います。それはこの広場にいた子に付けられていた物だけでなく、外で畑仕事をしていた子のまで全て。子供達をみんなをまとめて—— 転移

！

パッ

第104話 救出開始ですよ

「カヤッツ！ この子達をお願い！ 人攫いの犠牲者達です！」

門前に転移してすぐに透明ローブを脱ぎ、詰所に向かって叫びます。

「何事です！ こ、これは！」

「カヤッツ！ 人攫いにあつた子達なの！ この後冒険者達も連れてくるから、手配をお願いします！」

「ライ！ オークを出して！ 沢山よ！ この子達と冒険者達もお腹を空かせるからね！」

「うん、カヤッツ、マシユーにも手伝ってもらつて下さい！ ほいっと！」
ズドドドと門の横に、数百匹は出しておきます。

「坊っちゃん、もしや人攫いの本拠地を見つけたのですか！」

「うん！ たぶんラビリンス王国のダンジョン街にある教会だよ！ 父さんにも伝えてね、よし、戻つて次は冒険者達もたすけちゃうよ、転移！」

パツ

「何て事だ。確かあそこの教会は教国の.....こうしちやおれん！ 俺は旦那様にご報告へ

行く。お前はマシユーに知らせろ！ お前とお前は門番を継続！ 他の者はこの子達

を休ませる場所を手配しなさい！」

「はっ！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

広場に戻つて来たのですが、流石にあの人数が消えたのですから大騒ぎです。

「探せ！ どこだ！ 一人たりとも無駄には出来ないんだぞ！」

「ダンジョンの罠か何かが発動したんじゃないのか！ おい！ ダンジョンに詳しいやつはいないのか！」

「ここは、もう放つておいて——。」

（ライ。表の花を全部刈り取つてしまつてくれない。それから麻薬を作つた物が保管されてるからそれも取り上げてしましましょう）

麻薬は駄目だからね。分かつたよ。外から行くよ！

素早く広場から、花畑の真ん中に転移。

パツ

花畑の真ん中からウインドカッターは止めて、お花を全て収納です！

一瞬の内に一面緑と白の花畑が、茶色い地面に早変わりしました。

（ライつて無茶苦茶ね！ 普通は生えている物は収納できないのよ！ つてもう良いわ

！ それならこの階層の物を全て収納しちやいなさい！
(やつちやえにやー！)

ぷるっぷる

パンパン

みんなの声援を受けましたから、やる気全開ですよ！ ぐるぐる〜！ 収納！

すると広場があつた建物以外が無くなり、家の中にいたのか、裸になつたおじさんやお兄さんが沢山なぜか抱き合つたり、ちゆつてしてる人達までいました。

(ん〜。まあ良いわ、放つておいて広場に戻つてそこもやつちやえ！ そしてダンジョンに入つてる人達を開放するわよ)

僕は領き、広場へ転移。ここでも収納、パンツを残すのを思い出してあわてて戻しました。

そして見えていた、階下を下りる階段に向かい、急いで下りて行きます。

「次の階層入り口に扉なんか付けちやつてるじゃない！ 邪魔ね。もう見張りはやつつけちやいなさい！」

「うん！ ぐるぐるもしてたから上の全員も気絶させてるよ！ ほらもうすぐ！」

「なっ！ 声と足音が聞こえ——」

ドサッ

「おい！ どうした！」

ドサツ、見張りだと思われる二人を気絶させ、扉の鍵をぐるぐるで開け二階層に突入しました。

「ここは、草原と岩山ですね。気配は岩山方面にありますから飛びますよ！ 転移！」
パツ

「くそ！ なんでこんなところに下層にしかないはずの！ はっ！」

「ベヒモスなんてどこが弱点なんだよ！ せいっ！」

採掘用の大きなハンマーやツルハシで攻撃しているようですが、その大きさのため、足を叩くくらいしか出来ていませんし傷も付けることが出来ないようです。

「よ、よひ！ お前らは俺達が逃げ切るまでそこで足止めだ！」

声の方を向くと、三人が馬車から馬を外し、乗馬して逃げ出すところでした。

「ライ悪者よ、気絶させて上に飛ばしておきなさい」

もちろん逃がしませんよ。ぐるぐるだけでは間に合いませんから、少し痛いですよ！

「シッ！」

ドドドと三人のお腹に木の棒で一突きずつ。三人ともに手綱を手放し落馬。痛みに転がっている内に、気絶しましたので上に飛ばしておきました。そして。

「冒険者の皆さん。今から奴隷の魔道具を外しますからね！」

「んん^{神眼}！ ライ。顔に入れ墨のヤツ見たいに、色付きの服を着ているのは犯罪奴隷だから外しちや駄目よ！ 白服だけ外しなさい！」

「分かったよ！ ぐるぐる〜！ ほいっと！ 皆さんベヒモスから離れて下さい！ 犯罪奴隷の方も！」

「なっ！ からだの自由が！ 誰だか知らねえが助かる！ おいみんな離れるぞ！」

冒険者達はベヒモスへの攻撃を止め、一斉に離れ始めました。

「ふう。よし透明ロープは収納して姿を見せておかなきゃね」

「そうね。早くしないと逃げてる方達に向かい始めているわ」

僕は透明ロープ収納すると行きなり現れた僕達に気付いたベヒモスは冒険者を追うことを止め、その場に止まりました。

そして三メートルくらいある太い足を持ち上げ、僕に向けて下ろしてきました。

「動きが遅いですよ！ アルティメット・ウィンドカッター！」

あれ？ 五メートルくらいのウィンドカッターを出すつもりで放つたのに、倍以上大きな物が——！

グボオオ

上げていない前足を狙ったのですが、後ろ足もまとめ三本の足が切断されました。後ろにあった岩山もたぶん切れていますよね。

「言い忘れていたわ。威力はその刀で上がってるから、次からは少し練習してからが
良いかもね」

そして、ウインドニードルを頭に打つと、ベヒモスは煙のように消えていき、宝箱が
現れたのを見て、少しでも顔がにやけたテラとプシユケはすぐに真剣な顔に戻りまし
た。

一応収納しておきますから後で中身は見ることにしましょうね。

第105話 教会のダンジョン

「うおおおおおー！」

切れちやった岩山もついでに収納しておこうとした時背後から、そんな声が上がりました。

「少年！ 君が俺達の奴隷の魔道具を外してくれたのか！ ありがとう、あのままならほとんどの者がベヒモスにやられていただろう」

「スゲーな少年！ あのベヒモスだぜ？ Aランクの『闘う商人』が単独で傷だらけになりながらやつと尻尾の先を持ち帰った代物を、完封勝ち！ Sランクかよ！」

五十人ほどの冒険者と。

「かあー。大したもんだぜガキンちよ！ 俺の店の用心棒に雇いたかったぜ！」

「なに言ってやがる！ おまえの店はぼったくりで取り締まられただろうが！ 俺んところならちよーつとエッチな店だから俺んところだよな！ 坊主、今は脱税で捕まっちゃいるが」

犯罪奴隷の方も、褒めてくれてますので、嬉しいのですが、ぼったくりも脱税も駄目ですからね。

「あはは。まだ僕達はAランクですよ。ところでこれだけなのですか？ 他に捕まってる人もいると思うのですが？」

「いるぞ、半分はこの階層の入口横から入れる隠し扉の奥に七百人はいるだろうな。このダンジョンの五階層までを俺達が攻略で良いのか分かんが、半日交代で攻略している。どっちかって言えば攻略より、命がけで金、銀、宝石を採掘しているんだがな。魔物が出てはハンマーにスコップなんかを装備ではそこくらいまでが限界だ」

「そうね、今後はBランク以上を優先的に狙うように人攫いギルドに依頼しているようだよ。普通に装備をさせてくれれば二十階層くらい行けるのに、やる事は採掘だけ、五階層まではゴブリンにオークまでしか出ないわ」

「教会の奴らは二十階層へ到達したらしいぞ、二人ほど死んだらしいが」

だとすれば、この階層と下の階層を合わせて1400人はいそいですね。

「分かりました。では一旦、隣の国になります、サーバル男爵領に移動して、その後各々の国へ帰れるようにしたいと思います。ではその隠し扉に案内をお願いしますね」

色々採れるらしい岩山を収納して、下りてきた階段前に転移して、勿論驚きましたが、隠し扉の中にも十人の白いローブを羽織った教会の方がいましたので、ぐるぐるしながら倒し、気絶させておきます。

「ここも一緒よ、色付きは犯罪奴隷よ。やっちゃいなさい！」
「うん。ぐるぐる。ほいっと！」

そしてまたカヤツツにお願いをしに行つた時、王様と、宰相さんが来ていましたので捕まる前に転移で戻ってきました。

「王様来てたけど良いの？」

「うん。先にこつちの冒険者さん達を助けなきゃですよ」

「そうね、行くわよ！」

テラに見てもらつて分かつたのですが、三階層へは、一階層からの階段からまつすぐ進んだところにあるそうなので、走ります。

一気に三階層へ駆け下りるとそこにも扉があり、二人の白ローブの見張りがいます。

ぐるぐるしながら倒して気絶させ、扉を押し開けました。

「聞いた通りね、ここも草原と岩山、さっさとやっちゃいましょう」

「うん。任せて。えーつと、見つけた転移で行くよ。転移！」

パッ

ここにも三人の白ローブが見張りのためにいるみたいですが。

「な！ 行きなり現れたぞ！ 何者だ！」

「先を急ぎますので、少し痛いですが！ シッ！」

ドドドつとまたお腹に一撃を入れ、ぐるぐるで気絶させます。

後は繰り返して、奴隷の魔道具を外してお屋敷に連れて行く。

三階層分を繰り返して、五階層にいた方達もお屋敷に送り、その先にいる攻略を進めている方達を捕まえるため、次々と階層を下りて行きます。

「結構深くまで潜っているのかと思いましたが、十階層に固まっていますね、何かと闘っているようですが、ここでやつつけちやいますよ」

「やつちやいますよ！ 魔物がいるのでしたら私とリントちゃんややつつけちやいますよ！」

「任せるにや！ 早く扉を開けるにや！」

「そうね、終わるのを待っても良いけど、さっさとやつてしまいなさい」

「うん。行くよ」

これまでの扉より大きく、装飾が施された扉を開いていくと、一つ目の大きな魔物と闘っている白ローブの集団がいました。

「サイクロプスさんですか？ 初めて見ましたね。とりあえずぐるぐるしちやいますよ！」

僕が声を出したので、幾人かは気付いたようですが、それどころではないようですね。「援軍か！ 何人来た！ コイツいつものオークリーダーが出る場所にこんな奴が出や

「がった！」

「援軍だと！ なんでも良い！ 魔法を撃ちまくれ！ 打撃は効かない、目を狙えばコイツも大人しくなるはずだ！ 俺達は魔力切れギリギリだから頼む！」

「あら、ちょうど良いわね、サイクロプスを倒して、ぐるぐるしちやえば完了よ」

「うん。首を落とせば良いよね、ウインドカッター！」

僕の放った二メートル幅のウインドカッターは、鉄のこん棒を振り上げていた右腕も切り裂き、首を通りすぎました。

ぼわんつとサイクロプスは消え、宝箱が出ましたので、収納しておきました。

「良くやったわライ。奴らには触らせてもやらないわ」

「そうです。後の楽しみに取っておきましょう」

「おおー！ 良くやった！ 誰だ小僧は！ 子供は一階層にしかないはずだぞ！」

「あのですね、悪者さんには内緒です。それにそろそろ倒れますから、気を付けてくださいね。ぐるぐる。ほいっと！」

「何を言っている！ 奴隷がなぜここまで来たか知らんが、宝箱はどこに消えたのだ」

ドサツドサツと全員で十五人は次々と倒れ、立っているものはいなくなりました。

「よし。転移！」

パッ

「ライ。送るだけなんてあなた……」

「よ、よし宝箱を、覗いてみようか！」

「そ、そうね、それは大切なことね。罾がない事は出た瞬間に見ておいたから開けても良いわよ」

くふふ。テラだつて宝箱が気になっていたのですね。

宝箱を出し、この前みたいに全員で手を添え、せーので蓋を開けると中は――。

第106話 ダンジョン攻略開始です

「ふほほほ。宝石だらけよ！ あつ、ライその緑色の大きいの取つてくれないかしら。そうそれ！」

「キラツキラですね♪ じゃあ私はこの青色のを。きゅふふふ」
「にゅふふ。この赤いにはリントのにゃ」

それからしばらく宝石の品定めをしたり、キラキラの腕輪があつたので、またムルムの王冠を取り替えたりして遊んでいたのですが、ふと気になる事がありました。

「ねえテラ。このダンジョンは普段そこには出ない魔物が出てたようです。普通はそんな事はある事なのかな？」

「無いわね。調べてみた方が良いかも。その前に外の人攫いも捕まえておきましょう。そろそろ夕方だと思うからみんな戻ってきているはずよ。一網打尽にしてしましましょう」

一階層に戻り、透明ローブを羽織つてプシユケを背負い直し、表に出ました。

「まったく門を抜けるのに一日かかったぜ。密輸してる奴らがいてよ、その大捕物だ」
「ふむ。それはうちのではないな、今日は出荷は無かった筈だからな、よし冒険者は預か

るから武器や持ち物の買い取りをしよう、そっちのテーブルに出してくれるか」

ほうほう。こんなに遅くまで門を通るために並んでいたのですね。

まあ、馬車の冒険者さん達を除いて、ぐるぐるやってしましましょう。

テーブルに出された物を品定めしている内に魔力切れになり、その場で崩れ落ちました。

「テラ、壁の内側で、教会じゃない方はいないかな？　いないなら、一度にぐるぐるしちゃえるのだけど」

「その方が楽よね。良いわ任せて。神眼んん。この街の住民が二人。たぶん教会にお祈りにも来てるのかしらね、奉っている神は実在しないけど、その人の心の支えにはなっているのかもね」

「いないんだ！　でも確か、教国の教会だよ。それが作り物の神様なら駄目じゃないの？」

「良くはないわね。偽物の神様に祈る事で心が安らぐなら目もつぶるわよ？　これでだいぶ見えてきたわね、この人攫い騒動。これって」

「教国が犯人にや教国が絡んでる」

「リント。犯人はほぼ確定、人攫いだけじゃなく、麻薬なんかも相当作っていて、ばらまいている方もありそうだわ。帝国も怪しいのは変わりないけど、教国にも目を向けた方

が良さそうね。それから、教会を隈無く調べた方が良いかもね、それはお義父様達に任せるとして、その二人を教えるから他の奴は気絶させて、送っちゃえ！」

「うん。じゃあその二人を見付けてからやっちゃうね。テラ案内お願いできる？」

「任せて！ つて、あの建物から出て来た二人以外よ。探す手間が省けたわね」

「じゃあやっちゃうね。ぐるぐる」

ぐるぐるしてから数分後には敷地内で動ける者は僕達だけになり、まとめてお屋敷に転移してカヤツツにお願いしました。協会に戻り、敷地内の建物の中身も収納して空っぽにしたのですが、テラに見てもらおうとそれでも沢山の麻薬、お金、何かの取引の書類や、名前が沢山書かれた物が床下などに隠されていましたので、最後は建物ごと収納する事にしました。

「ライ。収納の容量が無限になっているから良いけど、たぶんお義父様達が必要な資料とかもある筈だからもう一度帰った方が良いわよ？ まあ、人攫い達は送ったから、それを調べる時間もあるでしょうし、このダンジョンの異変を見てからでも良いと思うけど」

「う、うん。じゃあさっきの十階層から続けて攻略しちゃおう！ 転移！」

パッ

ダンジョン十階層に戻った後は、十階層ごとのボスを倒して宝箱を獲得しながら、五

十階層のボス部屋で、お泊まりすることにしました。

「今のところ調子良く来てるわね。でもドラゴンまでもこんな浅い階層に出るなんてどうなっているかしら？ ダンジョンマスターが、攻略をさせないようにしてる？ まあ最下層に行ってみなきゃ分からないわね」

「ダンジョンマスター。異世界で、やってみたい事ランキングにありますよ♪」

「ねえライ。異世界って何？」

「にやゝ。ライは異世界から来たのかにや、たまに来てるよにや。召喚が流行った時はよく来てたみたいになよ」

「え？ リントちゃんもなんだか知ってるみたいだし、知らないの私だけ？」

「そっか。テラとムルムルそれにフィーアとテイには話したかな。あのね僕は」

前世の記憶があり、そこで死んだ事。

死んだ後神様にあつて、この世界で生きる事にした事をプシケとリントに話しました。

「うくん。なんとなく分かったような？」

「転生者だったのにや。リントは初めて見たにや」

「そうね。召喚よりは物凄く珍しい事よ。ありがたく思いなさいね、だから楽しむのよ」
「うん。いっぱい何でも挑戦したくてたまらないし、それが楽しくて仕方がないんだ♪

できればみんなとずっと一緒に色んな所に行ったり、経験したいかな」

「ん〜。分かった！　じゃあ私もライと冒険を続けられ、ライも楽しいし、私も楽しい！　良いよね？」

「にや〜。仕方にやいにや〜。リントもこの冒険の旅は気に入ってるから、最後までついていくにやよ」

「うん。うん。ありがとう♪　無茶苦茶嬉しいですよ！」

「あ〜。リントは良いとして、プシユケ。あなた学院に通いなさい。絶対に今後役に立つわよ。ライは家で相当勉強していたみたいだから、そこそこの知識があるけど、プシユケは常識的な事もたまに抜けてると思うの。村の中での知識しか無いわよね？」

「うっ！　お勉強苦手かも」

「そうだね。プシユケは僕よりずっと長生きだから少しずつでも良いかも知れないけど、今の内にお勉強しておけば、さらに良いのかも。父さんに頼むのは違うよね、よし。僕が稼いでプシユケに学院に行ってもらおう。」

「ライ。少し寂しいかも知れないけど、そうする事でプシユケのためになるから、私も協力は惜しまないわよ」

「うん。この事が終わったら、相談してみるよ。」

「プシユケもその事は今は置いておきましょう。明日のために寝るわよ！」

夜中、プシユケは『うー数字があー』とか、勉強をしている夢でも見ているのか、寝言を言っていました。その夜は何事もなく、過ぎ朝を迎えました。

第107話 ダンジョンでの出来事

「ファイアードラゴンだよ！ 火炎に気を付けて！」

「任せられるにや！ やっちやいますよー！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

プシケが『背負子じゃなくて自分で戦ってみたい』とのお願いから、一度十階層に戻り、戦いの練習を始めたのですが、思いの外上手く倒して行くので、リントも『リントもやれるにや！』と背負子から飛び降りるとプシケと一緒に戦い始め、中々良い感じですから転移で飛び飛びですが階層を下りて行き、今では百階層のファイアードラゴンと交戦中です。

「僕が羽を切り落としますよ！ ドラゴンが落ちますから気を付けてください！」

「分かったよ！ 落ちて来たところを特大のウォーターアロー行きます！ リントちゃん！」

「任せるにや！ すっごく大きいのでいくにや！ ポツコリお腹に穴開けてやるにや！」

よし！ まずは目眩ましです！

ドラゴンの目の前に、物凄く眩しい光の玉を出現させ、一瞬目を閉じた瞬間に背中側に転移。片側の羽の付け根に狙いを定め、抜いていた刀を上から下に振り抜きます。

ズシユン！ グギャヤヤ！ そのままの勢いで前回りをしながらもう片方の羽を下から上に切り上げました。

ズシユ！ ゲガアアア！

切断したドラゴンの羽を収納し、プシユケ達の元に転移で戻ります。

ですがここで僕は攻撃を二人に任せ、吐く準備をしていた火炎を防御するため、二人の練習中、テラに教えてもらった結界を準備します。

「火炎は任せて！ 今です！ 撃て！」

「ウオーターアローです!!」

ズン。と四つ足で着地したドラゴンはかさず後ろ足だけで立ち上がると、頬袋ほっぺ膨らませ火炎を吐く寸前、二人のウオーターアローがドラゴンのお腹に命中し見事に大穴を二つ開けました。

ですがドラゴンも、しぶとく火炎を僕達に向け吐き出しました。

コガアアア！ 渦を巻きながら迫り来る火炎を塞ぐように僕は！

「結界！」

僕達の前に、大きな透明の盾をイメージして結界を張りました。そこに火炎が当たる

と凄い衝撃がビリビリと伝わってきました。

「くう！ 強いです！ もう一枚行きますよ！ 結界！」

パリン。と一枚目の結界が割れますが、二枚目の結界で受け止めました。ですがまだ火炎の勢いは衰えてきません。

「ライ！ 次の結界も用意しておくのよ！ プシユケとリントはライの後ろへ！」

「お腹に穴が開いたのに！」

「なんてしづとい奴にゃ！ 毛玉より暑いにゃよ！」

ですが、流石にお腹に大穴が二つも開いたのでその火炎も長くは続かず、数十秒続いた火炎は、六枚目の結界を破る事はできず、勢いを弱め、止まった次の瞬間、ズズンと崩れ落ち、ここまでのボスさんとは違い消えずにその肉体を残したまま、その脇に宝箱が現れました。

「消えませんか？ 魔力の回復も見られませんし、死んでると思うんですが」

「そうね。収納できるんじゃない？ ドラゴンも美味しいって言うし、良かったじゃない。宝箱も忘れないでね、まだ次があるみたいだし」

確かに、美味しいと言われれば、食べたいですよ♪ ファイアドラゴンと宝箱を収納して、次の階層へ向かったのですが、階段を下りきった先には小さな部屋の真ん中に水晶玉がポツンと浮いているだけで、後は何も無い部屋でした。

「何でしょうね？ お宝でしょうか？」

「うふふ。ライ、ダンジョンコアよそれ。ここでこのダンジョンは終わりね。見たところダンジョンマスターはいないみたいだから、ライ。なりたいんでしょ。その水晶に触るとなれるわよ」

「なんですとー！ ほ、本当に良いのかな？ 怒られない？」

「誰もいないし、良いんじゃない。ほらほらやつちやいなさい」
「うん」

僕は、プシユケ、リントの顔を見て、頷いてくれましたので数歩前に進み、ちょうど顔の位置に浮いている水晶玉に、そつと触れてみました。

『個人情報を確認しました』

『お名前を』

おお！ えっと、僕の名前だよね。

「僕は、ライ。ライリール・ドライ・サーバルです。ライと呼んで下さい」

『登録完了、マスターライ、ご用命を』

これは成功！

「やったあぁー！ ダンジョンマスターですよー！」

「ライおめでとにや」
「ライおめでと♪」

プシユケとリントが飛び付いてきてちゅーしてくれました。それに。お、おめでとうライ。お祝いだから特別なんだからね！ んーちゅー。

テラからちゅつてしてくれました！

「ありがとうみんな。そうだこれで攻略もできたし、みんな揃ってSランクだよ！」

「やったあー！ 私がSランクうー！」

「リントもケット・シー初の快挙にやよ！」

「ラ、ライ、ダンジョンの異変をき、聞きなさいよ」

くふふ。テラがまた真つ赤なお顔でムルムルを掴んで引つ張りながらそう言いますので、考えるまでもなくその通りですね。よし、ダンジョンコアさんに聞いてみましょう。

「コアさん。このダンジョンに異変が起きていたのはなぜだか分かりますか？」

『はい。ダンジョン内に、多数の者が長期間にわたり滞在し続けていたため、ダンジョン内から排除が必要と判断し、魔物が数段上位の魔物に変えました。現在は通常に戻っています』

ふむふむ。そうか、ダンジョンの中にならずと住んでいたのですから、ダンジョンからすればたまったものではありませんね。

「良かったです。じゃあ、ダンジョンマスターって何ができるのですか？」

『ダンジョン内の改造、現在入口付近の建物がなくなりましたから、そこをダンジョンに変えることもできます。レベル次第では、上部の街、さらにはある程度の広さをダンジョンに取り込む事ができ、好きなように変えることも可能です』

「ライ。とりあえずダンジョンの入口は屋根をつけた方が良いわね。雨が流れ込むわよあのままだと」

「だよね。コアさん外の入口をですね、水が流れ込んだりしないように、屋根をつけて下さい」

「どんなことになるかな？ 大きな物は要りませんが、頑丈で壊れないようにできると良いですね。そうか、教会の人や人攫いの人は入らないようにできたら良いのですが。」

『承知いたしました。では私の名を登録して下さい。そうする事によってご要望通りにできます』

「そうね。そうすればダンジョンとライとの間に繋がりができるから、より上のダンジョンになれるわ。フルフルとかどう？ ムルムルもだけどそこそこ強いやつの名前からもらったんだけど」

「フルフルですか。うん！ 響きも良いし、良いね♪ コアさん。あなたの名前はフルフルです♪」

『フルフルを登録いたしました。では地上部、壁が形成されていますので、その内部を範

囲に、現状の入口を屋根付きの小屋へ変更。破壊されようとも自動修復。水、教会関係者、人攫いのダンジョンへの立ち入りを禁じました』

■■■■ おおー。僕の考えていた事がそのままですね、心も読めるのですね。

■■■■ でもこれでひと安心です。さあ、3日もダンジョンいましたからそろそろ戻らないとうう、怒られそうですが帰りましょう。

■■■■

第108話 ダンジョン攻略

「ランクアップ試験の事でお聞きしたくて」

「ん？ ここ数日見当たらなかつたから、ダンジョンに籠っているものだと思っただろ。それでどうしたのだ？」

冒険者ギルドに入り、目の前にちょうどギルドマスターさんがいましたので声をかけました。

「ダンジョンの攻略をしてきたので確認してもらえますか？」

「は？ いや、先入観はいかな。よし、付いてきてくれ、カウンターにダンジョンカードを解析できる魔道具があるからな。それで全てが分かる。ダンジョンの位置、到達階層、倒した魔物の名前にその数だ」

「おおー。それは凄い魔道具ですね、はい。では並びに行きます。プシュケ、リント、並びに行こう」

「ぬふふふ。ここの皆さんの驚く顔が目には浮かびそうですよ」

「にやふふふ。きつと『えええええー！』っていうにやよ」

「ライ、これが終わったらだからね」

「うん。もう怒られる覚悟は決めたよ」

そんな話をしながら並んでいると。

「しかしあの教会跡のダンジョンは鍛冶士にすりや大喜びだろうな」

「そりやあ何てつたつて浅い階層で鉄はもちろん金、銀、銅、それに宝石まで出るとはな」

「そんな事より、あんなダンジョンを隠していたなんてな。それに消えちまうしどうなってるのかさっぱりだぜ」

「でも、あの新ダンジョンを見つけたパーティー羨ましいよな。王様から直接黒貨を受け取るため明日には迎えが来て出発らしいしな。それによ、叙爵が。」

そんな話が、聞こえてきました。

うんうん。少しでも役に立つダンジョンは僕達冒険者にも嬉しいですよ、何てつたつて採掘できる階層は魔物もそこまで強くありませんでしたから。それにもう教会の方がいいので、ダンジョンの中に住むことは無いでしょうし。

（その事で少し気になったのだけど、今攫われてこちらに向かつてる人達はいないのかしら？ 連れてこられて、教会が無くなったのならどこへ向かうと思う？）

そ、そうだよ、その事全然気付きませんでした。これは困りましたね。

（やっぱり早く帰って知らせるのと、資料を渡さないとまずい気がするわ。ほら前が空いたから行くわよ）

カウンターへ進むとサブマスさんが見てくれるようです。

「よろしくお願いします」

ダンジョンカードを出してカウンターに乗せました。後はいつものように僕とプシケは背伸びをして、顎をカウンターに乗せて待機です。

早く背も高くなりたいですね。

「お預かりしまえ？」

「ん？ どうした早く魔道具に通さないか」

「は、はい！ す、すぐに！」

サブマスさんが僕達のダンジョンカードを見て、何やら驚いたようですが、ギルドマスターに急かされ、魔道具に通すと天井を見上げました。

僕達もつられて見ると、そこにはこの街の地図が画かれていて、その場所の位置が光って明滅していました。

ふむふむ。あゝして場所が分かるのですね。

「ギルドマスター、新ダンジョンの発見パーティーはぐるぐるです。それに」

「何！ あの教会が無くなった今日の朝に見つかったのだぞ？ それがなぜだ！」

「パーティーぐるぐるが、ダンジョンに入ったのは、無くなるより数日前と出ています。さらに、ダンジョンは百階層、完全攻略と出ています。新ダンジョン発見及び、ダンジヨ

ン攻略を成し遂げています」

「何を言ってる！ そんな事が！ 見せてみる！」

新ダンジョンってあんなに沢山の方が入っていましたし、教会の方も、人攫い方も入っていましたから新ダンジョンではないと思うのですが？

ギルドマスターはカウンターの内側に回り込んで、サブマスさんの座る場所へ。

そして魔道具を覗き込んでいます。

「ぬぬ—— た、確かに発見は試験を言い渡した次の日、階層は百階層、そして完全攻略。誰か！ 今朝のパーティーの居所は知らないか！ 大至急来てもらってください！ 発見したパーティーは別パーティーの方が数日早かった！」

え？ それが僕達？ 違いますよね？ きちんと教えておかないと、嘘を付いたとか言われるかもですね。

「あの、ギルドマスターさん。ダンジョンを見つけたのは僕じゃないですよ。僕達が入った時には教会の人達と、最近お騒がせの人攫いの人達と、攫われて、奴隷として働かされていた人達が先に中にいましたから、たぶん教会の方が発見者だと思いますよ」

「ん？ ちよつと待て、先に教会の連中が中にいた？」

「はい」

「国中いや、周辺諸国でも被害の出ている人攫いとそのダンジョンに？」

「はい。人攫いの犠牲者の方もいましたよ。今は保護しましたし、教会の人達も、人攫いもそこにいた者は捕まえましたし」

ギルドマスターもサズマサさんも、ギルドマスターさんの声で、こちらに聞き耳を立てていた冒険者さん達も、こちらを見えています。

「人攫いと教会は共犯者に聞こえるのだが？」

「そうですね、ダンジョンの採掘要員として人攫いからお金で買い取りしていましたから。その冒険者さん達の武器なんかも買い取っていましたね。それから麻薬になるお花も育てて、その作業は子供でしたね。凄く沢山作っていましたよ」

ギルドマスターさんは、僕の話聞きながら徐々に顔を赤くして、怒りの形相に変わっていききました。いえ、ギルドマスターさんだけではありません、僕の話をも物音一つさせずに聞いていた冒険者の皆さんもです。

「何て事だ！ ここにいる全員に緊急依頼だ！」

「ギルドマスター！ 言わんでも分かる！ てめえも冒険者ギルドの全部に連絡入れやがれ！ 野郎共！ この町だけではないぞ！ 全ての街道をくまなく回れ！」

「良いか！ この街の教会は小さい所がまだ何カ所がある、その奴らも捕縛してこい！ 一人銀貨二枚だ！ 逃げる前にさっさと行きやがれ！」

「おおお！」

なんだか大事になってきました

.....

。

第109話 Sランクになりました

「待たせたな。君達のランクアップは決まりだ。おめでとう。すぐにカードを用意するから少しだけ待ってくれ」

「はい。大丈夫です。それはすぐにできるのですか？」

「ああ。もうサブマスが準備には入ってる。．．．ところで捕まえた奴らはどこにいるんだ？」

やりました♪ くふふ。プシユケにリントも笑顔で踊り出しそうです。リントはカウントーの上で既に立ち上がってもぞもぞしてますから時間の問題かも知れませんね。

おっと、話の途中ですね。

「捕まえた、人攫いと教会の方達は、サーバル男爵領で開拓をして貰おうかと。そう思っ
て連れていきました駄目でしたか？」

「ん？ なぜ隣国の？ サーバル男爵様と言えば剣聖様だぞ？ 面識でもあるのか、私の少し後に冒険者になったはずなのに、あつという間に抜かれたんだぞ？ それに連れていった？」

あはは。ここでも父さんは有名人ですね。後で父さんに教えて上げましょう。

「はい。父なので、面識と言うよりは親子ですね。それに人攫いについても国を上げて調べているはずですよ。それから僕は三男ですからこれまで通りの対応でお願いしますね。それから僕は転移が使えますから」

「なんと剣聖様の。う、うむ。十歳で家を出たということだか。分かった。長男次男以外は冒険者の道に進む者が多いからな。そうか、これは早急にラビリンス王国も国王が動いて貰わないとな。よし、その事も合わせて報せねばならんな。そうか！ 剣聖の奥様は賢者様か。それならばその力は納得がいく」

「ギルドマスター。カードが完成しました。私はその事を王都支部に連絡を入れておきます」

「うむ。ダンジョン街の人攫いについても教会が絡んでいた事を必ず伝えよ。それを捕まえたのは、パーティーぐるぐる。そのメンバーが、Sランクに昇格した事は全冒険者ギルドにも速報だ」

そして、ギルドマスターさんはギルドカードを受け取り、そのカードを見て止まりました。

「あの？ 大丈夫ですか？」

「サブマスこれは本当か！ 属性龍を倒してるとは本当の事か！」

カウンターの上の魔道具を操作しようとしていたサブマスさん呼びそんな事を。

属性龍ですか。聞いたことありませんが、最後のファイアードラゴンとかの事でしよ
うか？ それなら見せることもできますよ。他のドラゴンさんはやつつけた後消え
ちやいましたから残念です。僕達も六種類全部倒せましたので嬉しいですが、やっぱり
実物がないとですよ。

「はい。火、水、風、土、光、闇の六種類の討伐が成されていきました。他にもベヒモスも
複数体、百を超える討伐がダンジョンカードに記されていきましたから間違いはないで
すね」

「な、なんだと、それを単独パーティーで倒したと言うのか？ かの『風使い』に迫る討
伐成果ではないか」

「はい。ですからドラゴンスレイヤーの刻印がしてあります」

え？ ドラゴンスレイヤー！ う、う、うっひょー！

「ふ、ふははははは！ ライ！ なんとも驚かせてもらったぞ！ 聞いてくれ！ なん
とドラゴンスレイヤーのSランクが誕生したぞ！ ライ、テラ、プシユケ、リント。パー
ティーぐるぐるだ！ おめでとう！」

すると、先ほどまで教会の方達を捕まえに行くため騒いでいて、ギルドマスターが笑
い出した時に静まりかえった冒険者の皆さんが一斉に――！

「「おめでとうー！」」

それはもう耳がキーンってなるくらい大きな声で、ビリビリって冒険者ギルドが震えたんじゃないかと思うくらいでした。

「スゲーぞ！ ガキんちよのクセにやるじゃねえか！」

「おめでどう！ 驚いた顔が可愛い！」

「あははは。おめでどう！ 今度飯でもおごれよ！」

「クツソー！ こんなガキに先を越されるとはな、悔しいが、おめでどう！ 俺もすぐに

追い付くからな！」

などなど
等々周りから沢山の声を掛けていただいています。

中には、お姉さん冒険者の方は、プシユケもまとめて、ぎゅって抱き締められて、離れる時にクツキーが入った袋をくれたりもしました。

「よし！ お祝いは教会の奴らを捕まえてからだ！ 野郎ども！ 行ってこい！」

ギルドマスターの声に呼応して、冒険者さん達はギルドを出て行きます。

「ライ。良かったわね、こんな騒ぎになるとは思わなかったけど、悪くない気分ね」
「うん。よし、このまま楽しい気分のまま、一度お屋敷に戻りましょう」

「ん？ 帰るのか？ ではギルドカードだ。まずはライ」

「はい。くふふふ。ピカピカですよ！」

受け取ったギルドカードには。

ライ

従魔 ムルムル

パーティー ぐるぐる

ドラゴンスレイヤーヘキサグラム

ヒュドラ ファイアーアント

そして――。

Sの文字が刻まれた白銀で虹色に輝くカードでした。

次にテラがもらい、プシユケ、リント。

みんな、カードを手にした事で、実感がわいてきました。

「それから報酬は、王都に行ってもらわねばならんが、大丈夫か？ 叙爵もあり得るんだ

が、ライ達は見た感じ、貴族など欲していないようだしな」

「そうですね。まだまだ冒険の旅を続けたいと思ってますから、この国にとどまる事は
ありませんね」

「その事も連絡は入れておこう明日の朝にはギルドに顔を出してくれるか？ 王都から
の迎えが来るはずだからな」

「分かりました。よし、みんな、一度戻ろう。ではギルドマスターさんサブマスさんそれ
から皆さんもまた明日です。転移！」

パ
ッ

そして、僕達は転移で僕の部屋に戻ったのですが

.....

。